熊本県文化財調査報告第２６８集

The Nagayama Maeda Site
長山前田遺跡

The Ryouhazama Hiwatashi Site
両迫間日渡遺跡 1

－　九州新幹線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　－

2012
熊本県教育委員会

長山前田遺跡
両迫間日渡遺跡 1

－　九州新幹線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　－

２０１２
熊本県教育委員会

序文

本書は、九州新幹線建設工事に伴い埋蔵文化財発掘調査を実施した熊本県玉名郡南関町に所在する「長山前田遺跡」と玉名市両迫間に所在する「両迫間日渡遺跡」の発掘調査報告書です。

両遺跡とも熊本県北部に位置し、阿蘇外輪山に源を発する熊本県下の四大河川の一つである菊池川流域に所在する遺跡です。菊池川流域は、古代から熊本県の歴史を語るうえで欠かすことのできない多くの遺跡が知られています。なかでも全国に類を見ないほどの密度で装飾古墳が築かれており、九州中部域の古墳文化を語るうえで重要な地域として注目されています。また、古代には現在の山鹿市、菊池市にまたがり「鞠智城（国指定史跡）」が所在しています。

このたび、このような歴史的背景を有し文化を育んできた熊本県北部域に九州新幹線鹿児島ルートが建設され、平成 23 年３月 12 日熊本県民悲願の新幹線が開通しました。

県土の発展に伴い、記録保存として発掘調査が行われた本遺跡（本書）が、学術的資料としてはもとより、郷土の歴史に対する造詣を深めるとともに、県の教育・文化の向上に対する一助として活用していただけると幸いです。

最後に、埋蔵文化財発掘調査に御理解、御協力をいただきました玉名市の皆様を始め、事業主体である独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構に対し心より感謝申しあげます。

平成 24 年３月２３日

熊本県教育長　山本隆生

長山前田遺跡
The Nagayama Maeda Site

調査場所　熊本県玉名郡南関町長山26、27-（2）
調査期間　平成16年4月21日から平成16年5月31日

熊本県教育委員会

長山前田遺跡発掘調査報告

― 九州新幹線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査 ―

目 次

第Ⅰ章 序言 …… 1

1 調査にいたる経緯 …… 1

2 発掘調査の体制及び経過 …… 2

3 報告書の作成 …… 2

第Ⅱ章 調査 …… 4

1 調査地域 …… 4

(1) 遺跡の位置及び歴史的背景 …… 4

(2) 地理的環境 …… 4

(3) 測量 …… 4

(4) その他 …… 4

2 調査日誌抄 …… 5

第Ⅲ章 調査報告 …… 9

1 調査区の概要 …… 9

2 各区の報告 …… 9

3 まとめ …… 14

挿図（Fig）目次

Fig. 1 熊本県域における地形表記と九州新幹線建設に伴い発掘調査を実施した遺跡 …… 3

Fig. 2 長山前田遺跡周辺地形図（1/5,000） …… 6

Fig. 3 長山前田遺跡周辺遺跡地図 …… 7

Fig. 4 柵列 SA001 実測図 …… 9

Fig. 5 土坑 SK001 実測図 …… 9

Fig. 6 土坑 SK002 実測図 …… 9

Fig. 7 長山前田遺跡遺構配置図及び座標変換点 …… 10

Fig. 8 溝 SD001 ～ SD003 実測図 …… 11

Fig. 9 柵列 SA002 ～ SA005 実測図 …… 12

Fig.10 掘立柱建物 SB001 実測図 …… 13

表（Tab）目次

Tab. 1 九州新幹線（新八代・博多間）建設工事に伴う玉名郡市埋蔵文化財発掘調査一覧 …… 1

Tab. 2 長山前田遺跡の基準点測量成果 …… 4

Tab. 3 遺跡地名表 …… 8

写真（PL）目次

PL. 1 調査区から新幹線トンネル坑口（玉名方面） …… 18

PL. 2 溝遺構を挟み掘立柱建物 SB001 方向遺構検出状況 …… 18

PL. 3 柵列 SA001 完掘（東より） …… 19

PL. 4 掘立柱建物 SB001 完掘（北より） …… 19

長山前田遺跡発掘調査報告

第Ⅰ章　序言

1　調査にいたる経緯

長山前田遺跡は熊本県玉名郡南関町長山26、27-（2）に所在し、九州新幹線建設工事に伴い実施した分布調査で、試掘調査が必要と判断したなかで確認された新規発見の遺跡である。遺跡の時代は、試掘調査時に弥生時代後期の台付甕ほか弥生土器が数点出土したことから、当初は弥生時代の遺跡と報告された。

調査範囲は九州新幹線三池トンネル坑口（三池トンネル終点）から関川を望む丘陵先端部にまで及び、調査面積は1,201㎡を測る。

（事業計画の概要）

九州新幹線鹿児島ルートは、国民経済の発展及び国民生活領域の拡大並びに地域の振興を図る目的で、「全国新幹線鉄道整備法」に基づき建設されるもので、福岡市から熊本市、鹿児島県川内市を経由し、鹿児島市に至るまでの総延長約249㎞の大動脈である。完成により、移動時間の短縮、県内総生産にもたらす経済波及効果及び地域間交流の拡大等多くのメリットがもたらされることから、各界から早期の開業が望まれていた。

当該ルートは昭和48年11月13日に整備計画の決定及び建設の指示がなされた後、昭和61年8月29日に工事実施認可申請がなされたが、その後の経済情勢や社会情勢の変化に伴い、平成3年8月22日に先行して八代～西鹿児島間について工事実施計画が認可され、同年9月7日に起工した。その後、平成10年3月12日に船小屋～西鹿児島間の工事実施計画が認可され、同年6月2日に博多～船小屋間が起工している。

平成16年3月13日に新八代～鹿児島中央間の部分開業を経て、平成23年3月12日博多～新八代間が開業した。

№.	遺跡名	所在地	博多駅からの新幹線距離程	調査面積	調査期間	調査員名	遺跡の年代	主な遺構・遺物
1	長山前田遺跡（ながやまえだ）	玉名郡南関町長山字前田	66km700m～66km900m	1,201㎡	H16.4.21～H16.5.31	坂口圭太郎 松森由美 坂本亜矢子 横田光智	弥生・中世	掘立柱建物、柵列、道路、溝、土坑
2	稲佐津留遺跡（いなさつる）	玉名郡玉東町稲佐地内	80km383～80km598m	2,273.54㎡	H16.5.27～H17.12.28	尾方圭子 今村和徳 横田光智	弥生・古墳 古代	掘立柱建物、土坑、溝、 竪穴建物、柱穴群 巴形銅器、弥生土器・古式土師器
3	祭田下遺跡（さいだんした）	玉名市津留字祭田下223-2ほか9筆	78km227m～78km400m	5,762㎡	H16.6.1～H16.10.27	長谷部善一 吉田徹也 早田利宏 園田恭子	古墳・中世 近世	溝、杭列、土坑 13世紀～14世紀代青磁・白磁・ 土師器・中世須恵器・瓦器など
4	小薗遺跡（おづの）	玉名市石貫字小薗345-2ほか13筆	74km220m～74km300m	2,406㎡	H16.6.14～H16.10.31	坂口圭太郎 松森由美 坂本亜矢子 遠山　宏	弥生・中世 近世	掘立柱建物、竪穴建物、 土坑、溝 弥生土器・土師器・須恵器・陶器
5	太郎丸遺跡（たろうまる）	玉名市大字津留字白拍子373-2ほか13筆	77km840m～78km230m	14,148㎡	H16.11.1～H17.10.31	長谷部善一 吉田徹也 早田利宏 園田恭子 水上　悌	古代・中世 近世	土坑、土坑墓、溝、掘立柱建物 土師器、中世須恵器、龍泉窯系青磁、 瓦器、白磁
6	西屋敷遺跡（にしやしき）	玉名市大坊字西屋敷2660-3他4筆	75km230m～75km500m	325㎡	H17.4.9～H17.5.13	長谷部善一 吉田徹也 早田利宏 園田恭子	中世・近世	五輪塔、近世墓（舟形後背墓石）
7	瀬萩遺跡（せはぎ）	玉名市津留字川面103-3ほか3筆	78km860m～78km985m	4,344㎡	H17.4.19～H17.9.30	吉田徹也 早田利宏	古墳・古代 中世	竪穴建物、溝、焼成土坑 土師器・須恵器・青磁・白磁ほか
8	両迫間日渡遺跡（りょうはざまひわたし）	玉名市両迫間	76km277m～76km420m	742.92㎡	H18.8.23～H18.10.10	坂口圭太郎 亀田　学	弥生・古墳	水田畦畔
9	玉名平野条里跡（たまなへいやじょうりあと）（古閑前地区）（こがまえ）	玉名市両迫間字古閑前158-2他9筆	76km721m～76km873m	2,537.85㎡	H19.6.1～H20.1.31	長谷部善一 吉田徹也 手柴智晴 吉井英二 坂本亜矢子 園田恭子	弥生後期 古墳初頭・後期 古代・中世 近世	弥生後期（竪穴建物・溝状遺構） 古墳時代（竪穴建物・製鉄関係遺構・井戸・溝状遺構・土坑） 古代（掘立柱建物跡・溝状遺構） 中世（溝状遺構） 近世（粘土採掘坑）
10	西安寺遺跡（さいあんじ）	玉名郡玉東町西安寺1018	－（工事用道路）	518㎡	H18.11.26～H19.12.26	坂口圭太郎	中世・近世	溝、土坑、柱穴

Tab.1　九州新幹線（新八代・博多間）建設工事に伴う玉名郡市埋蔵文化財発掘調査一覧

2　発掘調査の体制及び経過

調査期間　平成 16 年 4 月 21 日から平成 16 年 5 月 31 日

調査体制

調査責任者　文化課長　島津義昭

調査総括　　課長補佐　倉岡　博

調査指導　　課長補佐（文化財調査第一係担当）　高木正文

調査担当　　文化財調査第一係　参事　坂口圭太郎、主任主事　松森由美

非常勤職員　　坂本亜矢子　横田光智

調査助言・指導及び調査協力者

大牟田市教育委員会、南関町教育委員会、和水町教育委員会、玉名市教育委員会

坂井義哉、坂本重義、黒田裕司、竹田宏司、益田浩二

調査に伴う業務委託先

4 級基準点測量及びメッシュ杭設置業務　有限会社 古家測量設計

3　報告書の作成

報告書の作成は、熊本県文化財資料室（熊本市城南町沈目 1667 番地）にて、平成 23 年 5 月 9 日に一次整理、二次整理、原稿執筆等一連の作業に着手し、同年 5 月 31 日に終了した。

本書の作成体制は以下のとおりである。

整理責任者　文化課長　小田信也

整理総括　　文化財調査第一係長　村崎孝宏

整理指導　　文化財資料室長　坂田和弘

整理担当　　参事　長谷部善一

非常勤職員　稲葉貴子、唐木ひとみ

整理補助　　石田敦子（班長）、福島典子（副班長）、小早川隆春、塩田喜美子、今崎光成、田中裕子

藤井美智子、田熊敏子、溜淵俊子（以上、一次整理）

土田みどり、岩下恵美子、築出直美（以上、二次整理）

整理報告に伴う委託業務

デジタルトレース業務　株式会社 埋蔵文化財サポートシステム　熊本支店

No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名
1	長山前田遺跡	11	二本木遺跡群（春日、田崎地区）	21	西片園田遺跡
2	小園遺跡	12	八島町遺跡		西片稲村遺跡
3	西屋敷遺跡		熊本平野条里跡		中片小路遺跡
4	両迫間日渡遺跡	13	上ノ郷遺跡	22	宮地年神遺跡
5	玉名平野条里跡（古閑前地区）	14	川尻下城遺跡		キリシタン寺院跡
	太郎丸遺跡	15	下江中島遺跡		宮地池尻遺跡
	祭田下遺跡	16	小曽部西園遺跡		宮地小畑遺跡
	瀬萩遺跡		南請遺跡		宮地観行寺遺跡
6	稲佐津留遺跡	17	高良柳迫遺跡		古麓城下遺跡
7	西安寺遺跡	18	四百町開		古麓能寺遺跡
8	万楽寺出口遺跡	19	高田手永堤防		古麓城跡
9	北島遺跡・北島北遺跡	20	島田遺跡	23	長野遺跡
10	新馬借遺跡		上日置女夫木遺跡		
	花岡山・万日山遺跡		西片百田遺跡		

Fig.1　熊本県域における地形表記と九州新幹線建設に伴い発掘調査を実施した遺跡

第Ⅱ章　調査

1　調査地域

(1) 遺跡の位置及び歴史的背景

熊本県の西北端部に位置し、行政区では玉名郡に位置する。福岡県大牟田市、みやま市に隣接する県境に接している。奈良時代から大水（おおむつ）と呼ばれ、927 年完成の『延喜式』兵部省諸国駅伝馬条によれば、この地域に宿駅が置かれたとされている。 それが「大水駅」であったと考えられる。その後、正式な記録としては平家物語の中に、南関町の関所が置かれたとする一節があるのみである。

現在の南関町の中心部近くには、近世には長く肥後国北辺の固めとなる上番関所の「松風の関」（別名「大津山の関」）が置かれ、町内をとおる豊前街道は豊後街道・薩摩街道・日向街道とならぶ「九州四大街道」のひとつで、熊本の城下から南関を経て豊前・小倉を結ぶ参勤交代路であった。参勤交代の道中、肥後藩主らが休息をとった「御茶屋」は、現在、豊前街道南関御茶屋跡として保存されている。また、明治 10 年（1877 年）の西南戦争（西南の役）では、有栖川宮熾仁親王が大本営を設置し官軍を指揮したとの記録も残る。

(2) 地理的環境

地形は北の大津山、西の三池山、南の小岱山、臼間山、東の二城山の小山系で囲まれ、盆地地形を呈する。南関町内に源を有する関川が大牟田市の境界境（一部は県境）を西流し、大牟田市街を経て有明海に注いでいる。遺跡は低丘陵性台地上に位置し、小規模な尾根上のわずかな平坦地に所在する。

(3) 測量

長山前田遺跡の発掘調査を実施するにあたっては、事前に基準点測量と水準点測量を実施した。基準点は本調査のきっかけとなった九州新幹線建設工事に伴い鉄道・運輸機構が設置した国土座標系Ⅱ系に基づく日本測地系により設置している。

2002 年（平成 14 年） 4 月 1 日からの改正測量法の施行に伴い、日本測地系から世界測地系へ移行することとなったが、本事業における基準点が日本測地系となっていることから、熊本県内における埋蔵文化財調査に伴う基準杭、メッシュ杭はすべて日本測地系で示している。そのため、以下に世界測地系に変換した数値を示すことで今後の資料とする。

	日本測地系		世界測地系	
	X 座標	Y 座標	X 座標	Y 座標
引照点．7	1157.619	-44964.887	1530.2451	-45185.8790
引照点．8	1174.340	-44957.699	1546.9656	-45178.6913
A2（調査区中心）	1210.000	-44960.000	1582.6248	-45180.9921
B1（調査区南端）	1193.500	-44960.000	1566.1251	-45180.9925
B4（調査区東端）	1220.000	-44952.500	1592.6244	-45173.4928
B8（調査区西端）	1234.000	-44960.000	1606.6243	-45180.9926
B6（調査区北端）	1220.000	-44982.000	1592.6252	-45202.9917

Tab.2　長山前田遺跡の基準点測量成果

(4) その他

発掘調査は遺構の種別を示す以下の記号と、一連の番号の組み合わせにより表記した。

SA（柵列） SB（掘立柱建物） SC（回廊） SD（溝） SE（井戸） SF（道路） SG（池） SI（竪穴建物）
SK（土坑） SP（柱穴） SS（礎石） ST（墓） SX（その他、不明遺構等）

※上記、遺構名称には本書で使用していない記号も含んでいる。
※遺構観察表に記している色調については「新版標準土色帖」（1999）を使用した。

2　調査日誌抄

2004 年（平成 16 年）

4.21　調査区の現況撮影実施

4.22　午前中、表土剥ぎ作業、調査機材等整理。午後、調査区周辺の除草作業。その後土嚢を作り調査区を囲む。

4.23　調査区の範囲に土嚢を積む（調査区のラインを明確にするため）。

4.26　午前中に土嚢作りをして調査区範囲に並べる。南西側から南東側に調査区全体を清掃。午後は調査区南東端の表土残りを除去。

4.27　午前中は降雨のため作業は中止。午後から土嚢作り、調査区にシート張り作業。その後、南西上段部から清掃。

4.28　調査区全体清掃。南側下段の精査を行い遺構検出作業を実施。

4.30　調査区北側の掘り下げ。

5.6　午前中は連休中の降雨による清掃作業を実施。その後、北側の精査を行い、遺構検出、写真撮影を実施。

5.7　午前中北側上段から清掃し遺構の検出に努める。中世期と見られる柱穴群を検出。午後から 4 級基準点測量及びメッシュ杭設置。

5.10　週末の降雨による土砂の排出及び水汲みを実施。その後、清掃を実施したが再度降雨のため作業を中止。午後から晴れたため全体の清掃を実施。

5.11　SA001、SA002、SA003、SA005、SA006、SB001 柱穴半裁。調査区北側の 1 層掘り下げ。
遺構配置図（1/100）、割り付け図（1/20）作成、遺構検出状況撮影。

5.12　SD001 ～ SD003 掘り下げ。SA003、SA005、SA006、SB001 実測。午前中、SD001 ～ SD003（溝状遺構）の掘り下げを実施。SA003、SA006、SB001 の土層断面を作成。文化課高木課長補佐来跡・指導。

5.13　降雨のため調査は中止。

5.14　前日までの降雨による雨水くみ上げ等を実施。SD001 ～ SD003 にトレンチを入れ立ち上がりを確認。SA005、SA006、SB001 の完掘写真撮影。

5.17　前日までに降った雨水の水抜き作業を実施。やや現場が乾いたのちに上段の調査区北西端から清掃を行い、SA002、SA003 の完掘写真撮影。
県教育庁 大久保教育次長、文化課倉岡課長補佐、高木課長補佐来跡。

5.18　SD001 ～ SD003 完掘状況、SA001 完掘状況撮影。

5.19　SK001、SK002 完掘。1/20 で実測。

5.20　降雨のため作業中止。

5.21　SD001 ～ SD003 の実測。

5.24　完掘写真撮影のため全体清掃。本日は個別遺構の写真撮影を実施。

5.25　午前中に全景完掘写真撮影を実施。その後、調査機材等の整理。

5.26　午前中に調査事務所で図面整理、写真台帳作成、遺構台帳作成。午後は調査区内の杭を抜いて現地調査を終了する。

5.27　図面整理。事務所撤収。

Fig.2　長山前田遺跡周辺地形図　　(1 /5,000)

121長山前田遺跡
大牟田市
荒尾市
上井手上
上井手
上井手下
黒尾
長山
上平山
平山
陣屋敷
茶屋原
大塔
九州産業短期大学

Fig.3　長山前田遺跡周辺遺跡地図

遺跡番号	遺跡名	時代
1	歴木石炭層の露頭	
2	稲荷層と断層	
3	今山斧神遺跡	古代
4	柳坂地区化石の露頭	
5	勝立ヒバリヶ丘2号窯	古代
6	勝立ヒバリヶ丘4号窯	古代
7	勝立ヒバリヶ丘5号窯	古代
8	宮前社宅跡化石の露頭	
9	勝立ヒバリヶ丘3号窯	古代
10	勝立ヒバリヶ丘1号窯	古代
11	勝立ヒバリヶ丘12号窯	中世
12	勝立ヒバリヶ丘10号窯	古代
13	勝立ヒバリヶ丘13号窯	中世
14	勝立ヒバリヶ丘11号窯	古代
15	東谷団地東側化石の露頭	
16	土穴のエノキ	
17	勝立ヒバリヶ丘6号窯	古代
18	勝立ヒバリヶ丘7号窯	古代
19	勝立ヒバリヶ丘8号窯	古代
20	勝立ヒバリヶ丘9号窯	古代
21	勝立第1号窯	歴史
22	勝立屋坂遺跡	弥生
23	勝立善徳4号窯	奈良・平安
24	勝立善徳6号窯	平安
25	勝立善徳3号窯	奈良・平安
26	勝立善徳2号窯	奈良・平安
27	勝立善徳1号窯	奈良・平安
28	勝立善徳5号窯	奈良・平安
29	勝立善徳古墳	古墳
30	勝立中原	
31	勝立椎ノ木平	縄文
32	勝立椎ノ木平古墳	古墳
33	勝立中原下	古墳～中世
34	本村の四仏塔婆	中世
35	勝立峰ノ元	古墳
36	本村地蔵	中世
37	下正原のシラカシ	
38	勝立庄原	古墳
39	米の山断層及び石炭層の露頭	
40	助丸・三郎丸屋敷	縄文～中世
41	竜宮社古塔碑群	中世
42	安の前	縄文～中世
43	岩本口番所跡	近世
44	岩本六地蔵石塔群	中世
45	岩本槍	近世
46	新井の宝塔	中世
47	井手城跡	中世
48	龍泉寺跡	中世
49	井手	古墳～平安
50	権現山窯跡	古代・中世
51	川登	古代
52	西浦窯跡	古代・中世
53	大蔵	縄文～中世
54	ウズゴノス窯跡	古代・中世
55	首塚古墳	古墳
56	首塚窯跡	古代・中世
57	聖人塚板碑	中世
58	堂山古墳	古墳
59	タンタン山窯跡	古代・中世
60	平山宿	旧石器～中世
61	今山畝田平墓地	中世
62	今山定林寺歴代住職墓碑	中世
63	定林寺中興開山塔	中世
64	普光寺並定林寺石塔群	中世
65	三池氏供養塔	江戸
66	屋山氏歴代墓碑	江戸
67	歴代三池藩主墓地	江戸
68	普光寺臥竜梅	
69	普光寺不動明王板碑	
70	普光寺本堂	17世紀
71	今山普光寺裏山	中世～近世
72	三池山	中世～
73	樋野嶽	奈良・平安
74	教楽来観音堂	中世
75	教楽来天満神社の狛犬	中世
76	元村	縄文～中世
77	教楽来一ノ尾	中世
78	一ノ尾のアラカシ	
79	金屋・金堀屋敷	中世

遺跡番号	遺跡名	時代
80	文安の石碑	中世
81	平山城跡	旧石器～中世
82	十蓮寺	縄文
83	平山名主屋敷	弥生～中世
84	光徳寺古塔群	中世
85	平山中尾窯跡	古代・中世
86	松尾	古代
87	園田窯跡	古墳～古代
88	古川	古代
89	栗木谷	古代
90	龍光寺製鉄跡	古代
91	薬師前寺跡	中世
92	阿蘇惟富供養碑（阿蘇どんの碑）	中世
93	薬師前製鉄跡・窯跡	古代・中世
94	旭田窯跡	古墳～古代
95	薬師の上屋敷跡	中世
96	小袋山製鉄跡（薬師の上製鉄跡）	古代～中世
97	かぐめ石	中世
98	荒井	縄文
99	落合	縄文～中世
100	十善寺横穴群	古墳
101	十善寺	縄文
102	泉福寺跡	中世
103	鳴石一石二面板碑	中世
104	鳴石正応の板碑	中世
105	前田	縄文
106	平砂	縄文
107	西平	縄文
108	上長田地下式横穴	古墳
109	日の浦	弥生
110	堀殿（ほっどん）	中世
111	宮ノ脇	縄文～中世
112	永見田	縄文
113	寺島	縄文
114	尾崎	弥生
115	穴の口	縄文
116	今村岩ヶ下横穴群	古墳
117	高久野	縄文
118	タキノバル古墳	古墳
119	安福寺跡	中世
120	教楽来堺丸	弥生
121	長山前田	中世
122	岡田山経塚	中世
123	岡田山龍門寺跡	中世
124	中尾丸の跡	中世
125	岩田山隆光寺跡	中世
126	今村豊後浦城跡	中世
127	小畑城跡	中世
128	龍福寺跡	中世
129	小代焼窯跡小代瀬上窯跡	江戸～大正
130	小代焼窯跡小代販焼窯跡	近世
131	東小代製鉄跡	古代・中世
132	大谷製鉄跡	古代・中世
133	岩薬師磨崖仏	中世
134	木原	弥生
135	安原の六地蔵	中世
136	福厳院跡	中世
137	金剛寺跡	中世
138	中塚城跡	中世
139	道場跡	中世
140	来光寺の五輪塔	中世
141	大迫の六地蔵	中世
142	東原	弥生
143	三角山経塚	中世
144	田原の豊後浦城跡	中世
145	法音寺跡	中世
146	八田横穴群	古墳
147	小次郎丸	弥生
148	宮ノ原	弥生
149	光徳寺跡	中世
150	西光寺跡	中世
151	鬼王浦ん谷	縄文
152	名称不明	
153	名称不明	

Tab.3　遺跡地名表

第Ⅲ章　調査報告

1　調査区の概要

当該工事予定は大牟田市側から延びる三池トンネル坑口であるため、通常の線路予定地のみの場所よりも横幅が広くなっている。調査区は背後の低丘陵性台地から関川に張り出す緩斜面上に位置しており、調査区の中ほどの溝状遺構（溝 SD002）を境に北側を１区、南側を２区として調査時に設定してある。また、Grid 設定は調査面積（1,201㎡）が広くないこと、遺物包含層が後世の削平により残されておらず Grid での遺物取り上げは必要ないと判断されたことから設定はしていない。（Fig.7）参照

2　各区の報告

X=1225、Y=－44980 から X=1220、Y=－44953 にかけて調査実施した溝 SD002 を境に北側の遺構から報告する。

１区柵列 SA001（Fig.4）P1 ～ P6 まで確認され、最大長（P1 ～ P6）の中心間は 9.7m を図る。しかし、P1 側は P2 との間隔からして調査区外に延びている可能性もある。南北側に並列する柱穴列が確認されなかったことから、調査時点から柵列との認識がなされている。検出された遺構は、いずれも浅いが基底面レベルはほぼ均一であることから、同時期に掘り込まれたものとして間違いないと考えられる。柱穴１基あたりの直径は約 20㎝から 35㎝程度とバラつきはあるが、中心ラインはほぼそれぞれの柱穴の中心を通る。P6 のみは遺構深度、直径ともに違いはあるが、ラインが中心線上に位置していることから同一遺構として報告する。柱痕跡、根固めの土層等は確認されていない。

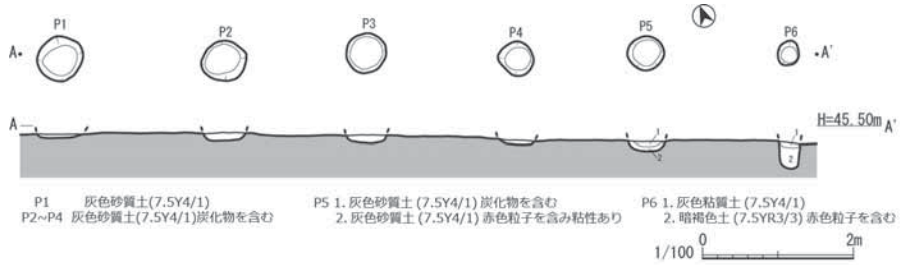


Fig.4　柵列 SA001 実測図

土坑 SK001（Fig.5）先述した柵列 SA001 の南側に位置し主軸はほぼ北を向く。遺構全長は 3.3m で、幅は断面図を作成した範囲で 50㎝を測る。両端でやや断面位置よりも幅が広がるが極端ではない。遺構南端ではやや西に向き逆Ｌ字状に曲がるが先は延びない。掘削深度は浅く、下端付近はほぼ水平である。出土遺物はない。

土坑 SK002（Fig.6）土坑 SK001 の西側に位置し検出された円形の遺構。直径 73㎝で、検出深度は 13㎝である。遺構埋土は土坑 SK001 と類似する。出土遺物はない。

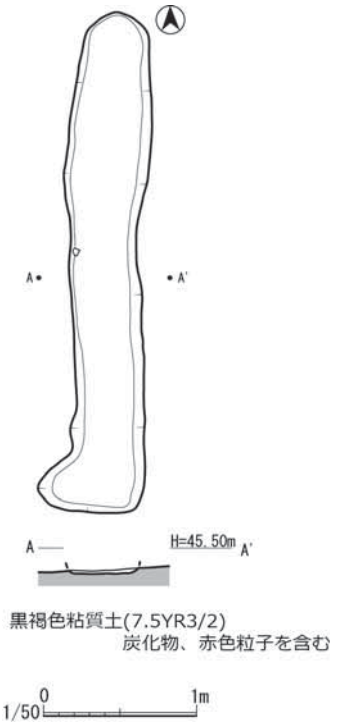


Fig.5　土坑 SK001 実測図

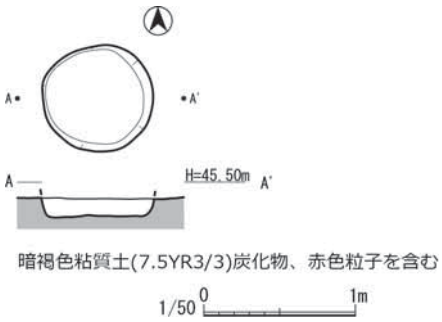


Fig.6　土坑 SK002 実測図

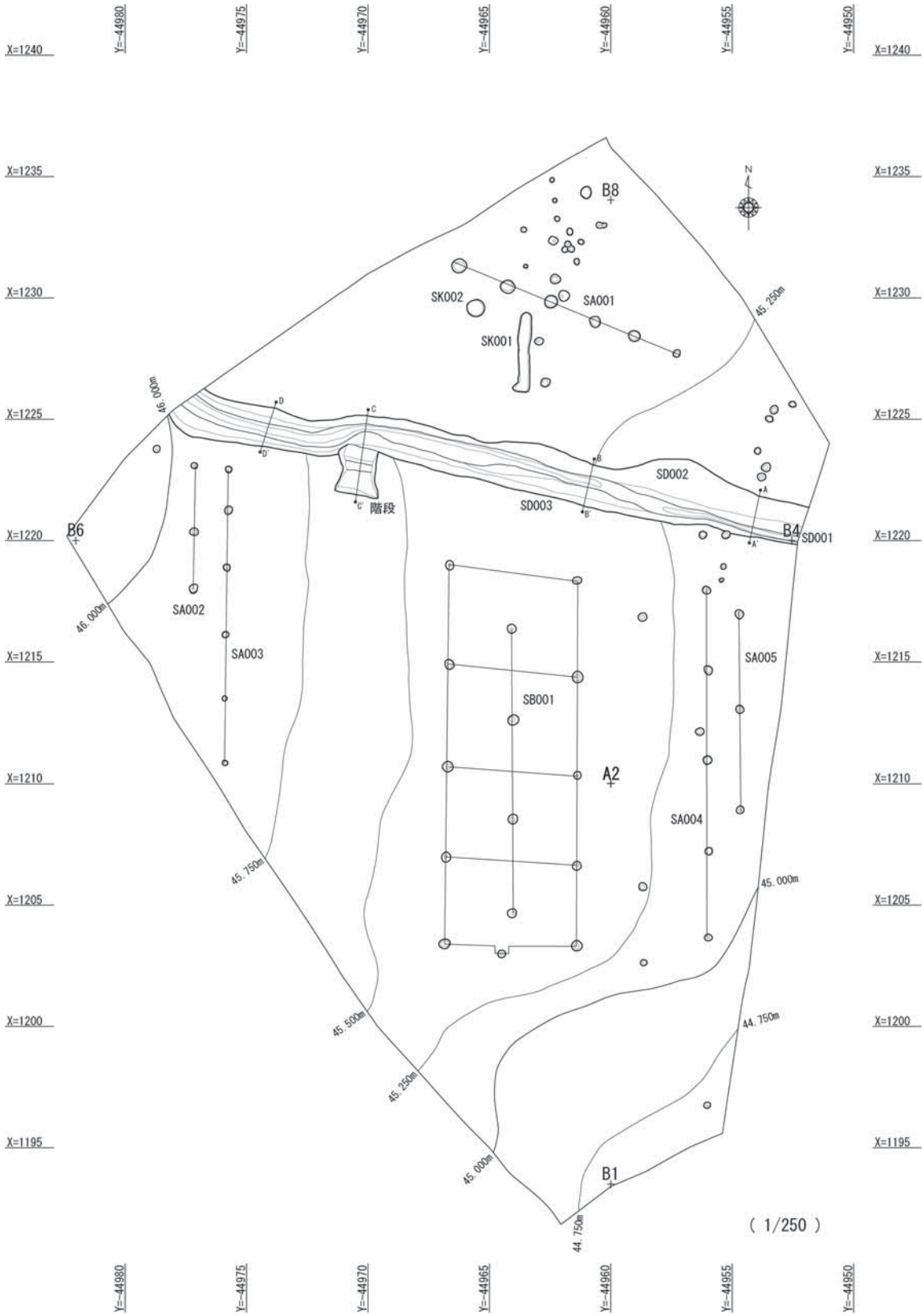


Fig.7　長山前田遺跡遺構配置図及び座標変換点

溝 SD001 ～ SD003（Fig.8）本調査区で１区、２区の間で検出した遺構。全長は約 26m、主軸は N-76.5° - W を測る。

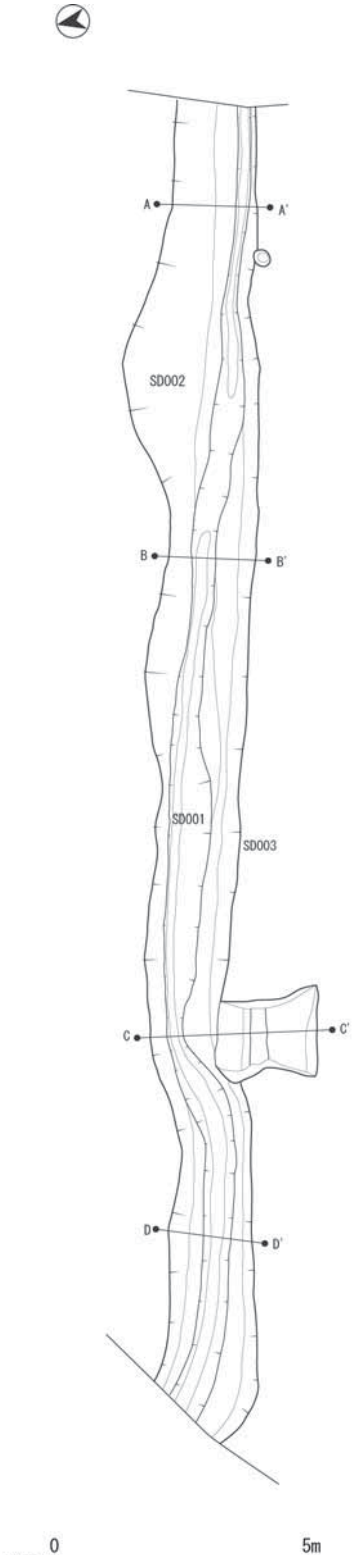
遺構検出、掘削時には１条の溝状の遺構として認識され調査されているが、完掘時点で３条の溝が切り合っていると判断し、断面図で溝の切り合いを表している。

整理時の図面検証の結果、溝は３条であること、切り合いの中心に溝 SD001 が掘り込まれていることを確認した。しかし、溝 SD002、SD003 間の切り合いは不明である。遺構ラインの推定を検討した結果、溝 SD001 の断面形状等が最も規模が小さく、溝 SD002 が最も規模の大きな遺構であると判断された。断面形状はいずれの溝も緩い U 字状で西に行くほど深くなる。土色は調査時点での記録がなく不明であった。

断面 C-C' 部では、南側に向かって階段状の遺構も確認されている。下段より２段目に向かっては緩く弧を描き段差を付けるが、これは本来の形状ではないと判断される。使用途上での崩落の結果であろう。溝 SD003 から１段目までの比高差はやや高く約 20 ㎝を測るが、２段目との段差は数センチしか残されていない。後世の削平によるものであろう。

東側から直線的に延びてきた溝は C-C' の階段状遺構直下でやや南に角度を変え蛇行し、その後再度直線に延びたのち、北へ屈曲を始める様相を呈する。延長線は用地買収外へ延びていることから最終的な形状は不明である。

埋土からは中世後期に位置する青磁皿片が出土しているが、同時に近世磁器の長頸壺胴部片が出土しているため、本遺構は近世の遺構であると考えられる。その他には、欠損端部が丸くなった土師器片が数点出土している。土地掘削時に上層にあった遺物の流れ込み、または表土に使用する耕作土を持ち込んだ際にすき込まれた可能性もある。



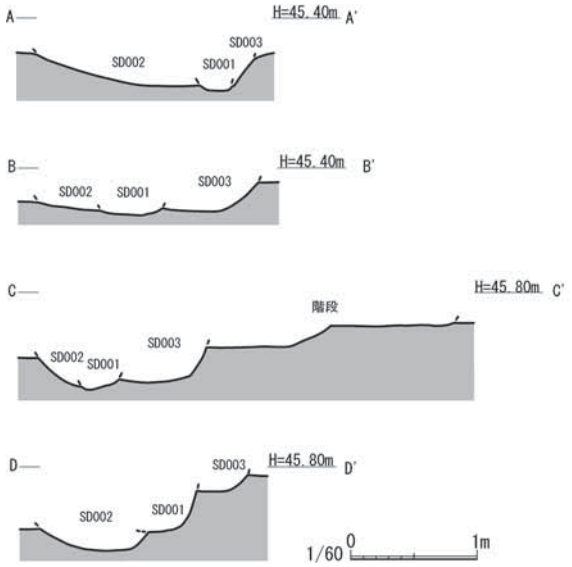


Fig.8　溝 SD001 ～ SD003 実測図

２区　柵列 SA002 ～ SA005（Fig.9）１区で検出した柵列遺構と違い、柵列 SA002 から柵列 SA005 として検出・確認した柵列はほぼ南北に主軸を有する。後に報告するが、柵列 SA002・SA003 と柵列 SA004・SA005 間で検出した掘立柱建物 SB001 を基準とした柵列であったことは、遺構の配置から十分検討するに足るものである。

遺構の全長はそれぞれ柵列SA002が5.1m、柵列SA003が12.2m、柵列SA004が14.4m、柵列SA005が8.1mを測る。また、同時期の柵列であるとした根拠は、中央の建物を挟み西側に位置する柵列 SA002・SA003 が黒褐色土系の埋土、東側に位置する柵列 SA004・SA005 が灰色砂質土の埋土を有すること、それぞれの土壌のなかで同時期に廃絶されたと見られること、遺構下端がほぼ均一で後世期の柱穴が混入しているとは考えられないこと等である。

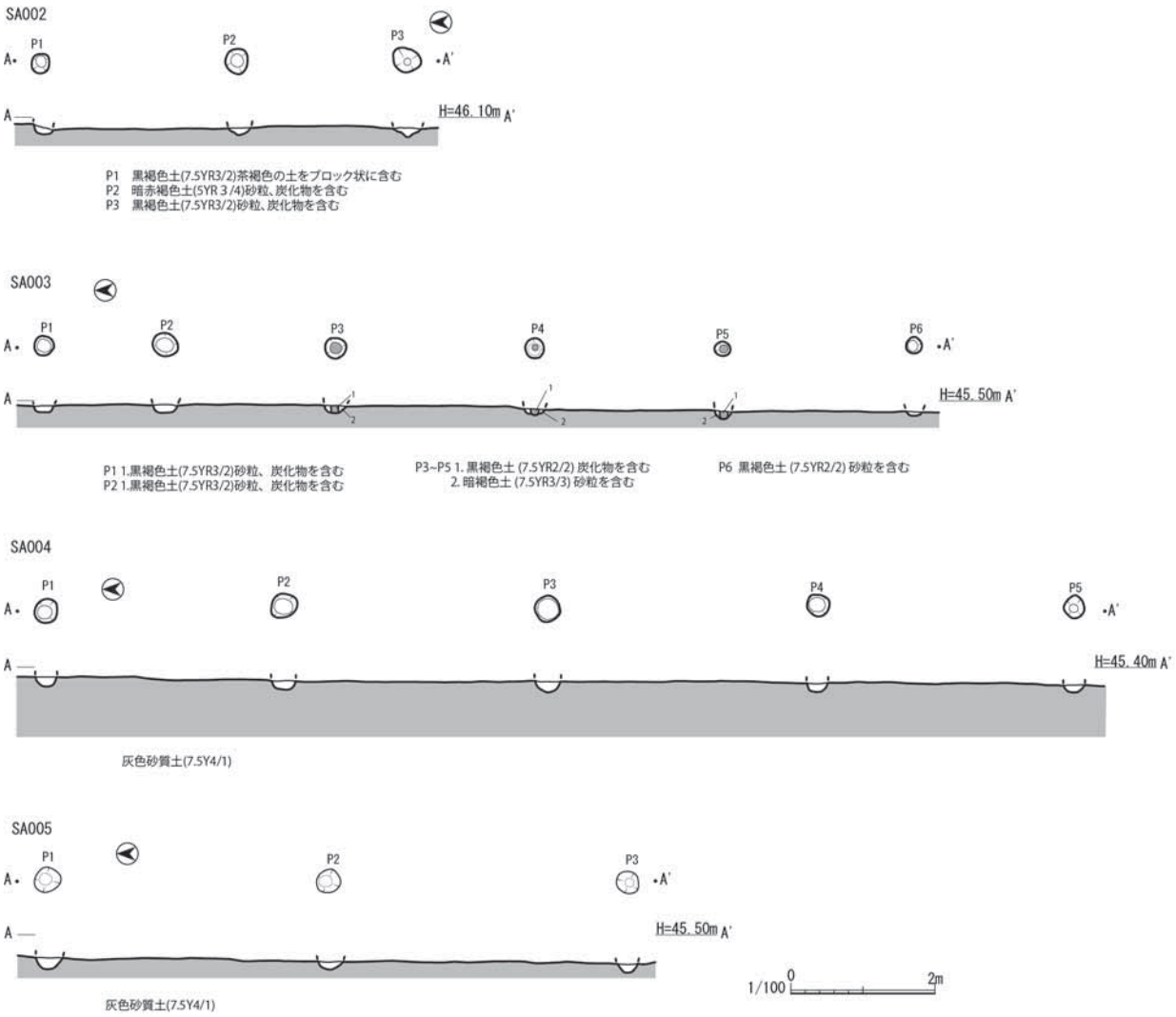


Fig.9　柵列 SA002 ～ SA005 実測図

掘立柱建物 SB001（Fig.10）調査区のほぼ中央部で確認された遺構。側柱は４間×２間で中心に半間ずらした状態で中柱を配している。長軸方向の全長は 15.6m、短軸側は 5.4m、主軸はほぼ南北に位置する。本建物で検出した柱穴群もほかの柵列柱穴群同様に、埋土が灰色と黒褐色土系の埋土であること、下端レベルがほぼ同一であることから柵列と同時期の遺構であると考えられる。

また、建物を検出した場所は 45.250m 付近の等高線間隔が広がっており、緩斜面を削平し整地していることが窺える。埋土中から図示できる遺物の出土はなく、欠損部端部が磨滅したものが多く年代を与えるだけの材料をもった資料はない。

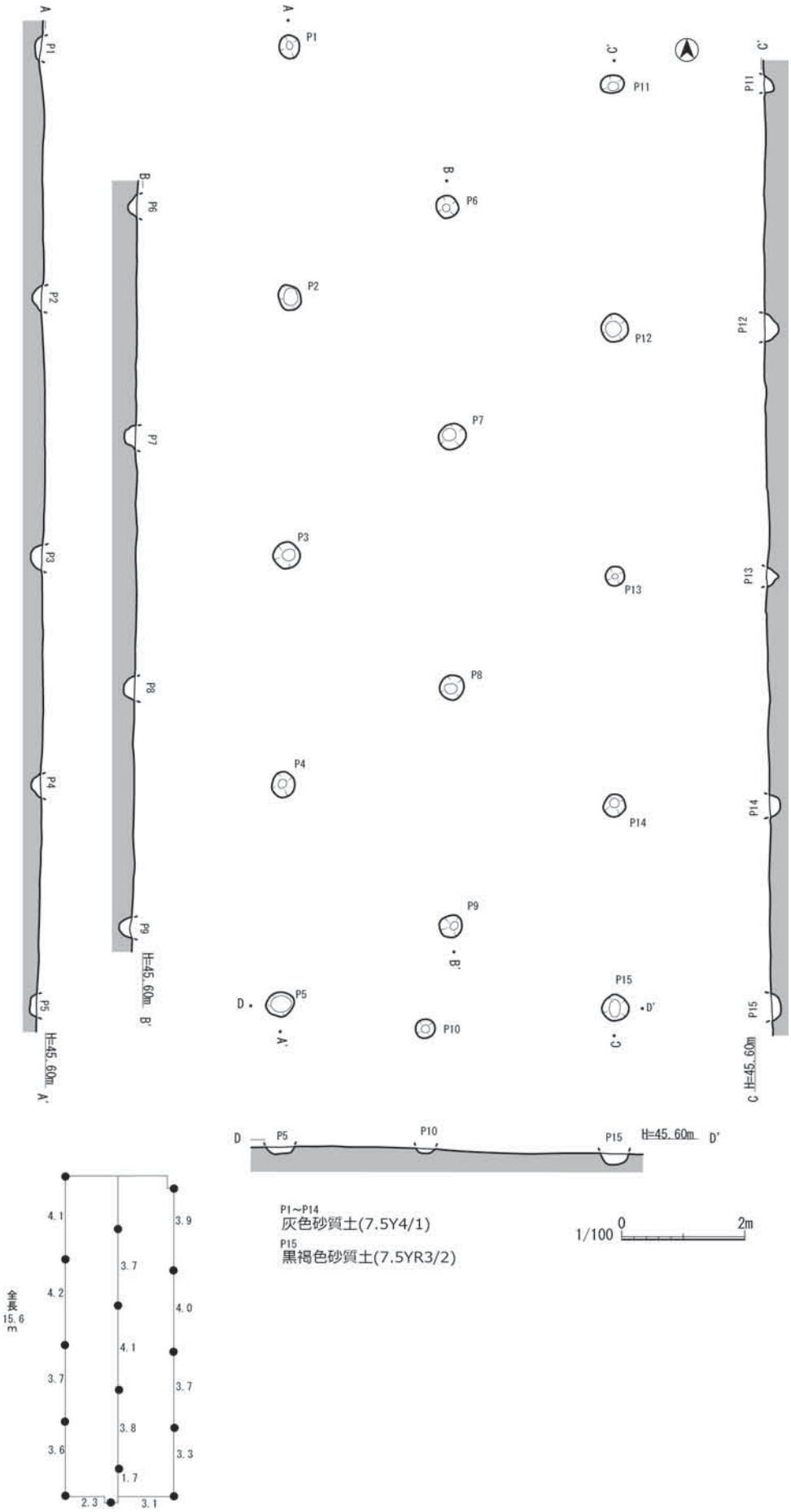


Fig.10　掘立柱建物 SB001 実測図

3　まとめ

今回の調査で検出した遺構は、明確な時期の遺物を含むものではないため、遺構そのものに時期を与えることは非常に危険である。しかし、調査を実施した記録と調査担当者の言を借りまとめとしたい。

調査を実施した平坦面を含む丘陵は、背後の低丘陵から延びる尾根上に位置する平坦面であることから、本調査区で検出した遺構が当該丘陵上で検出できるすべての遺構である。中心となる建物（SB001）が狭い丘陵上の中央に尾根方向に沿って建てられていたことも土地利用を意識したうえでのものと考えられる。また、建物の両端に柵列が並び、両方向からの見通しを分断するような構成となっており、建物の性格を判断するうえで重要な意味合いを持つ。また、遺物包含層が形成される土地ではないこと、遺構検出面が表土層直下であることなどを考慮すると、平野部に位置する遺跡と違い遺物の移動は少なく、出土した遺物が限りなく遺構の年代に近いことが予想される。

出土した遺物をみると、主に溝 SD001 ～ SD003 埋土から弥生後期の土器片、中世後期の龍泉窯系青磁片が出土している。主な遺構は龍泉窯系青磁が持ち込まれた中世後期の掘立柱建物 SB001 などで、これら遺構群造成の際の丘陵上の平坦部造成に伴い、弥生後期の遺構は消滅したものと考えられる。溝 SD001 ～ SD003 埋土からは、碁笥底皿青磁、細連弁文青磁[1]の小片が出土しており、これらの遺物が流通する 16 世紀前半以降の年代が本遺跡で確認した遺構群に与えられる年代であろう。

遺跡が立地する土地は福岡県と熊本県の県境が入り乱れていることから、見通しのきく丘陵上には簡易な砦が多く築かれ、本城に対する出城の機能を持った施設であったと考えられる。

遺跡の年代を 16 世紀前半から後半頃であったとすると、肥後国衆一揆が起こった 1587 年（天正 15 年）前後で、当該地区を含む肥後国北部が不安定な時期とも重なる。このことから、本遺跡で確認された遺構は、丘陵直下を通る三池街道への監視のための施設であった可能性が高いと考えられる。

1　中世土器研究会『概説 中世の土器・陶磁器』　真陽社　1995 の「貿易陶磁器（中世後期の貿易陶磁器）B 青磁」中で亀井明徳氏により、14 ～ 16 世紀に A- 雷文帯蓮弁文椀、B- 細蓮弁文（鎬文）椀の２型式に分類し、うち細蓮弁文については弁の先端が剣頭状でヘラによる片切彫りである B-1 と、口縁直下に連続する弧線を描きそこから任意に高台方向に縦線を下ろす B-2 の２型式に分類している。

長山前田遺跡現況　2011（平成 23 年）初夏

PLATE
写　真

PL. 1　調査区から新幹線トンネル坑口（玉名方面）

PL. 2　溝遺構を挟み掘立柱建物 SB001 方向遺構検出状況

PL. 3　柵列 SA001 完掘（東より）

PL. 4　掘立柱建物 SB001 完掘（北より）

両迫間日渡遺跡１

－九州新幹線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査－

大畦畔内敷粗朶（しきそだ）

熊本県教育委員会

２０１２

例　言

1　本書は、熊本県玉名市両迫間石町に所在する両迫間日渡遺跡　県06-Ⅱ調査区の報告書である。

2　発掘調査は、九州新幹線建設工事に伴い、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構九州新幹線建設局（旧日本鉄道建設公団九州新幹線建設局）の依頼を受け、熊本県教育委員会が実施した。調査費及び整理報告費については、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構九州新幹線建設局が負担した。

3　遺物の整理は、熊本県教育庁文化課文化財資料室で実施した。

4　遺跡の発掘調査は平成18年度に実施し、整理報告作業を平成22年度から23年度まで実施した。

5　本書で用いる地形図は、玉名市都市計画課から提供された図幅、並びに国土地理院発行の2万5千分の1地形図、玉名市教育委員会「両迫間日渡遺跡」掲載図面等をもとに作成した。

　また今回、地元地権者の方々に御協力を頂き、遺跡の測量の基準点測量及び水準測量は「有限会社古家測量設計」に委託して実施した。また、新幹線建設工事の共同企業体の担当者にも協力いただいた。

6　現地での写真撮影は坂口圭太郎、亀田　学、伊藤（手柴）友美子、園田恭子、戸田英祐、桒原　愛、多賀晴司、吉留　広が行った。遺構実測は前記３人の他、飯塚千恵美、高津千尋、吉田ムツ子、吉川ゆかり、堀田祐子、田上俊子、尾浦公治、梅林将旨が実施した。現地での掘削作業は、先程挙げた方々の他、多数の作業員の協力を得た。遺物の実測は、土器・石器を坂井（西野）由葉、渕上久史、亀田、製図は、主に同３人の他、川井田久子、平川恵里子が実施した。遺物洗浄・接合・復元は、松本直枝、上野栄子、三井佳子、松原泰子、水牧藤美、境　美恵子等が行った。遺物の写真撮影は、亀田が行い、これを坂井（西野）が補助した。

　その他宮崎敬士、山口節子、末武希代子、渡邊いわ子、田中知恵美、木村奈美、中島美絵に協力を得た。

7　自然科学分析（炭素同位体年代測定、樹種同定、種実同定等）は「株式会社パリノ・サーヴェイ」に委託した。

8　本書の執筆は、自然科学分析は、「株式会社パリノ・サーヴェイ」が、その他を亀田が執筆した。

9　整理後の保管は熊本県文化財資料室で保管されている。

10　本書の編集は、熊本県教育庁文化課が行い、渕上・平川・川井田の援助を得て坂井（西野）、亀田が担当した。

凡　例

1　**方位／座標**　国土座標第Ⅱ系（日本測地系）を基準とし、方位もそれに準じた。

2　**遺跡地区名**　遺跡全体の地区（図5）の通りである。

3　**遺構名略号**　次の通りである。SD；溝、SX；その他

4　**遺構図版**　標高は東京湾平均海水面（Tokyo Peil[T.P.]）

5　**遺構図版　縮尺**　遺構図版は、ブロックごとに掲載し、縮尺はキャプション及びスケールで図示した。

6　**遺構図版　線種**　遺構平面図は原則として確定ラインは実線で掲載し、遺構上・下端の推定線は破線で示した。また撹乱および調査区範囲については一点破線で示した。

7　**遺構図版**　木杭の断面については木目の方向で（斜線）で示している。これに該当しないものは線のみで示した。

8　**遺構図版　断面ポイント**　各遺構の平面及び断面図では—ラインの内側をポイントとしている。

9　**遺物図版　縮尺**　遺物実測は原則として土器は1/3及び1/2、石器は石製穂摘具については1/2、その他は3/4、木器は1/5で掲載した。

10　**遺物図版　線種**　外形線、中心線及び区画線は実線、稜線は一点破線または二点破線、推定線は破線で示した。また、須恵器については、断面を塗りつぶし、回転ヘラ削りを実線で示したのち、以下底部まで砂粒の動きを示している。

11　**遺物図版**　土器の小破片については、断面図の左を内面、右を外面の立面図にしている。拓本貼付もこれに準じている。須恵器は断面を黒塗りしている。

12　**接合痕跡**　断面の内側に破線を入れている。

13　**遺物観察表**　すべての実測個体について、遺物観察表を掲載した。その凡例は、各観察の下に別項にて注記している。

14　本文中のローマ数字の層名は、遺物包含層を省略して表記している。

第Ⅰ章　調査の経過

第１節　調査に至る経緯と経過

今回報告する調査地は九州新幹線の路線上であり、幅広くなっている調査区域は現在新玉名駅の駅舎の南側になっている部分である。当初調査地の北側及び南側の確認調査では顕著な遺構が存在しなかったが、県道玉名山鹿線の道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査で弥生時代後期と考えられる水田耕作に伴う畦畔が検出され、周辺に水田面が広がっていることが判明した。そこで確認調査を実施していなかった区域にトレンチを設定した結果、水田の畦畔に伴う木杭などを検出した。そのため、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構九州新幹線建設局（旧日本鉄道建設公団九州新幹線建設局）の依頼を受け、熊本県教育委員会が平成 18 年 8 月 23 日から平成 18 年 10 月 9 日まで埋蔵文化財発掘調査を実施した。（平成 18 年 8 月 21 日付け教文 1369 号で発掘調査の通知）を実施している。

第２節　調査の組織

【平成 18 年度】現地調査

調査主体者　柿塚　純男（熊本県教育長）

調査責任者　梶野　英二（文化課長）

調査総括　　江本　直（文化課課長補佐）

　　高木　正文（課長補佐（文化財調査第１係担当））

調査事務　　吉田　恵（課長補佐）

　　高宮　優美（主幹兼総務係長）

　　小谷　仁志（主任主事）

調査担当者　坂口　圭太郎（参事）、亀田　学（主任学芸員）、伊藤（手柴）友美子・園田　恭子・多賀　晴司・吉留　広（嘱託）

調査指導／支援　西住欣一郎（主幹兼文化財調査第２係長）、山下　義満（参事）

　　戸田　英祐・桒原　愛（嘱託）

【平成 23 年度】整理・報告書作成

整理主体者　山本　隆生（熊本県教育長）

整理責任者　小田　信也（熊本県文化課長）

整理総括　　村崎　孝宏（文化財調査第１係長）

　　坂田　和弘（参事兼文化財資料室長）

整理事務　　川上　勝美（課長補佐）、水元　敬浩（主幹兼総務係長）、山田　京子（高校教育課参事）

整理担当者　亀田　学（主任学芸員）、坂井（西野）由葉（嘱託）

第Ⅱ章　遺跡の環境（図 1）

両迫間日渡遺跡は、菊池川下流の右岸に位置する遺跡で山鹿地区から熊本県玉名市両迫間の字日渡・龍王田・御琴・阿弥陀田・上徳等に広がる遺跡群で東西約 300m、南北約 600m の範囲に広がる遺跡である。南側に柳町遺跡が存在し、弥生時代から古墳時代及び古代にかけてが中心の遺跡であることが判明している。また両迫間日渡遺跡や柳町遺跡を包むように古代からの生産遺跡（水田跡）として玉名平野条里跡が広がっていると推定されている。

九州新幹線建設工事に伴い、約 400m 南東の玉名平野条里跡古閑前地区で、弥生時代後期の竪穴建物 15 軒、古墳時代の竪穴建物 13 軒やそれらに伴うであろう土坑が出土している。また、総柱の建物群も想定され、古墳時代から古代にかけて集落が存在していることが判明している。地形をみると、当遺跡は菊池川右岸の自然堤防と西側から伸びる丘陵に挟まれた中央部分にあたり、いわゆる低湿地にあたり、古くから菊池川水系の氾濫していた箇所である。古くから水抜きに苦労したことが伺え、現在も玉名山鹿線沿いに北東から南西に灌漑水路が流れており、生産区域として重要な役割を果たしている。

生産区域を取り囲むように微高地には井戸等を持つ集落が点々と営まれたと考えられる。

すなわち、この区域は弥生時代から古墳時代及び古代の集落及び水田跡と推定され、集落と生産遺跡をセットとして考えられる遺跡である。九州新幹線玉名駅周辺整備事業に伴う玉名市教育委員会による埋蔵文化財発掘調査では、標高約 3.7m で弥生時代中期以前にさかのぼる杭列が 4 群検出されている。方向等から大別して 2 列の杭列を検出している。杭列の木杭の放射性炭素年代測定（AMS 法）などや本報告の成果も合わせると、弥生時代の後期以前のものと考えられる。注目されるのは、杭列内から刻目凸帯文土器が出土しており、どこまで水田遺構がさかのぼれるか注目される。

また、小田宮の前遺跡のボーリング調査の結果、菊池川の流路が東側に蛇行していることが推定される。小田宮の前遺跡も菊池川右岸の遺跡になり、一連の遺跡と考えられる。

小田宮の前遺跡では、古墳時代中期の水辺の祭祀と推定できる遺物群が出土している。鏡を模造した土製品や滑石製の有孔円盤や剣形石製品等が出土している。流路等から古墳時代前期にさかのぼる遺物も出土している。

当遺跡でも本調査区の 150m 西で古墳時代前期から中期の滑石製の有孔円盤や剣形石製品の祭祀遺物が出土している。土坑等に伴う祭祀遺構も検出されており、柳町遺跡にかけて

西側の微高地には集落も点在していたと考えられる。柳町遺跡では古墳時代前期の竪穴建物や井戸や土坑等が検出されている他、農耕具や鳥形木製品など多数の木製品が出土しており、水田耕作や集落に伴う祭祀等の一部が明らかになりつつある。

また、小田宮の前遺跡では縄文時代後・晩期では野蒜が炭化して土器に付着している状況が観察された。当遺跡周辺の県道玉名山鹿線の調査でも縄文時代晩期から弥生前期までの土器が集中して出土する地点もある。今回の調査の縄文土器の分布は調査区の北側を中心に分布しており、北側の微高地には縄文時代晩期から弥生時代前期にかけての集落が営まれていたと考えられる。

柳町遺跡でも縄文時代晩期の遺物が出土しており、菊池川の自然堤防上やそれから派生する微高地や丘陵から伸びる微高地等に縄文時代晩期から集落が営まれていたと考えられる。

古墳時代後期は当遺跡から北側の丘陵部に古墳が点在する。

６世紀前半から７世紀前半にかけて特に装飾古墳である大坊古墳や永安寺西古墳、永安寺東古墳等が分布する。その間の時期には馬出古墳や小路古墳等が分布し、周辺に有力な豪族が連綿と墓域を形成している。

また、７世紀代の竪穴建物や中世の掘立柱建物群が検出されている。

玉名平野条里跡では、奈良時代～中世と考えられる水田跡も検出されており、土地区画の変遷も注目されるところである。

第Ⅲ章　調査の成果

第１節　調査区の位置（図１・２・３）

九州新幹線路線内の現在の駅舎南側からほぼ直交する県道玉名山鹿線に挟まれた路線部分（幅の狭いところで約 8m）、駅舎南側の幅の広いところで約 20m、長さ 33m の調査区域である。

南東側が県道玉名山鹿線に伴う両迫間日渡遺跡県調査 05-1 区に隣接する区域で、あたり一面水田に囲まれており、北側が市道大坊両迫間線、東側が上述のとおり、県道玉名山鹿線（玉名平野幹線水路）、西側が中央水路、九州新幹線駅前周辺整備事業で玉名市教育委員会によって平成 19 年度調査を実施した調査Ⅱ区から東へ 50m の地点にあたる。

弥生時代から古墳時代にかけての住居跡が見つかり、古墳時代の塩を作った土器等が見つかり、注目された玉名市の玉名平野条里跡（古閑前地区）から北東へ 300m ほど離れた地点である。

第２節　調査概要

今回は、主に弥生時代終末から古墳時代後半にかけての水田跡を検出した。

この遺跡の弥生時代の水田跡については県道玉名山鹿線改良工事（県文化課平成 17 年度調査）や九州新幹線新玉名駅周辺整備事業に伴う調査（平成 19 年度調査；玉名市文化財調査報告第 19 集 2009）で見つかっており、その広がり及び時代ごとの区画のあり方を調べ、玉名平野の開発の歴史を解明することが求められていた。

今回の調査では熊本日日新聞で、「熊本最古の水田跡」として取り上げられる根拠になった水田に伴う大畦畔の続きを検出している。畦畔の時期は弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての時期であろうと現在のところ考えている。古墳時代初頭まで大畦畔に伴う区画は機能し、古墳時代後期には、西側の安定した区域を中心に水田は立地していると考えられる。

区画については、弥生時代終末から古墳時代初頭については、小区画水田で５～ 10m 前後の区画と推定できる。

明確な水路や水口や排水口を検出できなかったが、簡易な敷粗朶（しきそだ）技法を用いて畦畔の補強している様子や畦畔内に直交して杭列が並ぶ等の様子が観察できたことは意義深い。

ただ、玉名市教育委員会が杭列で畦畔を推定したように畦畔やそれに伴う溝を検出するのは困難であった。畦畔自体は上層で水田の区画が変わると削平されたり、下層の畦畔跡に影響された擬似畦畔等の認定など難しい面が多かった。さら

に、湧水時期のため、調査区に浸透する水を十分に断ち切れずに土層の観察が難しかった。

玉名市教育委員会調査両迫間日渡遺跡１区の標高 3.7m で弥生時代中期以前の杭列を検出している。刻目凸帯文土器が検出されていることから下層にも水田面が存在した可能性が高いと推定できる。

また、水田面の広がりも本調査区の北西にも（もちろん南東にも）広がっていることが確認できた。

しかしながら、古墳時代中頃の祭祀遺構（ミニチュア土器や鏡や剣等の石製模造品の出土）が玉名市教育委員会の調査で検出されているが、その時期に対応する水田面は明確にできなかった。

一方、丘陵上に位置する古墳に伴う古墳時代後期の水田面は検出できた。古墳時代の玉名平野の開発の一端を解明できた意義は多い。

県道玉名山鹿線改良工事に伴う埋蔵文化財調査の報告が後日なされ、周辺の開発の様子が分析されると考えられるが、縄文時代晩期から中世にいたるまで、重要な生産拠点や集落が営まれていたことが判明している。

周辺は九州新幹線の新玉名駅に伴い開発が進む可能性も高い。

縄文時代晩期から弥生時代前期にかけての頃より、開発事業とともに玉名平野の開発を支えてきた地域であるため、周辺の埋蔵文化財の分布を再考・検討し、町づくりに活かして欲しいと感じている。

第３節　基本土層（図 6、Ph.1）

Ⅰ層は現代耕作土でオリーブ黒色（5YR3/2）、Ⅱa層は灰オリーブ（5Y4/1）細砂混シルト。若干斑鉄が混じる。Ⅱb層は灰色シルト、わずかに細砂（7.5Y2/1）最上部にマンガン斑、全体的に斑鉄が著しい。しまり良。Ⅲa層は灰色シルト(5Y4/1)細砂及び粗砂混、上下の層に比較して暗色で砂質が強い。Ⅲb層は灰色細砂混シルト（7.5Y4/1)。粗砂が若干混じる。若干糸根状鉄あり。Ⅳ層との境は不明瞭なところがある。また、細砂が埋土となる踏み込みが点々と見られる。Ⅳ層は灰色細砂混シルト（7.5Y5/1)。Ⅴa層は暗灰黄色シルト。全体に斑鉄が著しい。上層よりシルト質が強い。Ⅴb層はオリーブ黒色細砂混シルト。しまり良好。

Ⅰ層は現代耕作土。Ⅱ層は現代耕作土床土。Ⅲ層は近世から近代の耕作土及び床土、近世後期以降の陶磁器を含む。Ⅳ層は近世の床土。木の葉猿や青銅製の煙管の吸い口等も出土している。Ⅴ層は中世の耕作面及び床土と推定できる。瓦器も出土。

Ⅵa層は（淡）灰色シルト（10YR6/1）淡褐色細砂を含む。やや青みあり。Ⅵb層は灰色シルト（10YR5/1)。やや砂質が強い。Ⅵc層は灰色粘質土で砂粒を多く含む。マンガン、鉄分が多い。

この層までは一部県道玉名山鹿線道路改良工事に伴う両迫間日渡遺跡 2005 年Ⅰ区の調査結果や出土遺物を参照している。

Ⅵc層は古代の耕作面の可能性がある。

Ⅶa層は灰色粘質土（砂質土を顕著に含む）で、古墳時代後期の耕作面と考えられる。Ⅶb層は灰色粘土でシルト質だが粘性強い（砂質土を含む)。鉄分、マンガンを含む。古墳時代後期の床土もしくは耕作土と推定できる。Ⅷ層は灰色粘土（10YR4/1）砂質を部分的に含む。ややシルト質で鉄分、マンガンが多い。Ⅷ層下層はオリーブ黒色粘土で暗青灰色粘土混。古墳時代初頭の耕作面と推定できる。Ⅷb層はオリーブ黒色（5Y3/2）シルト質土で粘性が強い。Ⅷb～Ⅸ層に伴う小畦畔より南側がやや砂混じりの土を含み、上下２層に分層できる。上層はところどころに鉄分を含む。しまりがなく粘性が強いシルト層。弥生時代終末の水田の耕作面と推定できる。下層は上層に比べ粘性が強く、鉄分がほとんど混じらない。細砂が斑に混じる。調査区の北側にいくほど層が安定し、調査区南側から２つ目の調査区の土層観察用アゼ（ベルト）付近（B12 付近）でこの層が確認できなくなる。洪水堆積にともなう水田区画を表す層と考えられる。敷粗朶技法に伴う畦畔の形成も砂層を含むことから、この土を含む土で行われたと推定できる。

Ⅸ層はオリーブ黒色（7.5Y3/1）粘土でややシルト質。上層部はシルト質が強く、下層部ほど粘性が強い。

上層では砂質が強いことから耕作面の可能性が高い。小畦畔もこの時期から存在していた可能性が高い。Ⅸ層上層は、部分的な調査にとどまったため、時期や区画に不明な点も多い。

夏の湧水期に重なったため調査区内に浸透する水を断ち切れなかったことから十分な分層ができなかったことも一因である。

Ⅹ層はオリーブ黒色粘土（7.5Y3/1)、Ⅸ層より粘性が強く、やや暗い色調である。

Ⅹ層は標高 4.3m くらいと考えられる。玉名市教育委員会で平成 19 年に調査した調査Ⅰ区で弥生中期以前の杭列が標高 3.7m で見つかっている。70 ㎝以上高いことからさらに下層に、弥生後期以前の水田面が存在した可能性がある。

第４節　縄文時代晩期から弥生時代早・前期の遺物

（図 43 ～ 51）

概要　Ⅷ層から遺物の出土量が増える。大畦畔周辺に多い。量的には北側に多いので、集落は調査地の北西側の微高地に存在すると推定される。

刻目凸帯文系の土器は宮地総一郎編年のⅡb期を中心とするが、Ⅱa期の粗製土器及び精製土器の浅鉢も出土している。

また、Ⅰa・Ⅰb期や天城～古閑式の黒色磨研土器後半の土器群も少量ながら出土している。

遺物包含層の時期的にはⅨ層上層が弥生時代後期から終末にかけての水田面と推定できるので、調査時はⅨ～Ⅹ層を縄文時代の刻目凸帯文期のにかけての時期の水田の可能性があるかもしれないと考えていたが、玉名市教育委員会調査Ⅰ区の成果からして弥生時代中期から後期にかけての水田を想定するのが妥当なようである。

(1) 土器（図 48 ～ 51、Ph. 12 ～ 16）

出土状況　包含層Ⅷb層まで顕著に出土する。（図 48 ～ 51）畦畔周辺のグリッドから出土しており、Ⅷ層以下の耕作面などから畦畔を形成する際に上層に浮き上がっている可能性がある。遺物包含層Ⅷ層については、出土数が増えているが傾向は同じである。南北に若干分布が広がっている。Ⅷb・Ⅷc層については大畦畔の位置するグリッドのうちC11 及びC12 に分布が集中する。Ⅸ層も同様な分布をするが調査区の北東側に遺物の分布が集中する。

土器　図 48 の 1 はⅩ層からの出土で黒色磨研土器様式の浅鉢である。口縁部に一条の沈線を持ち、全面を横方向の磨きを施した精製土器で古閑式併行期と推定できる。Ⅸ層上層からの出土であるが、図 48 の 9 も同様な黒色磨研土器様式の古閑式併行期と推定できる。図 48 の 2・3・6・8・10 は黒色磨研土器様式の黒川式の系統を汲む浅鉢で、口縁部刻目凸帯文土器様式の古段階にかけての浅鉢（精製土器）と考えられる。図 48 の 4 は横方向に磨研しているもので細片のため器種認定が困難であるが、浅鉢の可能性がある。深鉢であれば、やや古い型式の可能性がある。（古閑式以前）

図 48 の 7 は黒川式の系譜を引くもので、刻目凸帯文に併行する可能性があると考えられる。図 48 の 8・10・11・12 は黒川式の浅鉢の系譜であり、刻目凸帯文土器様式に併行するかが問題である。

図 48 の 16 は深鉢で、胴部屈曲部に丁寧な横方向のミガキを施し、黒色磨研土器様式の古閑式に併行する時期以前と推定できる。

図 48 の 17 は、口縁部に条痕文を数条施す深鉢で黒色磨研土器様式の古閑式併行期と推定できる。また、図 48 の 13 は細片で詳細は不明であるが、黒色磨研土器様式の古閑式併行の底部円形のボウル形の浅鉢の可能性があると考える。

図 49 は刻目凸帯文土器を中心とした粗製土器である。指押さえで刻目凸帯を施しているのは図 49 の 6 でⅨ層からの出土である。

図 49 の 13 はⅨ層上層からの出土で刻目凸帯文が口唇部よりやや下がった位置に有り、ヘラ状工具で刻目を入れている。

図 49 の 1 はⅩ層からの出土で、口唇部から若干下がった位置にヘラ状工具で刻目を施している。

図 49 の 8・9 は刻目凸帯が断面三角形状のやや突出するタイプで刻目もヘラ状工具の先端で施していると推定できる。夜臼Ⅱa式併行期以降で板付Ⅰ式併行期と推定できる。図 49 の 7 は口唇部が屈曲して先端部にヘラ状工具で刻目を入れている。夜臼Ⅱb式以降板付Ⅰ式併行期と推定できる。図 49 の 6・14 は口縁部上部に凸帯を貼付けているもので、夜臼Ⅱa型式併行期と推定できる。

図 49 の 3・4 は深鉢の底部で、図 49 の 3 は外面に粘土貼付けて踏ん張った形状（円盤形）であり、黒色磨研土器様式黒川式から刻目凸帯文土器様式夜臼式併行期と推定できる。図 49 の 4 はやや上げ底の形状を呈する可能性があることから黒色磨研土器様式古閑式以前にさかのぼる可能性がある。図 49 の 10・11 は刻目凸帯文の胴部片でヘラ状工具による調整である。夜臼Ⅱa式以降の型式と推定できる。

以上図化した図 48・49 の遺物は遺物包含層Ⅸ層からⅩ層にかけて出土しているものである。Ⅷb層に本来属す層からもⅨ層として取り上げている遺物も若干あると思われるが、黒色磨研土器様式古閑式から黒川式、刻目凸帯文土器様式夜臼式、また弥生前期土器である板付Ⅰ式まで型式差が存在する。

図 50 はⅧb層・Ⅷc層・Ⅷ層下層・Ⅶb層出土の刻目凸帯土器型式を中心とする粗製土器である。図 50 の 1・2・12・15 は指による刻目を有する刻目凸帯文土器である。口唇部からやや下がった状況で凸帯を貼付けている。図 50 の 7 はヘラ状工具による口唇部の上方に刻目を持つもので、凸帯部分が低く小さい。胴部のうち、図 50 の 3・4・5・6・9・10 はヘラ状工具による刻目凸帯を持つもので、3・6 は条痕調整が顕著に残存する。胴部に刻目凸帯を有する図 50 の 4 と図 49 の 8 とは刻目凸帯部分の調整・文様の類似により一連の遺物の可能性がある。

図 51 はⅧb層・Ⅷc層・Ⅷ層下層・Ⅷ層・Ⅶb層他出土の黒

色磨研土器様式及び刻目凸帯土器型式の精製土器である。

図 51 の 1・2 は口縁端部が肥厚して厚い黒川式の系統を引く浅鉢である。大きさの復元はできないが、かなり小型の製品である。図 51 の 3 は波状口縁の深鉢であるが、細片のため詳細は不明である。図 51 の 4・5・14 は壷形土器の口縁と推定できる。刻目凸帯文土器様式の夜臼式段階になって顕著に現れる器形である。図 51 の 6・8 は黒色磨研土器様式の深鉢で古閑式以前までさかのぼる可能性がある。図 51 の 8 は横方向に丁寧なヘラミガキを施し、口縁端部を丁寧に調整しているものの、丸みがなくなっており、刻目凸帯文土器様式夜臼式でも新段階の浅鉢と推定できる。図 51 の 9 は 8 と類似するが口縁部の屈曲が図 51 の 8 より緩やかで内面を条痕で調整したままであることから省略化が見られる。図 51 の 12 は口縁端部が若干肥厚する浅鉢である。夜臼式古段階（刻目凸帯文土器様式）かそれ以前と推定できる。図 51 の 13 は口縁部に明瞭な沈線を持つもので、口縁部から胴部までの屈曲も顕著であり、黒色磨研土器様式の天城式くらいまでさかのぼる可能性がある。図 51 の 16 も胴部に沈線が残存し丁寧に作られたもので、地域にはよると思われるが古閑式古段階以前までさかのぼると考えられよう。図 51 の 18 は浅鉢で図 51 の 8 が退化したものとも考えられる。

参考文献　小林　達雄編 『総覧　縄文土器』2008

(2) 石器（図 43 ～ 45、Ph. 10・11）

石器は縄文時代から弥生時代にかけてのものと推定できるが、弥生時代後期と推定できるもの以外はここで紹介する。

図 43 の 1 ～ 3 は打製石鏃である。図 43 の 1 は遺物包含層Ⅷ層出土で抉りが入る。調整は刃部周辺のみ細かい剥離を施す。刃部は先端部と基部よりの側面とを両面交替交替に最終剥離を施す。主要剥離面の左側辺を中心に押圧剥離を施していると考えられる。基部を最後に調整している。図 43 の 2 は三角形を呈する鏃である。最終的には片面から剥離を入れて刃部を最終調整している。図 43 の 3 は刃部の剥離が大きい。主要剥離面の片方から刃部を主に加工している。安山岩製の三角形を呈する鏃である。先端部が欠損する。現存している刃部の部分の剥離は両面の左側面を最終調整している。基部は片面から最終調整を行っていると見られる。

図 44 はスクレイパー及び使用痕剥片である。図 44 の 1 はⅧb 層からの出土である。剥片の側縁に使用痕を持つ。上部を簡易に刃つぶしの調整を行っている。図 44 の 2 はⅧb 層からの出土である。剥片の一側縁及び端部に使用痕を持つ。図 44 の 3 はⅧb 層からの出土である。剥片の一側縁に刃部を形成しているスクレイパーである。図 44 の 4 はⅧ層下層からの出土である。剥片の一側縁に刃部を形成している。端部に剥離を持ち刃つぶしの可能性がある。図 44 の 5 はⅧ層上面からの出土である。剥片の端部及び右側縁を片側から細かく刃部調整を行っている。上部には礫面が若干残存するが、つまみ状になる。小形製品だが、片刃の石匙の形態を呈する。

図 45 はⅨ層から出土の石核である。図 45 の 1 は、打面を転移した後、細かい剥離を行っている。図 46 の 1 はⅨ層上面出土の安山岩製の石核である。打面を転移しながら、剥離を行っている様子が伺える。最終剥離は縦方向の細かい剥離を行っている。図 46 の 2 はⅧc 下層出土の黒曜石の石核で、打面を転移しながら剥離を行っている。最終剥離は連続的に縦長の剥片を採っている痕跡が残存する。

図 47 は各層出土の剥片である。図 47 の 1 ～ 3 は使用痕等が顕著に残存するものである。いずれも縦長剥片の側縁部に残存する。一部欠損も含まれていると思われるが明確でない。図 47 の 1・3 は両側縁に、図 47 の 2 は一側縁に使用痕が残存する。

図 47 の 4 はⅨ層出土の黒曜石の縦長剥片である。図 47 の 5・6・7 は安山岩製の縦長剥片である。図 47 の 6 は端部及び側縁下部が刃部として使用された可能性がある。

小結　縄文土器については、大きく分けて 3 型式に分けられる。まずは黒色磨研土器様式古閑式以前である。口縁部に沈線を持つ浅鉢（図 48 の 1、図 51 の 11・13）や口縁部に条痕文を施すもの（図 48 の 17 等）や、黒色磨研土器様式の胴部（図 48 の 16、図 51 の 16 等）が出土している。2 型式目は、黒色磨研土器様式の黒川式の系統を引くものである。図 48 の 2・4・6 等である。またその他の型式は刻目凸帯文土器様式併行期と考えられる。刻目凸帯文土器様式も宮地総一郎編年のⅡb 期を中心とするが、Ⅱa 期の粗製土器及び精製土器の浅鉢も出土している。また、Ⅰa・Ⅰb 期も出土している。

第 5 節　弥生時代後期から古墳時代初頭の遺構

概要

Ⅷb 層の時期がメルクマールになる。水田遺構は顕著に砂の層が見られ、大畦畔の粗朶の上には、Ⅷc 層上下層を分離する砂の層に対応する可能性が高い砂層が含まれることから、水田の面が押さえられる。水田面の耕作面にはⅧb 層を耕作面とする層の下には、Ⅸ層上層を耕作面とする水田面が広がっている。基本的に土器や石器等を伴う遺構ではないが、流れ込みの遺物や上下の層の遺物の出土状況等から考えて弥

生時代後期～終末にかけての時期と推定できる。この層より上層は少なくともⅧ層までは大畦畔は機能していたと考えられる。

(1) 遺物包含層Ⅸ層検出遺構

ア　概要

(図 5 ～ 8・43・48・49・52、Ph. 6・13・14)

Ⅷb層に明確に畦畔が形成される以前のものである。大畦畔部分は調査区南西部分のⅧb層の段階で造成をおこなっており、Ⅸ層段階の構造は不明であるが、Ⅸ層上層に砂質土が混じると認識できる箇所が存在するため、この層を耕作層と認定して良いと考えられる。

A0-A2'の土層断面観察によると、北東分が 10 ㎝下がっており、ややU字状を呈する。(図 6)

区画については、Ⅷb層まで踏襲している可能性が高いが、調査区の南側でⅧb層の大畦畔から北に 3.5 ～ 4m離れた位置で畦畔を検出した。それらしい畦畔を検出できたのは、調査区の南東部と北西部のみで中央の区画を検出できなかった。そのため、区画の詳細をつかむに至らなかったが、3.5mから 10mの不定区画水田を推定したい。(図 5)

イ　畦畔（図 5 ～ 10）

検出した畦畔は蛇行しており軸は明確でないが、一番南側で検出したものは座標北より約 50°程西に振れている。断面観察によると基底部の幅は 80 ㎝と広いが、断面観察によると明確ではないが、Ⅷb層の耕作面の段階で削平されており、その際に広くなったと考えられる。そのため、幅 50 ㎝程の規模の畦畔と推定したい。検出できたのは約 12m、その先は 17m離れて約 7mであり、半分の長さしか検出できていない。北側で検出した畦畔は調査区の北西から 3m離れた箇所で途切れた状況で検出されており、水口の可能性があろう。

また、耕作面を区画するその畦畔については、調査区の南東部分はⅧb層の段階で大畦畔に敷粗朶技法が取られており、軟弱地盤である。このⅨ層段階でも、断面B0-B1 の断面図によると北東側から南西側（南側）に向かって 10 ㎝程耕作面が下がっていることが観察できる。同様に軟弱な土壌であったと推定できる。(図 7)

さらに、断面観察によると位置的にはこの畦畔に併行している畦畔についてはⅧb層段階の大畦畔の下層にほぼ想定できると考えられ、平面の位置図には畦畔推定線を復元的に入れている。

ただ、A0-A2'の土層断面観察によると、Ⅸ層上層の耕作面が大畦畔下層と南側の北東部分が 10 ㎝下がっており、ややU字状を呈する。耕作面の時期もあろうが、最終的には溝の役割を兼ねる氾濫を想定する区域になった可能性もある。(図 6)

もし、復元が正しければ南側のグライ化した土壌に行くに従い、その区画の面積が小さくなる。

併行する畦畔と推定するのが、Z14、Z15、A15 で検出している。蛇行して検出できたが、断面で確認できたのは、断面 D0-D1 である。高さ 7 ㎝で畦畔上部がややM字を呈する。

また、平面検出した畦の高まりに対して断面 Q-Q'にもわずかに痕跡が認められる。(図 9) Q-Q'にかかる畦畔は D0－G－G'方向に設定した調査用土層観察用の中に続いていたことも想定できる。(図 8・9)

ウ　溝（図 9・10）

Ⅸ層段階でも大畦畔の両側に排水や取水の溝があった可能性があるが、平面的には明確に検出できなかった。

ただ、L－L'の断面を観察すると大畦畔の北側及び南側が溝状になり杭が打たれた部分や横木が倒れている状況が伺える。(図 10) K－K'、J－J'も溝状の痕跡があった可能性がある断面である。(図 9) こうした箇所はⅨ層耕作面の段階でも溝状に機能していたと推定したい。

エ　遺物出土状況（図 43・52、Ph.10・21）

遺物の取り上げの際、大畦畔の粗朶内の下層及びⅨ層上層のグライ化した土壌の部分をⅨ層として取り上げた部分もあり、また、混入品もあると考えられる。

土器　図 52 の 1・2・3 はⅨ層出土である。1 は長頸壷の口縁部と考えられ、図 52 の 4 のような壷の一部と推定できる。図 52 の 2 は甕の口縁でタテハケ目のち丁寧にナデている。図 52 の 3 は脚部で小形甕や鉢等の底部である。内面も丁寧にナデている。細片で不明であるが、他の層等の土器も勘案して考えると弥生時代後期後半と推定できる。ただ弥生土器は畦畔部分を中心に 10 数点しか出土していない。

土師器については 6 点程出土しているが、少数であり、図化できるものがない。

石器　図 43 の 4 は石製穂摘具である。孔間距離約 3 ㎝、刃部幅 1.5 ～ 3.5 ㎜で片方の刃部幅が狭い。孔背間距離は約 0.7 ㎝、孔径は 3.5 ㎜である。研磨は横方向に施した後、縦方向に刃部方向は特に丁寧に背部も丁寧に研磨している。杏仁形である。弥生時代後期であろうが、孔間距離が長く孔の穿孔する範囲も広く、やや古い形態である。

オ　小結

残念ながら、還元された（グライ化）土壌での検出である点や調査時間が不足しており、Ⅷb層検出大畦畔を十分解体しながら下層を調査できず、調査用畦も除去できなかった。

さらに、畦畔方向の推定への認識が調査中に不足していたため、十分に区画をつかめなったのが実状である。

工楽善通氏の水田立地の分類によるとＢ類に位置づけられる。現況の地形から比較的高低差の少ない沖積地で水田を小さく区切る必要がなく見えるが、周辺の調査によると微地形で谷や微高地が存在し、微高地の縁辺から低湿地にかけての緩やかな傾斜地を利用したものと推定できる。そのため、小さな区画が必要な区域であったと考えられる。

Ⅸ層出土の遺物に土師器が含まれるが、上層取り上げの遺物と接合する細片が多い。混入遺物と考える。Ⅷb層の出土遺物に接合して復元できているものが多い。Ⅷb層で復元できる土器が図 52 の 4、図 53 の 1 等であり、大きめの破片で復元できそうなものが図 53 の 2・3 であることを考えると、この時期の耕作面を弥生後期後半から終末〔畿内第Ⅵ様式(庄内式）併行期〕と考えられる。図 52 の 4・5 を見ると弥生後期中葉以降、図 53 の 1・3 の土器を見ると、弥生後期終末と考えて良いと思われる。推測の域を超えないが、Ⅸ層耕作面は、弥生後期中葉併行期以前の可能性がある。玉名市教育委員会の調査等からⅨ層もしくはⅩ層が耕作面だとすれば、弥生中期までさかのぼる可能性を提起しておきたい。

(2) 遺物包含層Ⅷb層検出遺構

ア　概要（図 11 ～ 13・21 ～ 24・52・53、Ph. 1 ～ 5）

大畦畔を確実に伴う時期の耕作面である。区画としては、Ⅸ層の区画をほぼ踏襲していると推定できる。

Ⅷb層と認定している層位は南東側に一部に存在する。

畦畔の上部は敷粗朶技法と言われる枝や木材を畦畔の軟弱な部分に敷いて土が沈んでぬかるんで歩けなくなるのを防ぎ、通行できるように工夫されている。また畦畔を補強するように両脇に杭を打ち、補強している構造が見られた。

イ　畦畔（図 11 ～ 14・22、Ph. 1 ～ 5）

Ⅷb層及びⅧc層と認定している層位は南東側に一部存在する。

Ⅷc層はⅧb層に含まれるが、特に顕著に砂の層が含まれる層位に調査時に付けたが、断面A0-A2'、E-E'の間に一部存在する層である。同様な層は大畦畔周辺にも存在し、畦畔粗朶内のⅧb'やⅧb''等の層が対応する可能性がある。(図 14)

Ⅷb層は大畦畔に直交している畦畔まで存在し、断面で言うとT-T'やH-H'付近までである。

畦畔の形態は、幅 90 ～ 100 ㎝程であり、台形状を呈する。畦畔を形成している土はⅧb'・Ⅷb''・Ⅷb'''層等であり、その都度補強されていると推定できる。畦畔の中央は 10 ㎝以上くぼんでいるところがある。その部分には、大きい物で 50 ～ 80 ㎝の長さの木（枝）や杭等が土とともに積み重ねられている。それが約 6mの長さにわたり続く。畦畔に平行や直交して積み重ねられていると言うより、土とともに斜交して、不規則に積み重ねられている。整然としているとは言いがたい状況である。杭材も若干含まれるが、杭の転用材というよりは、自然の木を利用していると考えられる。20 ㎝未満の枝状のものも多数出土している。

大畦畔に平行と言うより併行している畦畔を検出している。当初Ⅸ層の耕作面の畦畔を検出したと考えたが、断面状況から見るとⅧb層の耕作面の段階まで機能していたと考えられる。

その構造は、断面台形状であるがⅧb層の耕作段階ではA0-A2'等の断面で平坦部は 20 ～ 30 ㎝程度のものと推定できる。(図 12)

ウ　溝（図 14）

畦畔に伴う確実な水路の溝等は検出していない。しかしながら、L-L'の断面や畦畔南西側の木の出土状況を観察すると、幅 1 m、深さ 15 ㎝の溝を想定して良いと思われる。

ただし、Ⅸ層上層の断面で指摘したように併行している小畦畔との間は、いわゆるある時期に溝のような役割をしていた可能性があるため、整然とした列状に杭が検出されなかったと考えられる。また、L－L'の杭は長さ約 30 ㎝、径は約 5 ㎝であり、枝状の柵を軽く止める程度のもので上部に砂状の堆積が多く、残存状況が悪かった可能性がある。

エ　遺物出土状況

（図11～14・21・22・52・53、Ph. 2～5・16～18・20・21）

水田面に伴う遺物は出土していないが、大畦畔の粗朶内や周辺から大きな破片で復元できるものが数点ある。(図 22)

全体的な個数を見ても大畦畔の所属するグリッドに遺物が多い。弥生土器が一番多く、内面にケズリを持つ薄手の土器（弥生終末から古墳時代初頭の甕類）はほとんど大畦畔周辺のみと言って良い。確実に弥生土器と言える土器は少ない。

粗朶内を完掘したとは言えないので、断定できないが、Ⅷb層及びⅧc層は砂を含み、洪水等で流された土に混じり畦

畔周辺で止まり、割れた可能性も想定したい。畦畔に伴う祭祀の可能性も想定できなくないが、状況からは前者の可能性が高く、厳密な年代を推定する資料ではないと考える。

また、縄文土器も出土している。畦畔周辺に多いのは他の時期の土器と同様の出土状況である。

土器　図 52 の 4 はⅧb層・Ⅷc層・Ⅸ層の土器が接合されている。口縁部から胴部の上半部、胴部下半から底部が接合できるが、胴部上半から下半部で接点がなく器形を考え実測図上で復元した。口唇部に櫛歯刺突文と胴部と頸部の境に列点文を施している。調整は外面胴部上半にハケ目が残存するが、その後ナデ調整をおこなっており、丁寧なつくりである。底部も平底が若干残存する。図 52 の 5 は同じく口唇部に櫛歯刺突文を施し、頸部に刻目凸帯をめぐらせており、頸は長くはない。器形は壷である。他地域の影響を受けている可能性がある。図 52 の 6・7 は櫛描波状文で長頸壷の頸部のやや下がった箇所と推定できる。

図 52 の 8・9 は甕の口唇部に面を持つもので弥生後期と推定できる。図 52 の 9 はタテ方向のハケ目が残存しており、調整の省略化が見られる。図 52 の 10・11 は外面にタタキが残存しているが、タテ方向のハケ目で一部調整している。図 52 の 13・14 は弥生土器の甕の底部である。図 52 の 15 は小形器種の底部である。土師器の可能性もある。細片で特定できない。

図 53 の 1 は口縁端部が丸く、外面及び内面の胴部下半がヘラ削り調整である。底部は尖底である。口縁部の形態は面を持つタイプであるが、熊本県上益城郡益城町の古閑南遺跡等と共通点がある。図 53 の 2 は甕で口縁部は沈線状のものを持ち外反し、胴部外面はハケ目調整を丁寧に消している卵形の土器である。図 53 の 3 は甕で口縁端部がやや丸みを持ち外反し、頸部にまで右上がり方向のタタキを残す。内面下半部には左上がり方向のケズリを残す。上半部はナデ消している。胴部下半部が欠損して不明であるが、卵形を呈すると考えられる。図 53 の 4 は甕で口縁部がやや外反しながら端部付近で上方にややつまみ上げ、丸めの端部を持つ。図 53 の 5 は 2 と同様には頸部付近までケズリを残す。図 53 の 6 は尖底と考えられ、内面に指頭圧痕が残存する。長胴形の壷形土器と推定できる。内外面に右上がり方向のハケ目を残す。

オ　小結（図 53、Ph.18）

Ⅷb層は洪水で流れてきた砂を含む層であり、この層の存在する時期だけでなく、北西部のⅨ層の耕作面の新しい段階と同時期の可能性もある。

時期的には遺物出土状況で述べたとおり、年代の推定は土器からは難しいが、Ⅷb層に含まれる細片や復元できる遺物から弥生終末からいわゆる古式土師器の時期までの間を想定したい。なお、型式学的には、図 53 が野田編年で言う古閑期（図 53 の 6 は前段階に含めても良い）から山下期併行期と考えられる。図 52 はいわゆる弥生後期後半（うてな遺跡段階）と考えられるが、その段階までさかのぼる可能性も否定できない。

なお、木杭の年代測定も現段階では弥生終末から弥生後期と推定できる年代を得ている。ただし、悉皆調査した訳でないので、年代の誤差はあり、木杭を加工する木の供給先も問題となろう。

第 6 節　古墳時代時代初頭の遺構

概要　Ⅷb層で作られた大畦畔を踏襲しながら直交する区画等を若干変えながら 2 面の耕作面を認識できると想定できる。

Ⅷ層の耕作面から、古墳時代後期の遺物も若干見られるが、混入と考えられる。溝等は明確に認識できていない。

(1) 遺物包含層Ⅷ層下層検出遺構

ア　概要（図 14 ～ 21、Ph.2 ～ 6）

Ⅷb層の大畦畔を踏襲し、7 ～ 10mを最小単位とする区画を持つ耕作面と推定される。溝や水口の状況を確定するには至らなかった。

イ　畦畔（図 14 ～ 21、Ph.2 ～ 6）

大畦畔を踏襲する時期のものと考えられる。T-T’、L-L’の断面を観察すると耕作によりⅧ層下層の畦畔の幅が 60 ㎝と狭くなっている。Ⅶb層の耕作の段階で畦畔が削平されており明確ではないが、大畦畔で検出した杭列のうちいくつかはこの段階で打ち込まれた可能性が高い。図 22 のⅧ層下層段階杭列の平面分布やL-L’の断面等から真ん中内側と外側の間の深さの浅い杭等が該当する可能性がある。杭列の悉皆調査をできていないため詳細は不明であるが、推定の杭列を図示している。(図 22)

この段階では明確に北西方向の比較的安定して検出した段階でグライ化していない層まで区画が続く。

Ⅷ層を少し削った段階で検出した畦畔がこの段階まで継続すると推定していたが検出した杭列の状況やH-H’やC-C’やK-K’、J-J’の断面等からⅧ層段階と重なる部分はあるもののⅧ層段階の畦畔よりも若干北西方向にずれた状況が推定

できる。

Ⅷb層が分布する区域やR-R'やS-S'ではⅧ層を上下2層に分層でき畦畔らしい高まりを検出したが、他の調査用ベルトでは必ずしも分層できていない。K-K'の断面やJ-J'の断面を観察すると畦畔状の高まりを近接して観察できることから、Y15・Z14・A13などに位置する畦畔を復元した。

ウ　溝（図19・20）

T-T'やL-L'やE-E'の断面を観察しても大畦畔周辺には明確な溝は検出できない。上層の耕作段階でならされた可能性もある。

エ　遺物出土状況（図54、Ph.19）

畦畔の出土している地点に弥生土器、土師器、縄文土器等共通して多い。量的には土師器、そして弥生土器である。

一番多いのはC11グリッドの古墳時代初頭の土師器の出土である。

前述のように耕作面に伴う遺物はない。耕作によりそれより前に流れ込んだ土器を畦畔に投げ上げたりしていると考えられる。

土器　細片のため、口縁部も詳細不明である。ただ参考になるのは、図54の1である。口縁部がつまみ上げられ、端部が内傾し丸くなっていることから、Ⅷb層段階よりやや時期を下って良いと考えられる。

オ　小結

先に7～10mの最小区画を持つ耕作面としたが､A12グリッドで検出された北西から南東に伸びる幅50㎝の畦畔がこの段階に伴えば､4～5mの区画が最小単位になる可能性がある。畦畔や溝や水口等はⅦb層段階で耕作されており明確でないが、調査地全体の区画がぼんやりと判明できる。

時期については、耕作面に直接伴う土器はないもののその出土状況から古墳時代初頭に位置づけたい。

(2) 遺物包含層Ⅷ層検出遺構

ア　概要（図24～30、Ph.7）

Ⅷb層の大畦畔を踏襲する区画を持つが、直交する区画は調査区の北西側に検出した程度である。杭列は伴う最終段階である。Ⅶb層の耕作面により畦畔は削平を受けている。

イ　畦畔（図24～30、Ph.7）

Ⅷb層の大畦畔を踏襲した最後の段階である。検出した畦畔の平坦幅は南東部で80㎝、A12付近では1m以上ある箇所も存在する。

A0-A2'、T-T'やL-L'の断面などからわずかに畦畔の痕跡を残す。

Ⅷb層・Ⅶb層段階の耕作により畦畔が明瞭でなくなったと推定できる。

Ⅷb層が分布する区域やR-R'やS-S'ではⅧ層を上下2層に分層でき、畦畔らしい高まりを検出したが、他の調査用ベルトでは必ずしも分層できていない。Y15・Z14・A13グリッドなど蛇行する畦畔を検出した。K-K'の断面やJ-J'の断面を観察するとわずかに畦畔状の高まりやくぼみを確認できる程度である。

また、Z13・14ではP-P'の断面で高まりを確認できる大畦畔に直交する畦畔を6mほど検出した。

また、調査区の北西部分C0からC1の部分に大畦畔に直交する高まりや水口等の排水・給水の状況を示す施設の確定するには至らなかった。

ウ　溝（図25・26）

調査区の北西部分C0からC1の部分に高まりを検出したが、B4・B5付近（W13・14グリッド）の断面やW14・X14付近で溝状のくぼみを検出した。直交する比較的大きな畦畔と排水の溝の可能性がある。

エ　遺物出土状況（図53・54、Ph.19）

大畦畔付近周辺が多いのは他の層と共通するところである。Ⅷ層下層と同様に土師器の出土量が一番多く、点数的には弥生土器の2倍以上である。やはり、多いのが敷粗朶技法で作られた畦畔周辺である。

土器　Ⅷ層で図化できたのは、図54の3と5である。図54の3は弥生後期と推定できる甕の底部である。弥生の小形器種の底部とも考えられるが、図54の5は底部径9㎝で厚みが2㎜であることから土師器の小形器種の可能性がある。

また、図54の6は須恵器模倣杯（土師器）である。内外面に丁寧な横方向の静止ヘラミガキを施しており、黒色に塗られている。図54の7は須恵器杯蓋でありMT85型式期以前のものと考えられ、天井部と口縁部の境目に稜が残存する。

図54の8は須恵器杯身の口縁である。端部は丸く、沈線は消滅しており、器壁も3㎜と薄い。傾きがもう少し立つ可能性があるがTK43型式期を中心とした時期であろう。図54の4は、頸部はやや厚めでⅧb層出土土師器より時期が下る様相であろう。

オ　小結（図 54、Ph.19）

平面や断面を観察すると 10m 以上の最小区画を持つ耕作面の可能性があるが、特に南東側の大畦畔に直交する畦畔を検出できなかったため、比較的大きな区画の可能性もある。

この耕作面に直接伴う遺物はない。図 54 の 6・7 のような古墳時代後期の土器は出土しているが、Ⅶb層からの出土量は少ない。畦畔がⅧ層下層等から継承していることから考えて、これらの土器を混入品と考えて、Ⅷ層下層から若干時期が上る、Ⅷb層耕作面より 1 ～ 2 型式期下った古墳時代初頭の時期と考えたい。

第 7 節　古墳時代後期の遺構

概要　Ⅷb層で作成された大畦畔よりややずれた区画で水田面が作成されている。やはり小区画水田と考えられる。畦畔を検出時に須恵器を検出しており、古墳時代後期の水田面と想定している。下層の水田面よりやや時期の差があると考えられる。

(1) 遺物包含層Ⅷb層検出遺構

ア　概要（図 31 ～ 35、Ph.8・9）

南北から約 50 ～ 60°西に振れた畦畔を持つ小区画水田と推定できる。一辺の区画は 4 ～ 10m と不定形である。

イ　畦畔（図 31 ～ 35、Ph.8・9）

大畦畔のⅧb層が存在した範囲には明確な畦畔は検出できない。平面的に検出したのはその北西側で、ポイントで言うとB2 とD1 を結んだ線付近である。R-R’の断面からは畦畔は約 60 ㎝幅である。F-F’、K’-K’’の断面からは高まりを 2 カ所観察できる。平面的に顕著に検出できたのは南側の方であり、A12･Z13 付近で蛇行している。北側で検出した高まりは，広い意味でのⅦb層の耕作面の畦畔か、または、畦畔に伴う溝による凹みと高まりか判断が難しい。

平面的には X14 や Y13 及び Z13 付近で畦畔を検出できなかった部分もあり、畦畔を切る水口や排水があった可能性もある。

ウ　溝（図 32・35）

R-R’の断面からは畦畔の南東側に溝状のくぼみを観察できる。平面的には検出できなかったが、さきに畦畔のところで触れたように北西から南東にかけての畦畔の北（東）側や北東から南西に伸びる畦畔の南（東）側に溝状遺構を推定できなくもないが、平面的にうまく検出できなかった。(C2-C3 の断面では凹みが検出される。)

エ　遺物出土状況（図 54、Ph.9・19）

Ⅷ層には C11 に須恵器及び須恵器模倣土師器が出土しているものを混入品と考えられた。しかしながら、この段階の耕作面には若干ではあるが、畦畔の上で検出した須恵器もある。(写真 ;Ph.9) 須恵器は北西側に 3 点検出している。

土師器については、北側に集中している。厚手の土師器は見当たらないが、古墳時代中期以前のものが大半と考えられ、前の耕作面に当たる時期の土師器が撹乱された状況の出土状況が推定される。

ただ、破片であるが、回転台土師器の杯のようなものも存在する。上層Ⅶa層からの混入と推定しておきたい。

弥生土器についても北側に数点出土がある。縄文土器は北西側に若干出土する程度である。

土器　図 54 の 10・21 は口縁端部をややつまみ上げるように内傾する。やや端部が内側に肥厚する甕の口縁である。図 54 の 11 も端部がやや狭くなりややつまみ上げ加減である。図 54 の 14 は胴部内面に横方向のヘラケズリが残るもので器壁が 4㎜ でやや厚めである。いずれも弥生終末から古墳時代初頭にかけての特徴である。

図 54 の 13･15 とも布留式新段階併行期以降と推定できる。図 54 の 13 は端部がやや細まりながら大きく内傾する。割れ口から甕の口縁と推定できる。図 54 の 15 も土師器の甕の底部で内面に指頭圧痕が残る。底部付近の厚みが 1㎝ 以上ある。

図 54 の 17 は須恵器杯身の体部である。底部にヘラ記号を持つ。図 54 の 16 は土師器杯である。外面に横方向の静止ヘラケズリが残存する。口縁端部がやや内傾し、胴部が張っている。高さも 4 ㎝程で浅い。

また、図 54 の 18 は細片で不明であるが、土師器の皿と考えられる。図 54 の 19 は赤褐色（2 ～ 3 ㎜）の胎土が緻密な土師器である。回転ナデによる整形でいわゆる「回転台土師器」である。9 世紀代か。

オ　小結（図 31 ～ 33・54、Ph.8・9・19）

北側の区画が明確には検出されていないが、西側の検出できた区域を見ると、整然とした区画ではなく、不定形の小区画の水田と考えられる。

時期的には耕作面に伴う遺物はないが、この段階でⅧb層の大畦畔による区画が変わり、杭等を伴う畦畔がなくなること。細片ではあるが、土師器の比率が下層の遺物より高まる。

また、Ⅷ層に須恵器が混入し、この層でも須恵器が出土していることから、古墳時代初頭から若干時期が下る古墳時代後期（須恵器のTK43型式を中心とする時期）の耕作面と考えたい。

なお、図54の18・19は上層からの混入品と考えておきたい。

なお、調査区の南西部で畦畔を平面的に検出できていない。

A0-A2'断面及びB0-B1の断面等を観察するとB0-B1に北西から南東に向かって伸びる畦畔が重なっている可能性も考えられる。また、南西部のそれに直交する区画については、南西区域に設定した土層観察のためのベルトに一部重なるように存在した可能性も提起しておきたい。

第8節　古代以降

概要　県道玉名山鹿線調査時の隣接地ではⅤ層段階で水田面を検出し、現段階で中世の年代を推定している。その下層面も区画は明確ではないが、水田面である可能性があると推測される。

今回は、調査期間が短く、Ⅴ層段階の区画を検出できなかった。

Ⅵc層段階から人力掘削をしたため、その上層の区画は解明できなかった。

Ⅶa層段階で水田面と推定できる区画の一部を検出した。また、Ⅵc層より上層から掘り込まれた溝を検出した。

(1) 遺物包含層Ⅶa層検出遺構

ア　概要（図36～40・54、Ph.9・19）

Ⅵc層に荒い砂が顕著に混じるためその砂が混じる層を除去する際に溝状の遺構及び畦畔状の高まりを検出した。北西部しか検出できていない。10m以上の区画と一部5mの区画といった具合で上層の耕作により明確には検出できていない。小区画水田とは言える。

イ　畦畔（図36～40、Ph.9）

B3-B4の断面を観察すると01-SDの北西側には溝状のくぼみを検出できる。幅約60㎝程の台形状の断面である。畦畔と推定して良いと思われる。B2-B3の断面にはやや高まりがあり、高まりの上が耕作もしくは踏み込みの跡がある部分がある。

平面でA12・13からZ12にかけてのグリッドで畦畔（03-SX）を検出した。B2-B3の断面に畦畔の高まりや踏み込み（耕作等）がわずかに反映している。

また、C2-C5の断面観察で02-SDの北西側に畦畔を想定できる。

さらにG-G'、F-F'に囲まれた区域で畦畔を検出した。Ⅶa層上層からしか土層断面が残存しない部分のため平面でしか確認できなかった。

溝と畦畔が十分復元できないが、01-SDと03-SDの間が約10～12m、Z14グリットで検出された小畦畔と02-SDとの距離が約5mで、区画は5～12mくらいの規格を持つ小区画水田と考えられる。

ウ　溝（図36・38・40,Ph.9）

① 01-SD　Ⅵc層は灰色粘質土で砂粒を多く含み、洪水による堆積と粘土質の土が混じる。これらの土を除去していると、特に砂混じりが多い溝状の遺構を検出した。

B3-B4の断面ではB4から約1.7～2.2mの間で落ち込み状に観察できる。白色の粗砂が多く混じっている。

② 02-SD　C2-C5の断面を観察すると幅約40㎝、深さ4㎝のわずかな凹みと北西側にわずかな高まりを検出した。

エ　遺物出土状況（図54・Ph.19）

Z14グリットで須恵器を1点確認している。外面を格子目タタキ、内面を平行タタキで調整していることから見て古代の奈良～平安時代のものと推定できる。（図54の23）

古代の土師器のような破片も存在するが、明確でない。古墳時代の遺物が大半と思われる。

土器　図54の20は弥生土器甕の脚部で、内面も丁寧にナデている。図54の21は甕の口縁で、口縁部を若干つまみあげている。弥生終末から古墳時代初頭の特徴を持つ。図54の23は須恵器の甕の胴部で外面が格子目タタキのちハケ目、内面は横方向の平行タタキである。奈良～平安時代の須恵器の胴部と推定できる。

オ　小結

5～12mの小区画水田であり、Ⅷb層からⅧ層までの区画やⅦb層の区画とは方向はほぼ同じであるが、小区画の位置はそれまでとは異なる。

また、耕作面の年代であるが、直接に伴う土器はないが、図54の23や、図54の19（Ⅶb層下層出土土器）等を参考にして平安時代前期（9世紀頃）と推定したい。

(1) 遺物包含層Ⅵc層検出遺構

ア　概要（図 41・38・54、Ph.9）

Ⅵc層の上層まで重機で掘削したため、Ⅵc層より上層は明確でない。ただ、南東から北西方向の溝を検出した。

B2-B3 の土層断面で確認できる。幅 40 ㎝、深さ 5 ㎝程である。

イ　畦畔

畦畔は確認できない

ウ　溝

幅 40 ㎝、深さ 5 ㎝程で、5m の間だけ平面的に検出できた。

エ　遺物出土状況

ほとんど遺物は出土していないが、図 54 の 24 の須恵器杯身が出土している。

オ　小結

この面に対応する遺物は出土していない。ただ、Ⅶa層には図 54 の 23 のような古代の須恵器の甕が出土していることや、図 54 の 18 のような土師器皿がⅦb層に混入している点から、中世まで下る可能性を示唆したい。

第Ⅴ章　まとめ

第 1 節　弥生時代から古墳時代の水田区画について

(1) 区画について

後に触れるが、Ⅷb層（弥生時代終末から古墳時代初頭で検出した大畦畔を中心に区画されている。その区画はⅨ層検出水田遺構で触れたが、Ⅸ層までさかのぼる可能性がある。

Ⅸ層段階では 10m程の小区画であるが、Ⅷb層段階では、北東から南西に向けての大畦畔と小畦畔が 4 ～ 8m幅で離れながら 2 条に伸び、その間が 15m以上離れた直交の小畦畔で区切られる構造でる。

Ⅶ層下層段階では、水田区画が全面にいたる。ただ、Ⅷb層の分布する南東側は、北東から南西方向の区画が検出できず、4m幅程の細長い区画しか検出できなかった。Ⅶ層下層は 8m程の小区画は検出できている。Ⅶ層段階では同じく調査区北西で 10m程の区画を検出している。

この段階までは、検出した限りでは、8 ～ 10m 程の区画をベースに半分の 4m 程の細長いスペースも存在する。小区画をベースにしたものと考えられる。軟弱である区画部分は若干広めの細長い区画を意識している可能性がある。

Ⅶb層の段階では大畦畔は北西部分については南西側に、南東部分は北西側に畦畔がずれてやや区画方向が変わる。下層の擬似畦畔の可能性があるが、おおむね、下層段階の耕作面を意識していることも考えられる。

(2) 大畦畔について

区画の開始期はⅨ層段階であろうが、大規模の畦畔を造成しているのはⅧb層の段階である。畦畔の両脇に杭を打ち、特に杭の上がぬかるんで沈む部分に、木の枝や細い木や木材等をクロス状に敷き詰めた簡易な敷粗朶（しきそだ）技法とでも言えよう。

杭は自然面を 1 面持ち、断面が三角形（扇形）状を呈するもののほか、台形状や細い丸木を利用したものがある。

杭はやや幅等を変えながら、Ⅷb層段階からⅦ層耕作面に相当する時期まで、杭を打った畦畔が利用されたと推定される。ただ杭の耐久年代を考えると露出していなかった可能性が高い。畦畔の南西方向に畦畔の端から 70 ～ 80 ㎝離れ、もしくは溝の推定部分に 0.8 ～ 1.1mの枝や木が出土している地点があることから、杭に横木を渡していて杭を補強していた可能性を考えたい。

(3) 水路や水口について

大畦畔部分のだめ押し調査が不備であったため、明確には

指摘できないが、X=-6740m のラインと大畦畔が交わる付近、L－L'の付近に畦畔の真ん中に杭が見られる。一番北西側は敷粗朶技法に伴う杭の可能性があるが、手前の 2 本は畦畔に直交する水口等を補強するものであった可能性も考えられるのではないかと思われる。また、エ-エ'の断面を見ると粗朶の断面の下に 2 本の縦杭が見られる。(図 14) こうした杭は畦畔のただの補強と言うよりは、ある時期の水口等の痕跡と考えても良いのではないかと考えられる。ただし、だめ押し調査の不足は否めない。

(4) 杭列について

杭列はⅧb層の段階からⅧ層段階まで畦畔を補強していたと考えられる。杭列と層ごとの対応までの分析はいたっていない。畦畔に直交している断面を見ると、エ-エ'及びL-L'のように内側の杭の長さ（深さ）が短い。(図 14)

ク-ク'、g-g'の杭の縦断面と平面の位置関係から見ると内側に並ぶ杭の長さが短い。(図 23)

これらは畦畔を耕作している内に畦畔の幅が若干短くなっているのではないかと推定できる。深い杭で標高約 3.8mまで打ち込まれているのに対し、浅いもので標高約 4.3mである。場所によって若干異なるが、Ⅷb層の存在する地点では一般化できると推定できる。

また、北側で検出した杭は断面で見る限りは深さが標高約 4.3m ものも多い。Ⅷ層～Ⅷ層下層段階に打ち込まれた可能性が高い。ただし、南東部分は軟弱なため、深い杭が打ち込まれた可能性もあり示唆にとどめたい。

杭の形状は小形の丸材の先端を尖らしたものもあるが、大半は木を薪のように割り、一辺は自然面で 2 片に切断面を持つものや、一辺は自然面で 3 片が切断面のものが一般的である。先端部は鋭利に 2 面以上は加工している。統計的には表 3 を参照して頂きたい。熊本県報告第 218 集『柳町遺跡Ⅱ』で弥生時代中期として報告されている 6SX054 堰状遺構部材の杭は 4 類に分けられている。(1) 細い一木を利用し、下端は特に加工せず、伐採時のままのもの、(2) 半裁丸材で下端は伐採時のままか、やや尖らせ気味にしたもの、(3) ミカン割り材を利用し、下端は伐採時のままで加工を特におこなっていないもの、(4) 板状に割ったミカン割り材を利用したもので、縦方向の下端を尖らせて打ち込みやすいように加工しているものなどである。

これらの分類に当てはめると今回出土の杭は大半が (4) に相当する。先の 6SX054 の調査者で報告者は、「下端は金属によるかと思われる加工がなされている」と記述している。この遺構は後に補強されたりしたものがあったとして、今回報告する杭列の杭は大半が金属器で加工された可能性を持つ。すなわち、金属器の普及が不可欠であり、現在の熊本県玉名地域の金属器の出土状況等を勘案すれば、弥生時代後期後半までしかさかのぼらないのではないかと現在のところ推定したい。逆に言えば、弥生時代後期～古墳時代初頭にかけては熊本県の玉名平野では金属器の普及がかなり進んでいたと考えられよう。

(5) 検出遺構・遺物からみた集落の立地について

Ⅸ層の耕作面がどこまでさかのぼれるか不明であるが、杭列を伴っていないか、先の杭列の分類の (1) ～ (3) に属するものも少数あるので弥生時代後期後半以前にさかのぼる可能性もある。

玉名平野では九州新幹線玉名駅周辺整備事業に伴う調査Ⅲ区の調査で祭祀遺構として S-21 が報告されている。弥生時代終末から古墳時代にかえての遺物も混ざってはいるものの、中期後半と認定できる黒髪式土器の甕や壷が、土製勾玉や手づくね土器とともに出土している。

また同事業に伴う調査Ⅰ区では、水田耕作に伴うであろう杭列が出土しており、杭列とともに板付式土器が出土している。杭列の放射性炭素年代測定では 1 世紀から 2 世紀であり、実年代は難しいが、弥生中期から後期にかけての年代であろう。

Ⅸ層はそうした遺構に伴うかどうかの年代であろう。祭祀遺構が存在するため、集落は近くの微高地に存在すると推定できる。玉名平野条里跡古閑前地区の竪穴建物も後期後半であり関連遺跡と考えられる。

Ⅷb層に伴う集落としては、柳町遺跡や玉名平野条里跡の微高地に存在する竪穴建物や井戸等が時期的には合う。周辺は微高地や谷や沼地等複雑にからみ合って地形を形成している。集落はすぐ近くに存在したと考えられる。

同じく、Ⅷ層下層やⅧ層段階では、同じく柳町遺跡や両迫間日渡遺跡調査Ⅲ区の祭祀遺構 S-14 や S-18 や S-01 段階まで対応する可能性があり、関連が見られる。

出土した遺物の分布をみると、Ⅷb層からⅧ層では明らかに北側に分布が偏在する。全体的な地形の高低差ではあるが、北側に集落の存在を想定できる。

第 2 節　古墳時代後期の水田区画について

(1) 区画について

Ⅷb層で形成された大畦畔が耕作により削平され、新たな

区画が作られる。ただし、南東部分は明確でない。

しかしながら、前代の区画の方向は若干西に振れる程度で、特に南側で検出された畦畔についてはⅨ層以来の区画をほぼ踏襲していると考えられる。

また、南東部分は明確でないが、A0-A2'、B0-B1、D3'-D3''の断面から南東方向にも畦畔が伸びている可能性が高い。

こうした点から、古墳時代初頭から後期までの間も層的には認識できないが、周辺を含めて継続的に水田が行われた可能性がある。

また、X14グリッド、Z13グリッドでは南西方向から北東方向の畦畔の一部が途切れた状況で平面的に検出されている。水口等の可能性も考えたい。

(2) 検出遺構からみた集落及び墓の立地について

Ⅶb層は柳町遺跡Ⅱで報告された4SX038、九州新幹線玉名駅周辺整備事業に伴う両迫間日渡遺跡Ⅱ区、Ⅲ区では遺物包含層中から6世後半から7世紀にかけての遺物が出土している。また、1.5㎞以上北東の上小田宮の前遺跡でも、流路や遺物包含層から6世紀から7世紀にかけての遺物が見られる。

小岱山系の南の裾に6世紀前半から終末にかけての古墳が点在する。小路古墳、馬出古墳、永安路寺東古墳、永安寺西古墳、大坊古墳等が存在する。また岡箱式石棺墓群や富尾には横穴群も存在する。また、玉名市教育委員会が作成した地図には、詳細が不明な古墳等が数多く分布している。こうした墓に眠っている人たちが営んでいた水田が周辺に広がっており、今回その一部を検出したと考えられる。

第3節　古代の水田面について

古代の土器は少数しか出土していない。Ⅶa層を古代の水田耕作面と推定したが、水田面に伴う遺物はなく、今後の周辺の調査や報告等類例を待ちたい。しかしながら、Ⅵc層検出の溝や上層の遺物包含層の状況から、大きく区画の方向が古代に変わっているという状況は伺えなかった。

この区域は玉名平野条里跡に想定されているが、現区画の地割りは少なくとも中世以降のある段階以降から作られた区画と考えられないかと想定している。

第4節　縄文時代晩期から弥生時代早期について

この時期の水田遺構は熊本では発見されていない。九州新幹線新玉名駅周辺整備事業に伴う両迫間日渡遺跡Ⅰ区で弥生中期をさかのぼると見られる杭列が出土している。杭列周辺で板付式土器も出土している。

縄文晩期から弥生早期についての小結（第Ⅲ章第4節）で触れたように縄文晩期の黒色土器様式古閑式の段階・黒川式の段階等が特にⅨ層以下の層で混じる割合が増えている。

目立つのは刻目凸帯文土器段階である。

刻目凸帯文様式の土器資料は、玉名地域では柳町遺跡群等で遺物包含層や杭列とともに出土しているが、様式を設定するには至っていない。熊本市江津湖遺跡群等比較的良好な遺跡はあるが、墓域であるため、精製土器と粗製土器との対応が難しい。

型式学的に見れば、今回の調査では、①刻目凸帯文が指で調整し、口縁端部よりやや下に刻目凸帯文を付けているもの（図50の2・15、図49の5等）②口縁端部やや下にヘラ状工具による刻目を施しているもの、③口縁端部とほぼ同じ面であまり突出しない刻目凸帯を持つもの、④口縁端部とほぼ同じ面で7㎜以上突出したヘラ先等で刻目を施した凸帯文をもつもの（図49の8）⑤屈曲して外反する口縁端部に刻目を持つもの（図49の7）等に分けられる。

型式学的に刻目凸帯文が口縁端部に組込まれ文様化する方向へ変化するとすれば、①から⑤に向かって新しくなる傾向が指摘できよう。今回調査で量的に多いのは、②、③であり、刻目凸帯文土器の夜臼式に相当する時期と考えられる。対応する精製土器は難しいが、図51の4・5、図48の15等の壷形土器と思われるものの口縁、図48の11・12・2・3・6や図51の8などの浅鉢や黒川式土器の系統を引く土器群等が対応する可能性がある。

また、⑤に対応する土器は、1点であるが、Ⅸ層出土土器である。Ⅸ層上層を弥生後期以前で中期を見据えるならその下層かほぼ同じ面に杭を伴わない畦畔による水田耕作面を仮定できたのではないかと考えている。そのため、縄文土器のレイアウトをⅨ層・X層に分けてレイアウトしている。

それ以前の黒色磨研土器様式はⅨ層以下の下層を面的に調査していないし、土層がかなりグライ化しているため、検出がさらに難しい。土器の出土地点を見てみると北側に多く、その方向に集落があった可能性も考えられる。そうすると隣接する谷地形を利用した生業を想定すべきで今後の課題であろう。

第5節　課題

九州新幹線新玉名駅周辺整備事業に伴う両迫間日渡遺跡では、弥生時代中期にさかのぼる水田耕作に伴う施設（杭列）等が見つかっているが、今回はそれに次ぐ弥生時代終末から古墳時代初頭の時期の水田に伴う畦畔等の区画を検出した。

柳町遺跡やそれに隣接する集落の生産遺跡の可能性がある。大畦畔のみでなく、完全な形では検出できていないが、工楽善通氏の分類で言えば、B類の「微高地の縁辺部から低湿地にかけての緩やかな傾斜地を利用したもので、傾斜の度合いに応じて大小に区画され、その形は等高線に左右されて不定形になる事が多い。」に当たると考えられる。一見、A類の「高低差の少ない沖積地や扇状地状に位置するもので、水田を小さく区切ることをしないもので、かなり大きな区画であることを特徴とする。」にも当てはまる地形ではあるが、県道玉名山鹿線改良工事や九州新幹線新玉名駅周辺整備事業の調査により、細かい谷等が入っている地形であり、微高地及び低地及び谷等が細かく入っていることが判明している。そのため、小区画の水田が一般化したのであろう。

今回畦畔部分の軟弱部分には木枝や木材（杭等）を斜交させ、砂や土を混ぜながら畦畔を形成していることが判明した。

畦畔のところで敷粗朶技法と述べたものの、柳町遺跡で検出された1号大畦畔（奈良時代後半から平安時代前期）程整然としたものではない。土壌が不安定な部分に部分的に周辺にあった木材を使用して用いられた技法と考えられる。

また、Ⅷb層耕作面からⅦa層の耕作面までそれほど畦畔（区画）が変化しているわけではない結果となった。頭によぎるのは、検出された畦畔状の遺構がわずかな高まりであり、上層や下層の影響によるいわゆる「擬似畦畔」の可能性がないとは言えない。周辺の調査や自然科学的分析等によってより良い検証方法を模索することも大切だと思われる。

今回植物珪酸体分析では、イネの植物珪酸体量が通常の水田面の量より少なかった。土壌の保全状況や環境変化によるものであろうが、今後の資料の積み重ねも待ちたい。

また、施設面では、水路や水口等の構造が解明するには至らなかった。断面で多少観察することができたり、木や杭の出土状況で推測できるものもあったが、今後の課題である。柳町遺跡Ⅱで報告の6SX054堰状遺構遺構等のようなものが周辺で検出できるかどうか注意を要する。

また、敷粗朶技法のようなものが、技術的に柳町遺跡Ⅰ区の1号大畦畔の技術までどう発展したのか、古墳時代中期から後期・古代にかけての大畦畔の形成も条里制の区画がどこまでさかのぼれるかも課題である。

また、弥生中期及び前期にかけての水田耕作面の有無には課題が残った。グライ化した土層の調査方法にも工夫がいると思われる。

細かいところでは、弥生終末の土器の編年が様式としてとらえられていないため、細かい時期区分ができなかった。弥生土器系の在地の土器と畿内系や北部九州系の土器との併行関係や土器の時期区分の細分化も必要であろう。こうしたことで玉名平野における古墳時代の展開がどこから伝わりどう展開していくかを解き明かす大きな一歩となろう。

（参考引用文献）

・荒木　隆宏編『両迫間日渡遺跡』
　玉名市文化財調査報告第19集　2009
・高谷　和生編『柳町遺跡Ⅰ』
　熊本県文化財調査報告第200集　2001　熊本県教育委員会
・坂田　和弘『柳町遺跡Ⅱ』
　熊本県文化財調査報告第218集　2004　熊本県教育委員会
・廣田　静学『上小田宮の前・養寺遺跡』
　熊本県文化財調査報告第255集　2010　熊本県教育委員会
・長谷部　善一『玉名平野条里跡（古閑前地区）』
　熊本県文化財調査報告第261集　2011　熊本県教育委員会
・別府大学考古学研究室『古保山・古閑・天城』1980
　熊本県文化財調査報告第47集　1980
・工楽　善通『水田の考古学』1991
・春成　秀爾『弥生時代の始まり』1990
・小林　達雄編『総覧 縄文土器』2008
・野田　拓治「古式土師器の成立と展開」
　『森貞次郎博士古希記念古文化論集』1982

表1　石器観察表

図面	遺物番号	グリット	遺構名	遺構種類	出土層位	器種	石材	法量				備考	実測番号	登録番号	Ph.No
								長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)				
43	1	C11	－	－	包Ⅷ層	石鏃	黒曜石	2.05	1.55	0.30	0.8		S1	87	10
43	2	C12	－	－	包Ⅷｂ層	石鏃	黒曜石	2.00	(1.80)	0.40	1.0	一部欠損	S2	34	10
43	3	B14	杭周辺	－	包Ⅷ層	石鏃	安山岩	(1.60)	2.00	0.50	1.3		S16	113	10
43	4	Y15		－	包Ⅸ層（Ⅷ層耕作面畦畔）	石製穂摘具	黒泥片岩	12.00	5.10	0.50	53.3	孔径 3.5 ㎜	S5	―	10
44	1	D11	杭周辺	－	包Ⅷｂ層	スクレイパー	黒曜石	2.30	2.25	0.70	1.8		S8	―	10
44	2	B12	畦中層ソダ内	－	包Ⅷｂ層	掻器	黒曜石	2.60	3.50	0.55	5.3		S11	184	10
44	3	B12	畦中層ソダ内	－	包Ⅷｂ層	掻器	黒曜石	3.10	2.30	0.55	3.6		S12	184	10
44	4	Z15	－	－	包Ⅷ層下層	サイドスクレイパー	黒曜石	4.50～	3.75～	1.10～	11.6		S21	284	10
44	5	A14	－	－	包Ⅷ層上面	スクレイパー	黒曜石	1.80	1.15	0.20	0.5		S9	231	10
44	6	A13	－	－	包Ⅶｂ層	スクレイパー	黒曜石	2.80	2.00	0.55	2.2		S10	251	10
45	1	Z14	杭列Ｓ	－	包Ⅸ層	石核	黒曜石	1.60～	2.90～	2.00～	6.1		S20	―	11
45	2	B13	－	－	包Ⅸ層	石核	黒曜石	2.50～	3.30	1.20	9.8		S19	121	11
46	1	A15	－	－	包Ⅸ層上面	石核	安山岩	3.50	6.70	1.70	35.4		S13	204	11
46	2	C11	－	－	包Ⅷｃ層下層	石核	黒曜石	2.30～	2.20	2.30	10.8		S22	69	11
47	1	C12	－	－	包Ⅷｂ層	剥片	黒曜石	2.00	1.20	0.50	1.0		S7	35	11
47	2	B13	杭列上	－	包Ⅷ層下層	剥片	黒曜石	(2.85)	(2.20)	0.60	4.1		S3	125	11
47	3	A13	－	－	包Ⅷ層上層	剥片	黒曜石	4.25	2.20	0.90	5.9		S6	247	11
47	4	A15	－	－	包Ⅸ層	剥片	黒曜石	(3.40)	1.80	0.65	3.2	アゼ上か？下部欠損	S4	205	11
47	5	Z14	杭列上	－	包Ⅸ層	剥片	安山岩	3.40	4.90	0.90	11.1		S15	―	11
47	6	C11	杭列	大畦畔	包Ⅷｃ層下層	剥片	安山岩	2.80～	3.2～	1.90～	6.5		S18	48	11
47	7	C11	－	下アゼ内	包Ⅷｂ層（ソダ砂質土）	剥片	安山岩	4.90～	2.40～	0.80～	7.3	石核から取る一番目の剥片	S17	82	11
47	8	C11	杭列	大畦畔	包Ⅷｃ層下層	剥片	安山岩	4.20	2.50	1.00	9.7		S14	48	11

表2－1　土器観察表

図面番号	遺物番号	遺構名	グリッド	出土層位	取り上げ番号	種別	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整(外)	調整(内)	胎土	焼成	色調	備考	残存率	実測番号	登録番号	Ph.No.
48	1		Y13	包Ⅹ層		縄文	浅鉢	口縁	―	―	3.5～	ミガキ、沈線、ナデ	ミガキ	角閃石、石英	良好	外)黒色 内)黒褐色		―×1/10	67	369	12
48	2		B11	包Ⅹ層上層		縄文	浅鉢	口縁	―	―	3.5～	ミガキ	ミガキ	角閃石、雲母	良	外)浅黄橙 内)にぶい黄橙		1/10以下	68	191	13
48	3		A14	包Ⅹ層	74	縄文	浅鉢	口縁	―	―	3.2～	ミガキ	ミガキ	長石、雲母	良好	(外)灰黄褐色 (内)にぶい黄橙色	口縁部は、ゆるやかな多角形状	1/10以下	96	215	12
48	4		A12	包Ⅹ層		縄文	深鉢	口縁	―	―	2.6～	一次調整よこ方向条痕、ミガキ、ナデ	ナデ、ミガキ	角閃石、長石	良好	外)灰黄褐色 内)黒褐色		1/6×1/10以下	87	255	12
48	5	杭列	Z14	包Ⅹ層		縄文	深鉢	胴部	―	―	3.4～	条痕	条痕	角閃石、長石	良好	外)橙色 内)褐色		1/10以下	88	306	―
48	6		A14	包Ⅸ層		縄文	浅鉢	口縁	―	―	2.5～	ナデ、ミガキ	ナデ、ミガキ	石英、長石、角閃石、雲母	良好	外)灰黄褐色 内)褐灰色、灰黄褐色		1/10以下	76	220	12
48	7	杭列周辺	B14	包Ⅸ層		縄文	浅鉢	口縁	―	―	1.5～	ヘラミガ	ヘラミガキ	(密)角閃石	良	外)灰褐色 内)褐色、(断面)黒灰色	キザミ目突帯文土器併行半月製	1/10以下	91	111	12
48	8	弥生水田面	C10	包Ⅸ層		縄文	鉢	頸部	―	―	2.9～	ナデ、ミガキのちナデ、ミガキ	ミガキのちナデ、ミガキ	長石、雲母、赤色粒	良好	外)灰黄色 内)浅黄色、オリーブ黒色		1/10以下	75	97	13
48	9		A15	包Ⅸ層上層		縄文	浅鉢	口縁	―	―	1.9～	ナデ、ミガキ、ナデ後ミガキ	ミガキ、ナデ	角閃石、長石、	良好	(外)褐灰色 (内)にぶい黄橙色	御領式	1/10以下	15	203	13

表2－2　土器観察表

図面番号	遺物番号	遺構名	グリッド	出土層位	取り上げ番号	種別	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整(外)	調整(内)	胎土	焼成	色調	備考	残存率	実測番号	登録番号	Ph.No.
48	10		Z16	包Ⅸ層上層		縄文	浅鉢	頸部	―	―	1.8～	ミガキ	ミガキ	長石、石英、角閃石、	良	(外)黒色 (内)黒褐色		1/10以下	17	281	12
48	11	杭列上	A14	包Ⅸ層		縄文	浅鉢	口縁	―	―	3.1～	ヘラミガキ	ヘラミガキ	(密)長石、雲母	良好	外)灰黄白褐色 内)赤褐色		1/18×1/6	89	221	13
48	12	杭列	A13	包Ⅸ層		縄文	浅鉢	口縁	―	―	5.5～	横方向ミガキ	横方向ミガキ	(密)長石、角閃石、雲母	良	外)黄灰褐色 内)淡褐色		1/12×1/5	72	240	13
48	13	杭列周辺	B13	包Ⅸ層(Ⅷ層)		縄文	深鉢	口縁	―	―	1.9～	ナデ、沈線	ナデ	長石、雲母	良	外)黒褐色 内)黒褐色		1/10以下	71	123	12
48	14		A15	包Ⅸ層		縄文	壺	口縁	―	―	2.9～	調整不明ナデ	調整不明ナデ、指ナデ	―	良	外)明黄褐色 内)にぶい黄橙色		－×1/10以下	86	202	13
48	15	杭列上	Z15	包Ⅸ層		縄文	深鉢	口縁	―	―	3.4～	条痕のちナデ、ナデ	条痕のちナデ	長石、石英、角閃石	良好	外)黒灰色、淡褐色 内)黒灰色		1/14×1/7	73	278	12
48	16		西区中央東 西セレクション	包Ⅺ層上面		縄文	深鉢	胴部	―	―	9.0～	ミガキ	指ナデ	角閃石、石英	良	外)にぶい褐色 内)にぶい黄橙色	実103と同一？	1/10以下	104	403	12
48	17		西区中央東 西セレクション	包Ⅺ層上面		縄文	深鉢	口縁	―	―	3.3～	条痕	ミガキ	角閃石、石英	良	外)黒褐色 内)黒褐色	古開式の古い方、実104と同一？	1/10以下	103	403	12
49	1		Y13	包Ⅹ層		縄文	深鉢	口縁	―	―	2.6～	ミガキ、ナデ、キザミ目突帯文	ミガキ、ナデ	石英	良	外)にぶい黄橙色 内)にぶい黄橙色		1/10×1/10以下	77	369	13
49	2		Z14	包Ⅹ層		縄文	深鉢	胴部	―	―	6.3～	キザミ目突帯文、ナデ	丁寧な横方向ナデ、ナデ	石英、雲母	良	外)黒色 内)黒色		1/10以下	69	306	14
49	3	杭列	Z14	包Ⅹ層		縄文	深鉢	底部	―	(11.0)	1.8～	指押さえ痕、ナデ	ナデ	角閃石、石英	良	外)赤褐色 内)橙色		1/6×－	82	305	14
49	4		A12	包Ⅹ層		縄文	深鉢	底部	―	―	1.2～	ナデ	ナデ	雲母、角閃石	良	外)橙色 内)にぶい黄橙色		1/10以下	81	255	14
49	5		A15	包Ⅸ層		縄文	深鉢	口縁	―	―	2.2～	キザミ目突帯文、ナデ	ナデ	―	良	外)明黄褐色 内)にぶい黄橙色		1/10以下	80	205	14
49	6		A14	包Ⅸ層		縄文	深鉢	口縁	―	―	3.4～	キザミ目突帯文、ミガキ、ナデ	ナデのちミガキ	石英	良	外)明褐色 内)褐色	口縁部スス付着	1/7×―	85	222	13
49	7		B11	包Ⅸ層 包Ⅹ層上層		縄文	深鉢	口縁	―	―	1.6～	キザミ目突帯文、ナデ	ナデ	(密)長石、石英	良	(外)赤褐色(断面)黄灰褐色 (内)赤褐色		1/20×1/10	90	191	13
49	8	側溝	―	包Ⅸ層		縄文	壺	口縁	―	―	3.6～	キザミ目突帯文、ミガキ、ナデ	ナデ	長石、石英、雲母	良好	(外)にぶい黄橙色 (内)にぶい黄橙色		1/10以下	84	406	13
49	9		B12	包Ⅸ層		縄文	壺	口縁	―	―	3.4～	キザミ目突帯文、ミガキ、ナデ	ナデ	石英、長石、角閃石、雲母	良好	外)にぶい黄褐色 内)にぶい黄橙色		1/10以下	83	138	13
49	10		A15	包Ⅸ層		縄文	深鉢	胴部	―	―	3.0～	ミガキ、キザミ目突帯文	ナデ	石英、角閃石	良	外)黒褐色 内)明黄褐色		1/10×1/10以下	70	202	14
49	11		B14	包Ⅸ層		縄文	深鉢	胴部	―	―	3.6～	キザミ目突帯文、ナデ	ナデ	(密)長石、石英、雲母	良	外)黒褐色 内)淡褐色	スス付着	1/10以下	92	121	14
49	12		B11	包Ⅸ層		縄文	深鉢	胴部	―	―	5.0～	条痕のちナデ	横方向板ナデ、指ナデ	雲母、長石、角閃石	良好	外)にぶい黄褐色 内)灰黄褐色		1/10以下	79	191	14
49	13		Z16	包Ⅸ層上層		縄文	深鉢	口縁	―	―	3.9～	ナデ、キザミ目突帯文	ナデ	(密)長石、石英	良	(外)褐色 (内)褐色	スス付着か？	1/10以下	9	281	13
49	14		Z16	包Ⅸ層上層		縄文	深鉢	口縁	―	―	2.8～	ナデ、キザミ目突帯文	ナデ	(密)長石、石英	良好	(外)黒灰褐色 (内)淡赤褐色		1/10以下	10	281	13
50	1		B11	包Ⅷb層		縄文	深鉢	口縁	―	―	1.1～	ナデ、キザミ目突帯文	ナデ	(密)角閃石、雲母、長石	良好	外)暗黒灰褐色 内)暗黒灰褐色		1/10以下	37	195	14
50	2	抗列周辺	C13	包Ⅷb層		縄文	深鉢	口縁	―	―	3.5～	ナデ、キザミ目突帯文	ナデ	やや粗(石英、長石、角閃石(少量)	良好	(外)淡灰褐色 (内)淡灰褐色	粗製土器	1/10以下	27	8	14
50	3	ソダ内	C12	包Ⅷb層		縄文	深鉢	胴部	―	―	2.2～	ナデ、一部条痕のちナデ、キザミ目突帯文	ナデ	(密)長石、石英、雲母	良	外)赤褐色、黒褐色 内)暗褐色	スス付着	1/10以下	29	37	14
50	4		C11	包Ⅷc下層	30	縄文	深鉢	胴部	―	―	2.9～	指ナデ、キザミ目突帯文	指ナデ	(密)石英、雲母、角閃石	良好	(外)淡茶褐色 (内)淡茶褐色	スス付着	1/10以下	8	51	14
50	5	ソダ内	C12	包Ⅷb層		縄文	深鉢	胴部	―	―	3.9～	ナデ、キザミ目突帯文	ケズりのちタテ方向のナデ	(密)長石、石英、雲母	良好	(外)淡褐色、黒褐色 (内)茶褐色	スス付着、夜臼	1/12×1/12	26	37	15
50	6	側溝	C12	包Ⅷb層		縄文	深鉢	胴部	―	―	4.0～	斜め条痕、キザミ目突帯文	ナデ	(蜜)長石、角閃石	良好	(外)淡茶褐色 (内)淡茶褐色	スス付着	1/12×1/12	28	194	14
50	7		C12	包Ⅷb層		縄文	壺	頸部	―	―	4.3～	ミガキ、キザミ目突帯文	条痕	石英	良好	(外)にぶい黄橙色 (内)灰色		1/10以下	30	38	14
50	8	杭列	C12	包Ⅷc下層		縄文	深鉢	口縁	―	―	3.8～	粘土貼り付け後ナデ、ナデ、キザミ目突帯文	ナデ	角閃石、長石、石英	良好	(外)黒褐色 (内)にぶい褐色		1/10以下	16	15	15
50	9		B12	包Ⅷc下層	35	縄文	深鉢	胴部	―	―	2.6～	ナデ、キザミ目突帯文	指ナデ	(密)長石、雲母	良	(外)淡茶褐色 (内)淡茶褐色	夜臼	1/10以下	7	170	15
50	10	杭列上	B13	包Ⅷ層下層		縄文	深鉢	胴部	―	―	2.4～	ナデ、キザミ目突帯文	ナデ	(密)角閃石、雲母、長石	粗	外)明褐色シルト 内)明褐色シルト		1/10以下	43	125	―
50	11		B13	包Ⅷ層上層		縄文	深鉢	胴部	―	―	5.5～	指ナデ	横方向条痕、ナデ	長石。雲母	良	(外)赤褐色 (内)赤褐色、灰色	外面に黒斑有り	1/10以下	60	132	15
50	12		―	包Ⅶb～Ⅷ層		縄文晩期	鉢	口縁	―	―	2.2～	キザミ目突帯文、ナデ	ナデ	石英	良好	外)にぶい黄橙色 内)明黄褐色	夜臼式Ia, Ib期？	1/10以下	46	188	14
50	13		A14	包Ⅶb層		縄文	壺	口縁	―	―	2.4～	ナデ、キザミ目突帯文	横ナデ、右上がりのナデ	角閃石、石英	良好	外)黄褐色 内)にぶい黄橙	板付式	1/10以下	52	235	14

表2－3 土器観察表

図面番号	遺物番号	遺構名	グリッド	出土層位	取り上げ番号	種別	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整(外)	調整(内)	胎土	焼成	色調	備考	残存率	実測番号	登録番号	Ph.No.
50	14	杭列周辺	B14	包Ⅶb層		縄文	深鉢	胴部	―	―	1.9～	キザミ目突帯文、ナデ	ナデ	長石	良好	(外)淡赤褐色 (内)淡赤褐色	スス付着	1/10以下	62	115	14
50	15		一括	―		縄文	深鉢	口縁	―	―	3.0～	キザミ目突帯文、ナデ	ナデ	石英	良	外)黒色 内)黒色		1/10×1/10以下	78	428	14
51	1		C12	包Ⅶb層		縄文	浅鉢	口縁	―	―	0.9～	磨滅により調整不明	磨滅により調整不明	密	良好	外)灰色 内)淡褐色		1/10以下	36	35	15
51	2	ソダ内	C12	包Ⅶb層		縄文	浅鉢 小壺	底部	―	―	1.1～	タテ方向ナデ　底)一定方向ナデ	ナデ	(密)長石	良好	外)黒灰色 内)黒灰色		1/12×1/5	34	37	15
51	3		B12	包Ⅶb層		縄文	深鉢	口縁	―	―	3.1～	条痕のちナデ	ナデ	(蜜)角閃石、長石	良	外)黒灰色 内)暗褐色		1/10以下	35	182	15
51	4	側溝	―	包Ⅶb層		縄文	壷	口縁	―	―	3.5～	ヘラミガキ	ヘラミガキ	(蜜)長石、石英、角閃石、赤色酸化粒	良	外)淡褐色 内)淡褐色、暗黒褐色		1/12×1/50	33	412	15
51	5	抗列周辺	C13	包Ⅶb層		縄文	壷	口縁	―	―	3.8～	調整不明　横方向のミガキ	調整不明　左上がりのミガキ	(蜜)角閃石、長石	良	外)淡黄灰褐色 内)黒灰色		1/10以下	32	8	15
51	6		B12	包Ⅶb層		縄文晩期	深鉢	口縁	―	―	2.1～	調整不明　ミガキ	ナデ?	(蜜)雲母、角閃石、長石	良好	外)赤褐色 内)黒褐色		1/12×1/15	31	182	16
51	7		―	包Ⅶb層		縄文晩期	深鉢	底部	―	―	4.4～	ナデ	ナデ	長石	良	外)浅黄橙色 内)灰褐色		1/8×1/10	45	81	15
51	8		B12	包Ⅶc下層		縄文	浅鉢	口縁	―	―	4.2～	ミガキ	ミガキ、ナデ	角閃石、石英	良好	(外)にぶい黄橙色 (内)灰褐色	夜臼の終わり?	1/21x1/2	1	159	16
51	9		B12	包Ⅶc下層		縄文	浅鉢	口縁	―	―	4.9～	ミガキ、ナデ	ミガキ、条痕	角閃石、石英	良好	(外)灰黄褐色 (内)黒褐色	夜臼の終わり?(実64と同一)	-X1/2	2	159	16
51	10		C12	包Ⅶc下層	121	縄文	鉢	口縁	―	―	2.1～	横ミガキ	条痕のち横ナデ	長石、角閃石	良好	(外)黒茶褐色、黒灰色 (内)黒灰褐色	黒色研磨土器	1/10以下	11	23	15
51	11		A13	包Ⅶ層上層		縄文	浅鉢	口縁	―	―	1.8～	調整不明横方向ミガキ?	調整不明横方向ミガキ?	長石	良	(外)淡黄褐色 (内)黒灰色		1/10以下	61	248	15
51	12		A13	包Ⅶ層		縄文	浅鉢	口縁	―	―	2.7～	ミガキ	ミガキ	(密)石英、雲母、長石	良好	外)淡赤褐色 内)灰褐色シルト　表面酸化		1/10以下	42	244	―
51	13		X15	包Ⅶb下層		縄文	浅鉢	口縁	―	―	3.0～	調整不明横方向へらミガキ?	調整不明横方向へらミガキ?	(やや粗)長石、角閃石、雲母、石英	良	外)淡褐色 内)黒灰色		1/10以下	100	292	16
51	14	畦畔上	Z16	包Ⅶ層上～下層		縄文	壷	口縁	―	―	3.6～	横方向ミガキ	調整不明　ミガキ?	(密)角閃石、雲母、長石	良	外)黒褐色 内)淡褐色		1/10以下	41	268	―
51	15		B13	包Ⅶb層		縄文	深鉢	口縁	―	―	3.1	横方向ミガキ?	調整不明」横方向ミガキ?	長石。角閃石	良	外)淡灰褐色 内)黒褐色　(断面)黒灰色		1/20以下×1/16	63	137	16
51	16		B12	包Ⅶb～Ⅷ層		縄文	深鉢	胴部	―	―	4.2～	ナデ	ナデ	石英、角閃石(多)	良好	外)にぶい黄橙色 内)黒色	実2と同一	―×1/4	64	188	16
51	17		Y14	包Ⅶb層		縄文	深鉢	底部	―	(11.4)	2.7～	ケズリのちナデ、指ナデ	ナデ	長石、石英、雲母、赤色粒	良好	外)にぶい橙色 内)灰白色		1/2×1/10	74	367	15
51	18		一括	―		縄文	浅鉢	口縁	―	―	3.6～	ナデ、ミガキ	ナデ、指ナデ	石英、角閃石	良	(外)にぶい黄橙色 (内)にぶい黄橙色		1/10以下	106	428	15
52	1	杭列上	Z14	包Ⅸ層		弥生土器	長頸壷	胴部	―	―	4.6～	左上がりの斜めハケ目	左上がりの斜めハケ目	密(長石、雲母)	良好	外)赤褐色 内)淡茶褐色)	赤彩、弥生後期	1/8×1/10	109	307	16
52	2	杭	大畦畔	包Ⅸ層.Ⅹ層		弥生土器	甕	頸部	―	―	3.0～	横ナデ、縦方向のハケ目のちナデ	横ナデ、横方向のハケ目のちナデ	密(長石　)	良	外)灰褐色 内)淡褐色		1/10以下	12	405	―
52	3		A15	包Ⅸ層.Ⅷ層		弥生土器	甕	脚部	―	(8.4)	2.3～	ナデ	横ナデ	長石、石英、角閃石	良好	外)にぶい黄橙 内)にぶい黄橙		1/3×1/10以下	51	205　269	21
52	4		C11 C12	包Ⅶc層.Ⅶb層.Ⅸ層		弥生土器	壺	口縁～底部	(18.0)	4.8	26.5+13.0	横ナデ　縦方向のハケ目一部ナデ消し　ナデ	横ナデ、ナデ、ハケ目のちナデ、横方向のハケ	密(雲母、石英、長石　)	良好	外)淡灰褐色 内)淡灰褐色	転用して、煮沸具にも使用している可能性あり	2/5×2/3	107	50. 59. 55. 36. 160. 22. 68. 13	20
52	5		B12 A12 C12	包Ⅶc下層.Ⅶb層.Ⅸ層.Ⅹ層		弥生土器	鉢	口縁～胴部	―	―	14.2～	櫛歯刺突文、横ナデ、ハケ目のち横ナデ、刻み目突帯、横ナデ、左上がりのタタキのちハケ目及びナデ	横ナデ、横方向のハケ目	密(石英、雲母)	良好	外)淡赤褐色 内)灰褐色、黒褐色	内面にスス付着	1/6×2/5	54	158 255 155 405 168 35 44	21
52	6	取り上げ№67	C12	包Ⅶc下層		弥生土器	壺	胴部	―	―	3.9～	波状文、ナデ	指ナデ	密	良	外)灰褐色 内)灰褐色	弥生後期	1/10×1/10	4	21	16
52	7		C11	包Ⅶb層		弥生土器	甕	胴部	―	―	2.4～	波状文	左上がりヘラケズリのちナデ	密(長石、角閃石)	良好	外)黒褐色 内)暗褐色		1/10以下	22	79	16
52	8		側溝	包Ⅶb層		弥生土器	甕	口縁	―	―	2.4～	横ナデ　左上がりハケのち横方向板ナデ	左上がりハケのち横方向板ナデ	密(長石)	良好	外)黒褐色シルト 内)黒褐色シルト		1/10以下	19	412	16
52	9		B12	包Ⅶb層		弥生土器	甕か?壺	口縁	―	―	3.0～	横ナデ　タテハケのち横ナデ	横ナデ	密(長石、石英)	良好	外)暗褐色 内)暗褐色	内面に一部黒斑あり	10/1以下	14	182	16
52	10	取り上げ№24	C12 C11	包Ⅸ層下層 包Ⅶc下層		弥生土器	甕	肩部	―	―	4.4～	平行タタキのち左上がりのハケ目	指ナデ	密	良好	外)灰褐色 内)灰褐色	外面にスス付着.弥生後期	1/16×1/10	110	44　71	16
52	11		C12	包Ⅶb層		弥生土器	甕	胴部	―	―	3.0～	タタキ	ナデ	密(雲母、長石)	良好	外)黒褐色 内)明褐色		1/10以下	21	35	16
52	12	杭列周辺	C13　B12	包Ⅶb層 包Ⅶc下層		弥生土器	甕	底部	―	―	4.2～	ハケのちナデ	ハケのちナデ	密(石英、長石、雲母)	良好	外)淡灰褐色 内)淡灰褐色	内面にこげ痕あり	1/5×(1/9)	25	08 171	17
52	13		C10	包Ⅶb層		弥生土器	甕	底部	―	―	2.1～	ナデ	左上がりハケ目のちナデ	密(雲母、長石)	良好	外)赤褐色 内)明褐色	断面内部黒色、底部にスス付着	1/10以下	20	99	17
52	14	ｱｾﾞﾝﾀﾞ内	C12	包Ⅶb層		弥生土器	甕	底部	―	―	2.1～	横ナデ	横方向ナデ	密(長石、石英)	良好	外)淡灰褐色 内)淡灰褐色		1/10以下	18	36	17
52	15		C12	包Ⅶc下層		弥生土器	高杯	脚部	―	―	1.0～	横ナデ	横ナデ	密(長石、雲母)	良好	外)濃赤色 内)淡赤褐色	黒斑	1/6×1／12以下	6	23	16

表2－4　土器観察表

図面番号	遺物番号	遺構名	グリッド	出土層位	取り上げ番号	種別	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整(外)	調整(内)	胎土	焼成	色調	備考	残存率	実測番号	登録番号	Ph.No.
52	16		C12	包Ⅶc下層		弥生土器	杯	口縁	―	―	3.5～	横ナデ、ナデ	横ナデ、ナデ	密(長石)	良好	外)赤褐色 内)赤褐色		1/10以下	3	23	16
53	1		C12 C11 B12	包Ⅶc下層 Ⅸ層		弥生土器	甕	口縁～底部	(11.8)	丸底	23.5	ハケ目、ケズリ	ハケ目、ケズリ、指ナデ	密(角閃石、長石)	良	外)淡灰褐色 内)黒灰色	外面にスス付着,やけあり	2/5×1/1	108	24 25 56 58 140	17
53	2		C11	包Ⅶ層, Ⅶb層, Ⅶc層		土師器	甕	口縁～胴部	(15.0)	－	18.1～	左上がりの縦方向ハケ目のちナデ	ヘラケズリのちナデ	密(角閃石、長石、雲母)	良好	外)淡灰褐色 内)淡灰褐色	外面に赤変.スス付着、古式土師器内面の一部こげあり	1/7×4/5	38	01, 87, 62 40 ,79	18
53	3	小畦畔 大畦畔横	C11, C12, B11, B13	包Ⅶc層, Ⅶc下層, Ⅸ下層		土師器	甕	口縁～胴部	(13.8)	－	13.4～	横ナデ　タタキのち横ナデ　タタキ タタキのちナデ消し	横ナデ　タタキ左上がりのちナデ 左上がりヘラ削り	密(雲母、長石)	良好	外)赤褐色 内)赤褐色　断)淡赤灰褐色	赤変か？火を受ける。古式土師器	1/5×3/4	5	26, 45, 56, 124, 193, 411	18
53	4		B14 C10 C11	包Ⅶ下層, Ⅶb層, Ⅸ層		土師器	甕	口縁	(16.8)	－	3.7～	回転ナデ、 ナデ	ヘラケズリのちナデ、ハケ目のちナデ	雲母、長石、石英、	良好	外)にぶい橙 内)灰黄褐色	外面にスス付着	1/8×1/10	24	46, 86, 99. 39 117, 90(2)	18
53	5		C11	包Ⅶb層		土師器	甕	頸部～肩部	－	－	3.5～	横ナデ　左上がりナナメハケのち横ナデ ナナメハケ	横方向削り　左上がりのち指ナデ	密(石英、長石、角閃石、雲母)	良	外)淡灰褐色 内)淡灰褐色		1/10×1/6	13	77	18
53	6		C10, C11	包Ⅶ層 包Ⅶb層		弥生土器	甕	胴部～底部	―	―	8.8～	縦方向のハケ目	ハケ目、指ナデ及び工具状のナデ	密(角閃石、雲母)	良好	外)淡灰褐色 内)淡灰褐色(断面やや灰色)	外面にスス付着、赤変あり	1/6×1/3	40	90 98	18
54	1		調査区西側壁中央			土師器	甕	口縁～肩部	(16.8)	－	5.5～	ﾅﾃﾞ、横ﾅﾃﾞ	強いﾅﾃﾞ、横ﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞ、ケズリ	雲母	良好	外)橙色 内)橙色	11層くらいの高さ　古墳？弥生？くらいの時期	1/5×1/4	105	425	21
54	2		C10	包Ⅶ層, 包Ⅶb層		土師器	甕	胴部	－	－	8.5～	ナデ、縦方向のハケ目のちナデ、左上がりの斜め方向のハケ目のち右上がりのハケ目	ナデ、ヘラケズリのちナデ消し	密(長石、石英、角閃石、雲母)	良好	外)淡灰褐色 内)淡灰褐色	外面にスス付着	1/8×1/4	39	99, 102	19
54	3		Z16	包Ⅶ層		弥生土器	甕	脚部	―	(9.2)	2.4～	横ﾅﾃﾞ	ナデ、横ﾅﾃﾞ	密(長石、雲母、吹き出し)	良好	外)灰褐色(赤褐色) 内)灰褐色	脚部に黒斑あり	1/10以下	58	269	19
54	4		Z16	包Ⅶ層		土師器	甕	頸部	－	－	3.5～	ナデ	ナデ　ケズリのち一部ナデ	角閃石、長石、石英	良好	外)黒褐色 内)褐灰色		―×1/10	23	269	―
54	5		C11	包Ⅶ層		弥生土器	鉢形土器？	脚部	―	(9.4)	0.5～	横ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	密(石英、雲母、角閃石)	良	外)灰褐色 内)灰褐色　断)黒褐色	黒斑	1/6×1/12以下	59	89	19
54	6		C11	包Ⅶ層上層		土師器	坏身	胴部	－	－	2.8～	ナデのちミガキ	ケズリのちミガキ	緻密(赤色酸化粒、わずかに長石)	良好	外)にぶい橙色 内)橙色	外・内面に漆？炭付着 須恵器模倣　回転台使ってない	1/8×―	66	93	19
54	7	暗渠北側	C11	包Ⅶ層		須恵器	坏蓋	天井部～口縁	(14.0)	－	4.8	回転ヘラケズリ、回転ナデ、ナデ、回転ナデ	回転ナデ	密	良好	外)灰色 内)灰色		1/3×1/3	53	90, 414	21
54	8		C11	包Ⅶ層		須恵器	坏身	口縁	－	－	1.5～	ﾅﾃﾞ、ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ﾅﾃﾞ、ﾍﾗｹｽﾞﾘ	密	良好	外)暗青灰色 内)暗青灰色		1/10×1/10以下	55	87	19
54	9		Y15	包Ⅶb層		弥生土器	鉢	口縁	―	―	3.7～	ナデ	下から上へ指ナデ	密(長石、石英、角閃石、雲母)	良好	外)淡灰褐色 内)淡灰褐色	黒斑	1/10以下	49	361	19
54	10	畦畔 検出面直上	A14	包Ⅶb下層		土師器	甕	口縁	－	－	2.4～	横ﾅﾃﾞ	横ﾅﾃﾞ	長石多し、雲母	良	外)淡灰褐色 内)淡灰褐色		1/10以下	97	233	19
54	11		A14	包Ⅶb層		土師器	壺	口縁	－	－	3.9～	左上がりハケ目のちナデ	ナデのち横ナデ	密(長石)	良好	外)淡灰褐色 内)淡灰褐色		1/10以下	47	235	19
54	13		Y15	包Ⅶb層		土師器	甕	口縁	(15.2)	－	3.6～	ナデ	ハケ目のちナデ	石英、 角閃石	良	外)にぶい橙色 内)橙色		1/6×1/5	56	361	19
54	14		A14	包Ⅶb層		土師器	甕？	肩部	－	－	5.6～	横ﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞ	右上方向にケズリ	雲母	良	外)明黄褐色 内)にぶい黄橙色		1/8×1/5	65	232	19
54	15	01-SD	X14, Y15	包Ⅶa層		土師器	甕	底部	－	丸底	4.5～	縦方向のハケ目　指ナデ	指ナデ、強い指ナデ	密(長石、石英)	良好	外)黄灰褐色 内)黄灰褐色　外、内(黒灰色、ｽｽ)	外・内面にｽｽ付着	4/5×1/6	93	394,393, 357,396,390	21
54	16		Z15	包Ⅶb層, 包Ⅶ層上面		土師器	(高)杯	杯部	(14.4)	－	3.8～	ミガキ、ヘラケズリのちﾅﾃﾞ	ミガキ、ヘラケズリのちﾅﾃﾞ	長石、角閃石、石英	良	外)にぶい橙色 内)にぶい褐色	外面の一部に漆と焼けた痕?あり	1/10×1/4	57	297 288	19
54	17		－	包Ⅶb層		須恵器	坏身	胴部～底部	－	－	3.0～	ケズリ、回転ナデ	回転ナデ	密	良好	外)灰色 内)灰色	外面に2本の線刻？あり	1/2×3/5	44	275, 320	21
54	18		Z14	包Ⅶb層		土師器	皿	口縁	－	－	1.4～	横ナデ、指ナデ・ナデ	横ﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞ	密	良好	外)淡灰褐色 内)淡灰褐色	10c後半ぐらい？	1/10以下	50	320	18
54	19		X14	包Ⅶb下層		土師器	坏	口縁	－	－	3.4～	回転ナデ	回転ナデ	密(赤色酸化粒、長石少)	良好	外)赤褐色 内)赤褐色	回転台土師器, 9c前半～中	1/10以下	99	390	19
54	20		Z16	包Ⅶa層		弥生土器	甕	脚部	―	―	2.9～	横ﾅﾃﾞ	横ﾅﾃﾞ	密(長石、角閃石、赤色酸化粒)	良	外)灰黄色 内)灰黄色	砂粒付着なし	1/10以下	95	276	19
54	21		A14	包Ⅶa層		土師器	甕	口縁	－	－	2.6～	横ﾅﾃﾞ	横ﾅﾃﾞ	密(長石、石英)	良好	外)淡灰褐色(黒灰色) 内)淡灰褐色		1/10以下	94	402	19
54	22		Y12	包Ⅶa層		土師器	坏(皿)	口縁	－	－	1.4～	横ﾅﾃﾞ	横ﾅﾃﾞ	密(長石)　砂粒小さい、少ない	良好	外)淡灰褐色 内)淡灰褐色	7C後半～8C初	1/10以下	98	378	―
54	23		－	包Ⅶa層		須恵器	甕	胴部	－	－	6.5～	格子目タタキのちハケ目	平行文タタキ	密	良好	外)灰色 内)灰色	(7a層)古代(古墳以降)	1/10以下	102	423	19
54	24		X15	包Ⅵc層		須恵器	坏身	口縁～胴部	(14.0)	－	3.4～	ナデ	横ナデ	密	良好	外)灰色 内)灰色		1/10×2/3	101	384	21

表3-1　木杭観察表

図版番号	遺物番号	実測番号	取り上げ番号	写真No.	全長	最大幅	先端部			軸部				備考	図面整理番号	写真番号(Ph.No.)
							長さ	加工面数	自然面数	長さ	加工面数	自然面数	断面形			
					(cm)	(cm)	(cm)			(cm)						
55	1	33	53		86.0(85)	7.1(7.1)中	17.5	4(13)	1	68.5	2(3)	1(1)	四角っぽい三角形	大形三角形		Ph.22
55	2	31	317		75.6(80.3)	8.5(9.6)大	26.5	5(22)	0(0)	49.1	2(2)	1(1)	四角っぽい三角形	軸部の上部が2つに分かれている。大形三角形(長)	11-2	Ph.22
55	3	34	36		66.5(66.2)	6.0(6.1)大	12.0	4(13)	0(0)	54.5	3(3)	0(0)	四角っぽい三角形	大形三角形(長)	11-1	Ph.22
55	4	6		22-15	44.2	6.8大	18	6(12)	1(1)	26.2	2(2)	1(1)	四角形	包丁の形をしている。大形扁平	11-2	Ph.22
55	5	3		6-2	42.7	6.8	15.2	7	0	27.5	2	1	扁平な三角形	3mm大の穴が2個。5mm大の穴が1個。先端部が炭化。平べったい。大形三角形(短)	24-1	Ph.22
55	6	28		11-3	55.7(52.8)	4.8(5.2)中	17.0	4(16)	0(0)	38.7	2(2)	2(1)	三角形	軸上部は四角っぽくなっている。中形三角形(長)	10-1	Ph.22
55	7	22	52		50.0(50.0)	5.8(5.0)	19.0	5(15)	1	31.0	2(2)	1(1)	三角形(一部台形)	先端部が炭化。中形三角形		Ph.22
55	8	24		22-11	48.4(47.9)	4.7(5.7)大	23.3	5(38)	0	25.1	2(2)	1	四角っぽい三角形	中形三角形(長)	11-2	Ph.22
55	9	4	203		47.5(47.3)	6.1(6.15)大	17.0	4(14)	0(1)	30.5	2(4)	1(1)	四角っぽい三角形	ふしあり。上部は四角形。中形三角形(長)	5-2	Ph.22
56	1	17	305		40.5(40.25)	5.5(5.6)中	21.2	5(13)	0(0)	19.3	2(3)	1(0)	三角形	中形三角形(短)	3-2	Ph.22
56	2	15	15		39.5(39.9)	5.8(6.0)中	16.5	4(12)	0(1)	23.0	3(2)	0(1)	三角形	軸部にふしあり。中形三角形(短)	18-1	Ph.22
56	3	9		22-5	40.5(40.6)	4.5(4.2)	10.5	4(12)	0	30.0	3(3)	0(1)	三角形	先端部片方のみ尖っている。中形三角形(短)	12-2	Ph.22
56	4	21	320		38.0(38.3)	4.4(3.3)	15.0	6(19)	0	23.0	4(3)	0	三角形	面取りにより加工面数4となる。中形三角形(短)	3-2もしくは4-2	Ph.22
56	5	35	96		86.8(86.4)	7.2(7.6)大	21.3	2(6)	2(0)	65.5	1(4)	3(0)	長方形	先端部が折れている。大形の四角形	4-2	Ph.23
56	6	27		24-2	62.1(61.7)	7.2(7.5)大	22.8	4(20)	0(0)	39.3	2(3)	2(1)	扁平長方形	先端部が炭化している。大形四角形	11-1	Ph.23
56	7	12	2		41.6(40.2)	3.5(3.3)小	3.5	7(11)	0	38.1	4(3)	0(1)	四角形	炭化。先端が欠けている。小形四角形	31-1	Ph.23
56	8	10	313		34.8(34.65)	3.4(3.6)小	14.2	7(6)	1(0)	20.6	2(4)	2(0)	長方形	小形四角形	11-2	Ph.23
56	9	18	32		34.9(34.7)	3.8(3.2)	14.7	5(25)	0(0)	20.2	3(3)	1(1)	四角形	小形四角形	11-1	Ph.23
57	1	30		22-7	57(57.1)	5.0(4.9)	14.5	7(10)	1(1)	42.5	3(3)	1(1)	四角形	中形四角形(長)	12-1	Ph.23
57	2	29		11-7	58.3(57.6)	4.0(4.4)中	13.5	6(14)	0(0)	44.8	4(3)	0(1)	四角形	軸面の上部は三角形になっている。中形四角形(長)	10-1	Ph.23
57	3	19		21-1	54.3(54.1)	4.5(5.05)	18.5	6(10)	0(0)	35.8	4(4)	0(0)	正方形	中形四角形(長)	10-1	Ph.23
57	4	26		11-2	53.3(53.3)	4.5(4.2)	15.2	8(15)	0(0)	38.1	3(3)	1(1)	四角形	中形四角形(長)	10-1	Ph.23
57	5	23	59		47.3(47.55)	5.4	20.0	6(17)	0	27.3	4(3)	0(1)	正方形	中形四角形(短)		Ph.23
57	6	20	1021		47.3(46.8)	4.3(4.4)	7.5	6(16)	0(0)	39..8	3(4)	1(0)	四角形	上部にいくほど薄くなる。中形四角形(短)	2-2	Ph.23
57	7	32	50		92.4(88.6)	8.4(9.1)大	35	5(11)	0(0)	57.4	4(4)	0(0)	扁平長方形	先端部は竹串で修復してある。大形扁平		Ph.24
57	8	25	1022		55.0(54.8)	6.9(6.8)大	25.5	6(10)	0	29.5	2(3)	1	扁平三角形	先端部にふし穴あり。大形扁平	2-2	Ph.24
57	9	36	55		54.0(53.8)	8.0(7.35)	32.5	7(12)	0(0)	21.5	3(3)	1(1)	扁平	大形扁平		Ph.24
57	10	5	57		50.1(51.3)	8.4(8.7)大	27.0	8(31)	0	23.1	3(3)	1(1)	扁平	大形扁平		Ph.24
58	1	2		21-2	26.7	6.8		(4)	0		(3)	(1)		中形扁平	10-1	Ph.24
58	2	1	331		52.5(49.2)	6.6(6.5)中	9	4(3)	0	43.5	2(3)	1	扁平三角形	軸部にふしあり。中形扁平	4-2	Ph.24
58	3	7	24		41.0(40.8)	5.5	13.0	4(6～8)	0(0)	28.0	2(2)	1(1)	三角形	軸部は三角、先端部は四角形。欠損によるものか？中形扁平	11-1	Ph.24
58	4	8	209		37.4(36)	5.7(5.5)中	10.4	9	1	27.0	2	2	扁平	先端部炭化。実測図の加工面数に不明点あり。中形扁平	4-2	Ph.24
58	5	16		1-5	35.4(35.1)	22(2.8)小	6	5(4)	0	29.4	4(3)	0(1)	四角形	直径4mmの穴が2個貫通している。炭化。最先端が欠けている。小形扁平	11-1	Ph.24
58	6	14		1-3	26.8(27.2)	4.3(4.5)小	10.6	5(8)	1	16.2	3(2)	1(1)	扁平	炭化なし。小形扁平	11-1	Ph.24
58	7	11		10-2	20.4(20.45)	3.5(3.4)小	4.8	4(4)	1	15.6	1(1)	2(1)	扁平	小形扁平	31-1	Ph.24
58	8	13		22-18	22.1(22.2)	2.9(3.2)小	9.3	6(8)	0	12.8	0(0)	0(1)	丸	軸部に皮付き。小形円形	11-2	Ph.24
				1-1	10.3	2.3	3.5	3	1	6.8	3	1	扁平		11-1	
				1-2	30.4	3.5				30.4	2	1	三角形	先端部なし	11-1	
				1-3	23.0	4.6	9.9	6		14.1		変形丸全面自然	変形丸	最先端部欠損	11-1	
				1-4	39.0	2.5	3.7	5	0	35.3	3	1	不定形	杭に直径3mmの穴が3ヶ所ある(貫通してはいない)。先端が欠けている。	11-1	
				2-2	20.1	2.8				20.1	4	0	四角形	先端部なし	10-1	
				2-3	16.0	2.7	8.5	7	1	7.5	3	1	四角形	炭化している	10-1	
				2-3	23.3	4.3	5.8	3	1	17.5	2	2	扁平	先端が折れている		
				2-4	23.4	4.3	7.2	5	2	16.2	1	3	長方形(波うっている)		18-1	

表3-2 木杭観察表

図版番号	遺物番号	実測番号	取り上げ番号	写真No.	全長	最大幅	先端部			軸部				備考	図面整理番号	写真番号(Ph.No.)
							長さ	加工面数	自然面数	長さ	加工面数	自然面数	断面形			
					(cm)	(cm)	(cm)			(cm)						
				3-3	35.7	3.9	13.3	10	0	22.4	4	1	多角形	炭化	18-1	
				4-2	14.2	2.5	6.7	3	2	11.5	不明	不明	一部欠損の為不明	最先端部なし	17-1	
				4-2	10.4	2.1	2.7	4	0	7.7	1	1	一部欠損の為不明	最先端部なし		
				4-3	31.5	3.1	7.4	7	0	24.1	3	1	台形		17-1	
				5-1	13.0	2.6	5.5	5	0	7.5	3	1	不定形	最先端部欠損。先端部分が少し炭化	24-1	
				5-2	20.2	3.3	11.8	5	0	8.4	4	0	扁平		25-1	
				6-1	9.6	2.5	9.6	4	0				台形	炭化(全体的)。先端部のみ	24-1	
				7-1	22.4	1.3	5.6	1	3	16.8				軸部ねじれの為面数、断面形、不明。炭化	24-1	
				7-2	35.2	7.5	10.2	7	1	25.0	2	1	三角形	ふしあり。全体に炭化	24-1	
				8-1	25.6	5.5	9.5	7	0	15.1	4	1	三角形	角の部分を面取りなどをして平坦にし、面はたくさんあるが大きな形としては三角形とする。	32-1	
				8-3	32.5	4.9	14.1	5	0	18.4	2	2	四角形		32-1	
				9-1	27.2	4.5	12.4	10	2	14.8	0	3	三角形	9-1か9-2かどちらか不明	31-1	
				9-1	9.8	4.3	なし			9.8	1	2	三角形	9-1か9-2かどちらか不明	31-1	
				9-2	27.2	4.5	12.4	10	2	14.8	0	3	三角形	9-1か9-2かどちらか不明	31-1	
				9-2	9.8	4.3	なし			9.8	1	2	三角形	9-1か9-2かどちらか不明	31-1	
				10-1	21.9	4.0	13.5	9	0	8.4	3	1	長方形	最先端部少し欠損。炭化あり。軸部に直径1mmの穴3個あり。	31-1	
				11-1	39.8	4.5	20.4	7	0	19.4	3	1	四角形		10-1	
				11-4	55.3	3.4	12.3	5	1	43.0	3	1	四角形	中形四角形(長)	10-1	Ph.23
				11-5	48.4	4.3	13.2	9		35.2	3	1	四角形		10-1	
				11-6	43.5	7.2大	16.3	6	0	27.2	2	1	三角形	軸上部に切り込みあり	10-1	
				11-8	51.3	4.4	11.3	6	0	40.0	4	0	長方形		10-1	
				11-9	12.4	1.2	5.2	4	0	7.2	6	0	六角形	杭の可能性薄い	10-1	
				11-10	33.6	4.6	12.4	5	0	21.2	2	2	扁平	先端部が少し炭化	10-1	
				11-11	35.7	4.8	12.4	4	0	23.3	3	1	扁平	先端部炭化。中形扁平	10-1	Ph.24
				12-1	10.2	2.0	なし			10.2	4	0	四角形	炭化。下と同一杭の可能性	10-1	
				12-1	7.8	2.9	なし			7.8	3	0	不定形	炭化。上と同一杭の可能性		
				12-2	25.8	3.5	8.5	9	1	17.3	3	1	三角形	先端部炭化。面取り	10-1	
				12-3	27.5	3.4	11.8	4	1	15.7	1	3	扁平	先端部が欠けている	10-1	
				13-1	11.4	1.8	1.1	4	0	10.3	4	0	扁平長方形		17-1	
				13-2	35.2	5.4	10	4		25.2	0	4	扁平		17-1	
				14-1	9.7	1.9	6.2	4	1	3.5	3	1	四角形	炭化	24-1	
				14-2	16.0	1.1				16.0	0	3	三角形	杭の一部か？	24-1	
				14-3	12.5	1.5				12.5	0	2	三日月形	杭の一部か？	24-1	
				15	9.2	1.7				9.2	0	2	三日月形	杭の一部か？		
				15	7.8	1.7				7.8	1	1	半円	杭の一部か？		
				15-1	16.8	3.0	4.1	6	1	12.7	3	1	四角形	最先端部なし	24-1	
				15-2	33.5	6.5	18.0	4	1	15.5	2	1	三角形	軸の真中にねじりあとあり。上部そりあり。先端部にさけあり。	24-1	
				16-2	21.4	2.7				21.4	0	3	扁平な三角形	杭の一部か？	24-1	
				17	18.2	2.6				18.2	3	1	四角形	全体的に炭化。先端部欠損		
				17-1	36.0	3.2	11	7	0	25.0	3	1	四角形	小形四角形	24-1	Ph.23
				17-2	24.7	2.9	7.0	7	0	17.7	2	1	四角形	軸部の上部がそっている	24-1	
				17-3	18.8	4.4	14	6	1	4.8	1	3	扁平		24-1	
				17-4	6.3	2.6	なし			6.3	0	4	不定形	少し炭化。下と同一杭の可能性	24-1	
				17-4	6.1	0.8	なし			6.1	1	2	不定形	少し炭化。小さい残骸。上と同一杭の可能性		
				17-5	18.0	3.5	10.8	13	2	7.2	2	2	多角形	炭化	24-1	
				18-1	19.5	4.3	10.6	4	0	8.9	4	0	扁平	炭化している	31-1	

表3-3木杭観察表

図版番号	遺物番号	実測番号	取り上げ番号	写真No.	全長	最大幅	先端部			軸部				備考	図面整理番号	写真番号(Ph.No.)
							長さ	加工面数	自然面数	長さ	加工面数	自然面数	断面形			
					(cm)	(cm)	(cm)			(cm)						
				18-2	10.0	1.4	4.4	4	0	5.6	不明	不明	欠損の為不明	炭化。材は小枝	31-1	
				20-1	30.4	2.5	10.5	3	2	19.9	2	2	扁平	炭化している。小形扁平	17-1	Ph.24
				20-2	36.0	3.7	8.6	5	0	27.4	4	0	長方形	小形四角形	17-1	Ph.23
				21-2	56.8	5.5	29.5	9	0	27.3	3	1	扁平	全体炭化している	10-1	
				21-3	31.8	7.0	20.0	5	1	11.8	3	1	四角形	最先端にふしあり		
				21-4	17.4	2.9	12.0	8	0	5.4	4	0	四角形			
				21-5	21.8	3.6	4	4	0	17.8	3	1	扁平	先端部折れている。軸部に直径4mmの穴がある。	11-1	
				21-6	13.8	2.7	7.5	6	0	6.3	2	1	三角形		11-1	
				22-1	51.8	4.4	10.2	5	2	41.6	4	1	長方形	先端部炭化	11-1	
															11-2	
				22-2	30.3	5.7	17.8	8	0	12.5	3	1	扁平	先端部が少し炭化	11-2	
				22-3-1	28.5	3.5	12.0	6	0	16.5	4	0	四角形		12-1	
				22-4	49.7	4.0	16.2	9	0	33.5	3	1	四角形	先端部が炭化している。中形四角形(長)	12-1	Ph.23
				22-4	49.7	4.0	16.2	9	0	33.5	3	1	四角形	先端部が炭化している。中形四角形(長)	12-2	Ph.23
				22-6	35.3	5.7	19.8	17	0	15.5	4	0	長方形	先端部炭化	12-1	
				22-6	35.3	5.7	19.8	17	0	15.5	4	0	長方形		12-2	
		30		22-7	57(57.1)	5.0(4.9)	14.5	7(10)	1(1)	42.5	3(3)	1(1)	四角形	中形四角形(長)	12-2	
				22-8	33.1	3.7	10.5	9	1	22.6	3	1	正方形		12-1	
				22-8	33.1	3.7	10.5	9	1	22.6	3	1	正方形		12-2	
				22-9	31.8	6.3	13.8	5	1	18.0	1	2	楕円形に近い三角形	先端部やや炭化	11-2	
				22-10	41.5	4.0	17.2	3	1	24.3	2	2	扁平	小形三角形	11-2	Ph.24
				22-12	30.6	4.0	13.6	4	1	16.0	0	0	楕円形		11-2	
				22-13	21.0	3.5	6.5	4	0	14.5	1	1	半楕円形	ふしによる湾曲。材が枝の可能性あり。	11-2	
				22-14	40.1	4.7	12.8	7	0	27.3	3	1	四角形	最先端部なし。中形四角形(短)	11-2	Ph.23
				22-16	40.4	4.4	15.1	5	1	25.3	2	2	扁平		11-2	
				22-17	41.4	6.0	20.6	5	1	20.8	1	1	四角形	皮付き(自然面)	11-2	
				22-19	38.0	4.6	15.0	5	0	23.0	2	1	三角形	先端部にふしあり	11-2	
				22-20	33.3	4.5	15.7	9	0	17.6	3	1	四角形		11-2	
				23-1	29.5	6.8	16.0	6	0	13.5	1	3	四角形	中形三角形(短)		Ph.22
				23-2	31.4	4.7	14.2	6	0	17.2	3	1	扁平	先端部が炭化している		
				23-3	39.0	5.5	19.5	4	0	20.5	2	1	三角形			
				23-3	36.9	5.5	15.7	6	1	21.2	1	1	三角形	先端やや炭化		
				23-4	38.0	4.7	12.5	4	1	25.5	2	1	三角形	上部にふしあり		
				23-5	20.8	3.3	19.8	20	1	1.0	3	1	不定形	2個を竹串でつないである。表面に2mmの穴が1ヶある。		
				23-5	11.5	2.6	なし			11.5	3	1	扁平長方形	2個を竹串でつないである。表面に2mmの穴が1ヶある。		
				23-6	31.0	4.5	14	7	0	17.0	5	1	丸い五角形			
				23-7	22.0	4.8	9.7	4	0	12.3	3	1	四角形	全体的に少しそっている		
				23-8	30.2	4.5	13.2	5	1	17.0	2	1	三角形	全体が炭化		
				23-9	31.9	3.0	4.8	4	0	27.1	4	0	扁平長方形	最先端部が欠損。炭化		
				23-10	69.7	6.6	23.5	4	1	46.2	2	1	三角形			
				23-11	68.3	7.8	22.0	6	0	46.0	2	1	三角形	1mm径の穴が数個あり		
				24-1	26.3	5.8				26.3	2	1	三角形	先端部なし		
				24-4	51.5	6.6	19.4	5	0	32.1	4	0	扁平	先端部の加工痕多数。大形扁平		Ph.24
				24-5	44.5	6.7	7.0	4	1	37.5	2	1	三角形	最先端がない。大形三角形		Ph.22
				24-6	23.2	3.2	9.4	8	0	13.8	3	1	四角形	小形四角形		Ph.23
			1		8.2	1.6	6.6	6	1	1.6	2	2	四角形	炭化	31-1	

表3-4 木杭観察表

図版番号	遺物番号	実測番号	取り上げ番号	写真No.	全長	最大幅	先端部			軸部				備考	図面整理番号	写真番号(Ph.No.)
							長さ	加工面数	自然面数	長さ	加工面数	自然面数	断面形			
					(cm)	(cm)	(cm)			(cm)						
			2		40.5	3.0	13.2	5	0	27.3	3	1	四角形		31-1	
			3		23.5	6.0	9.5	7	0	14.0	3	1	台形		31-1	
			4		18.0	3.9	なし			18.0	2	2	扁平	先端部なし	31-1	
			5		47.0	4.1	16.8	5	0	30.2	3	0	三角形	軸上部がそっている	32-1	
			7		14.3	1.8	7.6	4	0	6.7	4	0	四角形	二方接合。内部炭化	32-1	
			8		38.0	5.2	10.0	6	1	28.0	2	1	三角形	半分に割れている。軸部上部がそっている。	18-1	
			9		47.6	6.7	21.7	8	0	5.9	4	1	四角形	全体に炭化(特に先端部は炭化が進んでいる)。欠損片(7.0cm)があるが同一個体になるか不明	18-1	
			10		9.7	3.2	7	7	0	9.0	4	0	四角形	炭化。同一杭の可能性	18-1	
			10		10.2	2.7	なし			10.2	4	0	不定形	炭化。同一杭の可能性		
			10		8.5	2.5	なし			8.5	3	1	台形	炭化。同一杭の可能性		
			10		8.4	1.6	なし			8.4	3	1	扁平長方形	炭化。同一杭の可能性		
			10		8.8	1.6	なし			8.8	1	3	不定形	炭化。同一杭の可能性		
			11		6.3	1.4	なし			6.3	1	2	不定形	先端部なし	18-1	
			12		18.4	3.1	なし			18.4	4	0	扁平	先端部炭化	18-1	
			13		8.9	2.4	6.0	5	1	2.9	2	2	四角形	最先端部欠損	18-1	
			14		35.6	4.2	8.8	6	0	26.8	4	0	長方形	先端部の下から9cmは上の方が削ってある。	18-1	
			16		10.9	2.0				10.9	4	0	四角形	全体的に炭化。先端部欠損	18-1	
			17		15.1	4.0	9.5	6	0	5.6	4	0	扁平		10-1	
			18		19.4	2.3	7.0	5	0	12.4	3	1	扁平	炭化。二方接合	24-1	
			19		15.1	3.8	13.2	5	2	1.9	1	2	三角形	最先端部欠損。全体的にやや炭化	24-1	
			19		13.6	3.0				13.6	1	3	三角形	軸部にふしあり。先端なし。材は小枝		
			19		33.4	3.0	11.8	5	0	21.6	2	2	扁平	炭化なし。先端部が折れている。	31-1	
			20		20.0	3.5	7.0	5	0	13.0	3	0	三角形		24-1	
			22		23.3	3.8	8.3	5	0	15.0	4	0	四角形		11-1	
			23		25.8	3.7	9.7	3	1	16.1	2	1	三角形	先端部が炭化	11-1	
			25		16.9	1.8	5.2	3	1	15.1	2	1	扇形	小枝を材にした様	11-1	
			26		32.7	4.0	15.0	5	0	17.7	3	0	三角形	半分に割れている	11-1	
			28		26.0	5.0	14.9	6	1	11.1	2	2	扁平	先端部が欠けている。炭化あり。	11-1	
			29		23.7	6.2	14.3	7	0	9.4	2	2	扁平		11-1	
			30		16.9	2.7	8.4	4	0	8.5	4	0	不定形	二方接合。最先端なし	11-1	
			30		15.6	2.0				15.6	3	1(不明)	台形	先端なし		
			31		49.0	5.2	21.0	6	1	38.0	2	1	三角形	軸部にふしあり	11-1	
			33		49.6	3.6	18	10	1	31.6	2	2	正方形	炭化。中形四角形・短	11-1	Ph.23
			34		41.8	5.5	19.0	5	0	22.8	4	0	正方形		11-1	
			35		26.0	2.6	12.6	5	0	13.4	4	0	四角形	小形四角形	11-1	Ph.23
			51		29.1	4.8	13.5	10	1	15.6	2	2	長方形(変形)			
			54		51.6	6.4	28.5	6	0	23.1	2	1	三角形	最先端がない		
			56-1		45.2	4.7	18.0	4	1	27.2	2	1	三角形	上部にふしあり。中形三角形(長)		Ph.22
			56-2		35.0	3.8	6.0	4	0	29.0	4	0	扁平			
			58		38.0	5.0	11.0	6	0	27.0	4	0	四角形	小形扁平		Ph.24
			60		36.2	4.0	10.4	6	0	25.8	2	1	三角形	2つに割れている		
			76		42.4	5.2	14.0	5	0	28.4	3	1	四角形	軸部が3つに割れている	4-2	
			78		26.8	5.8	なし			26.8	3	1	長方形	先端部なし	4-2	
			81		28.8	2.9				28.8	不明	1	三日月形	先端部なし。全体的に炭化	11-2	
			81		12.2	1.5				12.2	2	1	三角形	下と同一個体の可能性あり	4-2	
			81		9.1	2.1				9.1	1	1	三日月形	上と同一個体の可能性あり		
			82		70.7	4.8					2	1	三角形	先端部なし		

表3-5 木杭観察表

図版番号	遺物番号	実測番号	取り上げ番号	写真No.	全長	最大幅	先端部			軸部				備考	図面整理番号	写真番号(Ph.No.)
							長さ	加工面数	自然面数	長さ	加工面数	自然面数	断面形			
					(cm)	(cm)	(cm)			(cm)						
			83		28.8	4.0	14.4	4	0	14.4	4	0	三角形	最先端部が欠損。軸部に直径1mmの穴が2ヶ所ある。貫通していない。	11-2	
			84		71.2	4.3	13.8	6	1	57.4	1	3	不定形	先端が折れている	11-2	
			86		47.7	5.5				47.7	2	1	三角形	先端部なし	11-2	
			88											現物不明(タグあり)	4-2	
			89		45.5	4.2	なし			45.5	2	1	三角形	先端部なし	4-2	
			89		6.4	2.0	2.0	3	1	4.4	2	1	不定形	小枝を材にした様		
			90		20.0	3.0	7	5	0	13.0	4		扁平	先端部が欠けている	4-2	
			91		48.8	3.8	7.3	7	0	41.5	3	1	四角形	先端部だけ炭化	4-2	
			94		27.5	3.2	なし			27.5	3	1	扁平長方形	全体的に炭化	4-2	
			95		43.7	4.5				43.7	2	2	正方形	先端部なし	4-2	
			97		36.6	7.2	4.5	1	2	32.1	1	2	三角形	先端が折れている	4-2	
			97		6.8	6.9	なし			6.8	3	1	扁平長方形	残骸		
			100		8.1	2.0	なし			8.1	3	1	扁平長方形	先端なし	5-2	
			101		58.0	5.7	18.5	6	0	39.5	3	1	三角形	最先端部が欠けている。	5-2	Ph.22
			102		15.1	3.2				15.1	2	1	三角形	下と同一個体。二方接合	3-1	
			102		7.7	3.0				7.7	不明	1	三日月形	上と同一個体。		
			103-1		24.2	4.8					3	1	四角っぽい三角形	先端部なし	3-1	
			103-2		15.5	3.5					1	2	三角形	先端部なし	4-2	
			104		38.0	2.0	4.1	3	1	33.9	3	1	不定形	先端部欠けている	3-1	
			105-2		66.9	6.5	18.7	3	1	48.2	1	3	半楕円形	先端部が炭化している。先端部折れている。大形四角形	3-1	Ph.23
			106		34.3	5.0					3	1	四角っぽい三角形	先端なし	4-2	
			107		62.2	10.0	10	2	2	52.2	1	3	長方形	軸部の加工面については、自然面が加工面のうたがいも…、先端部が折れている。	5-2	
			108		23.1	4.7	20.8	7	0	23.0	3	1	丸に近い不定形	軸部が折れている。直径1mmの穴が2個ある(先端部にある)。先の方が折れている。	4-2	
			110		18.6	7.1	13.3	5	1	5.3	3	1	扁平	先端部が欠けている。炭化あり。残骸があるが、計測不能	5-2	
			111		44.8	4.8	13.7	5	2	31.1	2	2	長方形	炭化あり。先端部が欠けている。		
			112		46.3	3.6	13.9	2	1	32.4	2	1	扇形	最先端欠損	12-2	
			113		38.8	2.6	なし			38.8	3	1	四角形	先端部なし	12-2	
			114		27.7	4.0	10.4	3	1	17.3	3	1	不定形	最先端部欠損	12-2	
			115		30.7	3.4				30.7	2	1	三角形	先端なし(バラバラになっている)。	12-2	
			116		70.5	5.4	なし			70.5	1	3	丸	先端部なし	11-2	
			201		74.4	6.8	19.8	4	1	54.6	2	1	三角形	軸上部は扁平になっている	5-2	
			202		26.7	3.7	14	3	0	12.7	3	0	三角形	縦に半分に割れている。	5-2	
			204		42.5	4.5	9.5	8	0	33.0	4	0	台形		4-2	
			205		14.4	4.1	6.4	4	0	8.0	4	0	三角形(一部台形)	比較的材が堅い。最先端部なし。三方接合。下と同一個体?	4-2	
			205		4.6	3.2	4.6	5	0				長方形	比較的材が堅い。最先端部なし。三方接合。上と同一個体?		
			205		15.4	3.7				15.4	3	0	三角形	下と同一個体の可能性あり		
			205		13.7	4.0				13.7	3	0	三角形	上と同一個体の可能性あり		
			206		28.1	5.2	11.0	4	0	17.1	4	1	三角形(一部不定形)	三方接合	4-2	
			207		39.2	5.0	16.3	6	0	12.9	3	1	三角形に近い四角形		4-2	
			208		37.0	5.2	16.3	7	1	20.7	2	1	扁平	面取りしてあるような痕跡あり?	4-2	
			21		31.4	6.7	8.0	6	1	23.4	4	0	四角形	最先端欠損。軸部にふしあり。裏の方にふし穴あり。2つ重なっている様。流木を使用か?		
			210		21.5	3.2	6.0	1	0		0	0	丸	軸部ふしあり。小形円形	4-2	Ph.24
			211		36.5	8.5	14.8	5	0	21.7	3	1	四角形	最先端なし。軸部に欠けた部分あり	4-2	
			211			8.9	11.6	6	0	20.0	2	2	台形	軸部途中が欠損の為全長計測不能		
			212		17.2	3.4	なし			17.2	3	1	扁平	先端部なし	4-2	

表3-6 木杭観察表

図版番号	遺物番号	実測番号	取り上げ番号	写真No.	全長	最大幅	先端部			軸部				備考	図面整理番号	写真番号(Ph.No.)
							長さ	加工面数	自然面数	長さ	加工面数	自然面数	断面形			
					(cm)	(cm)	(cm)			(cm)						
			212		34.5	4.9	29.3	7	0	5.3	3	1	四角形	半分に割れている	4-2	
			213		56.8	4.4	25.7	6	0	31.1	3	1	扁平		4-2	
			214		48.2	6.6	12.0	5	0	36.2	3	1	三角形	半分に割れている	4-2	
			215		26.0	3.6	4.3	4	0	21.7	1	3	扁平	先端部が折れている。	12-2	
			216		39.6	3.2	10.5	7	0	29.1	3	1	三角形	3つに割れている(小形三角形)	12-2	Ph.24
			217		19.5	3.6	8.6	4	0	10.9	3	1	台形	最先端なし	12-2	
			218		29.9	4.7	14.0	7	1	15.9	3	1	四角形		11-2	
			219		29.6	3.8	10.3	10	0	19.3	3	1	四角形	四方接合	11-2	
			220		52.7	3.6	22.5	6	2	30.2	2	2	不定形	炭化なし	11-2	
			301		25.0	2.7	5.7	5	1	19.3	0	1	丸	最先端なし。軸部に8mmと2cmの穴あり	11-2	
			302		43.1	5.6	14.3	9	1	28.8	3	1	台形	炭化	11-2	
			303		28.0	5.5	14.0	6	0	14.0	3	1	三角形	先端部炭化。面取りしてある。ふしらしきものあり	11-2	
			304		20.9	3.0	8.4	3	1	12.5	3	1	台形		11-2	
			306		17.4	4.6	8.5	9	0	8.9	2	2	扁平な三角形	先端部炭化	3-2	
			307		10.7	3.6	5.6	4	0	6.1	3	1	四角形	最先端部なし	11-2	
			308		23.5	2.8	5.4	6	1	18.1	2	1	三角形	最先端部なし	11-2	
			309		23.7	4.4	14	5	0	9.7	4	0	扁平	杭の厚みの半分位が炭化している。	11-2	
			310		31.3	5.4	12.7	8	1	18.6	1	3	長方形		11-2	
			312		33.2	3.0	11.4	5	0	21.8	2	1	三角形	先端部が曲がっている。小形三角形	11-2	Ph.24
			314		34.3	3.7	14	11	0	20.3	3	1	不定形	炭化している	11-2	
			315		32.4	4.0	14.0	2	1	18.4	3	1	四角形		11-2	
			316		45.3	3.3	25.0	5	0	20.3	2	1	三角形		11-2	
			318-1		41.4	5.3	22.7	17	0	18.7	3	1	扁平の長方形	炭化	4-2	
			318-2		34.4	3.8	15.6	11	1	18.8	2	2	長方形	炭化	4-2	
			319-1		45.8	4.7	12.2	4	0	33.6	3	1	四角形		4-2	
			319-2		33.5	3.0	6.2	5	0	27.3	2	2	扁平	先端部が途中で折れている。小形扁平	3-2	Ph.24
			320		36.2	5.2	18.0	6	0	18.2	2	1	台形		3-2	
			321-1		24.2	4.7	8.5	5	0	15.7	4	0	四角形	最先端部が割れている	3-2	
			321-2		35.6	7.7	18.0	7	0	17.6	2	1	三角形	先端から軸部にかけて炭化あり。最先端なし。	3-2?	
			322-1		51.2	4.2	12.7	4	0	38.5	2	1	三角形	3つに割れている	4-2	
			322-2		29.9	4.0	20.3	14	1	9.6		筒状	丸		3-2	
			323		46.2	3.8	10.0	6	0	36.2	3	1	四角形		4-2	
			324		28.6	5.4	11.4	4	1	17.2	3	1	扁平な三角形	先端部片方のみ尖っている。面取り加工	4-2	
			325		33.8	5.0	12.5	8	0	21.3	3	1	三角形	先端部きれいに切れているのは欠損の為か、そこで完結しているのか判断できない。中形三角形(短)	4-2	Ph.22
			326		27.6	4.0	13.4	7	0	14.2	2	2	四角形	最先端部なし	4-2	
			327		29.6	4.2	14	9	0	15.6	4	0	三角形	残骸あり	4-2	
			328		9.3	5.2				9.3	3	0	三角形	内部炭化。先端部なし	4-2	
			328		8.6	2.8				8.6	4	0	四角形	内部炭化。先端部なし		
			328		7.4	1.9	2.4	1	1	5.0	0	1	丸	小枝		
			328(北東)		23.6	4.0	13.5	6	0	10.1	4	0	四角形	先端部が欠けている	4-2	
			329		29.0	5.9	24.2	15	0	4.8	3	1	扁平の長方形	炭化	4-2	
			329		16.6	4.1	なし				3	1	不定形	先端なし(折れている)		
			330		25.2	3.9	12.5	11	1	12.6	4	0	長方形		4-2	
			332		58.3	4.8	22.2	5	0	36.1	4	0	四角形	半分に割れている。最先端なし	4-2	
			334		39.4	4.2	11	6	1	28.4	2	2	四角形	先端部の三面が炭化。中形四角形・短	4-2	Ph.23
			334・104		29.7	4.9	18.6	12	0	11.1	2	2		取上NO.2つあり	5-2	
			335		53.6	6.8	10.6	7	2	43.0	2	1	三角形に近い	先端が折れている。炭化	4-2	

表3-7 木杭観察表

図版番号	遺物番号	実測番号	取り上げ番号	写真No.	全長 (cm)	最大幅 (cm)	先端部 長さ (cm)	先端部 加工面数	先端部 自然面数	軸部 長さ (cm)	軸部 加工面数	軸部 自然面数	軸部 断面形	備考	図面整理番号	写真番号 (Ph.No.)
			336		17.7	3.7	9.0	8	0	8.7	2	1	三角形		4-2	
			337		31.4	3.5	11.5	11	0	19.9	3	0	不定形	先端部の断面は三角形	4-2	
			338		27.8	3.1	14.9	5	0	12.9	4	0	扁平	先端部が少し欠けている。少し炭化。小形扁平	4-2	Ph.24
			339		34.0	3.6	9.5	4	0	24.5	4	0	台形	最先端部が欠けている	4-2	
			340		26.0	4.4	13.3	6	1	12.7	2	1	半楕円形		4-2	
			350		53.8	4.3	なし			53.8		筒状全面自然	丸	先端部折れている。炭化		
			351		50.2	4.8	18	15	1	32.2	3	1	長方形		5-2	
			352		32.4	3.9	8.2	5	0	24.2	2	1	三角形	先端部折れている。炭化	5-2	
			353		22.3	3.3	6.7	7	1	19.0	2	2	四角形	二方接合。小枝を材か？最先端部欠損	5-2	
			1001		20.5	5.7	なし			20.5	2	1	不定形	先端部なし。少し炭化。下と同一杭の可能性	14-2	
			1001		4.7	4.1	2.9	2	2	1.8	2	2	不定形	最先端部折れている。上と同一杭の可能性		
			1002		44.0	7.0	14.7	5	0	29.3	2	1	三角形	軸部にふしあり。	5-2	
			1003		35.0	5.5	15.0	9	1	20.0	3	1	三角形	上部を斜めに切断してある。切り口がとてもきれい。	5-2	
			1004		34.1	4.5	13.3	7	0	20.8	2	1	三角形	先端細かく加工してある。先端炭化	5-2	
			1005		19.0	5.4	15.1	11	2	3.9	1	2	三角形	二方接合。先端部やや炭化	5-2	
			1005		7.8	2.0	7.8	6	1				四角形	軸部なし		
			1005		7.1	3.7	7.1	2	2				三角形	軸部なし。最先端部欠損		
			1006		29.3	3.2	8	6	0	21.3	4	0	四角形	軸部一面えぐれあり。	5-2	
			1007		25.6	3.7	15.4	4	0	10.2	3	1	不定形			
			1008		22.8	4.0				22.8	3	0	三角形	先端部欠損。全体的に炭化。虫食い穴8（貫通せず）	5-2	
			1009		24.3	3.8				24.3	2	2	四角形	材が堅い。	5-2	
			1010		29.6	3.6	9.2	3	1	20.4	0	3	三角形	最先端部なし。二方接合。材は中太枝か？	5-2	
			1012		39.5	3.8	11.7	11	1	27.8	2	2	不定形	軸部分の中に穴があいている。	5-2	
			1014		28.4	5.0	14.5	7	0	13.9	3	1	長方形	最先端部少し欠損。先端部の断面は不定形	5-2	
			1015		25.3	5.3	11.8	8	0	13.5	4	0	台形		5-2	
			1016		38.2	4.5	10.0	4	1	28.2	2	1	三角形	先端部炭化	5-2	
			Ⅸ層杭の頭		12.4	3.0	なし			12.4	4	0	不定形	先端部なし		
			Ⅸ層杭の頭		10.3	2.8	なし			10.3	4	0	四角形	先端部なし		
			Ⅸ層杭の頭		13.3	2.8	なし			13.3	4	0	不定形	先端部なし		
			Ⅸ層杭の頭		5.8	2.2	2.4	5	0	3.4	4	0	四角形	最先端部なし		
			Ⅸ層杭の頭		6.5	2.4	なし			6.5	4	0	四角形	先端部なし		
			Ⅸ層杭の頭		8.5	4.4	なし			8.5	3	0	三角形			
			Ⅸ層杭の頭		8.5	1.1	なし			8.5	3	1	不定形	小さめ。残骸？		
			Ⅸ層杭の頭		7.4	1.3	なし			7.4	2	1	三角形	小さめ。残骸？		
			Ⅸ層杭の頭		4.0	1.2	なし			4.0	2	1	不定形	小さめ。残骸？		
					31.9	5.7	9.8	2	2	22.1	2	2	不定形	包Ⅷb層南杭列そば		
					36.5	4.2	14.5	5	1	22.0	2	2	扁平長方形	包Ⅷb層南杭列そば		
					7.9	2.2				7.9	1	2	半円	内部炭化,ラベルなし(B13)		
					7.5	2.1				7.5	2	1	台形	内部やや炭化,ラベルなし(B13)		
					6.2	1.4				6.2	2	2	台形	内部炭化,ラベルなし(B13)		

※四角形は正方形の形が崩れたものや歪んだ四角の形の物を表わし、細長い四角の形の物は長方形として表記した。また、カマボコ形など半円形より潰れているものは半楕円形と表記した。
※図面整理番号は、現場で記録した原図の整理番号を示す。

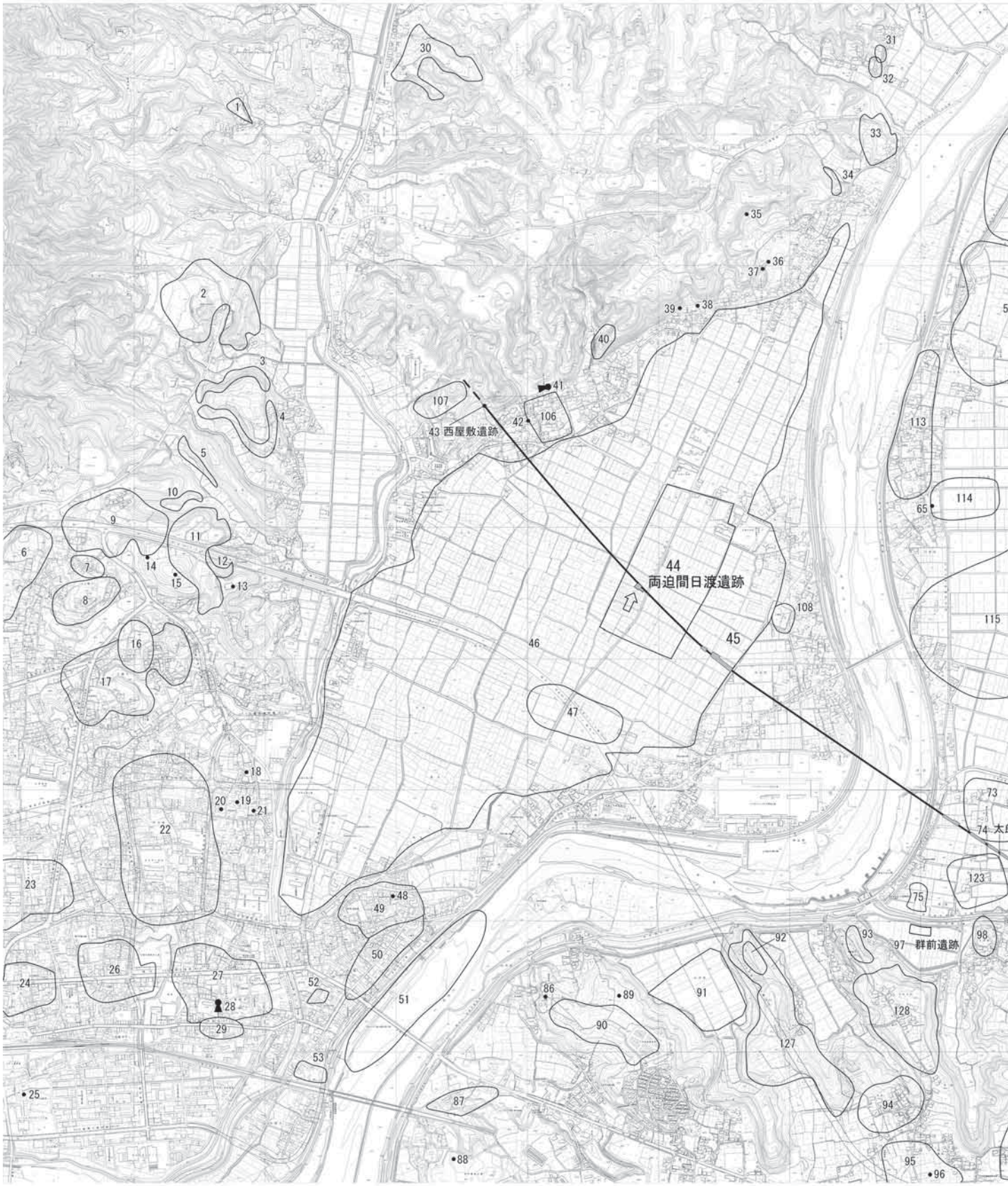


図 1 周辺遺跡分布図 (1/20,000)

図２　玉名平野周辺の地図と調査区位置図 (1/10,000)

（玉名市教育委員会 2009 『両迫間日渡遺跡』第 32 図より転載・加筆）

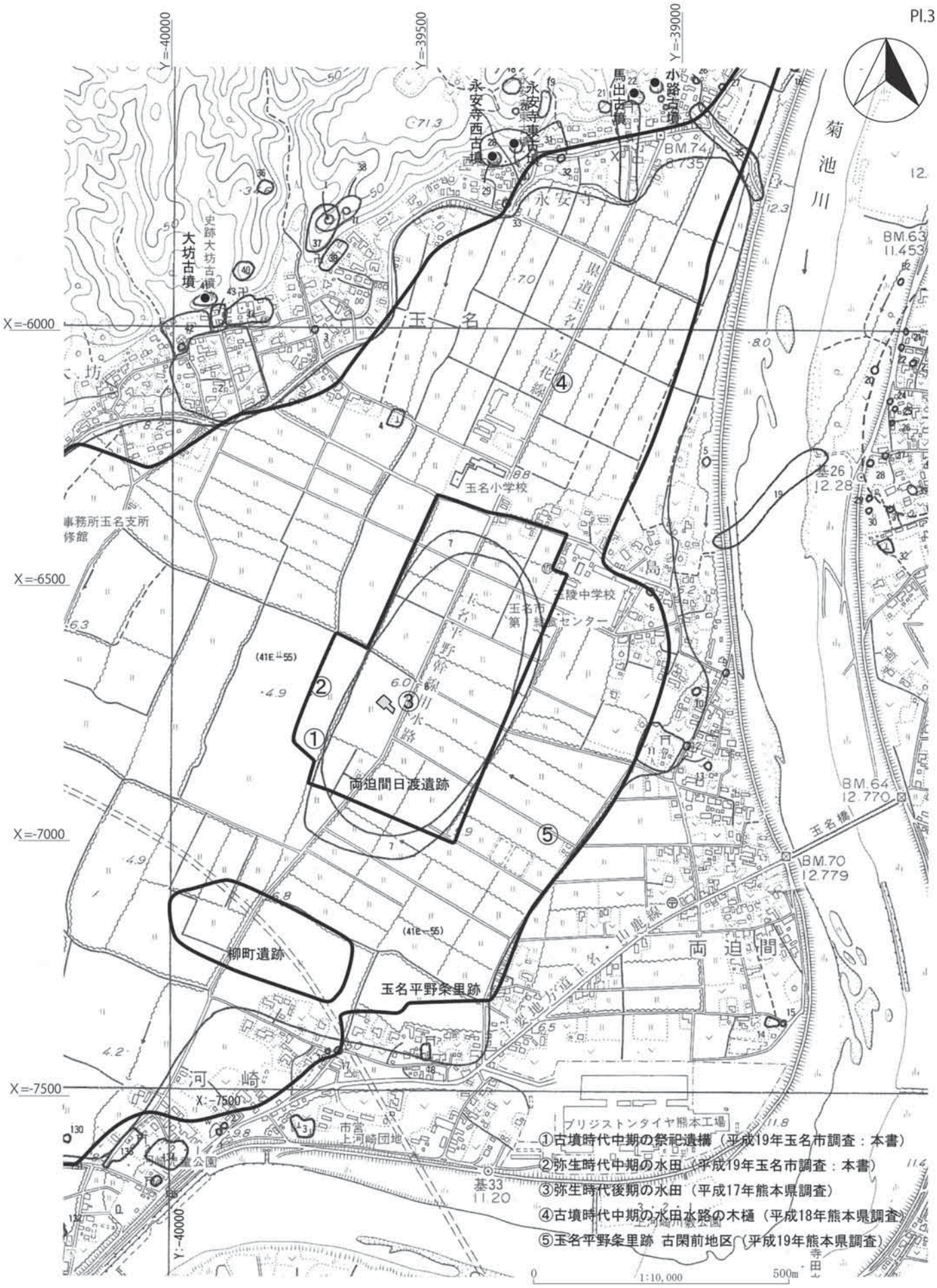


図３　両迫間日渡遺跡と玉名平野の遺跡 (1/10,000)

（玉名市教育委員会 2009『両迫間日渡遺跡』第７図より転載・加筆）

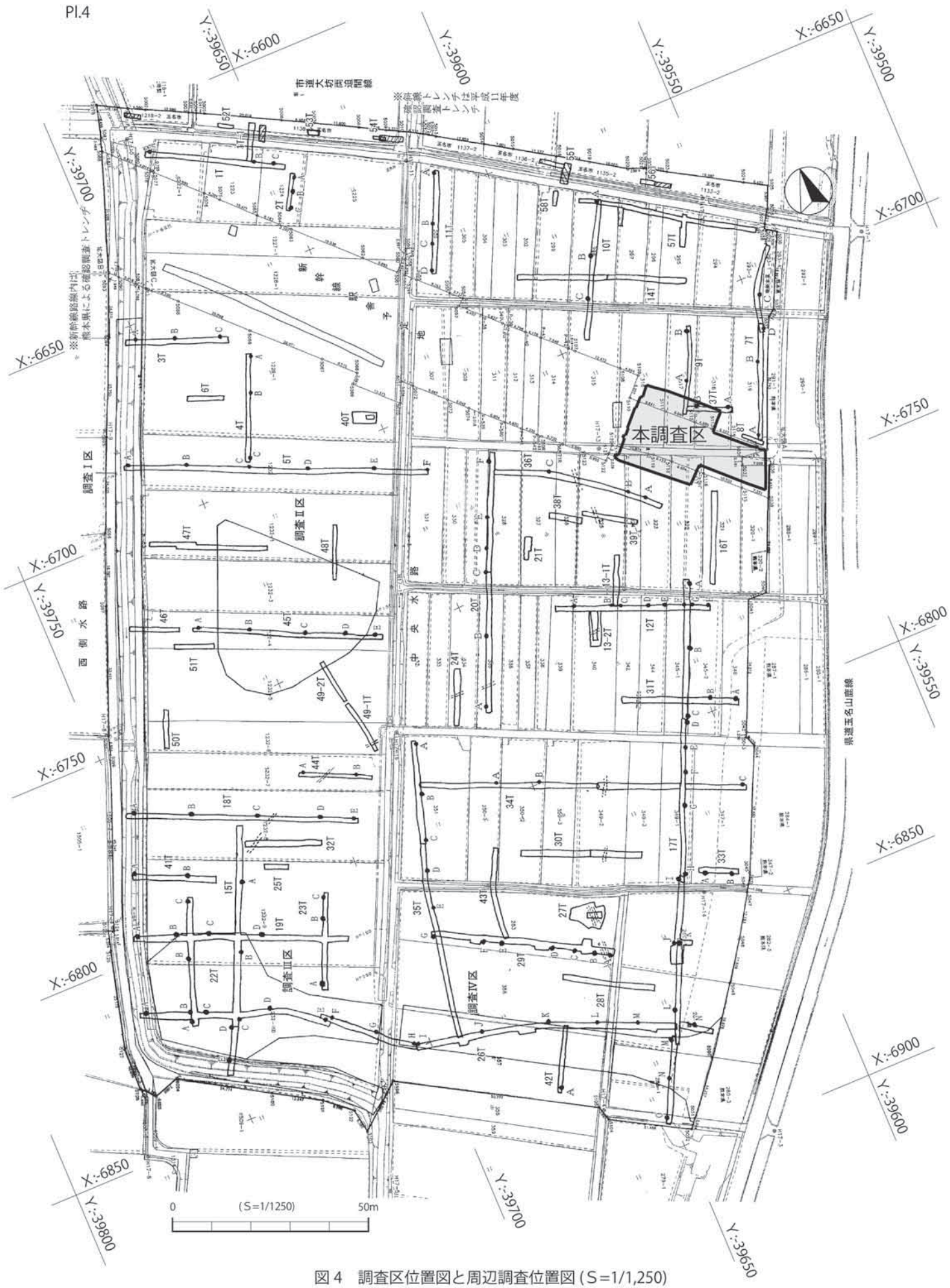


図４　調査区位置図と周辺調査位置図（S=1/1,250）

（玉名市教育委員会 2009 『両迫間日渡遺跡』第８・33 図より転載・加筆・改編）

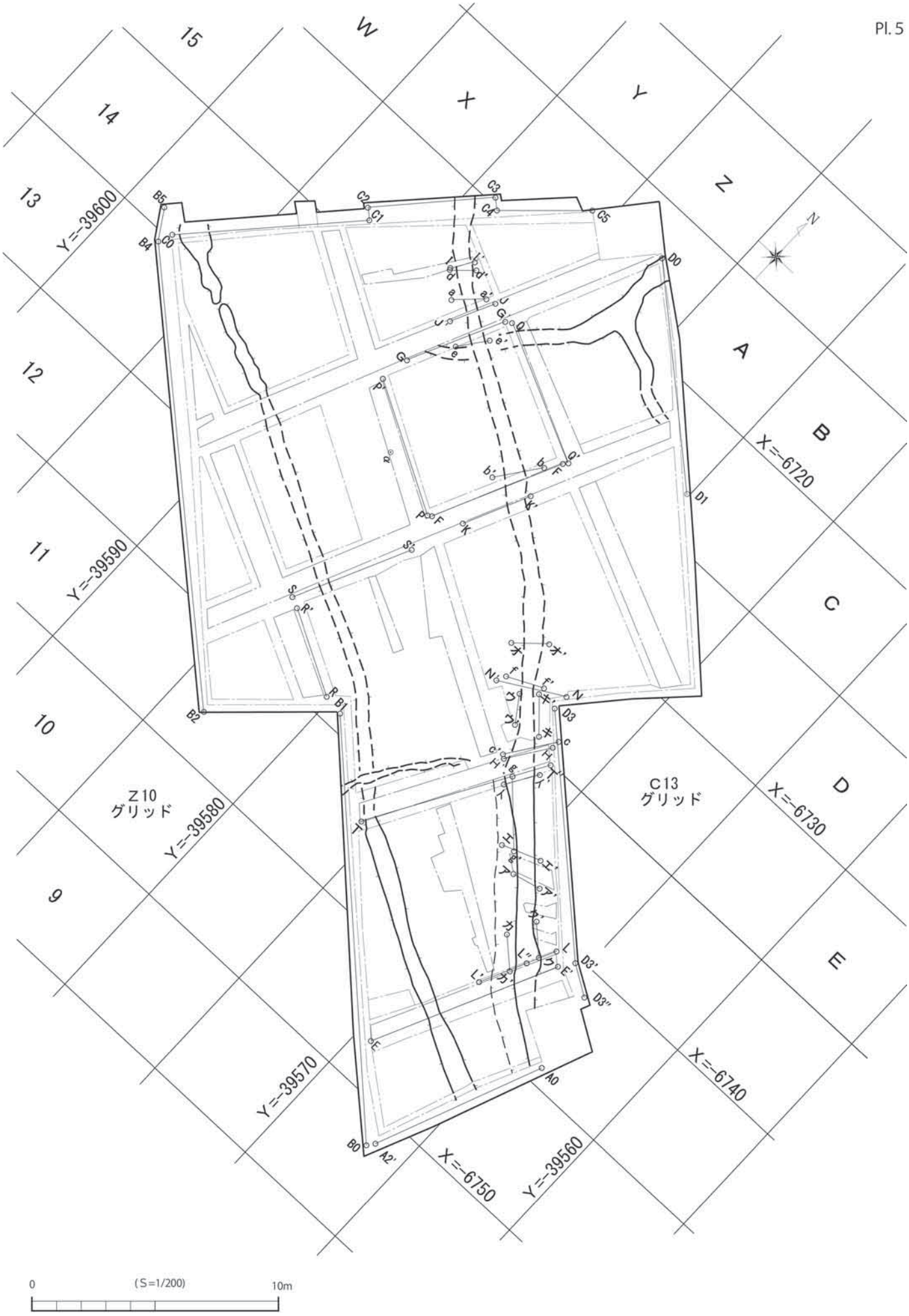
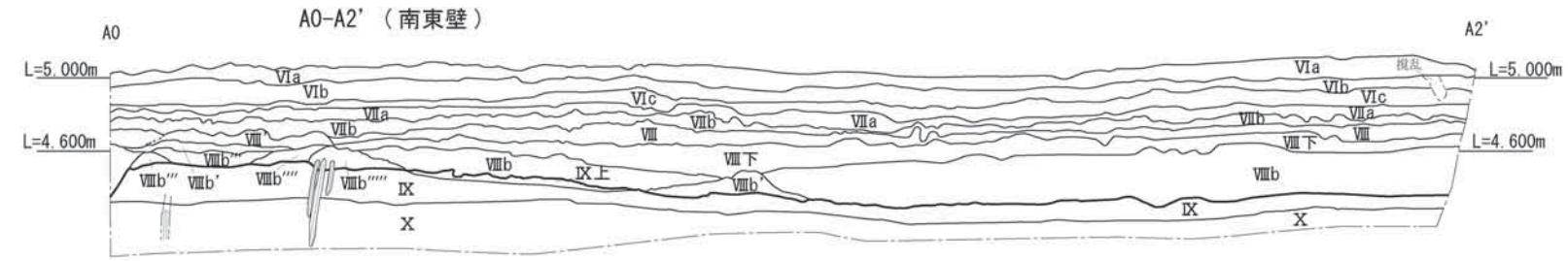
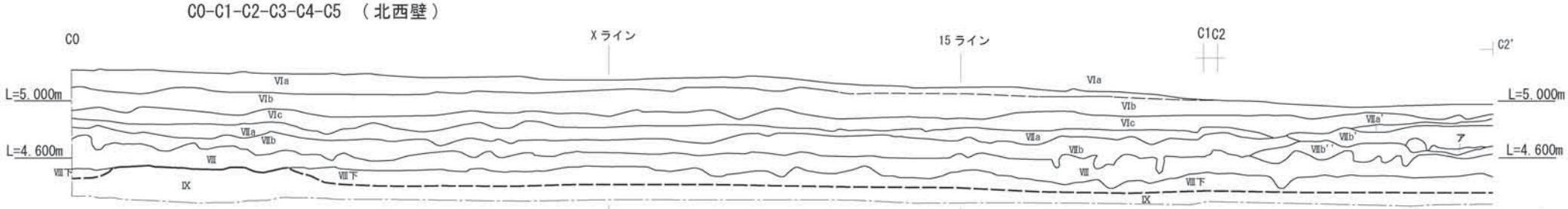
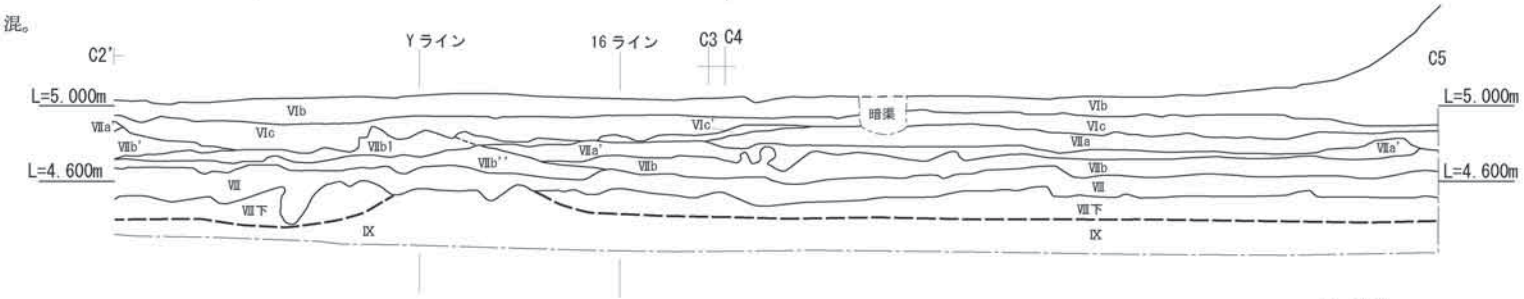


図5　IX層　遺構平面図（畦畔ほか）（1/200）

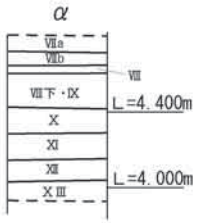


VIII' 層　VIII層よりやや砂っぽい。
VIIIb' 層　オリーブ灰色シルト
5GY 5/1　さらに砂を多く含む
暗青灰色粘質砂質土
VIIIb'' 層　シルト　5GY 5/1　砂質土
VIIIb''' 層　暗緑灰色粘土　7.5GY 3/1
シルト混じり
VIIIb'''' 層　灰色粘質土　やや砂混じり
粘土に近い
VIIIb''''' 層　暗青灰色シルト　砂、粘質混じり層
IX層　10Y 3/2　淡オリーブ混色





VIa 層　灰色シルト　10Y 6/1　やや青みあり。淡灰色シルト混。
鉄分・白色粒・淡灰色細砂を含む。
VIb 層　灰色シルト　10Y 5/1　やや砂質土多い。
VIc 層　灰色粘質土　7.5Y 5/1　砂粒を多く含む。
マンガン・鉄分が多い
VIc' 層
VIIa 層　灰色粘質土　7.5Y 6/1　砂粒を顕著に含む。
VIIa' 層
VIIb 層　灰色粘土　10Y 5/1　砂質を含む。
VIIb' 層　灰色粗砂　白色・灰色砂混。
VIIb1 層　灰色シルト　橙色・白色粗砂混じり
VIIb'' 層　灰色粗砂混シルト
VIII層の上に堆積した流路の氾濫
VIII層　灰色粘土　10Y 4/1　砂質土も部分的に含む。
鉄分・マンガン多い
VIII下層　オリーブ黒色粘土　7.5Y 2/2　暗青灰色粘土。
暗青灰色シルトを含む。
VIIIb 層　オリーブ黒色シルト　5Y 3/2
VIII下層と比べ、粘土が強く鉄分が混じらない。
細砂がまだら。
IX層　オリーブ黒色粘土　7.5Y 3/1
上層部はシルトが強く、下層部は粘土。
X層　オリーブ黒色粘土　7.5Y 3/1



XI層　5BG 4/1　暗青灰色　やや明るい粘土
XII層　5BG 3/1　暗青灰色粘土（有機層）
XIII層　5BG 5/1　青灰色粘土

Y-14・Z-13・Y-13 深掘トレンチ土層断面図

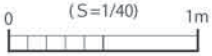
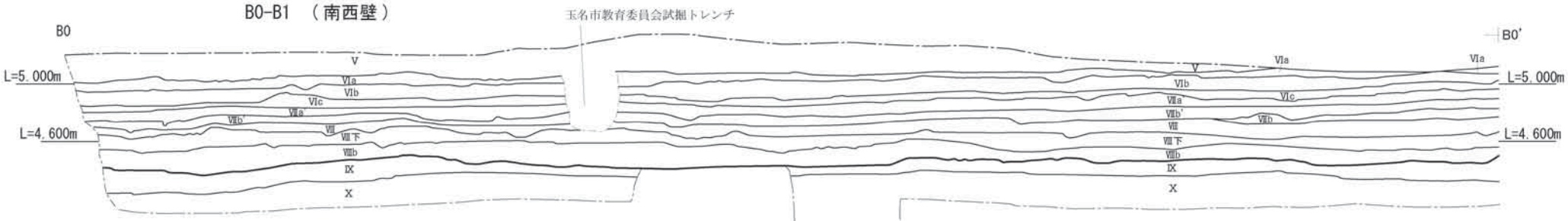
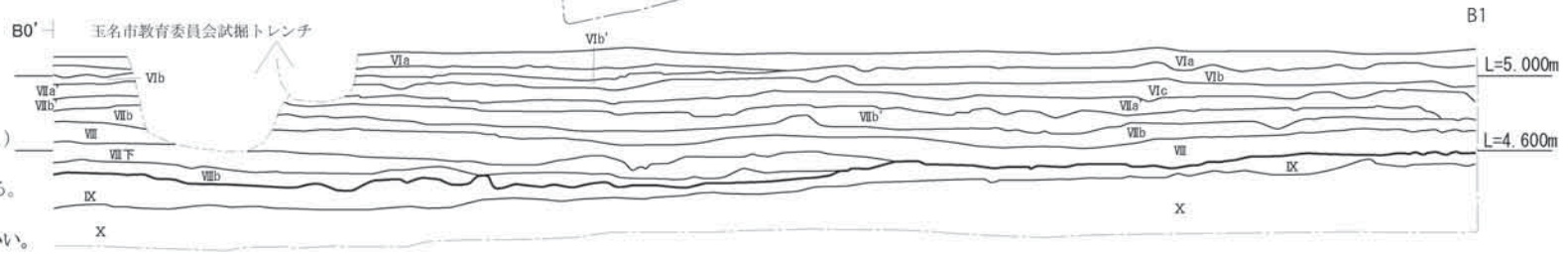


図6　IX層　基本土層図1（南東・北西壁）・Y-14・Z-13・Y-13 深掘トレンチ土層断面図　(1/40)

B0-B1 （南西壁）





VIa 層　灰色シルト 10Y 6/1　やや青みあり。淡灰色シルト混。
鉄分・白色粒・淡灰色細砂を含む。

VIb 層　灰色シルト 10Y 5/1　やや砂質土多い。

VIc 層　灰色粘質土 7.5Y 5/1　砂粒を多く含む。
マンガン・鉄分が多い

VIIa 層　灰色粘質土 7.5Y 6/1　砂粒を顕著に含む。
（粗砂が帯状堆積。下層部は鉄分が含まれる。）

VIIb 層　灰色粘土 10Y 5/1　砂質を含む。
（灰色　5Y 4/1　粘性があり粗砂が多く混じる。
しまりがなく、鉄分が混じる）

VIIb' 層　灰色粘質土 7.5Y 6/1　砂粒がVIIa 層より細かい。

14 層　灰色シルト 5T 4/1　鉄分が混じる。
わずかに粗砂を含む。

VIII層　灰色粘土　10Y 4/1　砂質土も部分的に含む。
鉄分・マンガン多い
（黄灰色シルト粘土　5Y 4/1 粘質をもち、鉄分重下）

15 層　灰色粘質土 5Y 4/1　少し粗砂混じり。
粘性が強く、しまりがある。鉄分を含む。

16 層　黄灰色シルト 2.5Y 4/1　VIII層よりしまりがなく、サラサラ。
質はほぼVIII層と等しいが鉄分の混じりが異なる（茶の細い鉄分重下）

VIII下層　オリーブ黒色粘土　7.5Y 2/2 暗青灰色粘土・シルトを含む。

IX層　オリーブ黒色粘土　7.5Y 3/1 上層部はシルトが強く、下層部は粘土。
（灰色粘土　5Y 4/1　しまりがあり、鉄分重下）

0　(S=1/40)　1m

B2-B3-B4-B5 （南西壁）

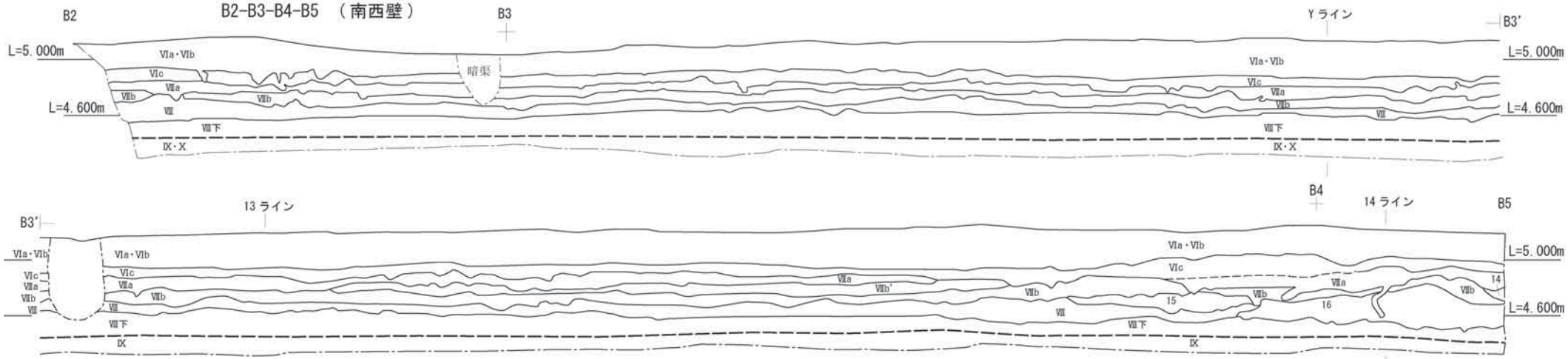
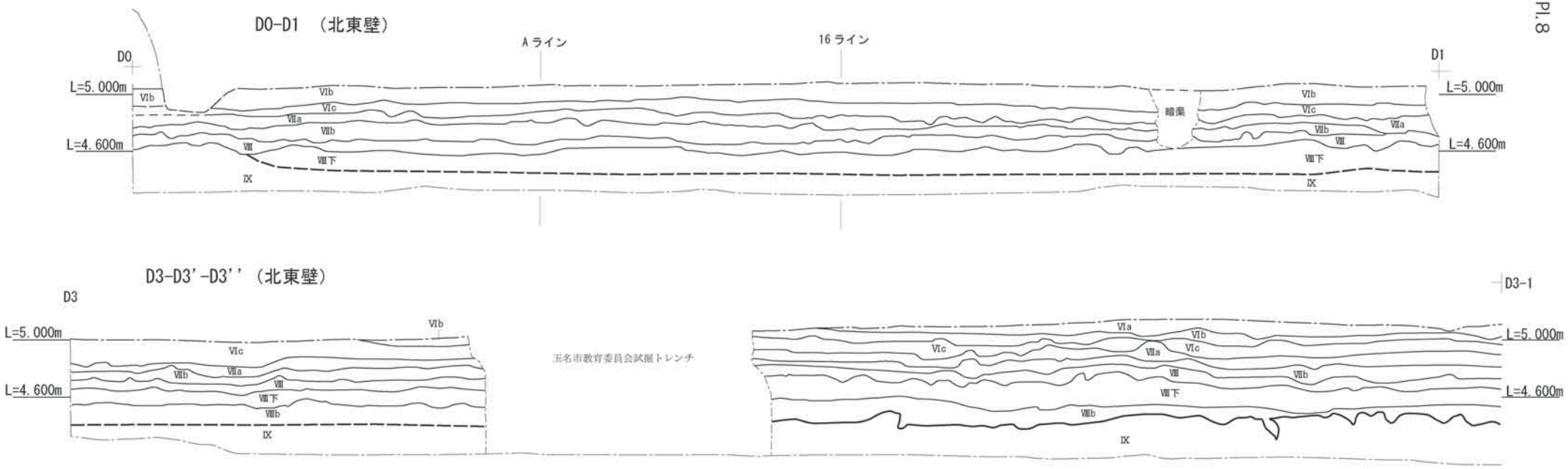
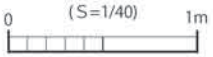
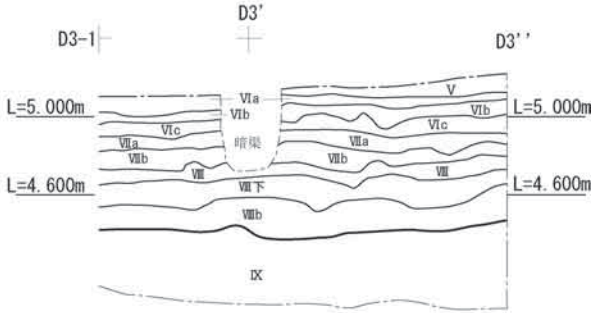


図7　IX層　基本土層図2（南西壁）（1/40）

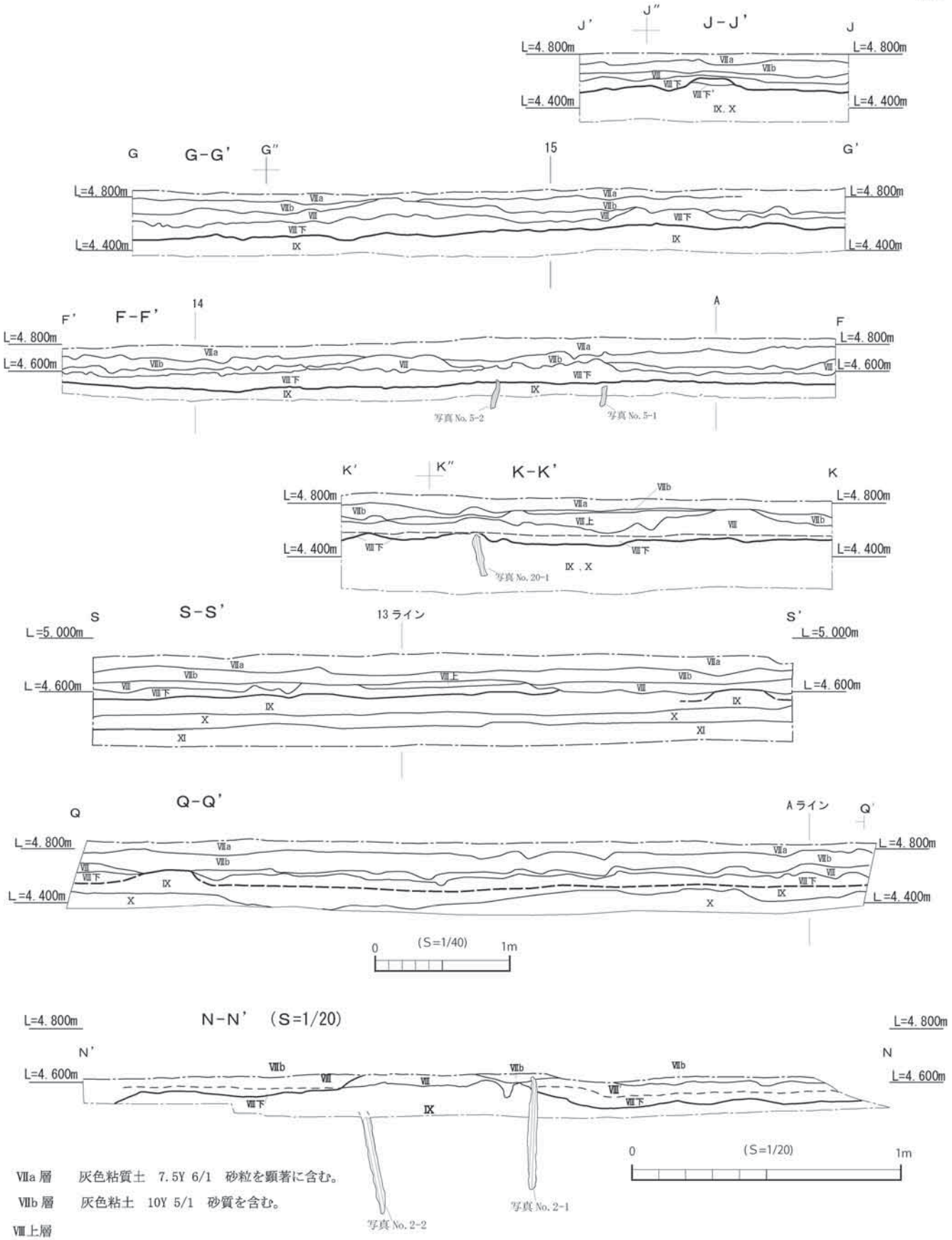






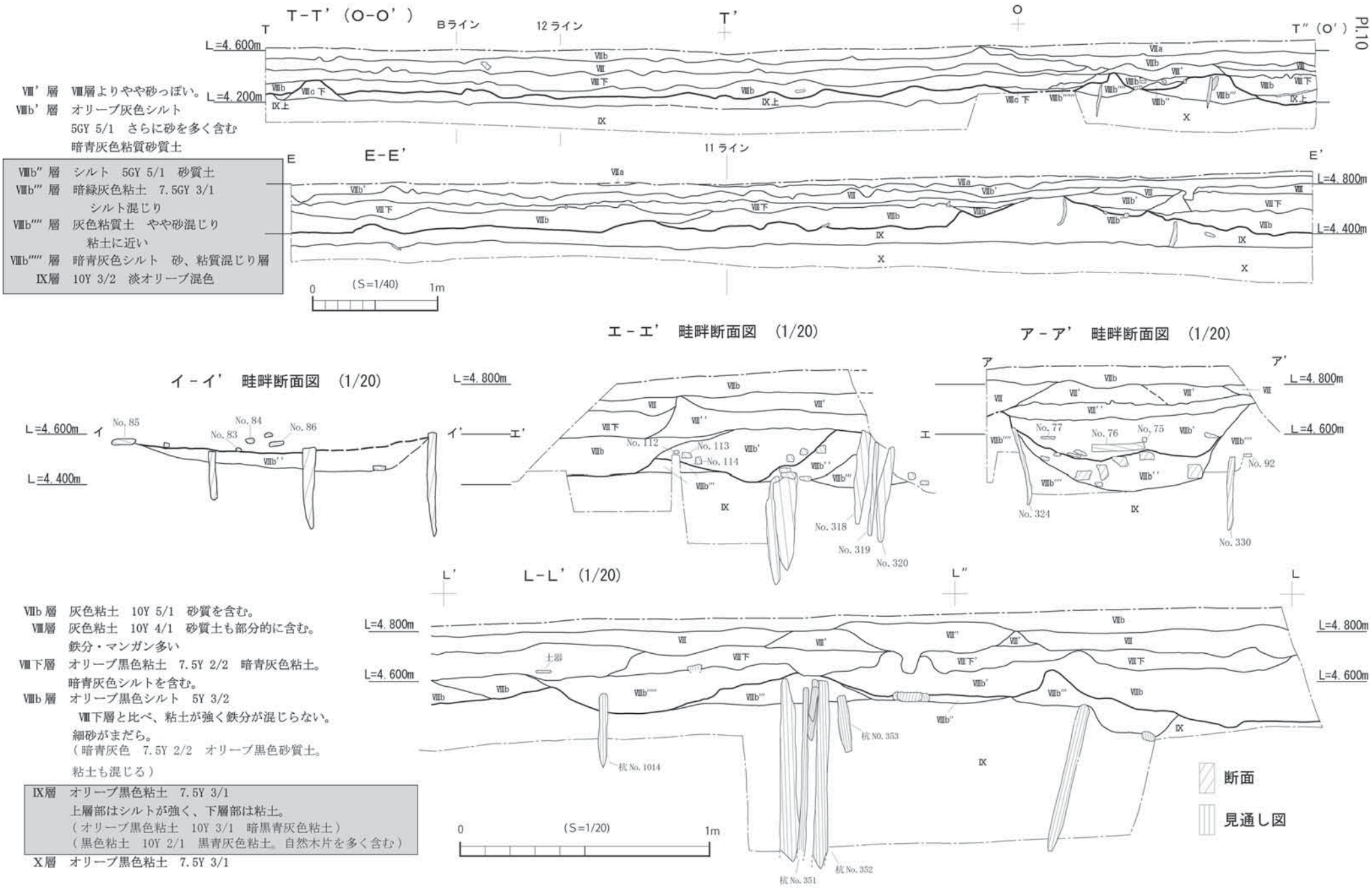
VIa 層　（淡）灰色シルト　10Y 6/1　やや青みあり。
　　鉄分・白色粒。淡灰色細砂を含む。
VIb 層　灰色シルト　10Y 5/1　やや砂質が強い。
VIc 層　灰色粘質土　7.5Y 5/1　砂粒を多く含む。
　　マンガン・鉄分が多い
VIIa 層　灰色粘質土　7.5Y 6/1　砂粒を顕著に含む。
　　（東側より砂質土混じり）
VIIb 層　灰色粘土　10Y 5/1　砂質を含む。
VII層　灰色粘土　10Y 4/1　砂質土も部分的に含む。
　　鉄分・マンガン多い
　　（オリーブ黒　5Y 3/1
　　土質もしまりがなく、乾くとボロボロに崩れる）
VII下層　オリーブ黒色粘土　7.5Y 2/2　暗青灰色粘土。
　　暗青灰色シルトを含む。
VIIIb 層　オリーブ黒色シルト　5Y 3/2　VII下層と比べ、粘土が強く鉄分が混じらない。
　　細砂がまだら。
IX層　オリーブ黒色粘土　7.5Y 3/1
　　上層部はシルトが強く、下層部は粘土。
　　（オリーブ黒　5Y 3/1 土質もしまりがなく、乾くとボロボロに崩れる）
X層　オリーブ黒色粘土　7.5Y 3/1

図8　IX層　基本土層図3（北東壁）（1/40）



VIIa 層	灰色粘質土　7.5Y 6/1　砂粒を顕著に含む。
VIIb 層	灰色粘土　10Y 5/1　砂質を含む。
VIII上層	
VIII層	灰色粘土　10Y 4/1　砂質土も部分的に含む。 鉄分・マンガン多い
VIII下層	オリーブ黒色粘土　7.5Y 2/2　暗青灰色粘土。 暗青灰色シルトを含む。
VIIIb 層	オリーブ黒色シルト　5Y 3/2 VIII下層と比べ、粘土が強く鉄分が混じらない。 細砂がまだら。
IX層	オリーブ黒色粘土　7.5Y 3/1 上層部はシルトが強く、下層部は粘土。
X層	オリーブ黒色粘土　7.5Y 3/1
XI層	5BG　4/1　暗青灰色　やや明かるい粘土

図9　IX層　畦畔（関連）断面図 1　(1/40) (1/20)



Ⅶ' 層　Ⅶ層よりやや砂っぽい。
Ⅷb' 層　オリーブ灰色シルト
5GY 5/1　さらに砂を多く含む
暗青灰色粘質砂質土

Ⅷb" 層　シルト　5GY 5/1　砂質土
Ⅷb''' 層　暗緑灰色粘土　7.5GY 3/1
シルト混じり
Ⅷb'''' 層　灰色粘質土　やや砂混じり
粘土に近い
Ⅷb''''' 層　暗青灰色シルト　砂、粘質混じり層
Ⅸ層　10Y 3/2　淡オリーブ混色

Ⅶb 層　灰色粘土　10Y 5/1　砂質を含む。
Ⅶ層　灰色粘土　10Y 4/1　砂質土も部分的に含む。
鉄分・マンガン多い
Ⅶ下層　オリーブ黒色粘土　7.5Y 2/2　暗青灰色粘土。
暗青灰色シルトを含む。
Ⅷb 層　オリーブ黒色シルト　5Y 3/2
Ⅶ下層と比べ、粘土が強く鉄分が混じらない。
細砂がまだら。
（暗青灰色　7.5Y 2/2　オリーブ黒色砂質土。
粘土も混じる）

Ⅸ層　オリーブ黒色粘土　7.5Y 3/1
上層部はシルトが強く、下層部は粘土。
（オリーブ黒色粘土　10Y 3/1　暗黒青灰色粘土）
（黒色粘土　10Y 2/1　黒青灰色粘土。自然木片を多く含む）

Ⅹ層　オリーブ黒色粘土　7.5Y 3/1

図 10　Ⅸ層　畦畔　（関連）断面図 2　(1/40) (1/20)

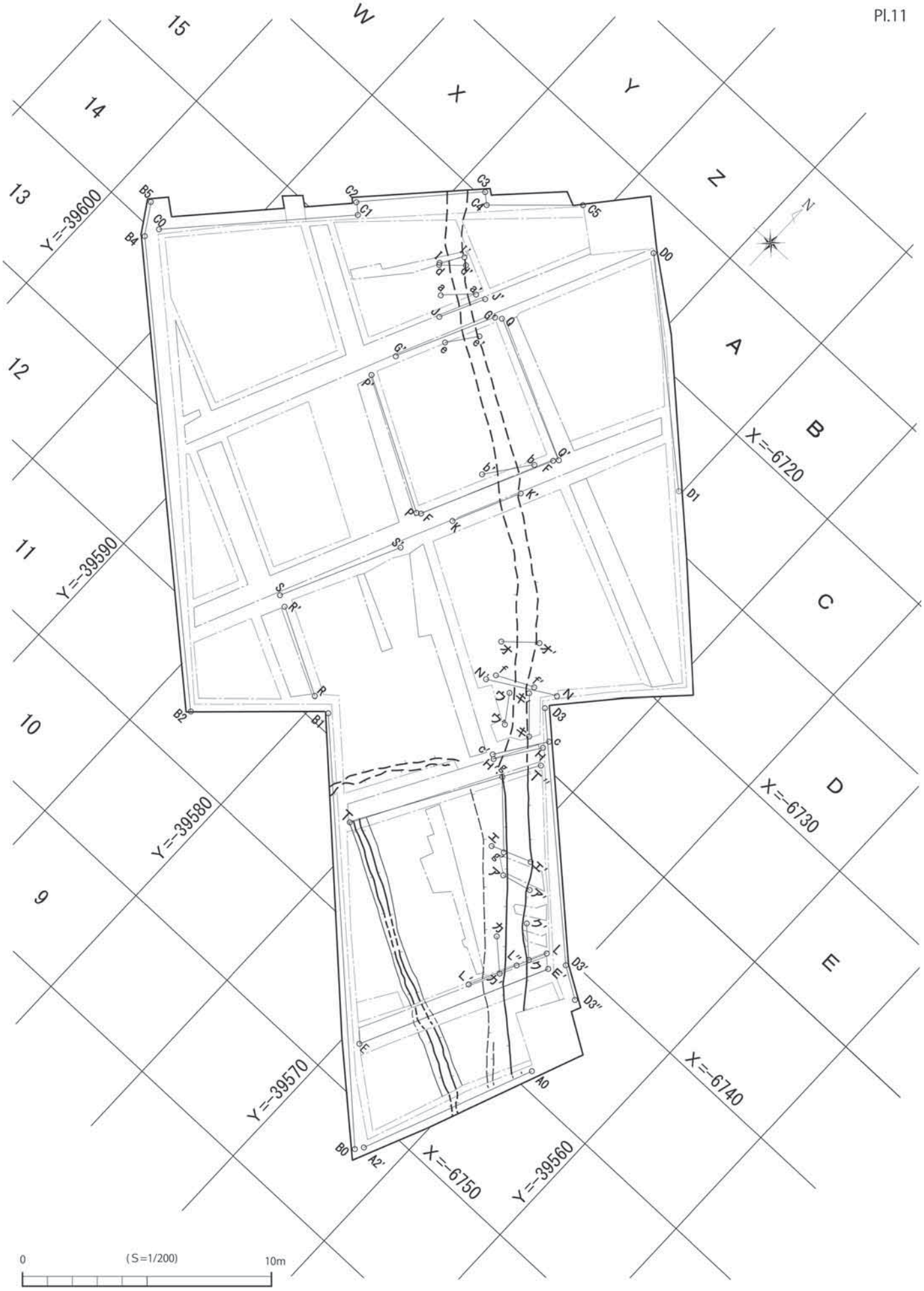
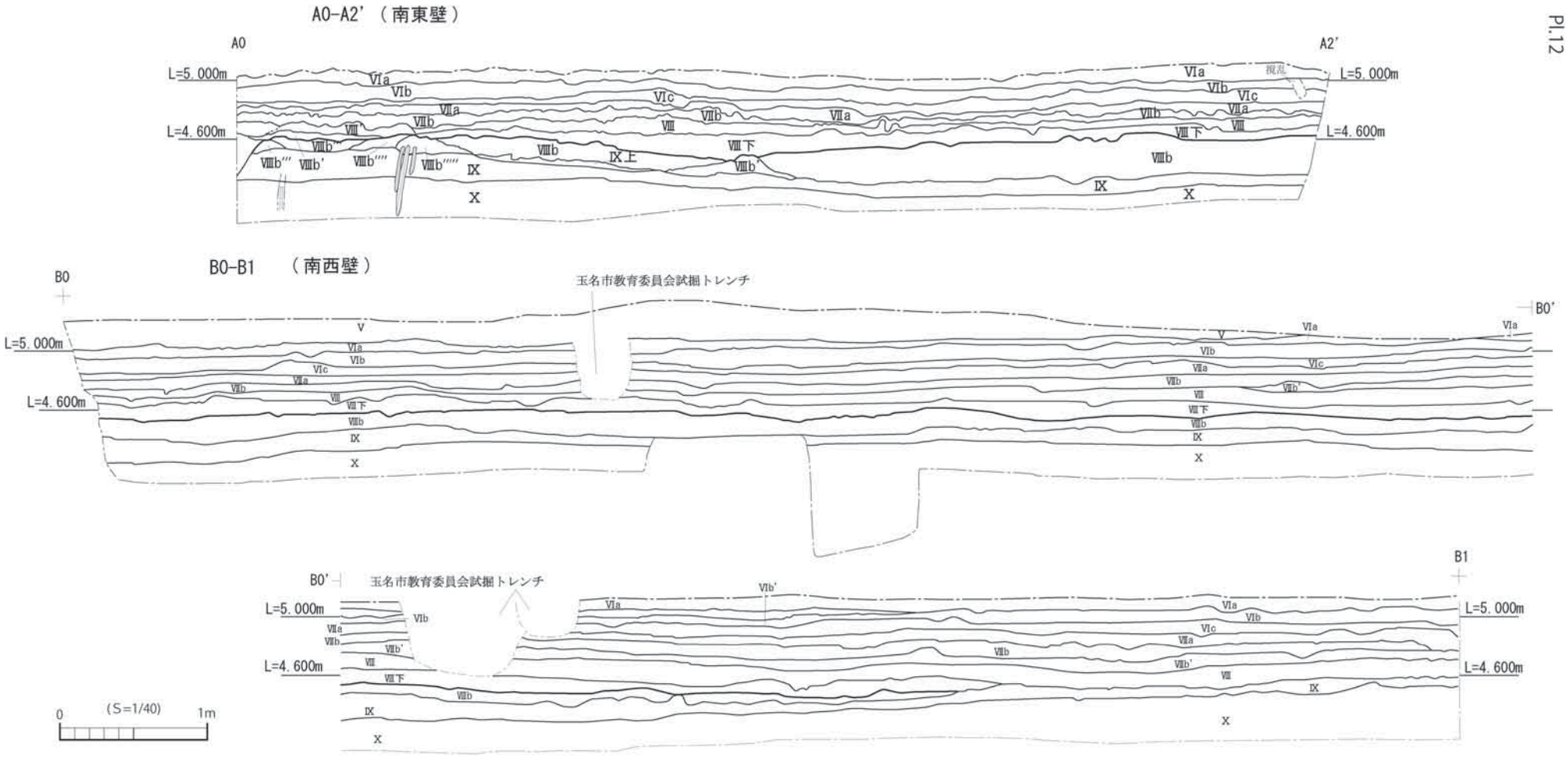


図 11　Ⅷb 層　遺構平面図 (畦畔ほか)　(1/200)



VII' 層　VII層よりやや砂っぽい。
VIIIb' 層　オリーブ灰色シルト
5GY 5/1　さらに砂を多く含む
暗青灰色粘質砂質土

VIIIb'' 層　シルト　5GY 5/1　砂質土
VIIIb''' 層　暗緑灰色粘土　7.5GY 3/1
シルト混じり
VIIIb'''' 層　灰色粘質土　やや砂混じり
粘土に近い
VIIIb''''' 層　暗青灰色シルト　砂、粘質混じり層

IX層　10Y 3/2　淡オリーブ混色

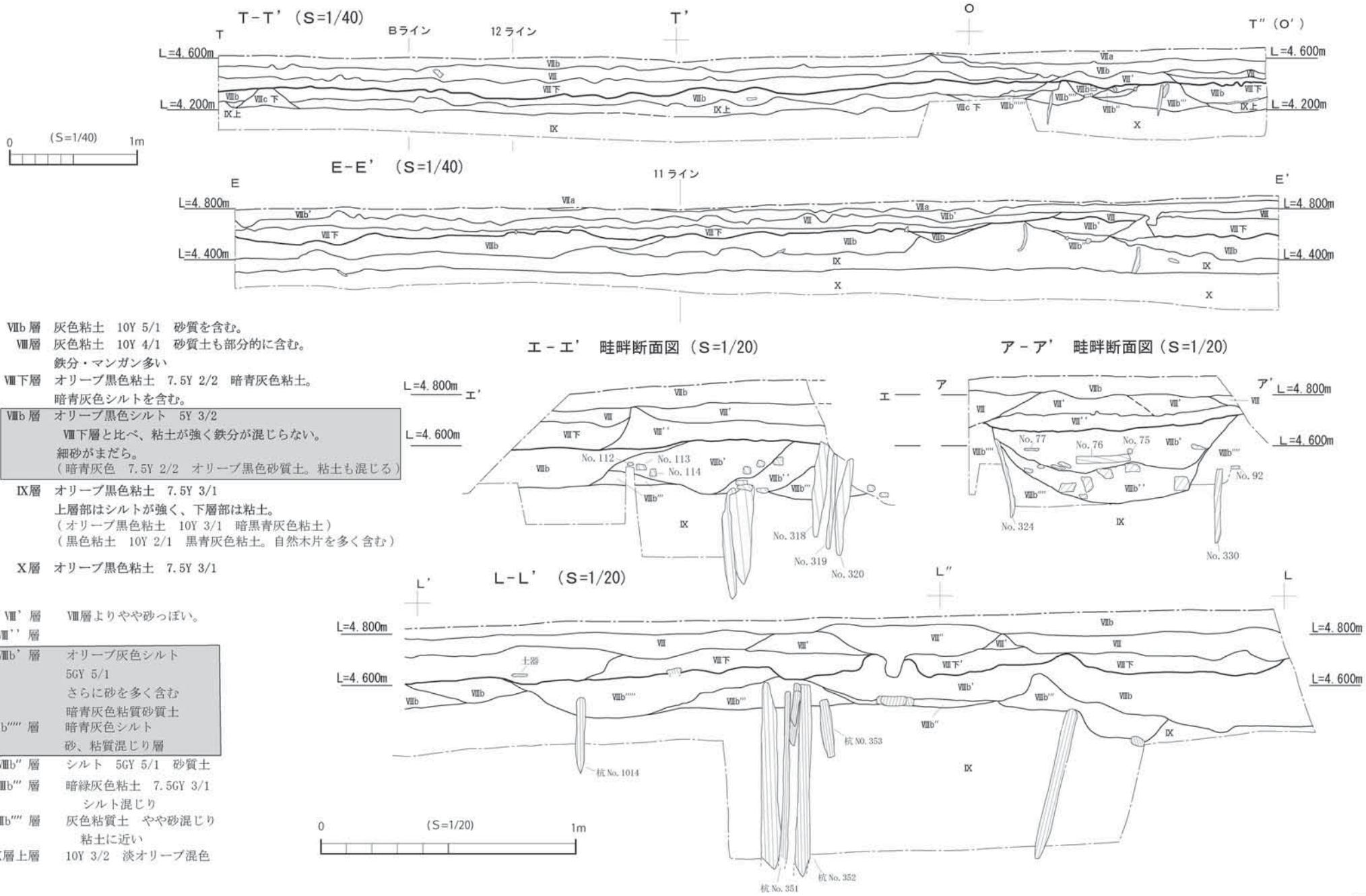
VIa 層　灰色シルト　10Y 6/1　やや青みあり。淡灰色シルト。
鉄分・白色粒。淡灰色細砂を含む。
VIb 層　灰色シルト　10Y 5/1　やや砂質土多い
VIc 層　灰色粘質土　7.5Y 5/1　砂粒を多く含む。
マンガン・鉄分が多い
VIIa 層　灰色粘質土　7.5Y 6/1　砂粒を顕著に含む。
VIIb 層　灰色粘土　10Y 5/1　砂質を含む。
VIIb' 層　灰色粘質土　7.5Y 6/1　砂粒がVIIa 層より細かい

VIII層　灰色粘土　10Y 4/1　砂質土も部分的に含む。
鉄分・マンガン多い
VIII下層　オリーブ黒色粘土　7.5Y 2/2　暗青灰色粘土。
暗青灰色シルトを含む。

VIIIb 層　オリーブ黒色シルト　5Y 3/2　VIII下層と比べ、
粘土が強く鉄分が混じらない。細砂がまだら。

IX層　オリーブ黒色粘土　7.5Y 3/1
上層部はシルトが強く、下層部は粘土。
X層　オリーブ黒色粘土　7.5Y 3/1

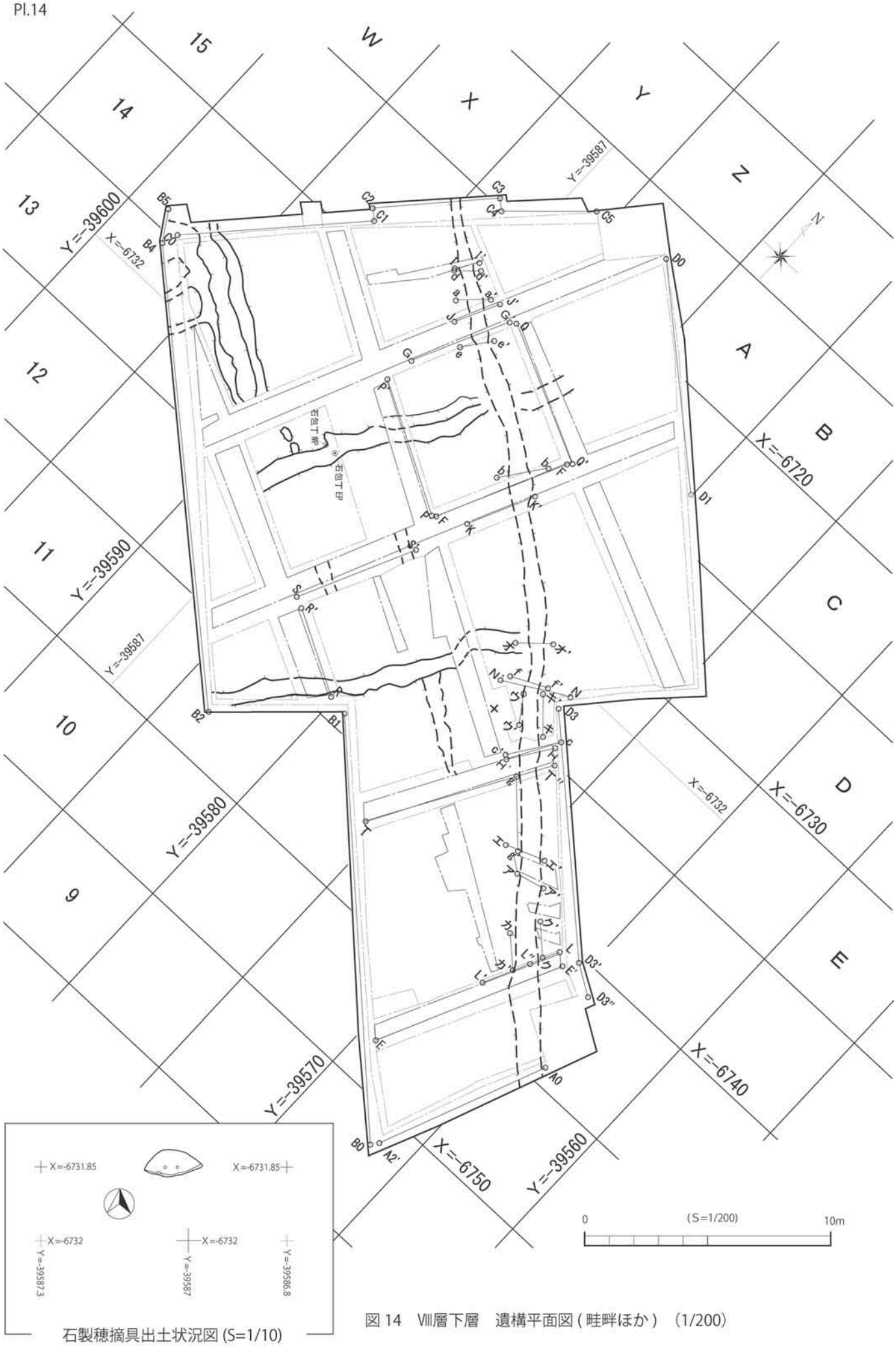
図 12　VIIIb 層　基本土層図 1　（南東壁・南西壁）（1/40）



Ⅶb 層　灰色粘土　10Y 5/1　砂質を含む。
Ⅶ層　灰色粘土　10Y 4/1　砂質土も部分的に含む。
鉄分・マンガン多い
Ⅶ下層　オリーブ黒色粘土　7.5Y 2/2　暗青灰色粘土。
暗青灰色シルトを含む。
Ⅶb 層　オリーブ黒色シルト　5Y 3/2
Ⅶ下層と比べ、粘土が強く鉄分が混じらない。
細砂がまだら。
（暗青灰色　7.5Y 2/2　オリーブ黒色砂質土。粘土も混じる）
Ⅸ層　オリーブ黒色粘土　7.5Y 3/1
上層部はシルトが強く、下層部は粘土。
（オリーブ黒色粘土　10Y 3/1　暗黒青灰色粘土）
（黒色粘土　10Y 2/1　黒青灰色粘土。自然木片を多く含む）
Ⅹ層　オリーブ黒色粘土　7.5Y 3/1

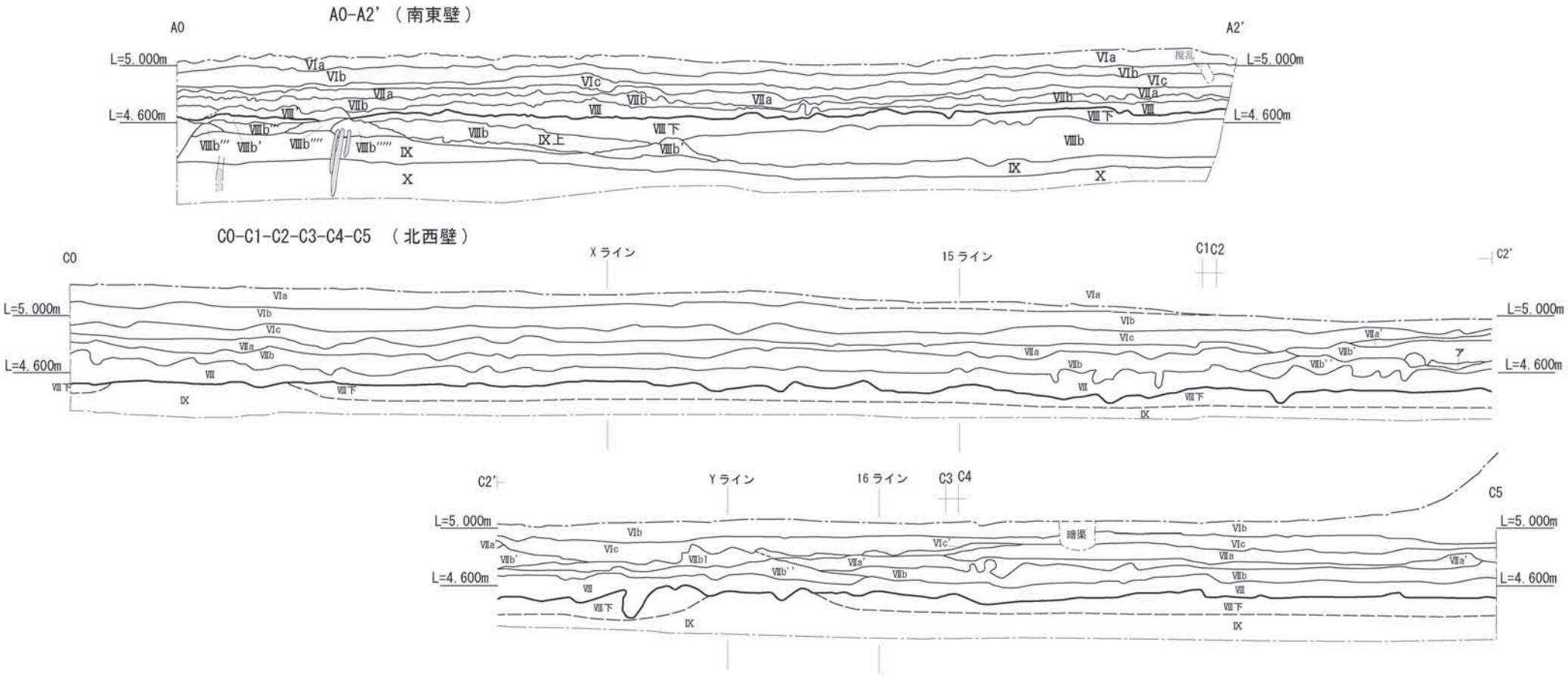
Ⅶ’ 層　Ⅶ層よりやや砂っぽい。
Ⅶ’’ 層
Ⅶb’ 層　オリーブ灰色シルト
5GY 5/1
さらに砂を多く含む
暗青灰色粘質砂質土
Ⅶb’’’’’ 層　暗青灰色シルト
砂、粘質混じり層
Ⅶb” 層　シルト　5GY 5/1　砂質土
Ⅶb’’’ 層　暗緑灰色粘土　7.5GY 3/1
シルト混じり
Ⅶb’’’’ 層　灰色粘質土　やや砂混じり
粘土に近い
Ⅸ層上層　10Y 3/2　淡オリーブ混色

図 13　Ⅶb 層　畦畔　（関連）断面図 1　（1/40）（1/20）



石製穂摘具出土状況図 (S=1/10)

図 14　Ⅷ層下層　遺構平面図 (畦畔ほか)　(1/200)



VIa 層　灰色シルト　10Y 6/1　やや青みあり。淡灰色シルト混。
鉄分・白色粒・淡灰色細砂を含む。

VIb 層　灰色シルト　10Y 5/1　やや砂質土多い。

VIc 層　灰色粘質土　7.5Y 5/1　砂粒を多く含む。
マンガン・鉄分が多い

VIc' 層

VIIa 層　灰色粘質土　7.5Y 6/1　砂粒を顕著に含む。

VIIa' 層

VIIb 層　灰色粘土　10Y 5/1　砂質を含む。

VIIb' 層　灰色粗砂　白色・灰色砂混。

VIIb1 層　灰色シルト　橙色・白色粗砂混じり

VIIb'' 層　灰色粗砂混シルト VIII層の上に堆積した流路の氾濫

VIII層　灰色粘土　10Y 4/1　砂質土も部分的に含む。
鉄分・マンガン多い

0　(S=1/40)　1m

VIII下層　オリーブ黒色粘土　7.5Y 2/2　暗青灰色粘土。
暗青灰色シルトを含む。

VIIIb 層　オリーブ黒色シルト　5Y 3/2
VIII下層と比べ、粘土が強く鉄分が混じらない。
細砂がまだら。

IX層　オリーブ黒色粘土　7.5Y 3/1
上層部はシルトが強く、下層部は粘土。

VIII' 層　VIII層よりやや砂っぽい。

VIIIb' 層　オリーブ灰色シルト
5GY 5/1　さらに砂を多く含む
暗青灰色粘質砂質土

VIIIb'' 層　シルト　5GY 5/1　砂質土

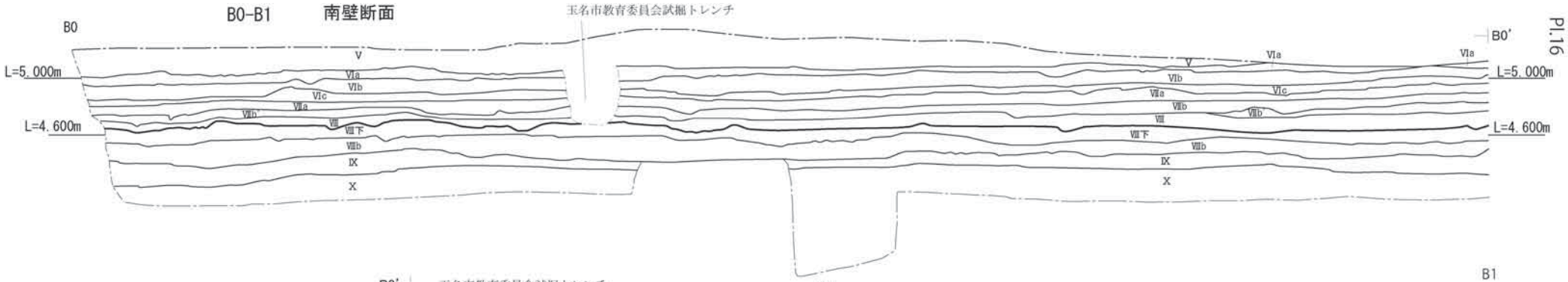
VIIIb''' 層　暗緑灰色粘土　7.5GY 3/1
シルト混じり

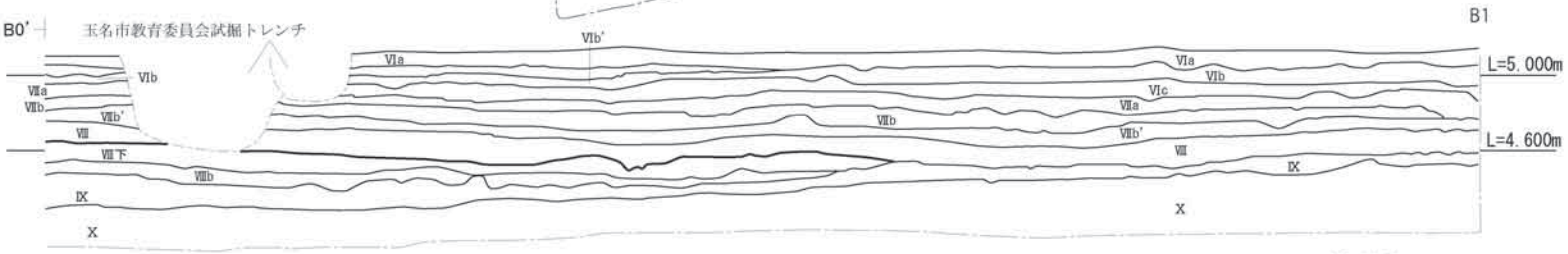
VIIIb'''' 層　灰色粘質土　やや砂混じり
粘土に近い

VIIIb''''' 層　暗青灰色シルト　砂、粘質混じり層

IX層　10Y 3/2　淡オリーブ混色

図 15　VIII層下層　基本土層図 1（南東・北西壁）（1/40）





VIa 層　灰色シルト　10Y 6/1　やや青みあり。
淡灰色シルト。鉄分・白色粒。
淡灰色細砂を含む。

VIb 層　灰色シルト　10Y 5/1　やや砂質土多い

VIc 層　灰色粘質土　7.5Y 5/1　砂粒を多く含む。
マンガン・鉄分が多い

VIIa 層　灰色粘質土　7.5Y 6/1　砂粒を顕著に含む。
（粗砂が帯状堆積。下層部は鉄分が含まれる。）

VIIb 層　灰色粘土　10Y 5/1　砂質を含む。
（灰色　5Y 4/1　粘性があり、粗砂が多く混じる。
しまりがなく、鉄分が混じる）

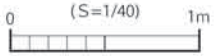
VIIb' 層　灰色粘質土　7.5Y 6/1　砂粒がVIIa 層より細かい

14 層　灰色シルト　5T 4/1　鉄分が混じる。
わずかに粗砂を含む。

VIII層　灰色粘土　10Y 4/1　砂質土も部分的に含む。
鉄分・マンガン多い
（黄灰色　5Y 4/1　シルト粘土　粘質をもち、鉄分重下）

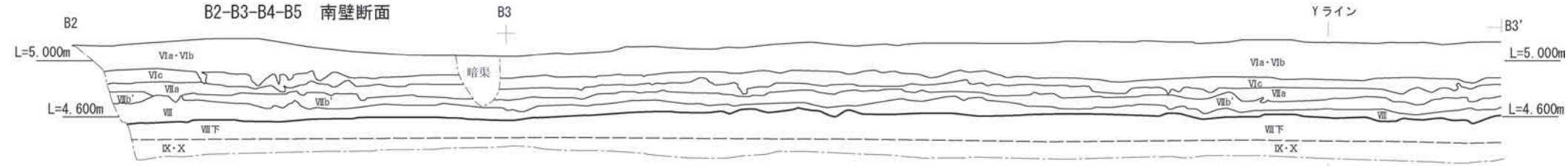
15 層　灰色粘質土　5Y 4/1　少し粗砂混じり。
粘性が強く、しまりがある。鉄分を含む。

16 層　黄灰色シルト質土　2.5Y 4/1　VIII層よりしまりがなく、サラサラ。
質はほぼVIII層と等しいが鉄分の混じりが異なる（茶の細い鉄分重下）



VIII下層　オリーブ黒色粘土　7.5Y 2/2　暗青灰色粘土。
暗青灰色シルトを含む。

IX層　オリーブ黒色粘土　7.5Y 3/1
上層部はシルトが強く、下層部は粘土。
（灰色粘土　5Y 4/1　しまりがあり、鉄分重下）



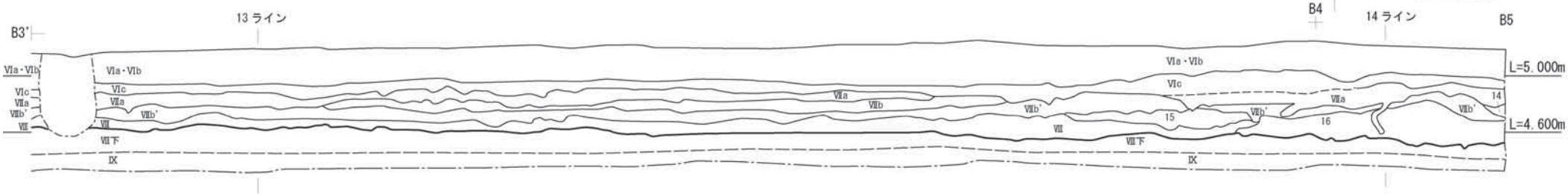
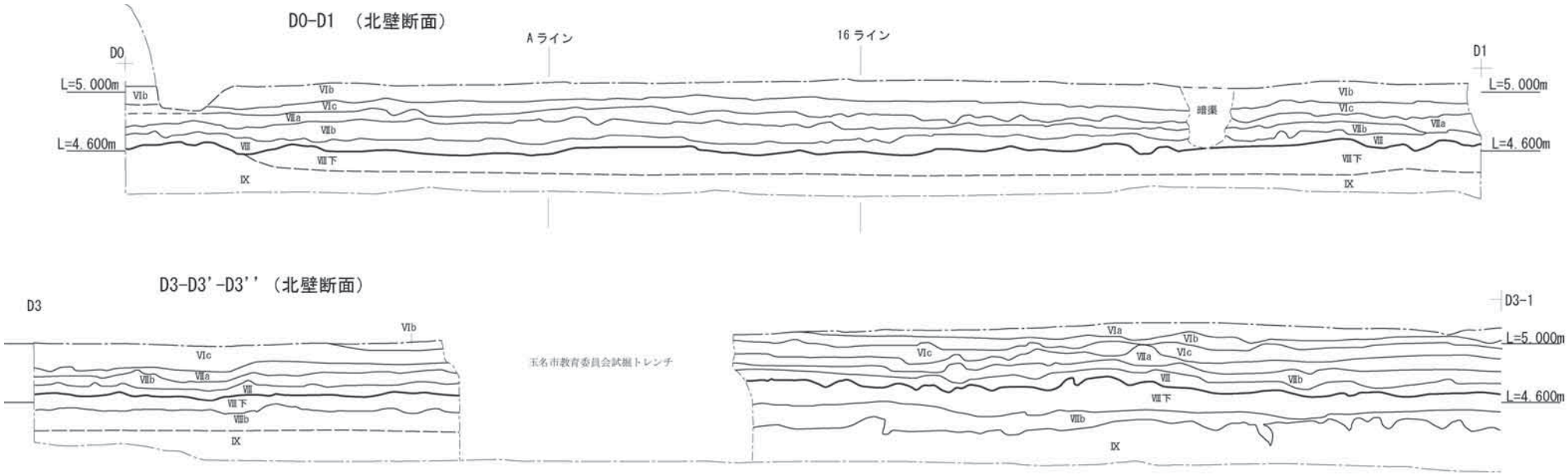


図 16　VIII層下層　基本土層図２（南西壁）（1/40）

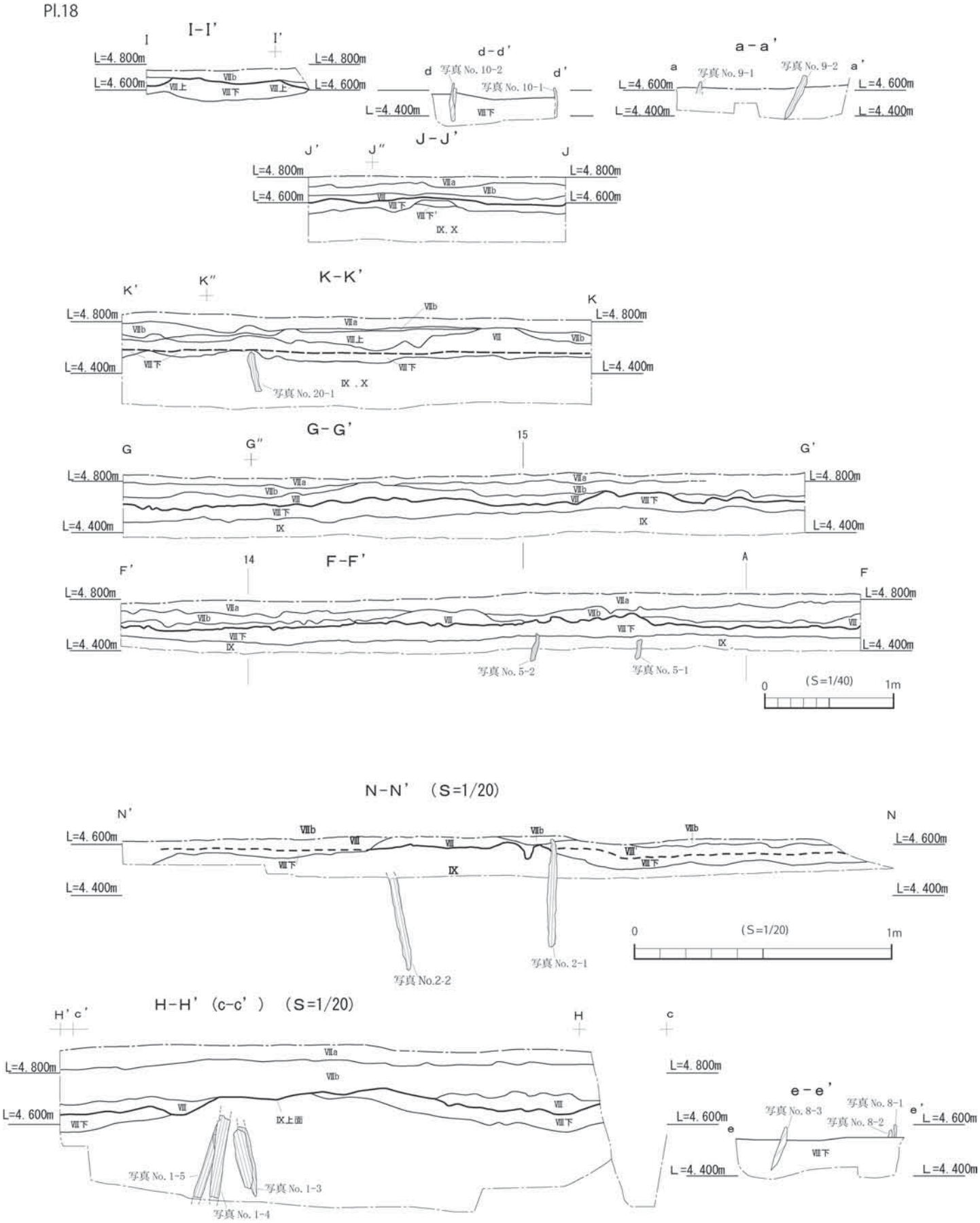


VIa 層　（淡）灰色シルト　10Y 6/1　やや青みあり。
　　鉄分・白色粒。淡灰色細砂を含む。
VIb 層　灰色シルト　10Y 5/1　やや砂質が強い。
VIc 層　灰色粘質土　7.5Y 5/1　砂粒を多く含む。
　　マンガン・鉄分が多い
VIIa 層　灰色粘質土　7.5Y 6/1　砂粒を顕著に含む。
　　（東側より砂質土混じり）
VIIb 層　灰色粘土　10Y 5/1　砂質を含む。
VII層　灰色粘土　10Y 4/1　砂質土も部分的に含む。
　　鉄分・マンガン多い
　　（オリーブ黒　5Y 3/1
　　土質もしまりがなく、乾くとボロボロに崩れる）
VII下層　オリーブ黒色粘土　7.5Y 2/2　暗青灰色粘土。
　　暗青灰色シルトを含む。
VIIIb 層　オリーブ黒色シルト　5Y 3/2　VII下層と比べ、粘土が強く鉄分が混じらない。
　　細砂がまだら。
IX層　オリーブ黒色粘土　7.5Y 3/1
　　上層部はシルトが強く、下層部は粘土。
　　(オリーブ黒　5Y 3/1 土質もしまりがなく、乾くとボロボロに崩れる)
X層　オリーブ黒色粘土　7.5Y 3/1

0　(S=1/40)　1m

図 17　VIII層下層　基本土層図 3（北東壁）（1/40）

Pl.18

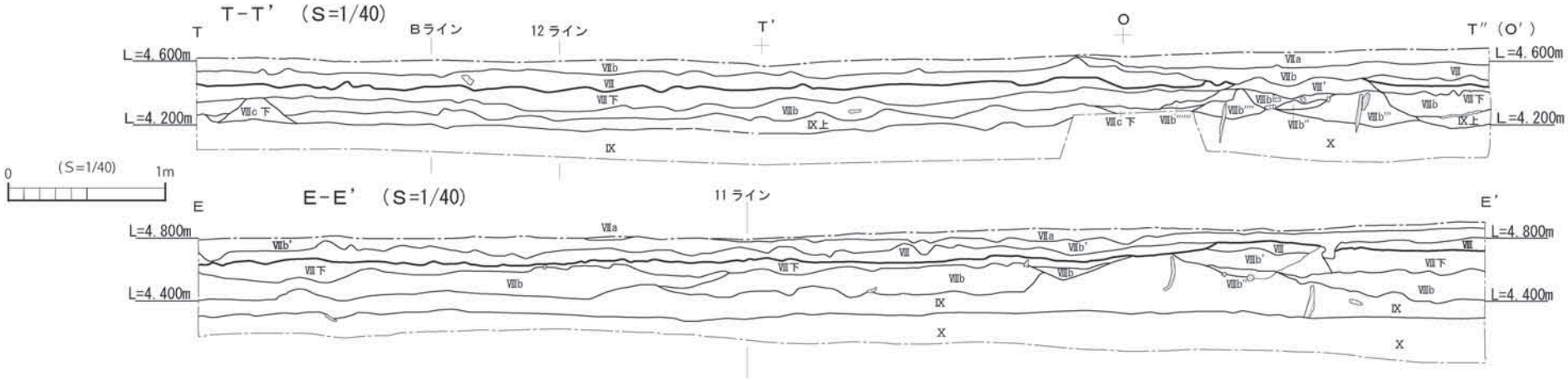


Ⅶa 層　灰色粘質土　7.5Y 6/1　砂粒を顕著に含む。
Ⅶb 層　灰色粘土　10Y 5/1　砂質を含む。
Ⅷ層上層
Ⅷ層　灰色粘土　10Y 4/1　砂質土も部分的に含む。
鉄分・マンガン多い

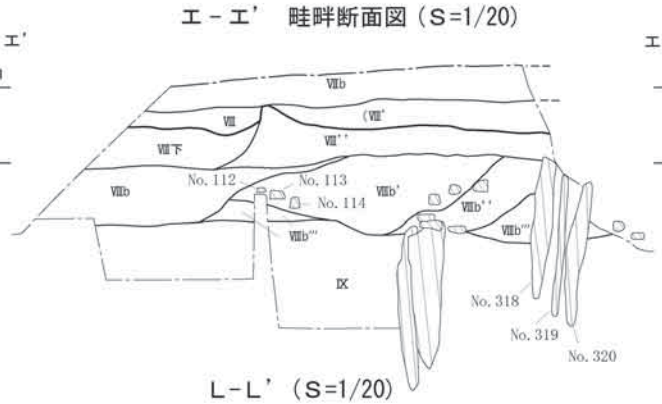
Ⅷ層下層　オリーブ黒色粘土　7.5Y 2/2　暗青灰色粘土。
暗青灰色シルトを含む。
Ⅷ層下' 層

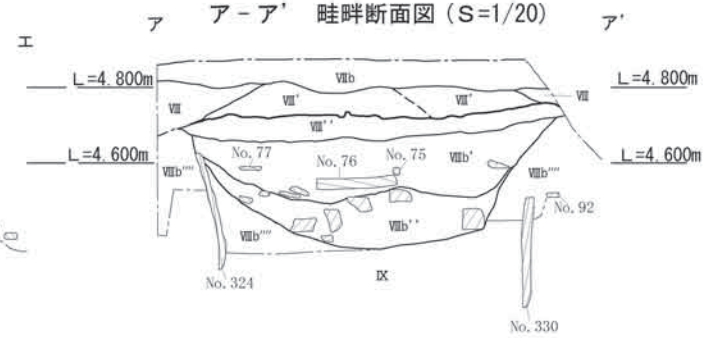
Ⅸ層　オリーブ黒色粘土　7.5Y 3/1
上層部はシルトが強く、下層部は粘土。
Ⅹ層　オリーブ黒色粘土　7.5Y 3/1

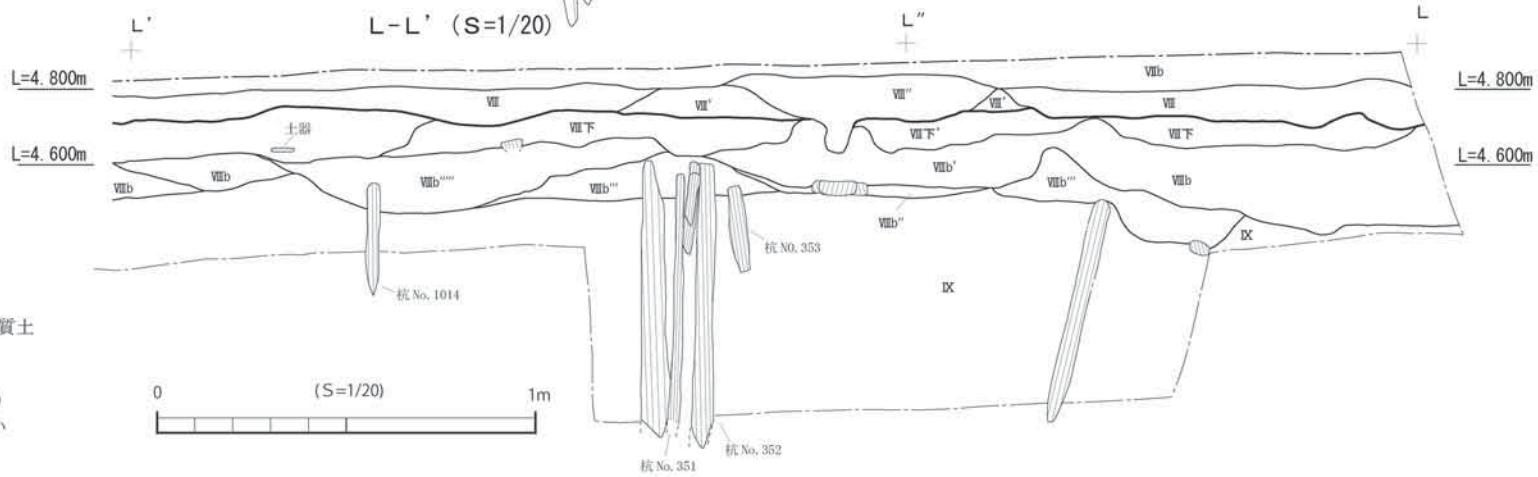
図 18　Ⅷ層下層　畦畔（関連）断面図 1　(1/40) (1/20)



Ⅶb層　灰色粘土　10Y 5/1　砂質を含む。
Ⅷ層　灰色粘土　10Y 4/1　砂質土も部分的に含む。
鉄分・マンガン多い
Ⅷ下層　オリーブ黒色粘土　7.5Y 2/2　暗青灰色粘土。
暗青灰色シルトを含む。
Ⅷb層　オリーブ黒色シルト　5Y 3/2
Ⅷ下層と比べ、粘土が強く鉄分が混じらない。
細砂がまだら。
（暗青灰色　7.5Y 2/2　オリーブ黒色砂質土。粘土も混じる）
Ⅸ層　オリーブ黒色粘土　7.5Y 3/1
上層部はシルトが強く、下層部は粘土。
（オリーブ黒色粘土　10Y 3/1　暗黒青灰色粘土）
（黒色粘土　10Y 2/1　黒青灰色粘土。自然木片を多く含む）
Ⅹ層　オリーブ黒色粘土　7.5Y 3/1

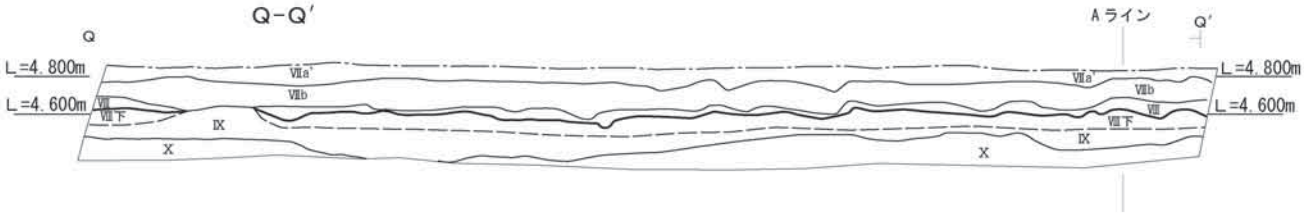


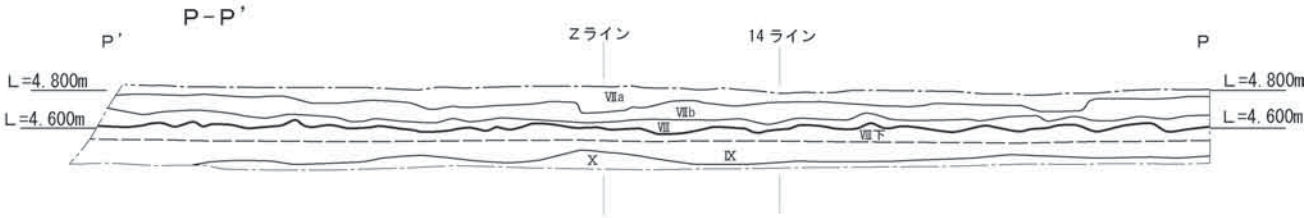


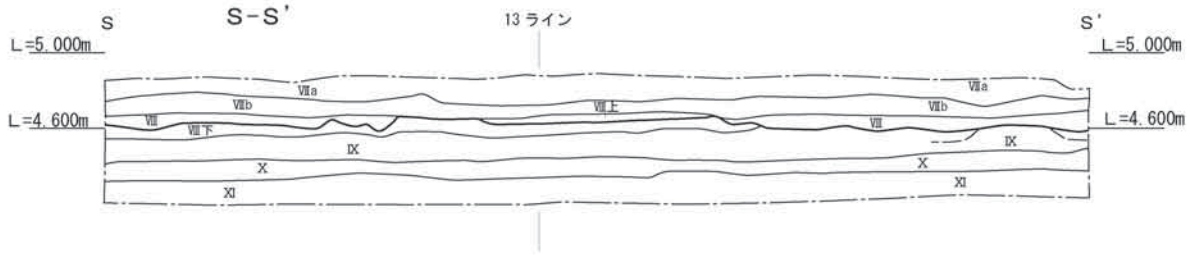


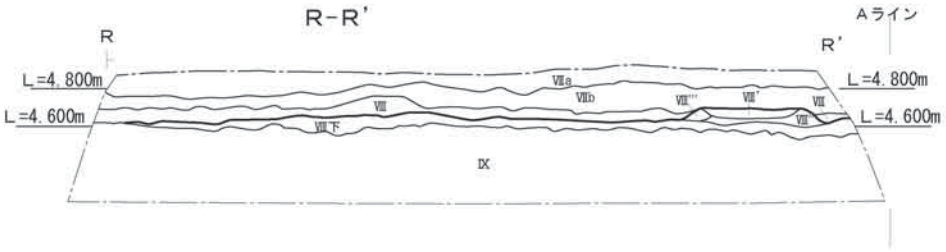
Ⅶ’層　Ⅷ層よりやや砂っぽい。
Ⅶ’’層
Ⅶb’層　オリーブ灰色シルト　5GY 5/1
さらに砂を多く含む。暗青灰色粘質砂質土
Ⅶb’’’’’層　暗青灰色シルト　砂・粘質土混じり層
Ⅶb”層　シルト　5GY 5/1　砂質土
Ⅶb’’’層　暗緑灰色粘土　7.5GY 3/1 シルト混じり
Ⅶb’’’’層　灰色粘質土　やや砂混じり、粘土に近い
Ⅸ層上層　10Y 3/2　淡オリーブ混色

図 19　Ⅷ層下層　畦畔　（関連）断面図 2　（1/40）（1/20）









VIIa 層　灰色粘質土　7.5Y 6/1　砂粒を顕著に含む。
VIIb 層　灰色粘土　10Y 5/1　砂質を含む。
VIII層上層
VIII層　灰色粘土　10Y 4/1　砂質土も部分的に含む。
鉄分・マンガン多い
VIII' 層
VIII'' 層　VIII層よりやや砂っぽい。
VIII下層　オリーブ黒色粘土　7.5Y 2/2　暗青灰色粘土。
暗青灰色シルトを含む。
VIIIb 層　オリーブ黒色シルト　5Y 3/2　VIII下層と比べ、粘土が強く鉄分が混じらない。
細砂がまだら。
IX層　オリーブ黒色粘土　7.5Y 3/1
上層部はシルトが強く、下層部は粘土。

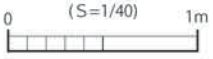


図 20　VIII層下層　畦畔（関連）断面図 3　(1/40)

Pl.22

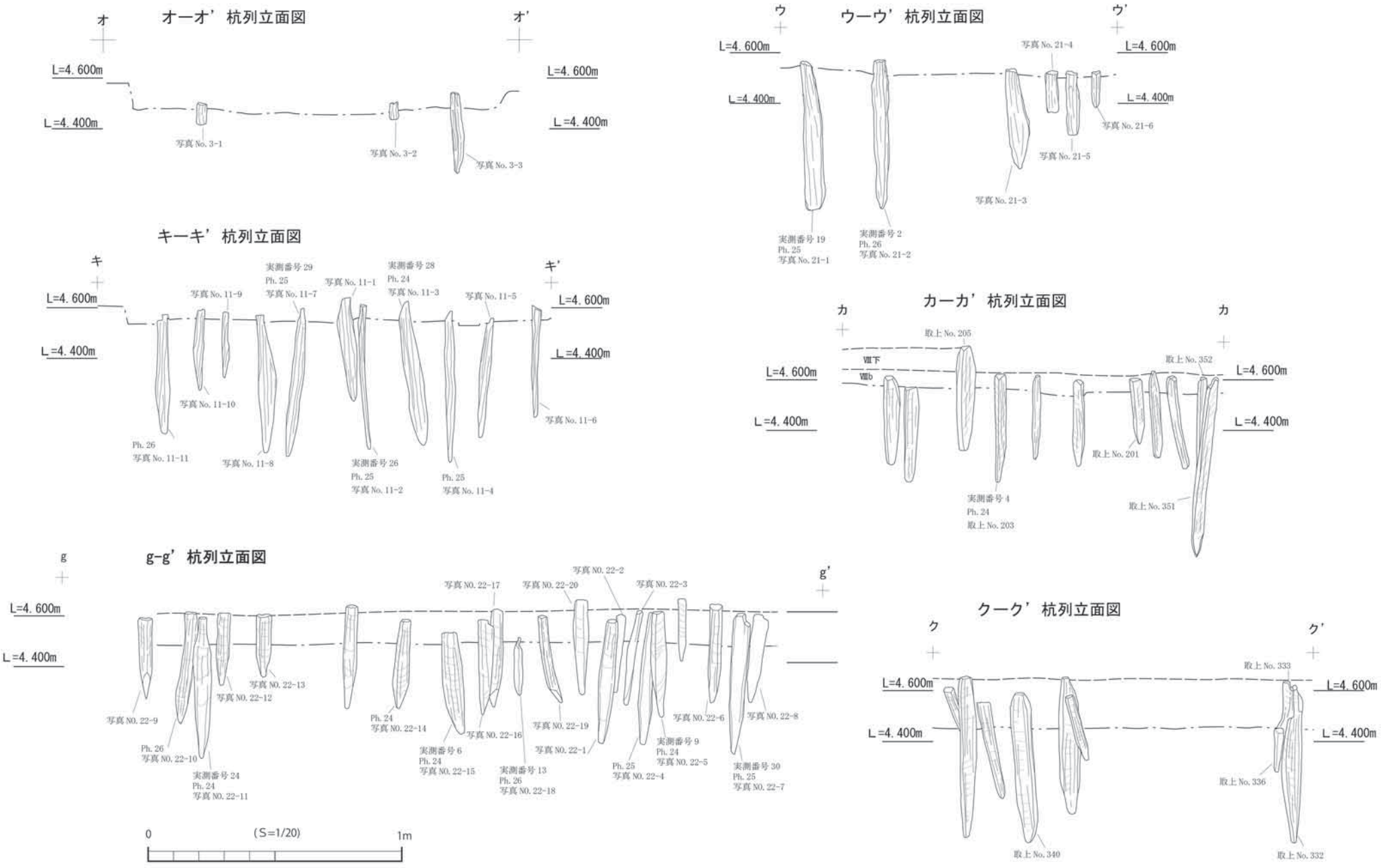


図23　Ⅷ層下層・Ⅷb層ほか　杭列　立面図　(1/20)

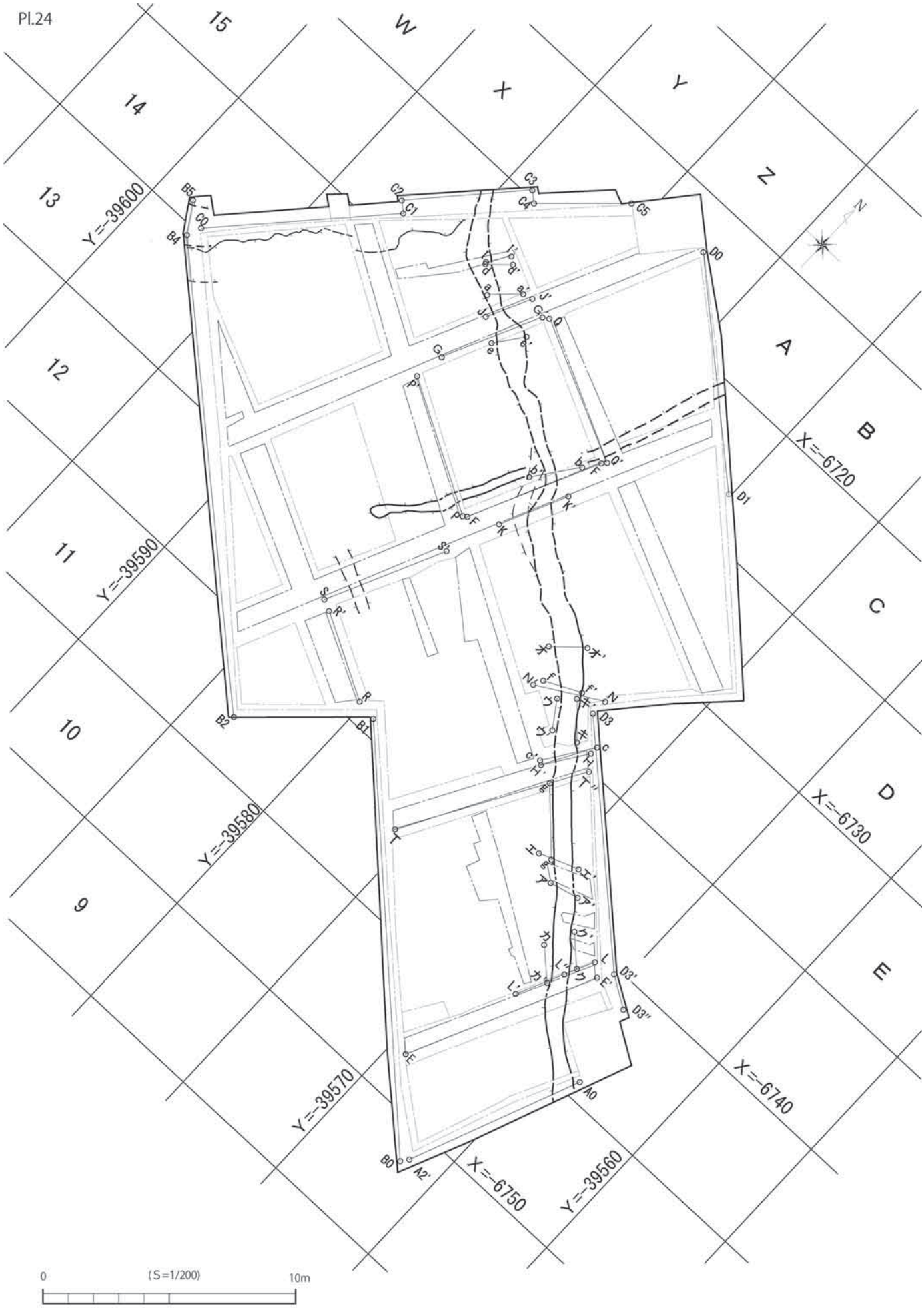
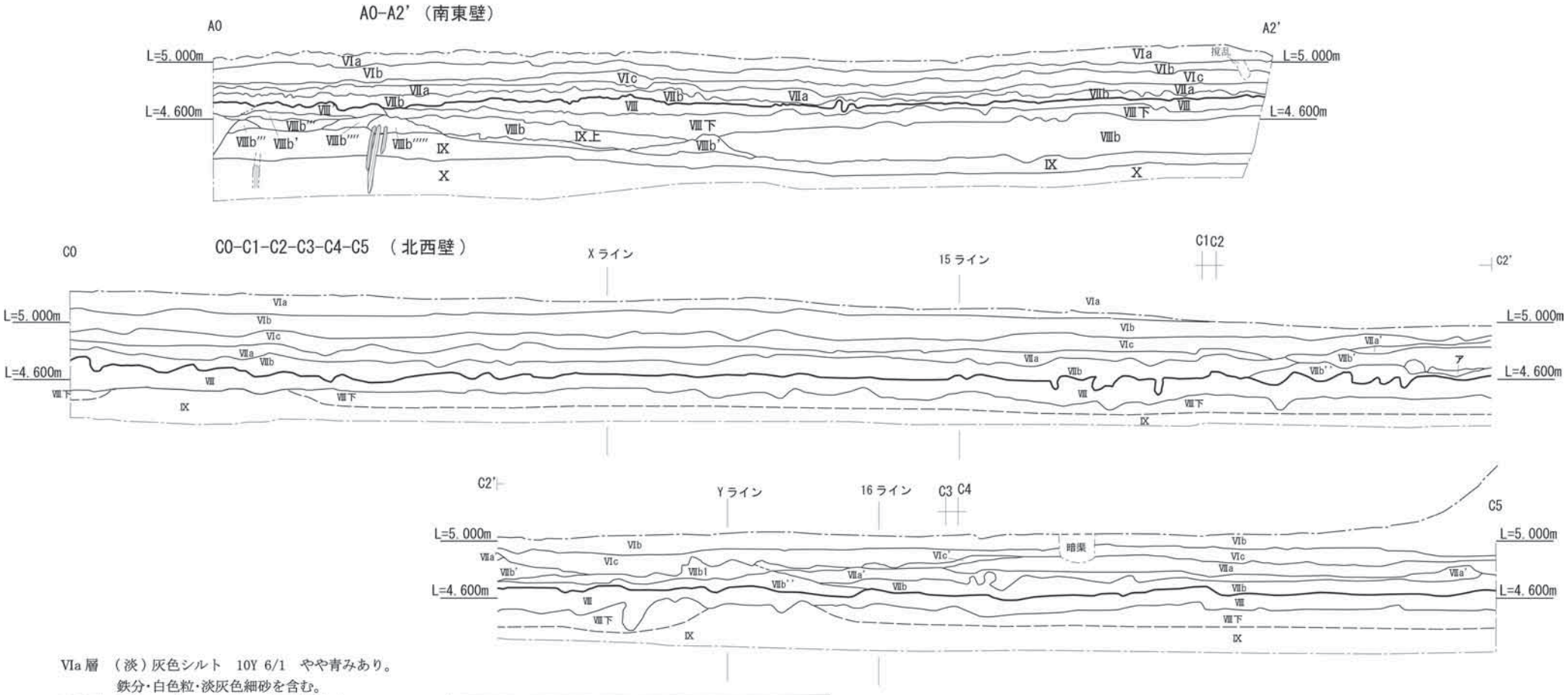


図 24　Ⅷ層　遺構平面図 (畦畔ほか)　(1/200)



VIa 層　（淡）灰色シルト　10Y 6/1　やや青みあり。
鉄分・白色粒・淡灰色細砂を含む。

VIb 層　灰色シルト　10Y 5/1　やや砂質土多い。

VIc 層　灰色粘質土　7.5Y 5/1　砂粒を多く含む。
マンガン・鉄分が多い

VIc' 層

VIIa 層　灰色粘質土　7.5Y 6/1　砂粒を顕著に含む。

VIIa' 層

VIIb 層　灰色粘土　10Y 5/1　砂質を含む。

VIIb' 層　灰色粗砂　白色・灰色砂混。

VIIb1 層　灰色シルト　橙色・白色粗砂混じり

VIIb'' 層　灰色粗砂混シルト
VIII層の上に堆積した流路の氾濫

VIII層　灰色粘土　10Y 4/1　砂質土も部分的に含む。
鉄分・マンガン多い

VIII下層　オリーブ黒色粘土　7.5Y 2/2　暗青灰色粘土。
暗青灰色シルトを含む。

VIIIb 層　オリーブ黒色シルト　5Y 3/2
VIII下層と比べ、粘土が強く鉄分が混じらない。
細砂がまだら。

IX層　オリーブ黒色粘土　7.5Y 3/1
上層部はシルトが強く、下層部は粘土。

X層　オリーブ黒色粘土　7.5Y 3/1

VIII' 層　VIII層よりやや砂っぽい。

VIIIb' 層　オリーブ灰色シルト
5GY 5/1　さらに砂を多く含む
暗青灰色粘質砂質土

VIIIb'' 層　シルト　5GY 5/1　砂質土

VIIIb''' 層　暗緑灰色粘土　7.5GY 3/1
シルト混じり

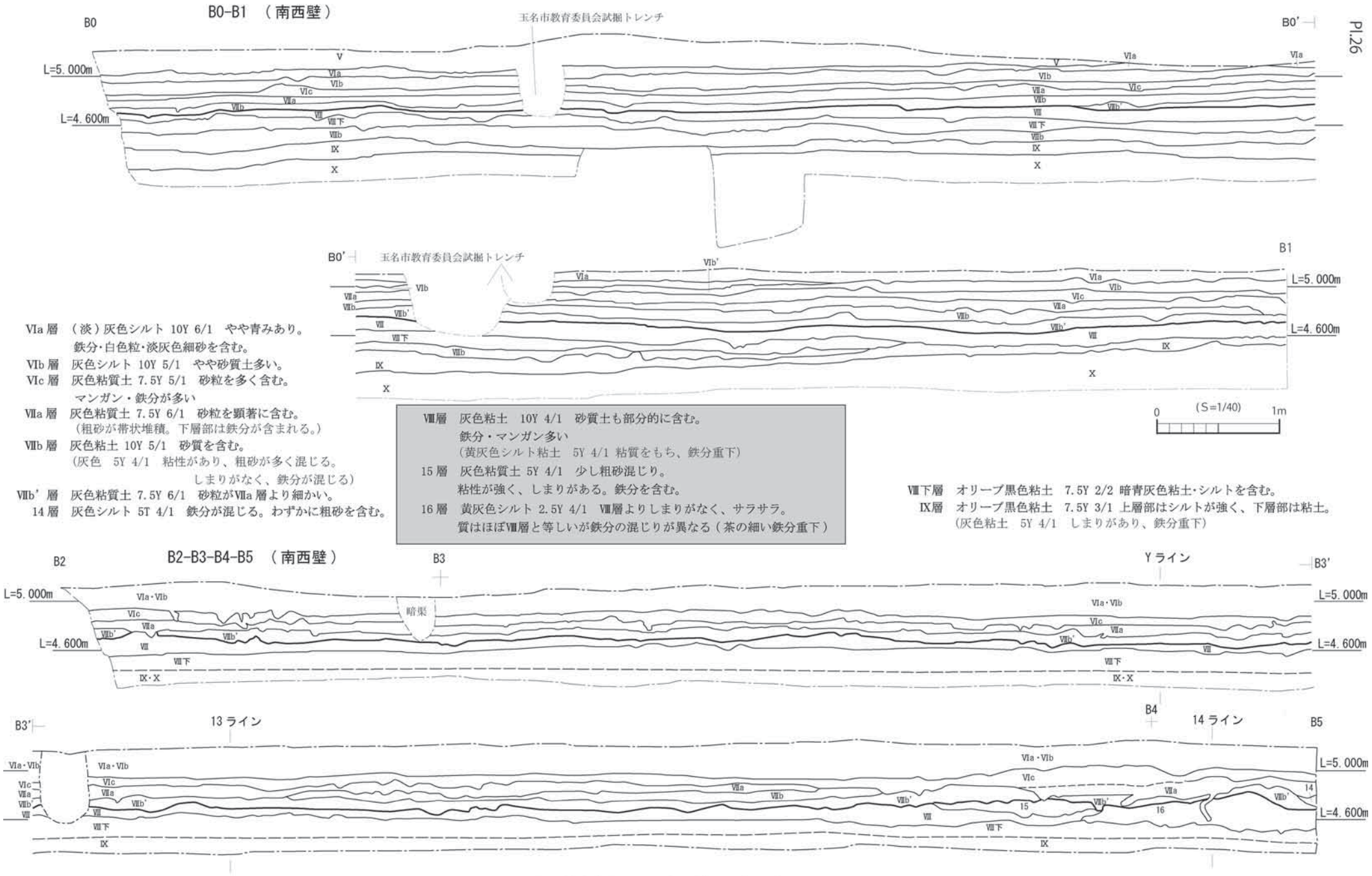
VIIIb'''' 層　灰色粘質土　やや砂混じり
粘土に近い

VIIIb''''' 層　暗青灰色シルト　砂、粘質混じり層

IX層　10Y 3/2　淡オリーブ混色

0　(S=1/40)　1m

図 25　VIII層　基本土層図 1（南東・北西壁）（1/40）

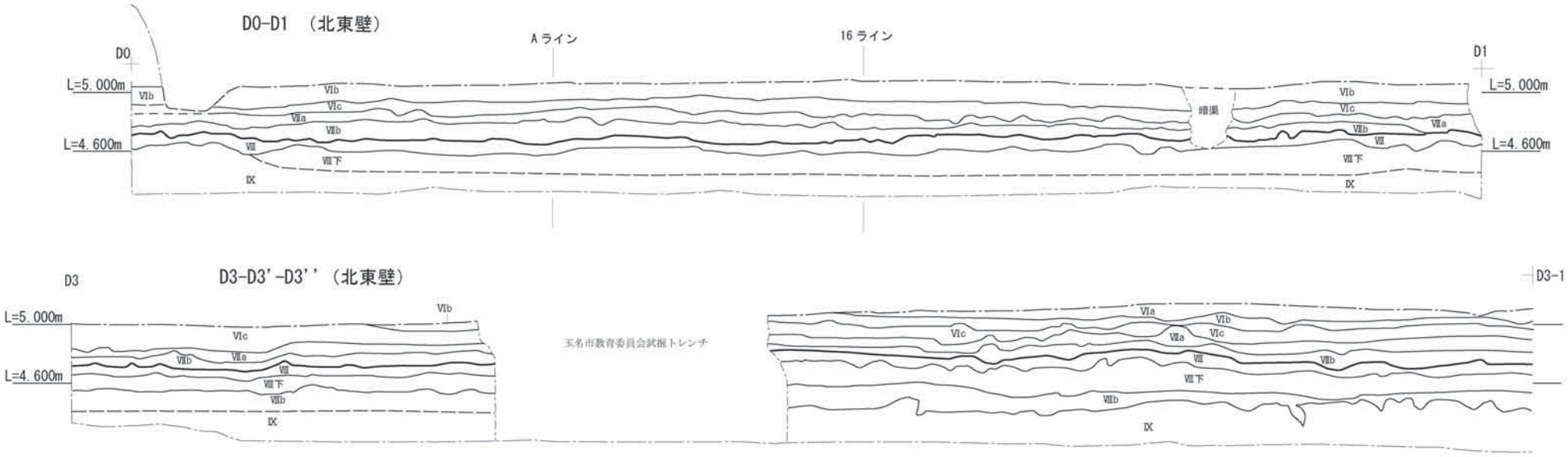


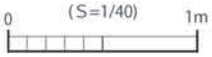
VIa 層　（淡）灰色シルト 10Y 6/1　やや青みあり。
鉄分・白色粒・淡灰色細砂を含む。
VIb 層　灰色シルト 10Y 5/1　やや砂質土多い。
VIc 層　灰色粘質土 7.5Y 5/1　砂粒を多く含む。
マンガン・鉄分が多い
VIIa 層　灰色粘質土 7.5Y 6/1　砂粒を顕著に含む。
（粗砂が帯状堆積。下層部は鉄分が含まれる。）
VIIb 層　灰色粘土 10Y 5/1　砂質を含む。
（灰色　5Y 4/1　粘性があり、粗砂が多く混じる。
しまりがなく、鉄分が混じる）
VIIb' 層　灰色粘質土 7.5Y 6/1　砂粒がVIIa 層より細かい。
14 層　灰色シルト 5T 4/1　鉄分が混じる。わずかに粗砂を含む。

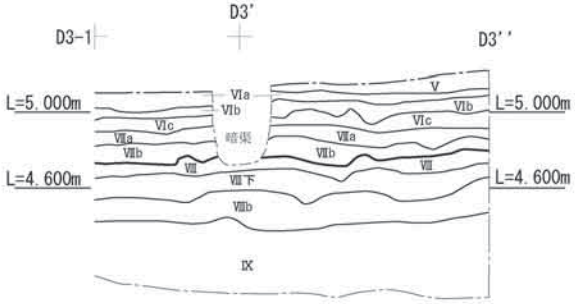
VIII層　灰色粘土　10Y 4/1　砂質土も部分的に含む。
鉄分・マンガン多い
（黄灰色シルト粘土　5Y 4/1 粘質をもち、鉄分重下）
15 層　灰色粘質土 5Y 4/1　少し粗砂混じり。
粘性が強く、しまりがある。鉄分を含む。
16 層　黄灰色シルト 2.5Y 4/1　VIII層よりしまりがなく、サラサラ。
質はほぼVIII層と等しいが鉄分の混じりが異なる（茶の細い鉄分重下）

VIII下層　オリーブ黒色粘土　7.5Y 2/2 暗青灰色粘土・シルトを含む。
IX層　オリーブ黒色粘土　7.5Y 3/1 上層部はシルトが強く、下層部は粘土。
（灰色粘土　5Y 4/1　しまりがあり、鉄分重下）

図 26　VIII層　基本土層図２（南西壁）（1/40）

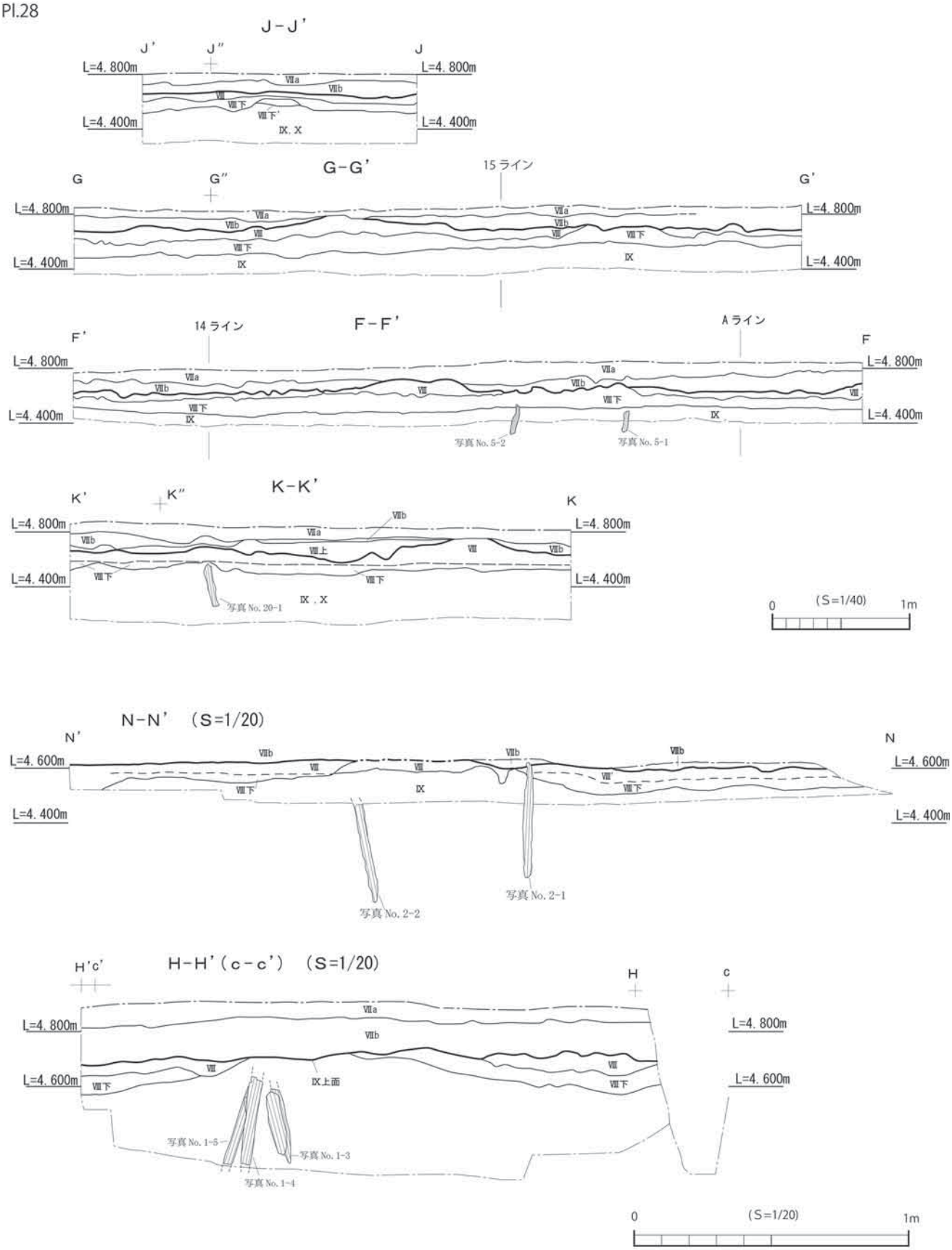






VIa 層　（淡）灰色シルト　10Y 6/1　やや青みあり。
　　鉄分・白色粒。淡灰色細砂を含む。
VIb 層　灰色シルト　10Y 5/1　やや砂質が強い。
VIc 層　灰色粘質土　7.5Y 5/1　砂粒を多く含む。
　　マンガン・鉄分が多い
VIIa 層　灰色粘質土　7.5Y 6/1　砂粒を顕著に含む。
　　（東側より砂質土混じり）
VIIb 層　灰色粘土　10Y 5/1　砂質を含む。
VIII層　灰色粘土　10Y 4/1　砂質土も部分的に含む。
　　鉄分・マンガン多い
　　（オリーブ黒　5Y 3/1
　　土質もしまりがなく、乾くとボロボロに崩れる）
VIII下層　オリーブ黒色粘土　7.5Y 2/2　暗青灰色粘土。
　　暗青灰色シルトを含む。
VIIIb 層　オリーブ黒色シルト　5Y 3/2　VIII下層と比べ、粘土が強く鉄分が混じらない。
　　細砂がまだら。
IX層　オリーブ黒色粘土　7.5Y 3/1
　　上層部はシルトが強く、下層部は粘土。
　　（オリーブ黒　5Y 3/1 土質もしまりがなく、乾くとボロボロに崩れる）
X層　オリーブ黒色粘土　7.5Y 3/1

図 27　VIII層　基本土層図 3　（北東壁）（1/40）



VIIa層　灰色粘質土　7.5Y 6/1　砂粒を顕著に含む。
VIIb層　灰色粘土　10Y 5/1　砂質を含む。

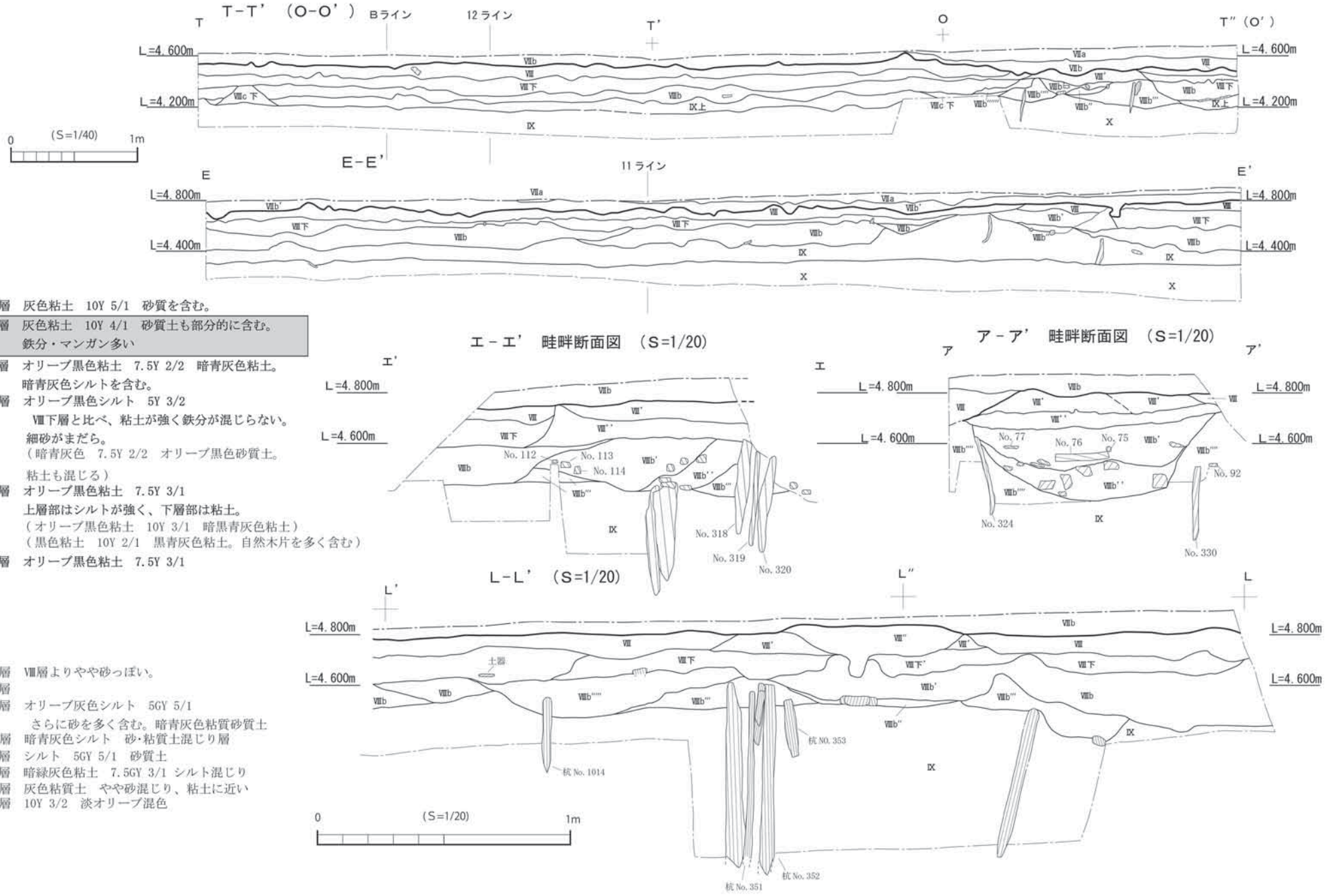
VIII層上層

VIII層	灰色粘土　10Y 4/1　砂質土も部分的に含む。 鉄分・マンガン多い

VIII層下層　オリーブ黒色粘土　7.5Y 2/2　暗青灰色粘土。
暗青灰色シルトを含む。

VIII層下'層
IX層　オリーブ黒色粘土　7.5Y 3/1
上層部はシルトが強く、下層部は粘土。
X層　オリーブ黒色粘土　7.5Y 3/1

図28　VIII層　畦畔　(関連) 断面図 1　(1/40) (1/20)



VIIb 層　灰色粘土　10Y 5/1　砂質を含む。

VIII層　灰色粘土　10Y 4/1　砂質土も部分的に含む。
鉄分・マンガン多い

VIII下層　オリーブ黒色粘土　7.5Y 2/2　暗青灰色粘土。
暗青灰色シルトを含む。

VIIIb 層　オリーブ黒色シルト　5Y 3/2
VIII下層と比べ、粘土が強く鉄分が混じらない。
細砂がまだら。
（暗青灰色　7.5Y 2/2　オリーブ黒色砂質土。
粘土も混じる）

IX層　オリーブ黒色粘土　7.5Y 3/1
上層部はシルトが強く、下層部は粘土。
（オリーブ黒色粘土　10Y 3/1　暗黒青灰色粘土）
（黒色粘土　10Y 2/1　黒青灰色粘土。自然木片を多く含む）

X層　オリーブ黒色粘土　7.5Y 3/1

VIII' 層　VIII層よりやや砂っぽい。

VIII'' 層

VIIIb' 層　オリーブ灰色シルト　5GY 5/1
さらに砂を多く含む。暗青灰色粘質砂質土

VIIIb'''' 層　暗青灰色シルト　砂・粘質土混じり層

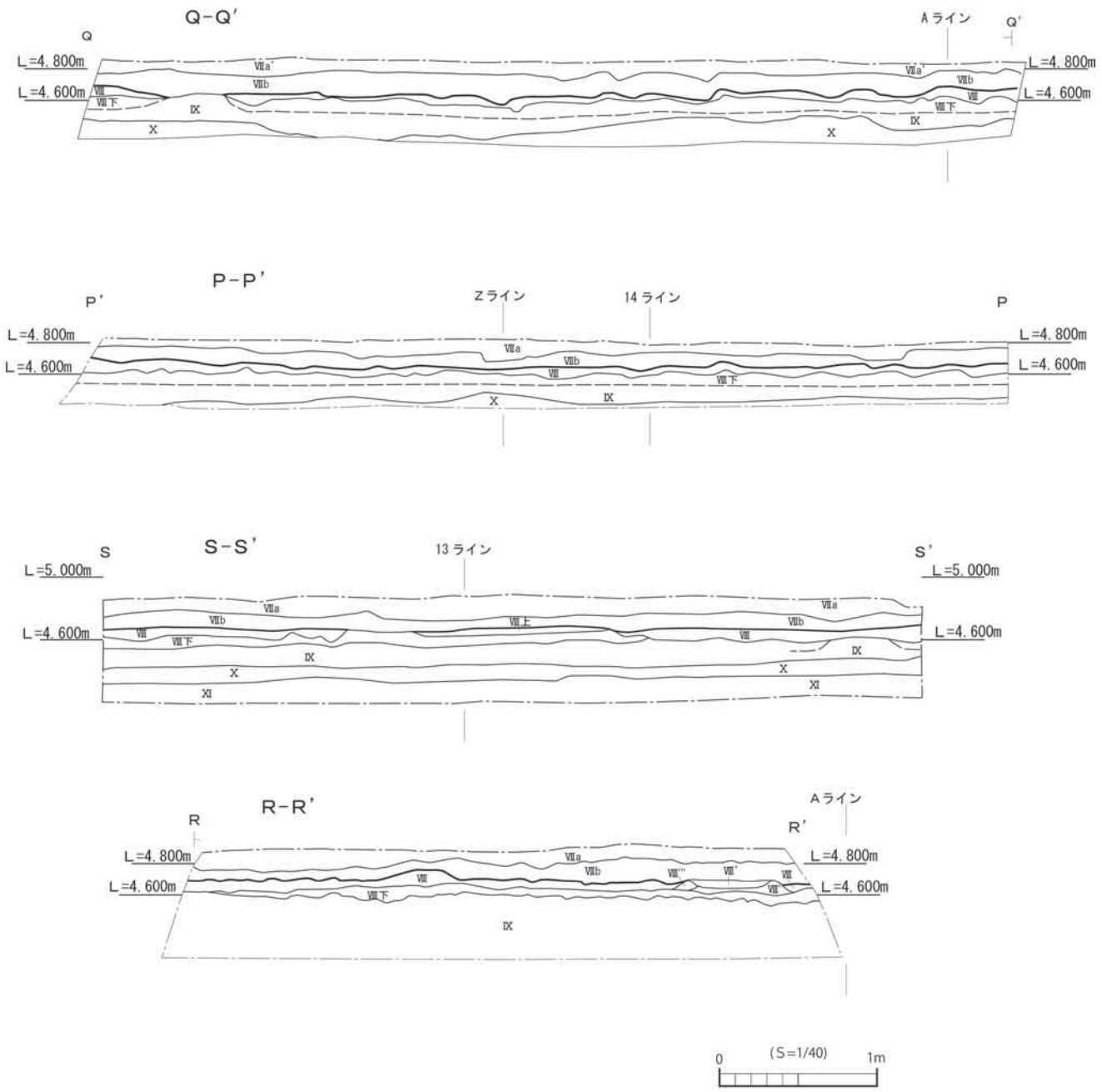
VIIIb'' 層　シルト　5GY 5/1　砂質土

VIIIb''' 層　暗緑灰色粘土　7.5GY 3/1 シルト混じり

VIIIb''''' 層　灰色粘質土　やや砂混じり、粘土に近い

IX層上層　10Y 3/2　淡オリーブ混色

図 29　VIII層　畦畔　（関連）断面図 2　（1/40）（1/20）



VIIa層　灰色粘質土　7.5Y 6/1　砂粒を顕著に含む。
VIIb層　灰色粘土　10Y 5/1　砂質を含む。

VIII層上層
VIII層　灰色粘土　10Y 4/1　砂質土も部分的に含む。
鉄分・マンガン多い

VIII'層　VIII層よりやや砂っぽい。
VIII''層

VIII下層　オリーブ黒色粘土　7.5Y 2/2　暗青灰色粘土。
暗青灰色シルトを含む。
VIIIb層　オリーブ黒色シルト　5Y 3/2　VIII下層と比べ、粘土が強く鉄分が混じらない。
細砂がまだら。
IX層　オリーブ黒色粘土　7.5Y 3/1
上層部はシルトが強く、下層部は粘土。

図30　VIII層　畦畔（関連）断面図 3　(1/40)

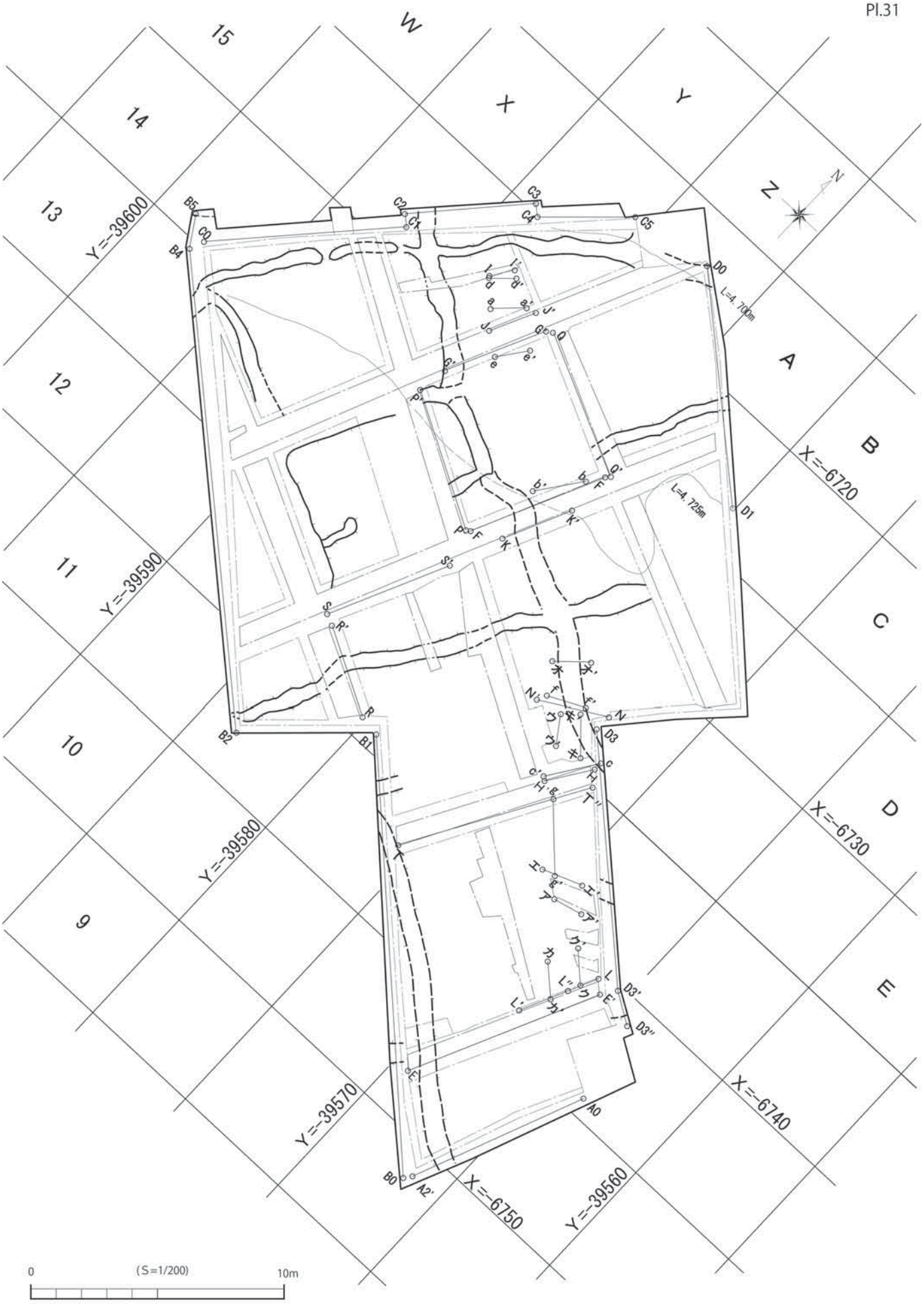
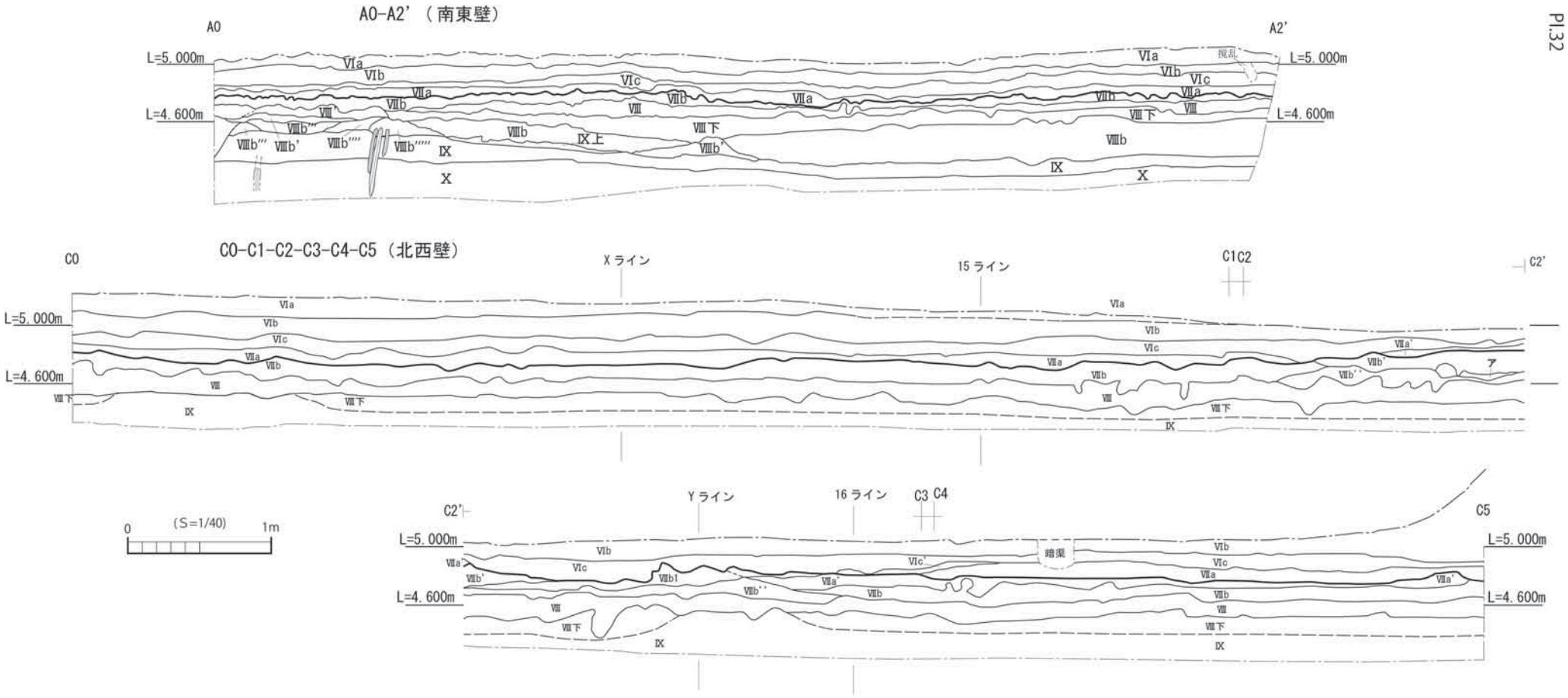


図 31　VIIb 層　遺構平面図 (畦畔ほか)　(1/200)



VIa 層　（淡）灰色シルト　10Y 6/1　やや青みあり。
鉄分･白色粒･淡灰色細砂を含む。

VIb 層　灰色シルト　10Y 5/1　やや砂質土多い。

VIc 層　灰色粘質土　7.5Y 5/1　砂粒を多く含む。
マンガン・鉄分が多い

VIc' 層

VIIa 層　灰色粘質土　7.5Y 6/1　砂粒を顕著に含む。

VIIa' 層

VIIb 層　灰色粘土　10Y 5/1　砂質を含む。

VIIb' 層　灰色粗砂　白色･灰色砂混。

VIIb1 層　灰色シルト　橙色･白色粗砂混じり

VIIb'' 層　灰色粗砂混シルト
VIII層の上に堆積した流路の氾濫

VIII層　灰色粘土　10Y 4/1　砂質土も部分的に含む。
鉄分・マンガン多い

VIII下層　オリーブ黒色粘土　7.5Y 2/2　暗青灰色粘土。
暗青灰色シルトを含む。

VIIIb 層　オリーブ黒色シルト　5Y 3/2
VIII下層と比べ、粘土が強く鉄分が混じらない。
細砂がまだら。

IX層　オリーブ黒色粘土　7.5Y 3/1
上層部はシルトが強く、下層部は粘土。

X層　オリーブ黒色粘土　7.5Y 3/1

VIII' 層　VIII層よりやや砂っぽい。

VIIIb' 層　オリーブ灰色シルト
5GY 5/1　さらに砂を多く含む
暗青灰色粘質砂質土

VIIIb'' 層　シルト　5GY 5/1　砂質土

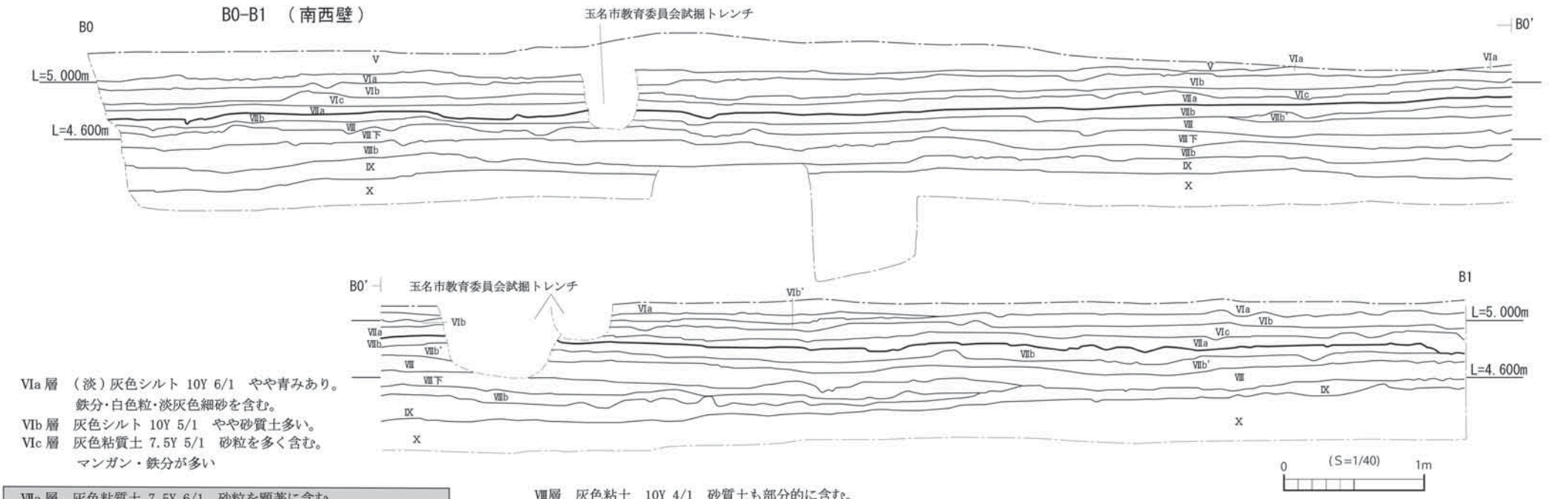
VIIIb''' 層　暗緑灰色粘土　7.5GY 3/1
シルト混じり

VIIIb'''' 層　灰色粘質土　やや砂混じり
粘土に近い

VIIIb''''' 層　暗青灰色シルト　砂、粘質混じり層

IX層　10Y 3/2　淡オリーブ混色

図 32　VIIb 層　基本土層図 1（南東・北西壁）（1/40）



VIa 層 （淡）灰色シルト 10Y 6/1 やや青みあり。
鉄分・白色粒・淡灰色細砂を含む。
VIb 層 灰色シルト 10Y 5/1 やや砂質土多い。
VIc 層 灰色粘質土 7.5Y 5/1 砂粒を多く含む。
マンガン・鉄分が多い

VIIa 層 灰色粘質土 7.5Y 6/1 砂粒を顕著に含む。
（粗砂が帯状堆積。下層部は鉄分が含まれる。）
VIIb 層 灰色粘土 10Y 5/1 砂質を含む。
（灰色 5Y 4/1 粘性があり、粗砂が多く混じる。
しまりがなく、鉄分が混じる）
VIIb' 層 灰色粘質土 7.5Y 6/1 砂粒がVIIa 層より細かい。
14 層 灰色シルト 5T 4/1 鉄分が混じる。わずかに粗砂を含む。

VIII層 灰色粘土 10Y 4/1 砂質土も部分的に含む。
鉄分・マンガン多い
（黄灰色シルト粘土 5Y 4/1 粘質をもち、鉄分重下）
15 層 灰色粘質土 5Y 4/1 少し粗砂混じり。
粘性が強く、しまりがある。鉄分を含む。
16 層 黄灰色シルト 2.5Y 4/1 VIII層よりしまりがなく、サラサラ。
質はほぼVIII層と等しいが鉄分の混じりが異なる（茶の細い鉄分重下）

VIII下層 オリーブ黒色粘土 7.5Y 2/2 暗青灰色粘土・シルトを含む。
IX層 オリーブ黒色粘土 7.5Y 3/1 上層部はシルトが強く、下層部は粘土。
（灰色粘土 5Y 4/1 しまりがあり、鉄分重下）

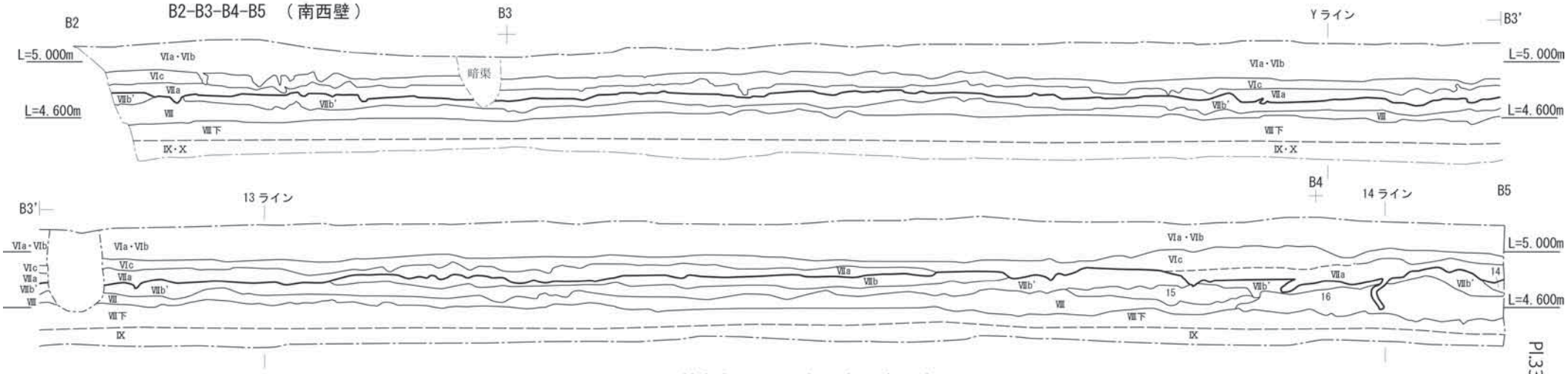
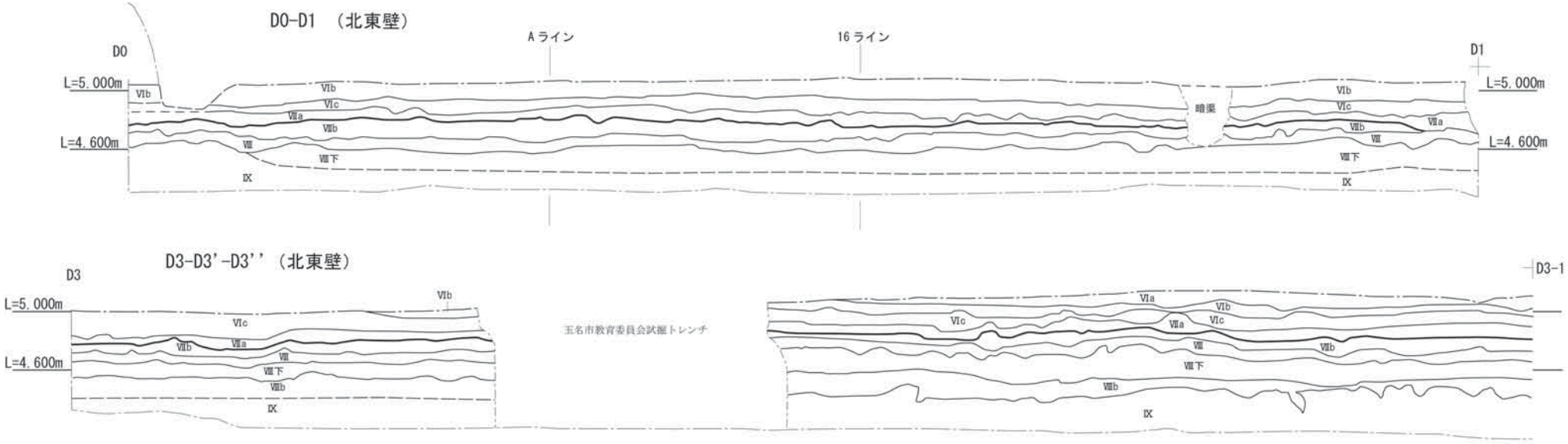
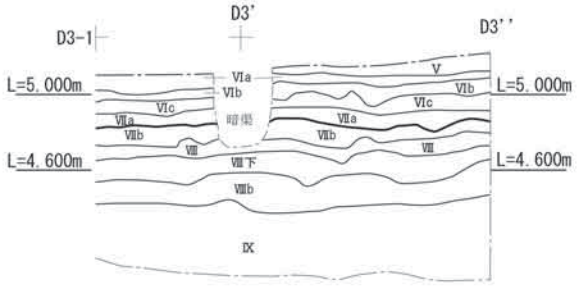
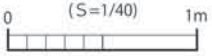


図 33 VIIb 層 基本土層図 2（南西壁）（1/40）







VIa 層　（淡）灰色シルト　10Y 6/1　やや青みあり。
鉄分・白色粒。淡灰色細砂を含む。

VIb 層　灰色シルト　10Y 5/1　やや砂質が強い。

VIc 層　灰色粘質土　7.5Y 5/1　砂粒を多く含む。
マンガン・鉄分が多い

VIIa 層　灰色粘質土　7.5Y 6/1　砂粒を顕著に含む。
（東側より砂質土混じり）

VIIb 層　灰色粘土　10Y 5/1　砂質を含む。

VII層　灰色粘土　10Y 4/1　砂質土も部分的に含む。
鉄分・マンガン多い
（オリーブ黒　5Y 3/1
土質もしまりがなく、乾くとボロボロに崩れる）

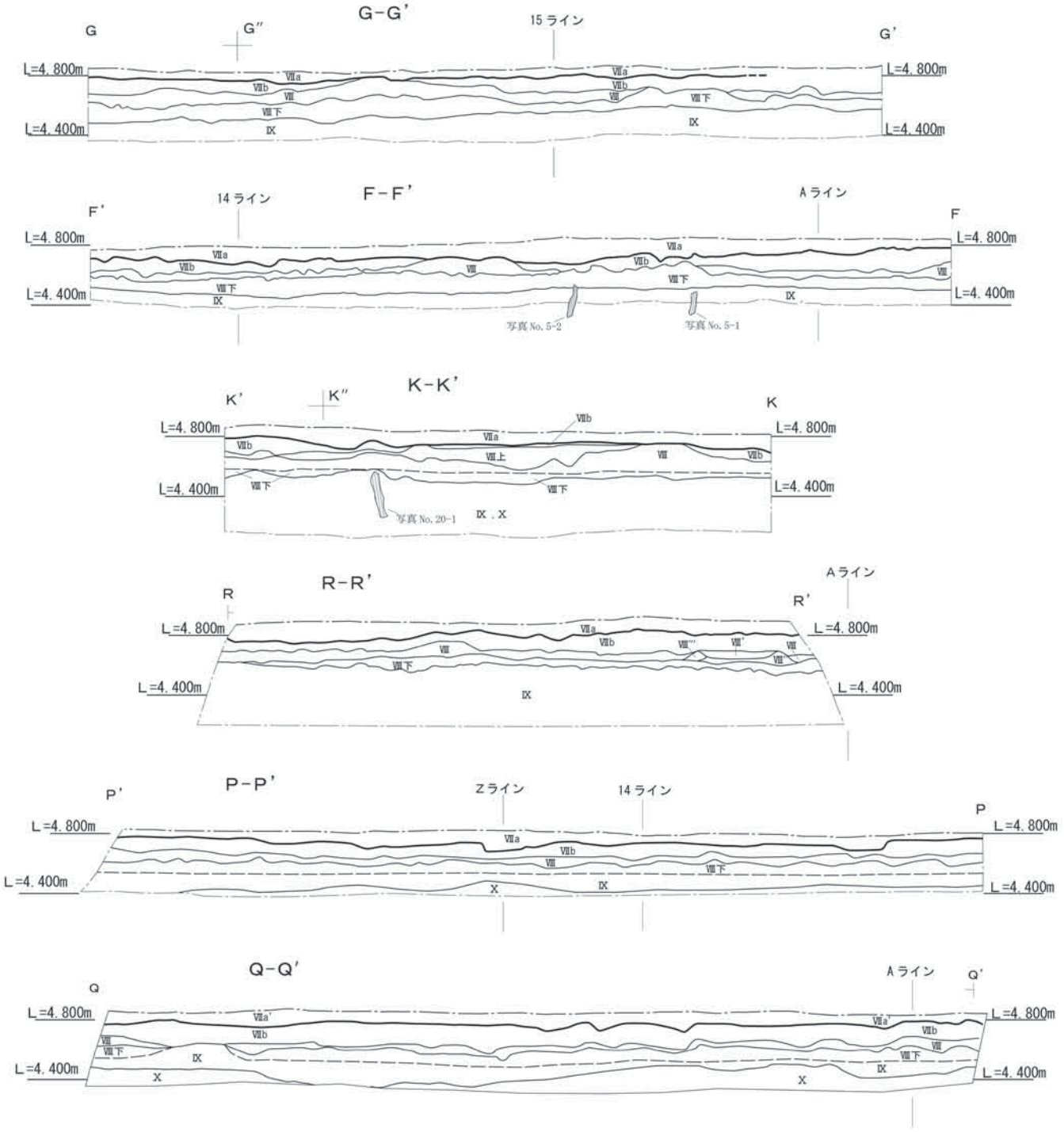
VII下層　オリーブ黒色粘土　7.5Y 2/2　暗青灰色粘土。
暗青灰色シルトを含む。

VIIb 層　オリーブ黒色シルト　5Y 3/2　VII下層と比べ、粘土が強く鉄分が混じらない。
細砂がまだら。

IX層　オリーブ黒色粘土　7.5Y 3/1
上層部はシルトが強く、下層部は粘土。
（オリーブ黒　5Y 3/1 土質もしまりがなく、乾くとボロボロに崩れる）

X層　オリーブ黒色粘土　7.5Y 3/1

図 34　VIIb 層　基本土層図 3　（北東壁）（1/40）



VIIa 層　灰色粘質土　7.5Y 6/1　砂粒を顕著に含む。

VIIb 層　灰色粘土　10Y 5/1　砂質を含む。
VIII層上層

VIII層　灰色粘土　10Y 4/1　砂質土も部分的に含む。
鉄分・マンガン多い

VIII' 層　VIII層よりやや砂っぽい。
VIII'' 層

VIII下層　オリーブ黒色粘土　7.5Y 2/2　暗青灰色粘土。
暗青灰色シルトを含む。

VIIIb 層　オリーブ黒色シルト　5Y 3/2　VIII下層と比べ、粘土が強く鉄分が混じらない。
細砂がまだら。

IX層　オリーブ黒色粘土　7.5Y 3/1
上層部はシルトが強く、下層部は粘土。

X層　オリーブ黒色粘土　7.5Y 3/1

0　(S=1/40)　1m

図 35　VIIb 層　畦畔　（関連）断面図 1　(1/40)

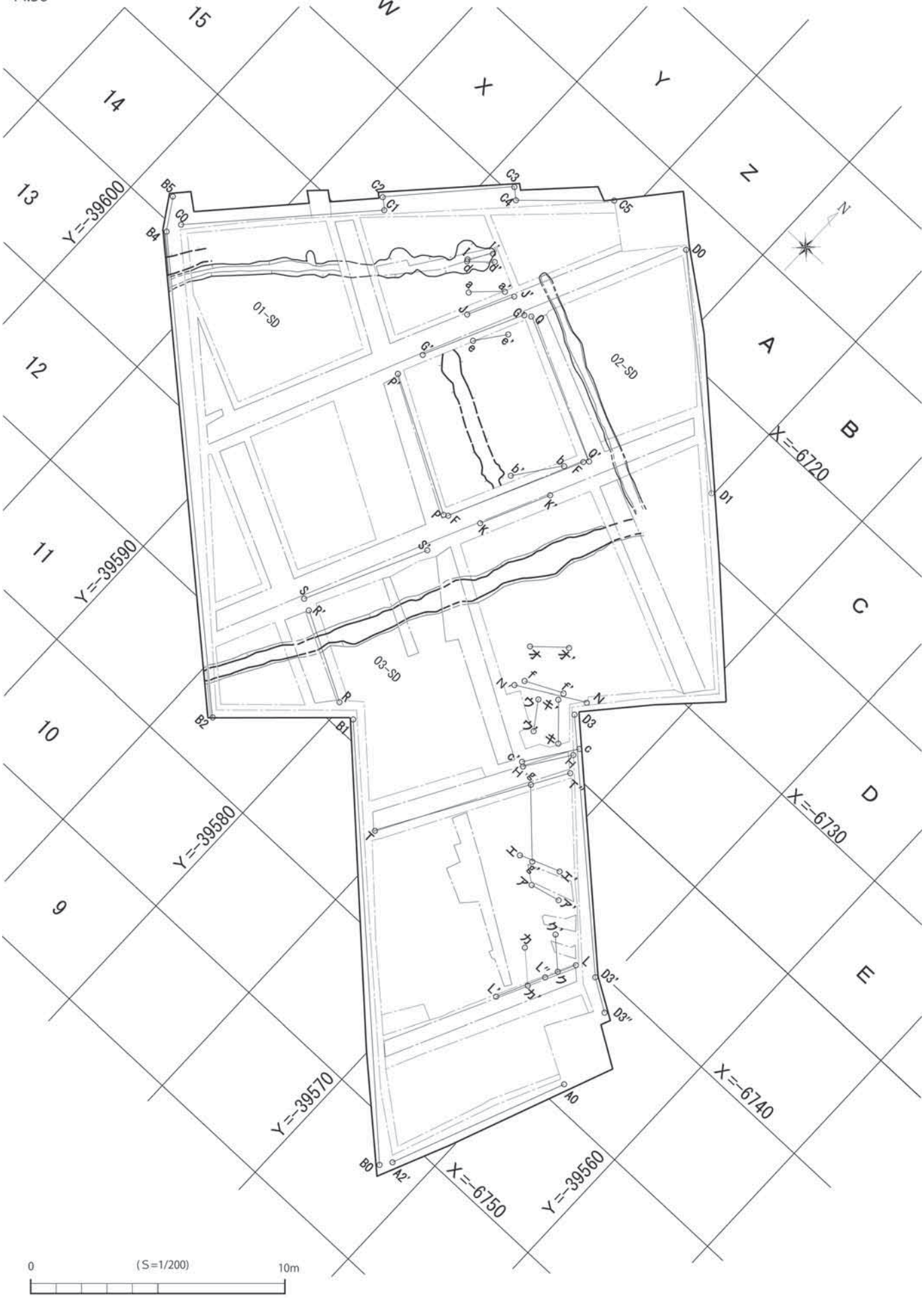
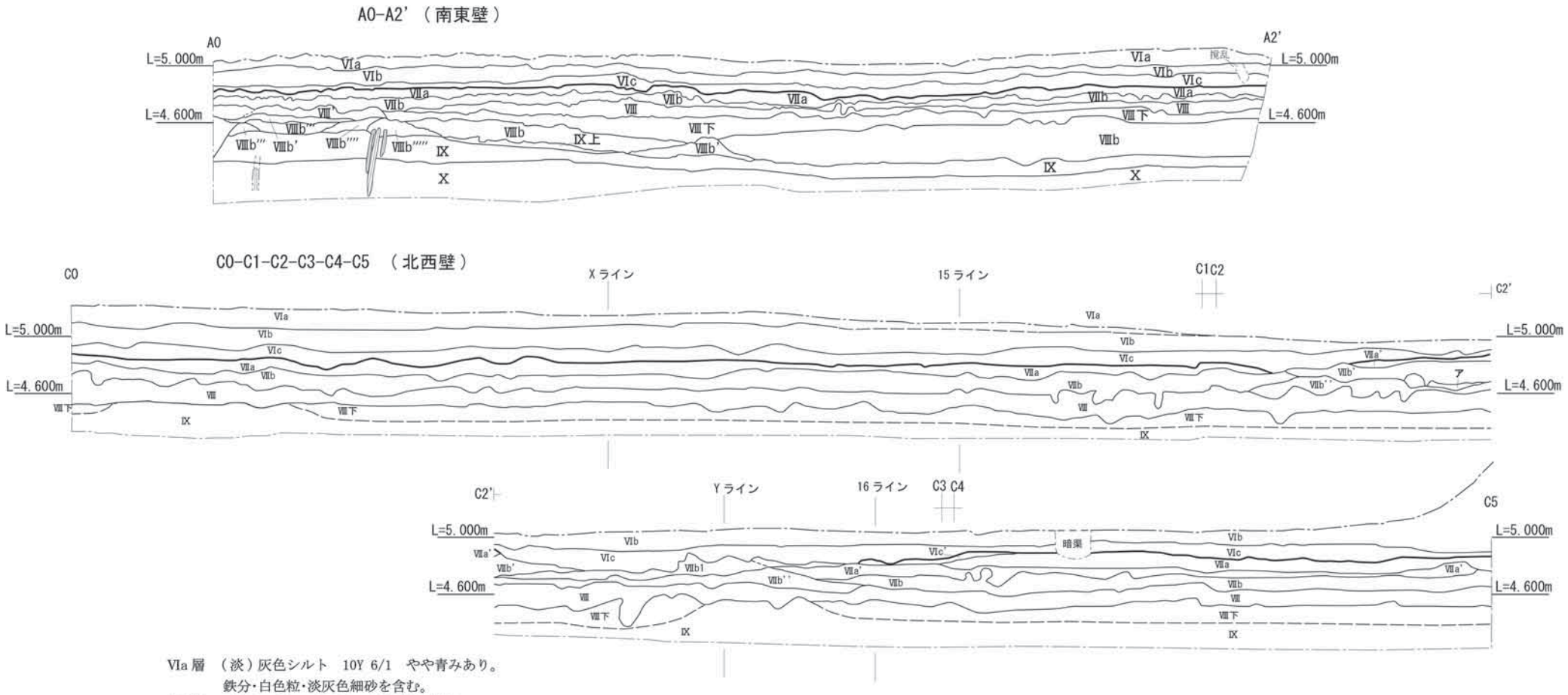


図 36　VIIa 層　遺構平面図 (畦畔ほか)　(1/200)



VIa 層　（淡）灰色シルト　10Y 6/1　やや青みあり。
鉄分・白色粒・淡灰色細砂を含む。

VIb 層　灰色シルト　10Y 5/1　やや砂質土多い。

VIc 層　灰色粘質土　7.5Y 5/1　砂粒を多く含む。
マンガン・鉄分が多い

VIc' 層

VIIa 層　灰色粘質土　7.5Y 6/1　砂粒を顕著に含む。

VIIa' 層

VIIb 層　灰色粘土　10Y 5/1　砂質を含む。

VIIb' 層　灰色粗砂　白色・灰色砂混。

VIIb1 層　灰色シルト　橙色・白色粗砂混じり

VIIb'' 層　灰色粗砂混シルト
VIII層の上に堆積した流路の氾濫

VIII層　灰色粘土　10Y 4/1　砂質土も部分的に含む。
鉄分・マンガン多い

VIII下層　オリーブ黒色粘土　7.5Y 2/2　暗青灰色粘土。
暗青灰色シルトを含む。

VIIIb 層　オリーブ黒色シルト　5Y 3/2
VIII下層と比べ、粘土が強く鉄分が混じらない。
細砂がまだら。

IX層　オリーブ黒色粘土　7.5Y 3/1
上層部はシルトが強く、下層部は粘土。

X層　オリーブ黒色粘土　7.5Y 3/1

VIII' 層　VIII層よりやや砂っぽい。

VIIIb' 層　オリーブ灰色シルト
5GY 5/1　さらに砂を多く含む
暗青灰色粘質砂質土

VIIIb'' 層　シルト　5GY 5/1　砂質土

VIIIb''' 層　暗緑灰色粘土　7.5GY 3/1
シルト混じり

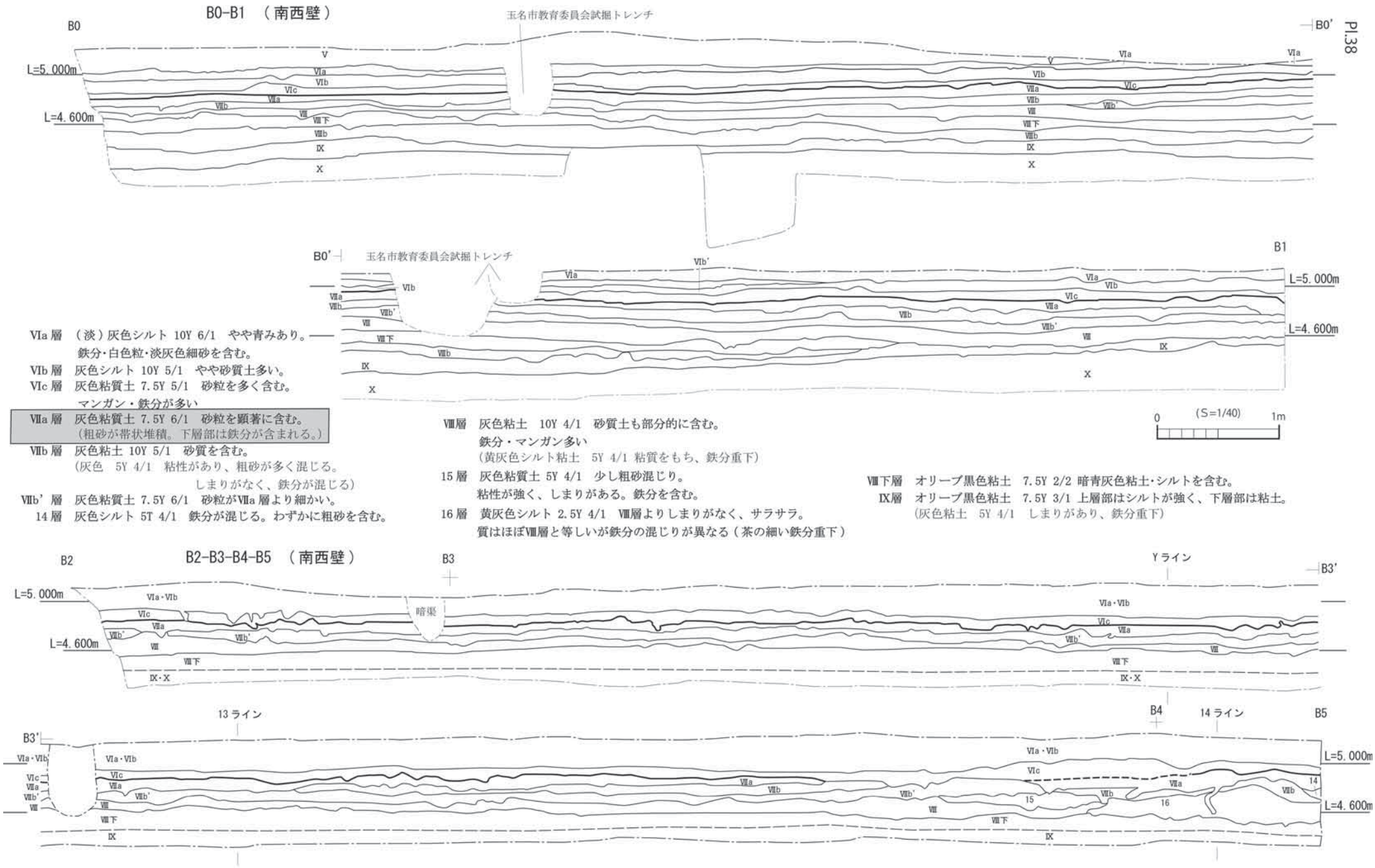
VIIIb'''' 層　灰色粘質土　やや砂混じり
粘土に近い

VIIIb''''' 層　暗青灰色シルト　砂、粘質混じり層

IX層　10Y 3/2　淡オリーブ混色

0　(S=1/40)　1m

図 37　VIIa 層　基本土層図 1（南東・北西壁）（1/40）



VIa 層　（淡）灰色シルト 10Y 6/1　やや青みあり。
鉄分・白色粒・淡灰色細砂を含む。

VIb 層　灰色シルト 10Y 5/1　やや砂質土多い。

VIc 層　灰色粘質土 7.5Y 5/1　砂粒を多く含む。
マンガン・鉄分が多い

VIIa 層　灰色粘質土 7.5Y 6/1　砂粒を顕著に含む。
（粗砂が帯状堆積。下層部は鉄分が含まれる。）

VIIb 層　灰色粘土 10Y 5/1　砂質を含む。
（灰色　5Y 4/1　粘性があり、粗砂が多く混じる。
しまりがなく、鉄分が混じる）

VIIb' 層　灰色粘質土 7.5Y 6/1　砂粒がVIIa 層より細かい。

14 層　灰色シルト 5T 4/1　鉄分が混じる。わずかに粗砂を含む。

VIII層　灰色粘土　10Y 4/1　砂質土も部分的に含む。
鉄分・マンガン多い
（黄灰色シルト粘土　5Y 4/1 粘質をもち、鉄分重下）

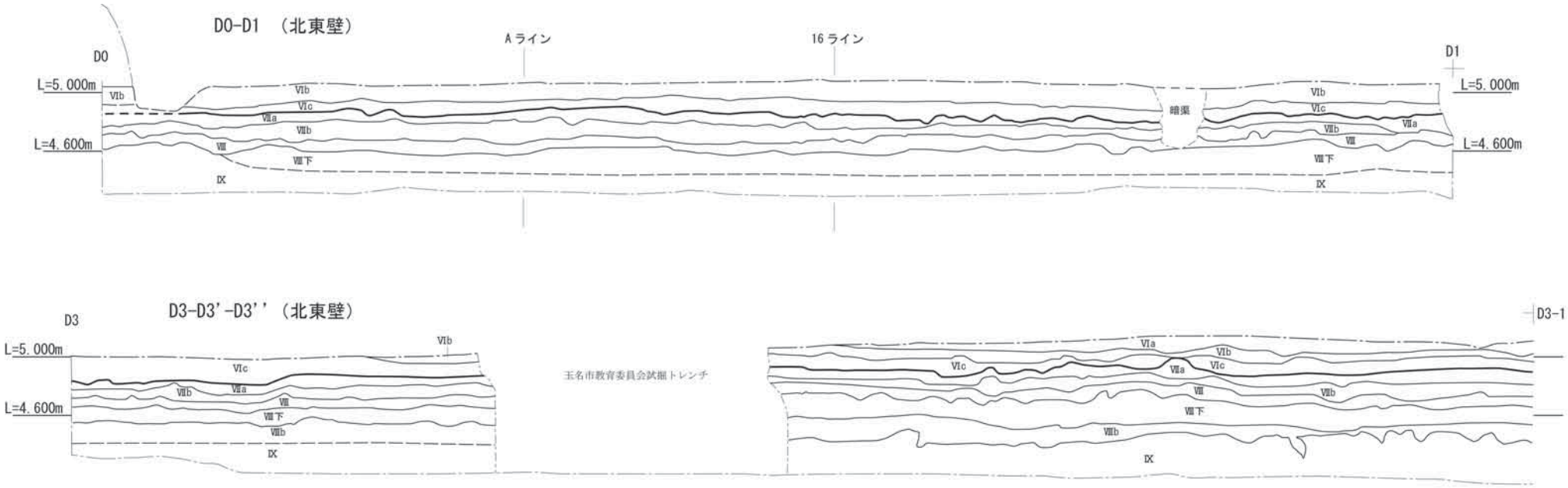
15 層　灰色粘質土 5Y 4/1　少し粗砂混じり。
粘性が強く、しまりがある。鉄分を含む。

16 層　黄灰色シルト 2.5Y 4/1　VIII層よりしまりがなく、サラサラ。
質はほぼVIII層と等しいが鉄分の混じりが異なる（茶の細い鉄分重下）

VIII下層　オリーブ黒色粘土　7.5Y 2/2 暗青灰色粘土・シルトを含む。

IX層　オリーブ黒色粘土　7.5Y 3/1 上層部はシルトが強く、下層部は粘土。
（灰色粘土　5Y 4/1　しまりがあり、鉄分重下）

図 38　VIIa 層　基本土層図 2（南西壁）（1/40）



VIa 層　（淡）灰色シルト　10Y 6/1　やや青みあり。
鉄分・白色粒。淡灰色細砂を含む。

VIb 層　灰色シルト　10Y 5/1　やや砂質が強い。

VIc 層　灰色粘質土　7.5Y 5/1　砂粒を多く含む。
マンガン・鉄分が多い

VIIa 層　灰色粘質土　7.5Y 6/1　砂粒を顕著に含む。
（東側より砂質土混じり）

VIIb 層　灰色粘土　10Y 5/1　砂質を含む。

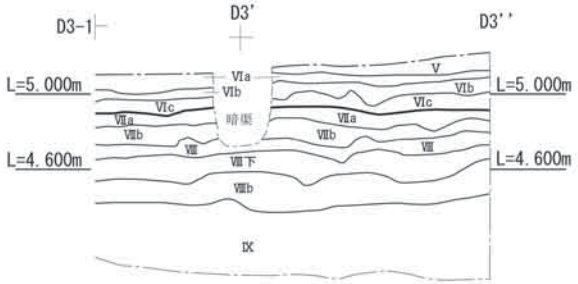
VIII層　灰色粘土　10Y 4/1　砂質土も部分的に含む。
鉄分・マンガン多い
（オリーブ黒　5Y 3/1
土質もしまりがなく、乾くとボロボロに崩れる）

VIII下層　オリーブ黒色粘土　7.5Y 2/2　暗青灰色粘土。
暗青灰色シルトを含む。

VIIIb 層　オリーブ黒色シルト　5Y 3/2　VIII下層と比べ、粘土が強く鉄分が混じらない。
細砂がまだら。

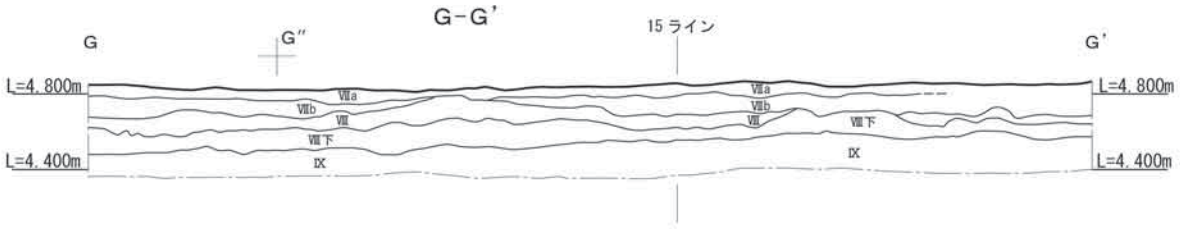
IX層　オリーブ黒色粘土　7.5Y 3/1
上層部はシルトが強く、下層部は粘土。
（オリーブ黒　5Y 3/1 土質もしまりがなく、乾くとボロボロに崩れる）

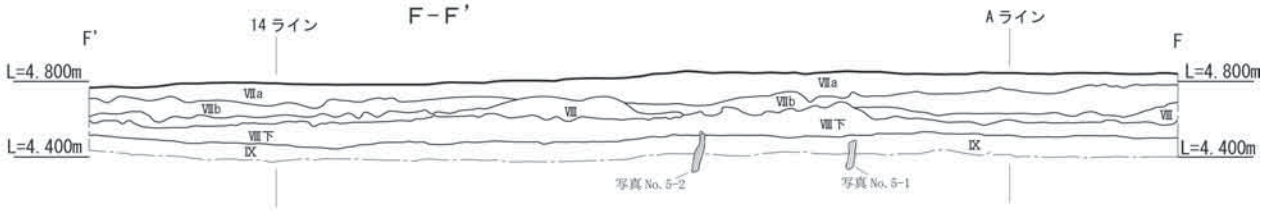
X層　オリーブ黒色粘土　7.5Y 3/1

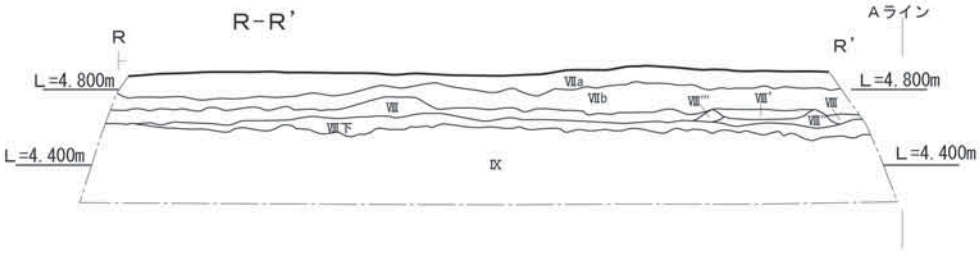


0　(S=1/40)　1m

図 39　VIIa 層　基本土層図 3　（北東壁）（1/40）







VIIa 層	灰色粘質土　7.5Y 6/1　砂粒を顕著に含む。
VIIb 層	灰色粘土　10Y 5/1　砂質を含む。
VIII層上層	
VIII層	灰色粘土　10Y 4/1　砂質土も部分的に含む。 鉄分・マンガン多い
VIII' 層	VIII層よりやや砂っぽい。
VIII'' 層	
VIII下層	オリーブ黒色粘土　7.5Y 2/2　暗青灰色粘土。 暗青灰色シルトを含む。
VIIIb 層	オリーブ黒色シルト　5Y 3/2　VIII下層と比べ、粘土が強く鉄分が混じらない。 細砂がまだら。
IX層	オリーブ黒色粘土　7.5Y 3/1 上層部はシルトが強く、下層部は粘土。
X層	オリーブ黒色粘土　7.5Y 3/1

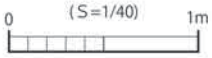


図 40　VIIa 層　畦畔　（関連）断面図 1　（1/40）

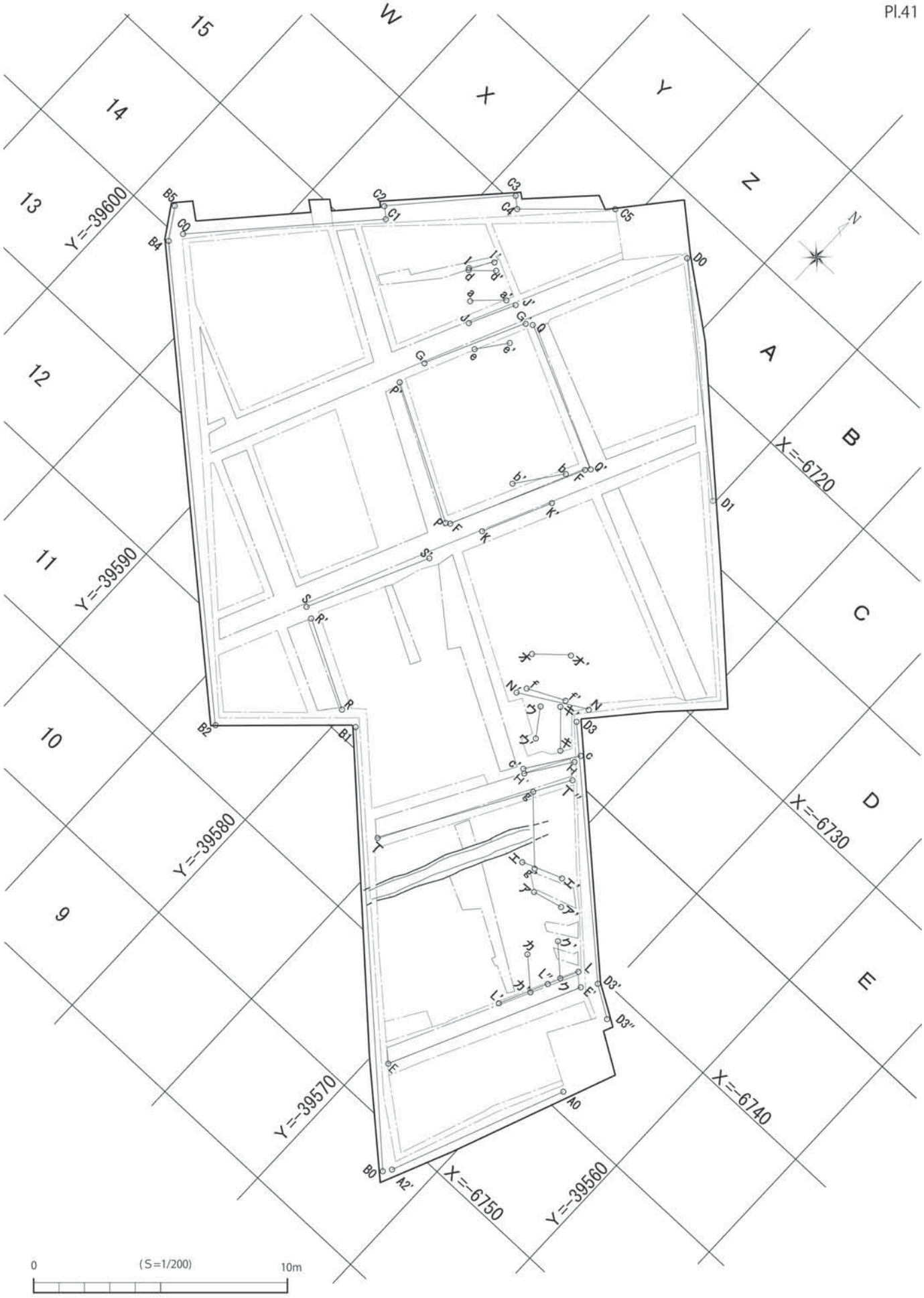
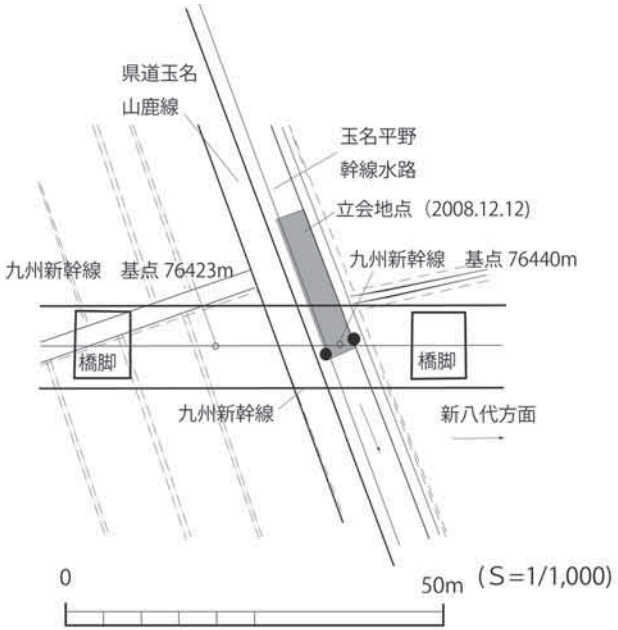
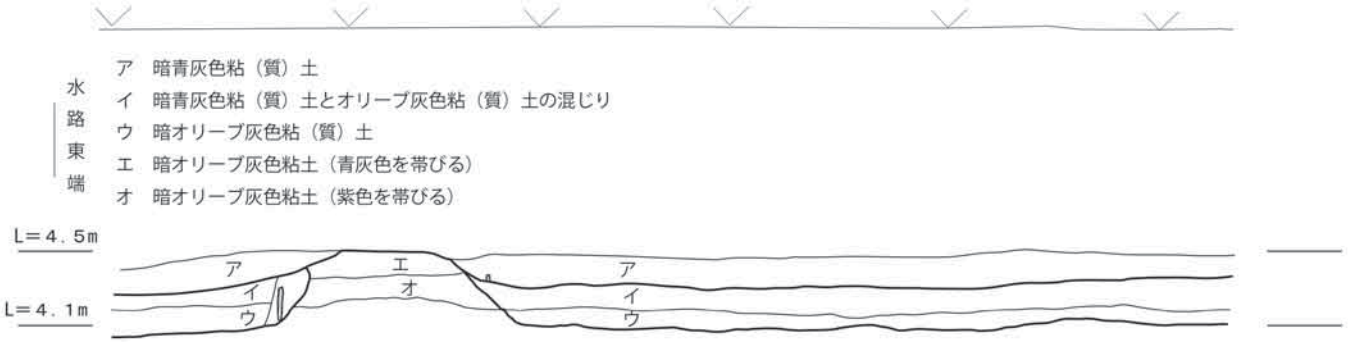
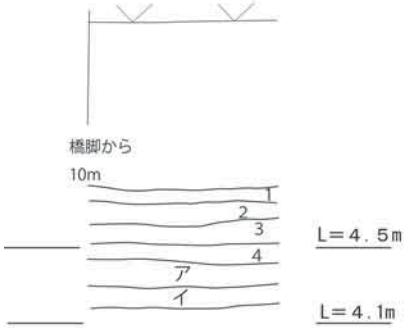


図 41　VIc 層　遺構平面図 (畦畔ほか)　(1/200)







1　暗青灰色粘（質）土（鉄分多し）
2　暗青灰色粘（質）土（褐色土混）
3　暗青灰色粘（質）土（鉄分混）
4　暗青色粘（質）土（オリーブ灰色粘土混；やや砂質）

ア　暗青灰色粘（質）土
イ　暗青灰色粘（質）土とオリーブ灰色粘（質）土の混じり
ウ　暗オリーブ灰色粘（質）土
エ　暗オリーブ灰色粘土（青灰色を帯びる）
オ　暗オリーブ灰色粘土（紫色を帯びる）

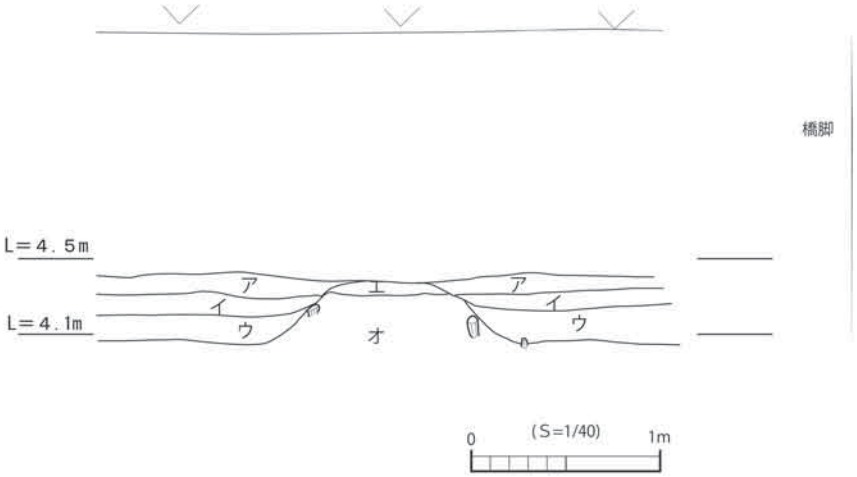


図 42　玉名平野幹線　水路立ち会い調査位置図 (1/1000)　断面図 (1/40)

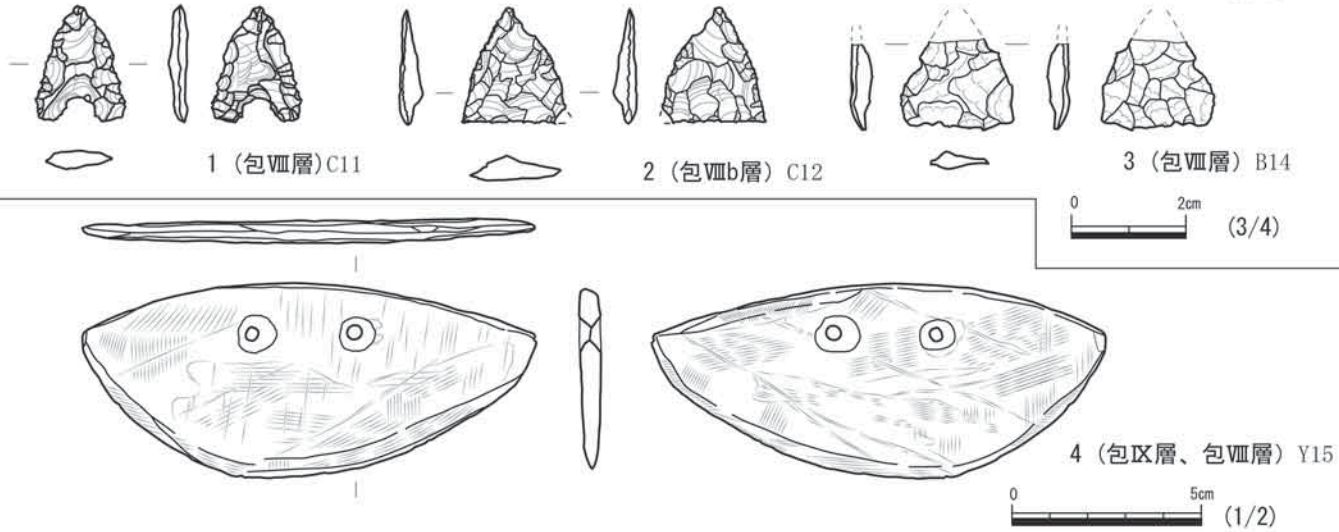


図43　包Ⅶ層・包Ⅸ層出土石器（打製石鏃 3/4 ・ 石製穂摘具 1/2）

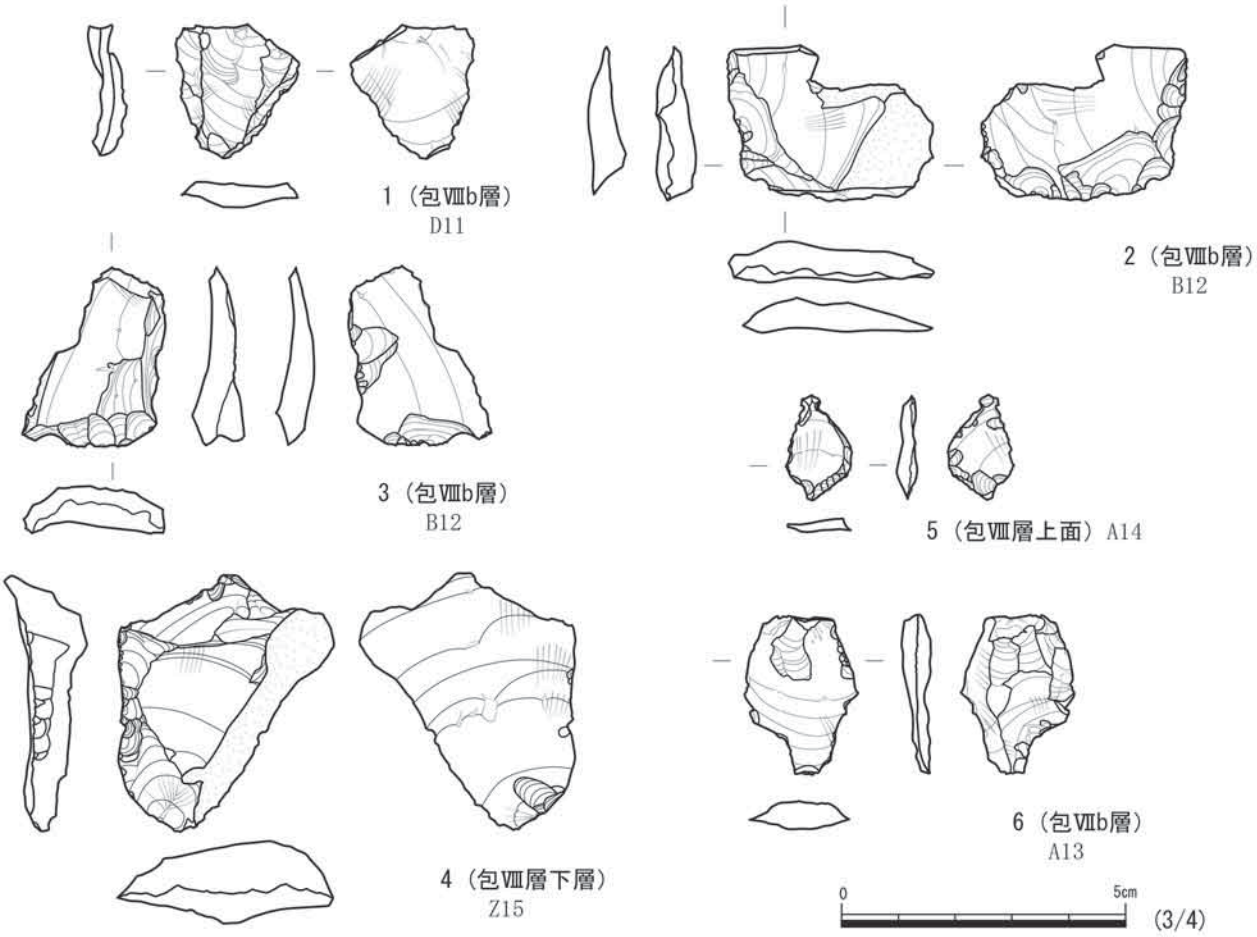


図44　包Ⅶb～包Ⅷb層出土石器（スクレイパー等 3/4）

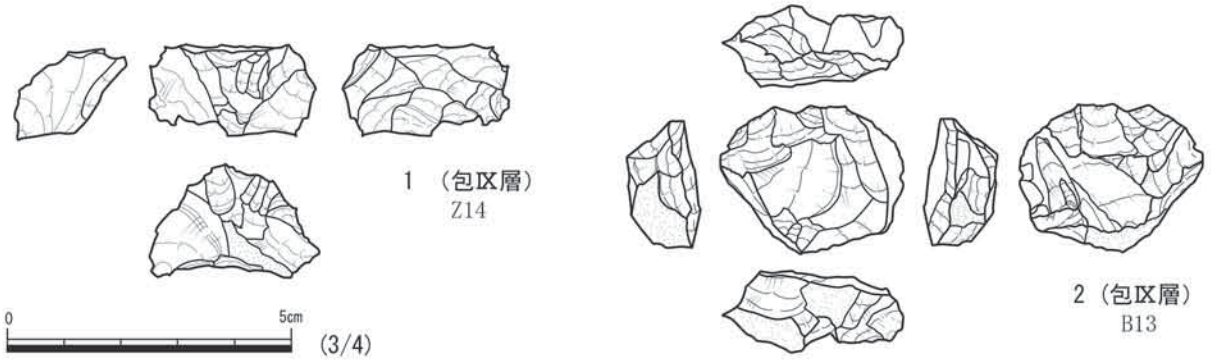


図45　包Ⅸ層出土（石核等 3/4）

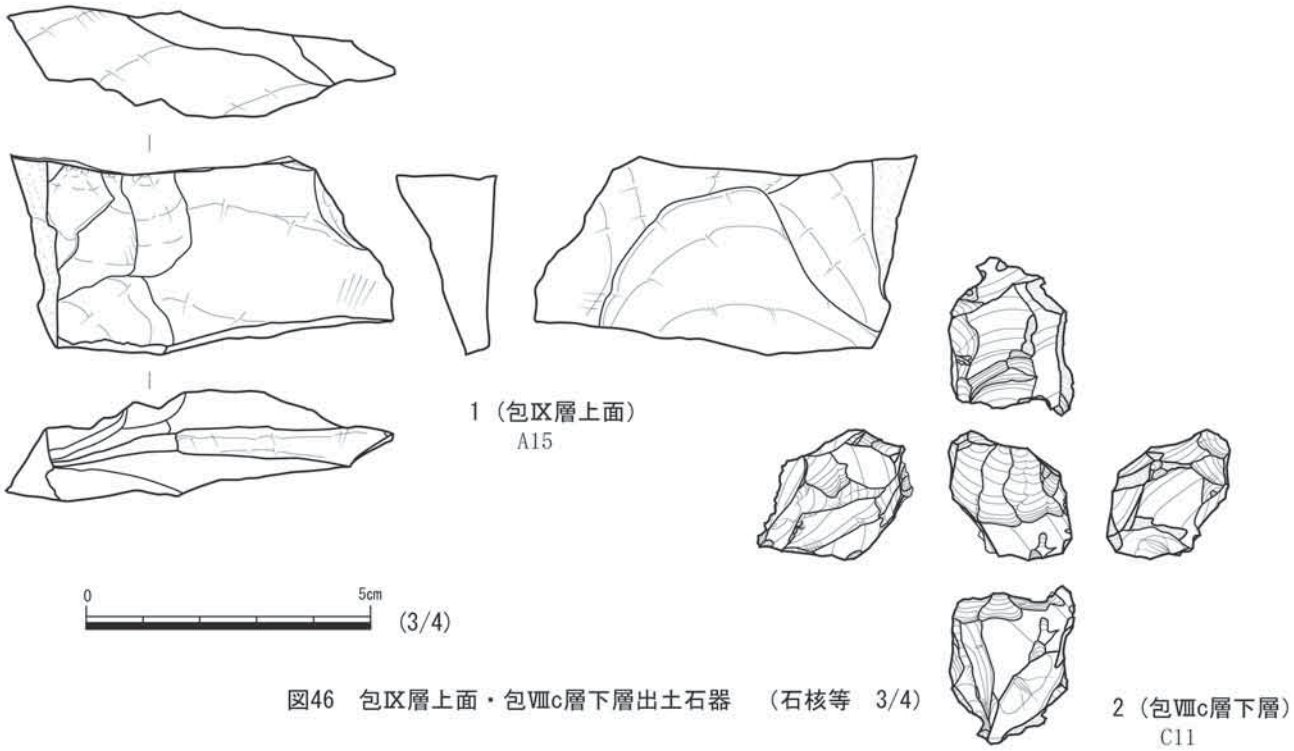


図46　包Ⅸ層上面・包Ⅷc層下層出土石器　（石核等　3/4）

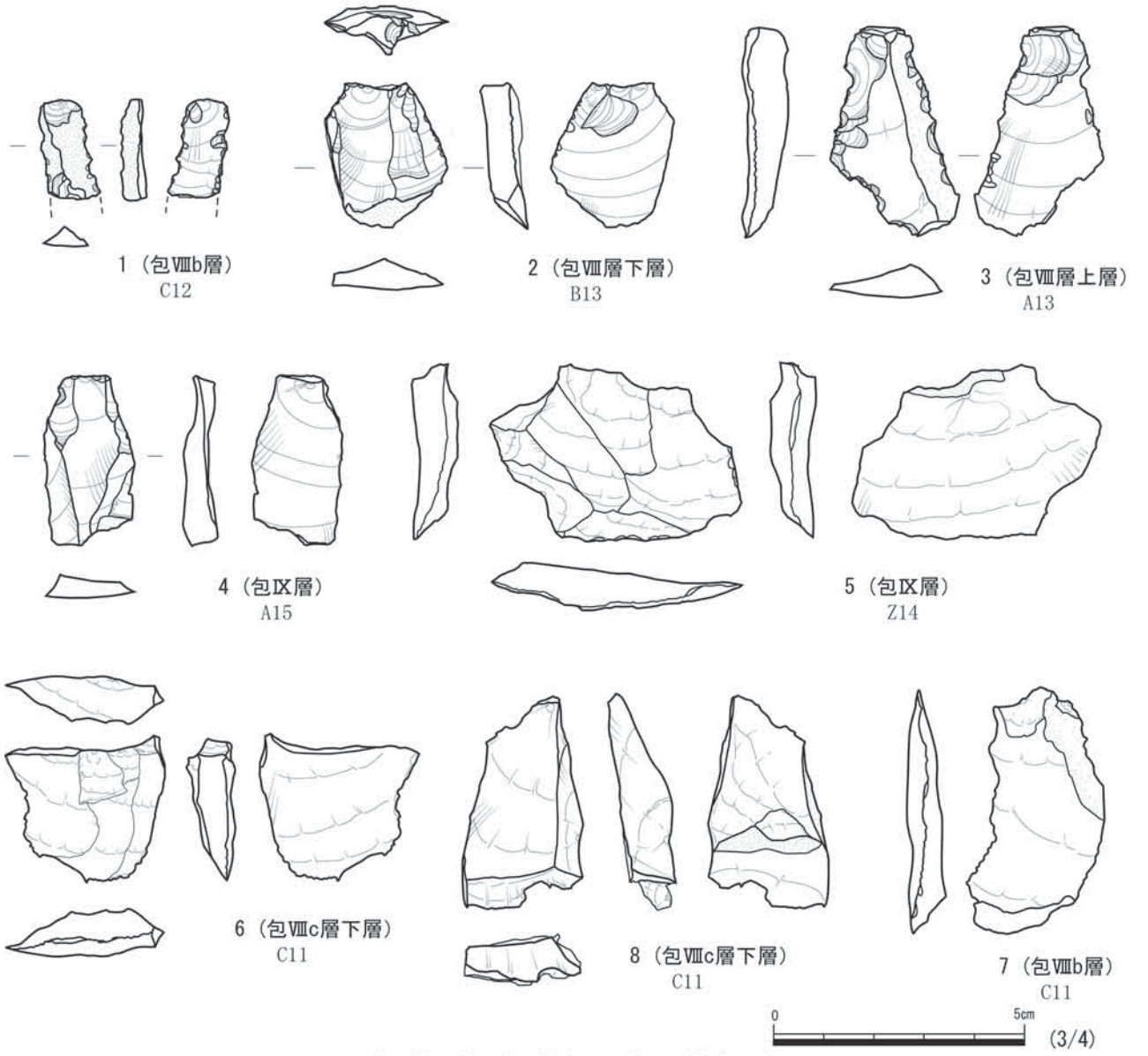


図47　包Ⅷ層上層～包Ⅸ層出土石器　（剥片　3/4）

※1～5　包X層
6～15　包IX層
9・10　包IX層上層
16・17　包XI層上面
〈　〉内グリット

1〈Y13〉
2〈B11〉
3〈A14〉
4〈A12〉
5〈Z14〉
6〈A14〉
7〈B14〉
8〈C10〉
9〈A15〉
10〈Z16〉
11〈A14〉
12〈A13〉
13〈B13〉
14〈A15〉
15〈Z15〉
16
17

図48　包含層XI層・IX層出土　縄文土器（精製土器）ほか（1/2）

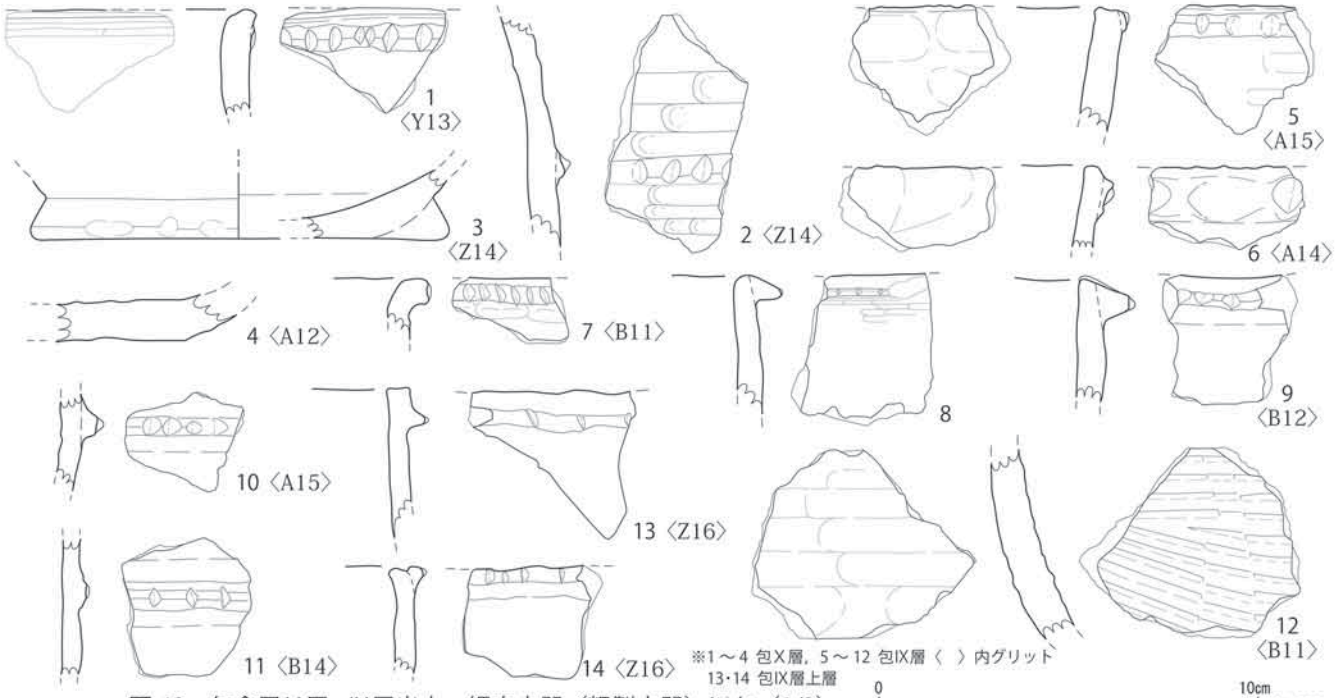


図49　包含層X層・IX層出土　縄文土器（粗製土器）ほか（1/2）

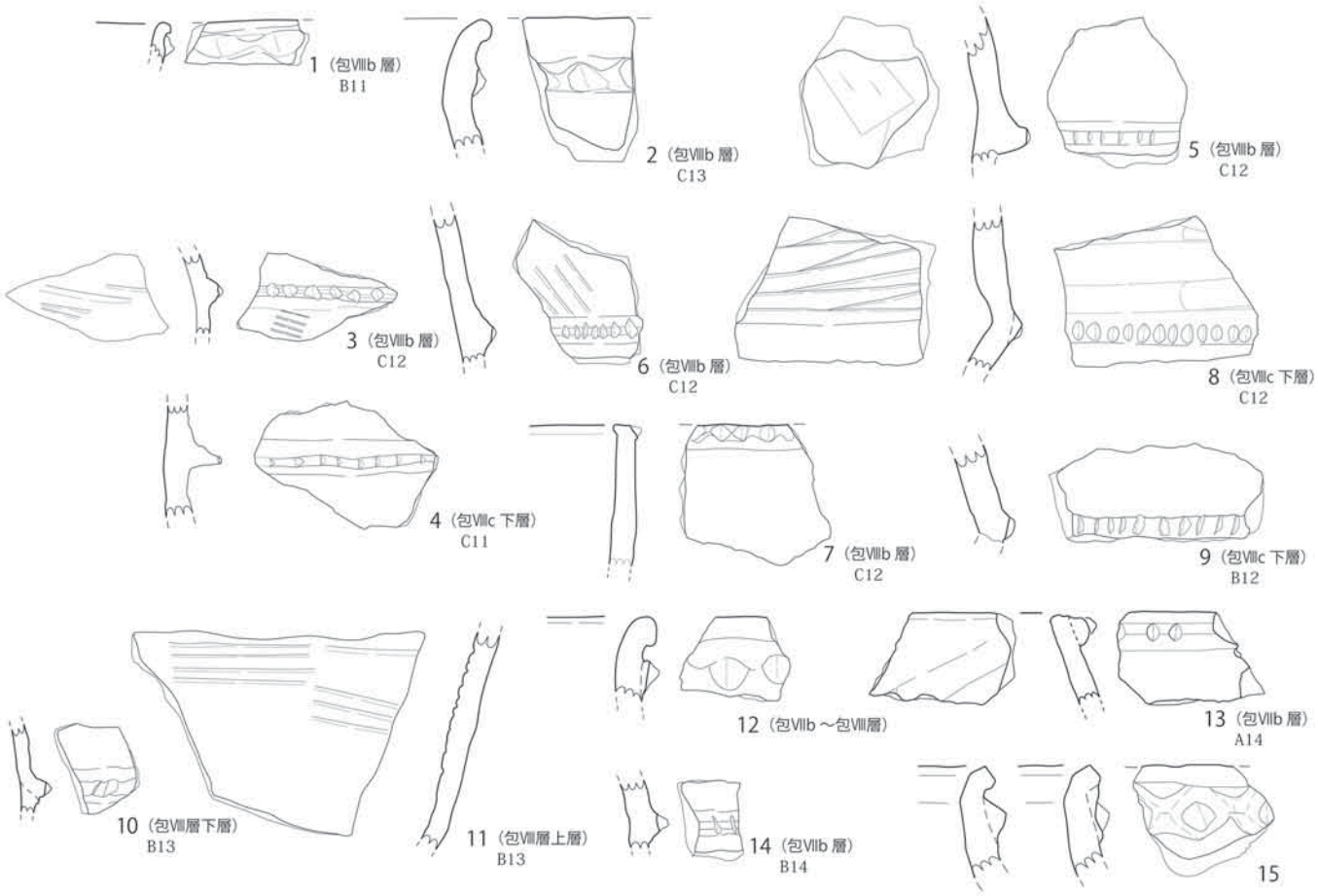


図 50　包VIIIb 層・包VIIIc 層・包VIII下層・包VIIb 層ほか出土　縄文土器（粗製土器）ほか（1/2）

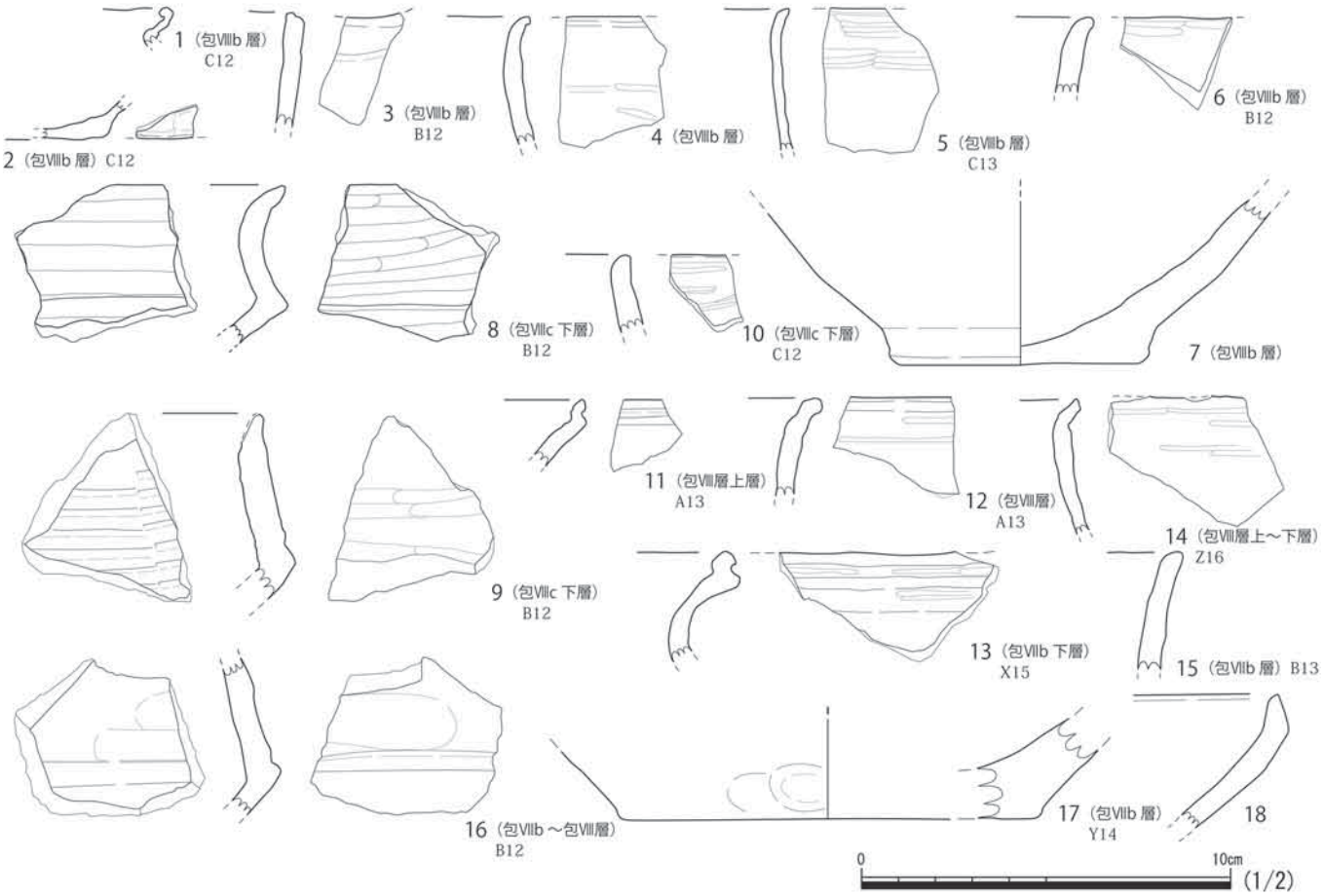


図 51　包VIIIb 層・包VIIIc 層・包VIII層・包VIIb 層ほか出土　縄文土器（精製土器）ほか（1/2）

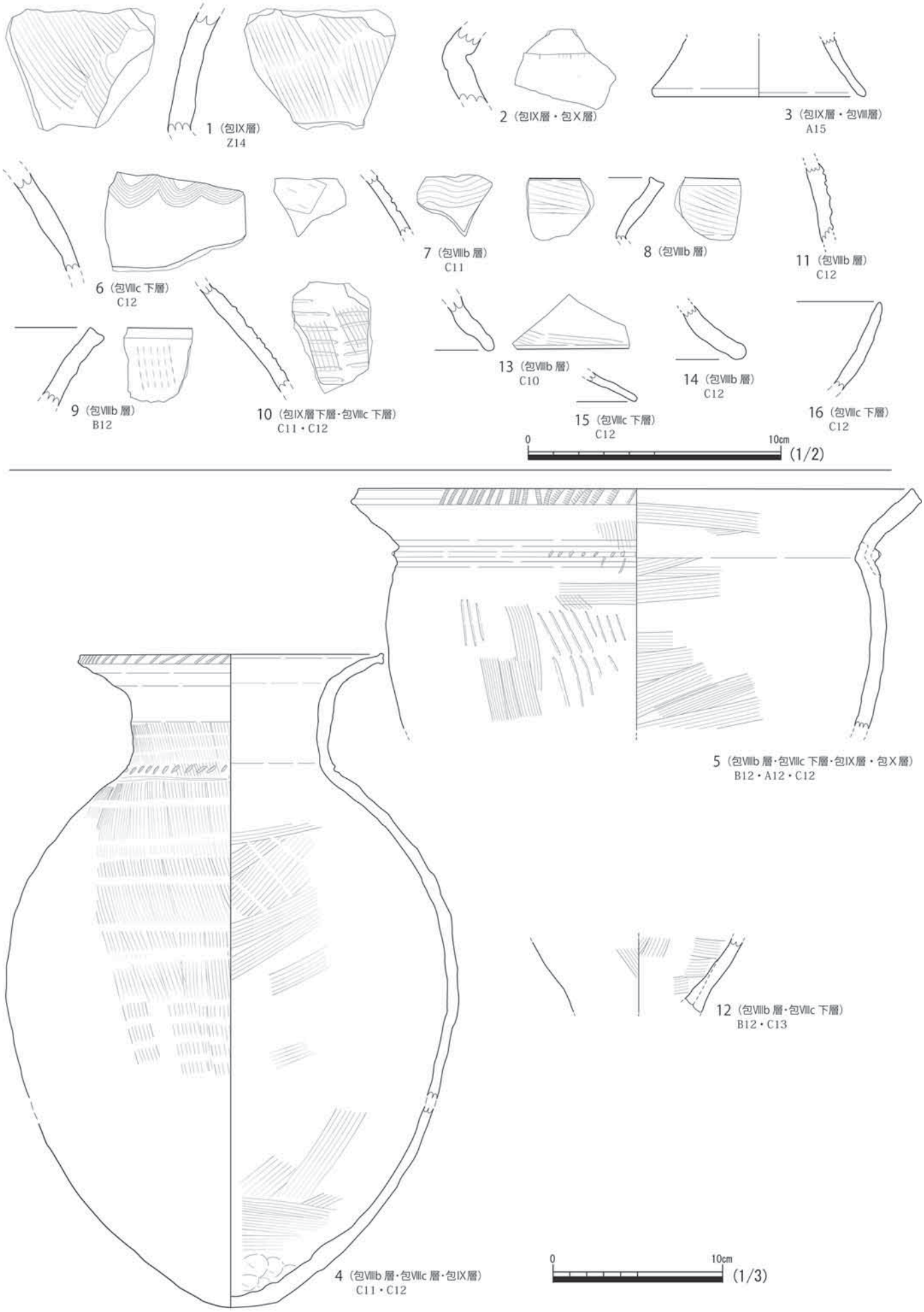


図52　包Ⅸ層・包Ⅷb層・包Ⅷc層出土　弥生土器(1/2・1/3)

Pl.48

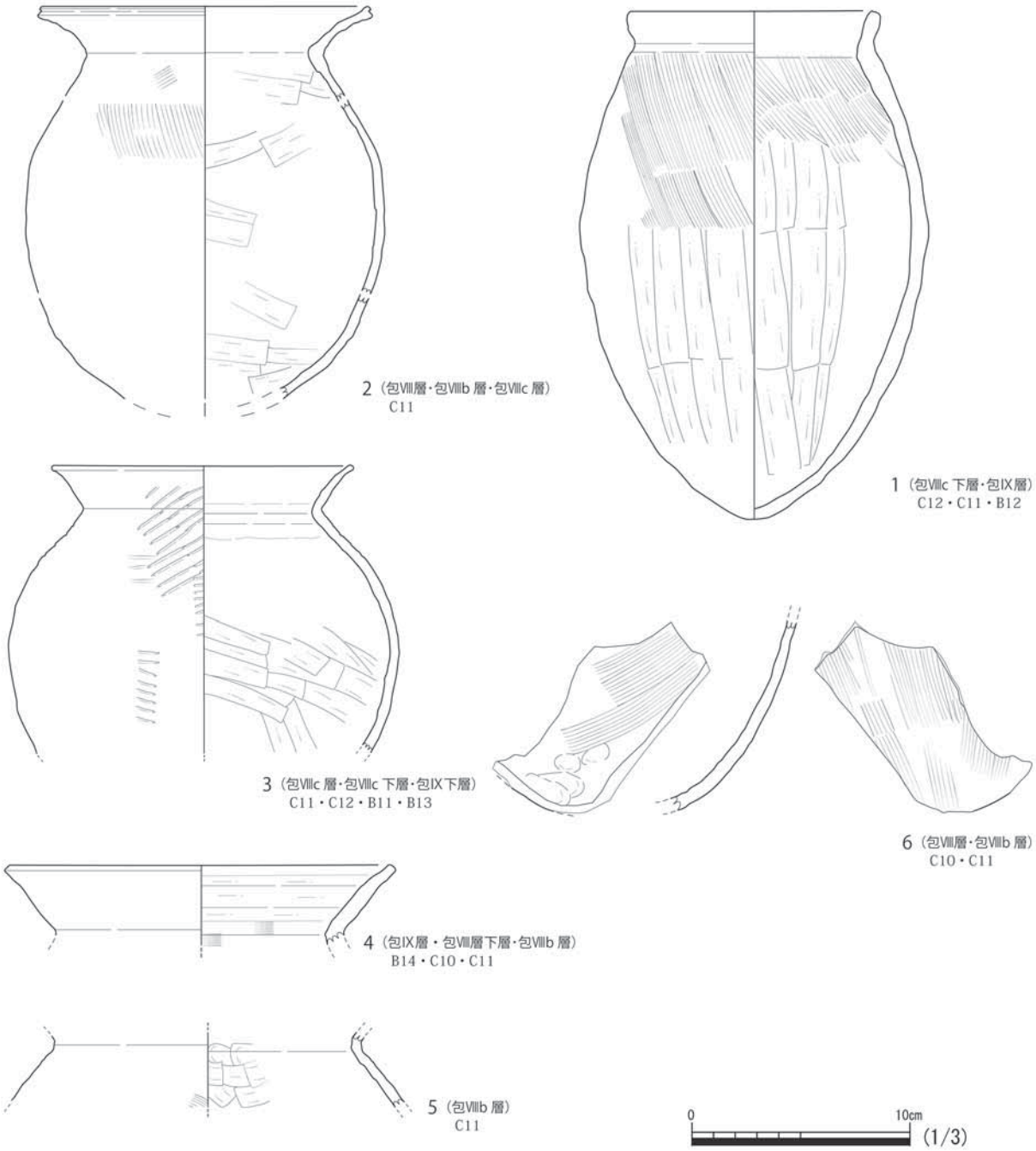


図 53　包Ⅷc 層・包Ⅷb 層ほか出土土器（弥生終末～古墳時代初頭）実測図（1/3）

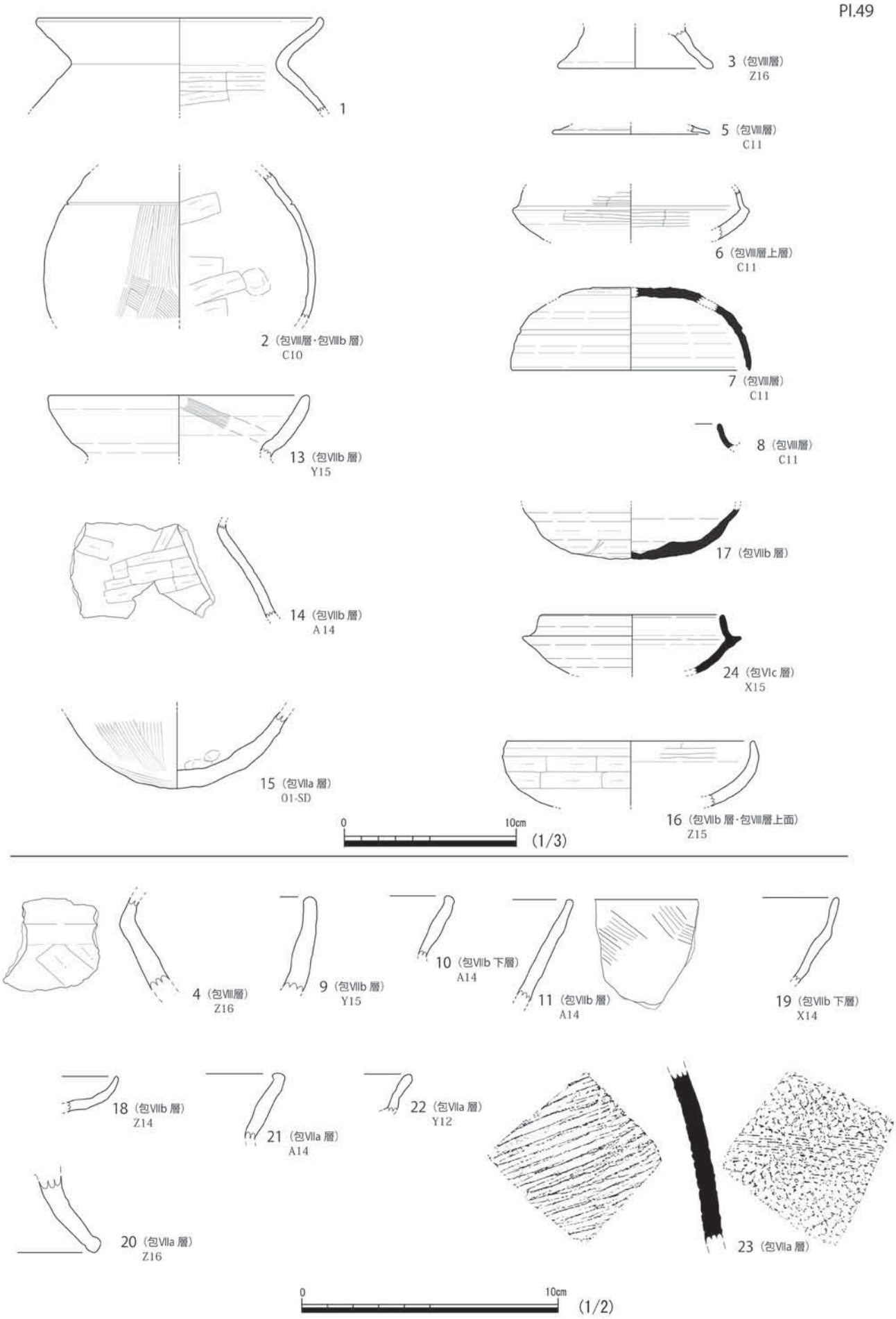


図 54　包Ⅷ層・包Ⅶb 層・包Ⅶa 層出土　弥生土器、土師器、須恵器実測図（1/3・1/2）

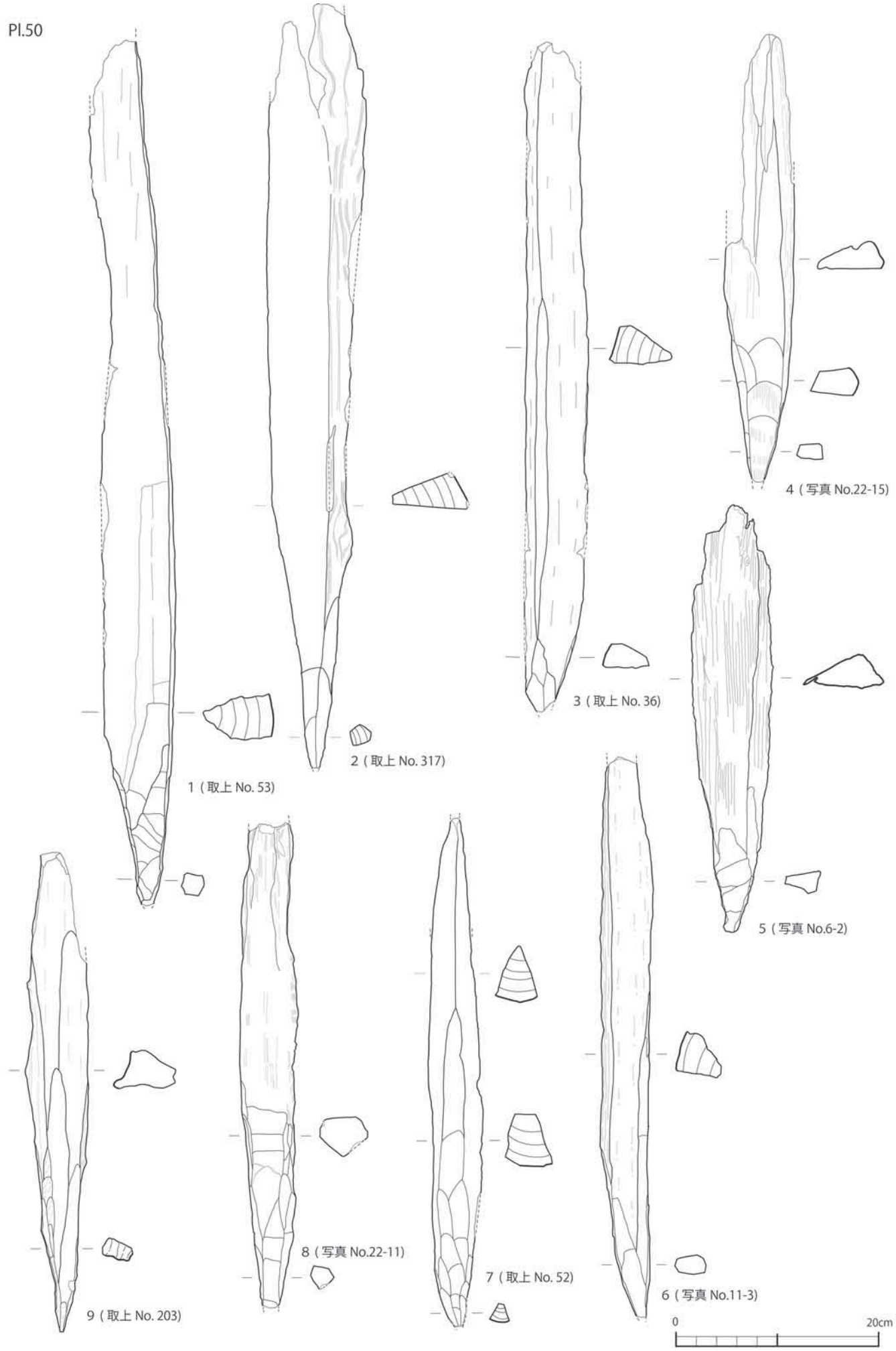


図 55　大畦畔出土杭　（上段 大形断面三角形、下段 中形断面三角形）（1/5）

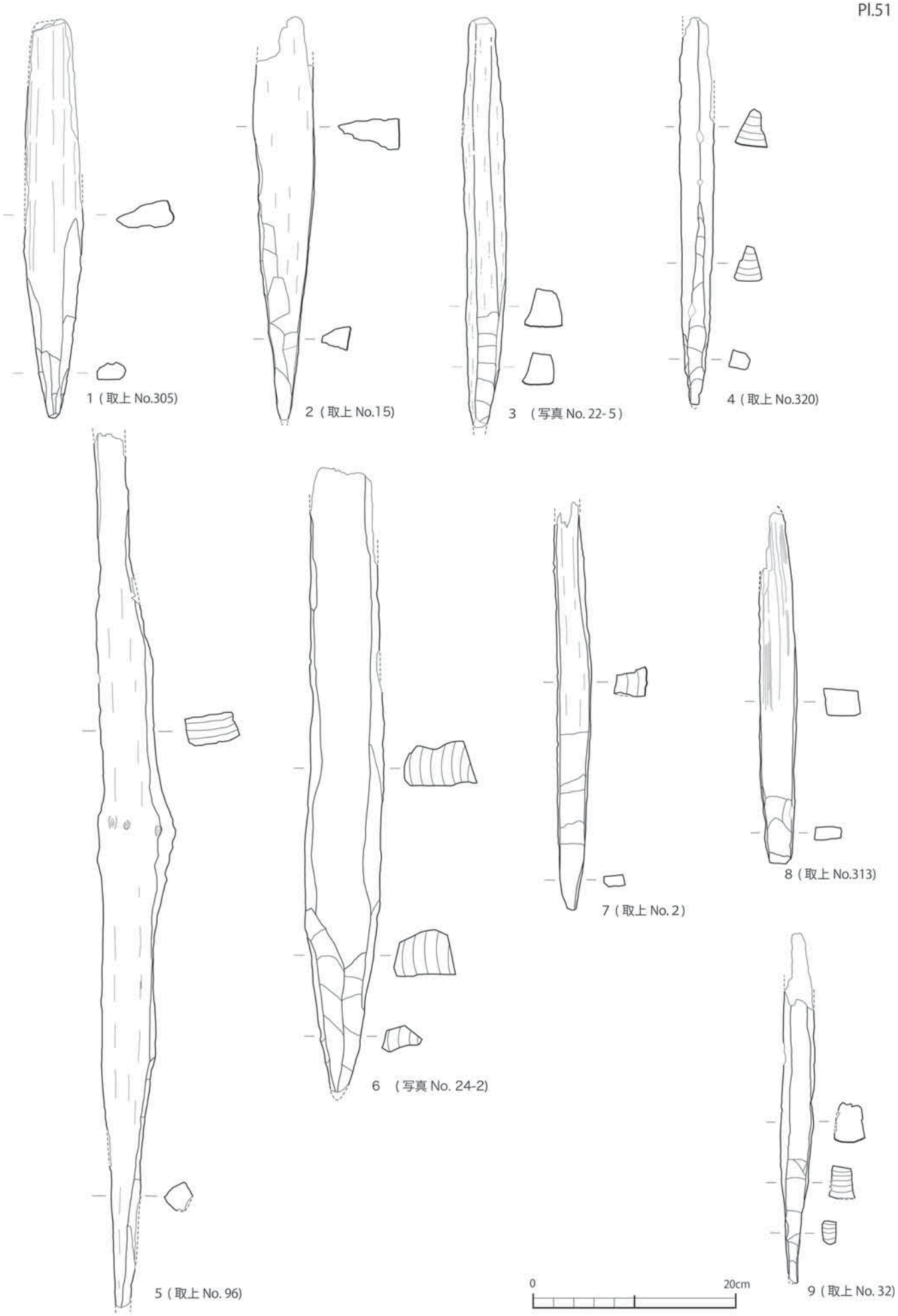


図 56　大畦畔出土杭 （上段 中形断面三角形、下段 断面四角形）（1/5）

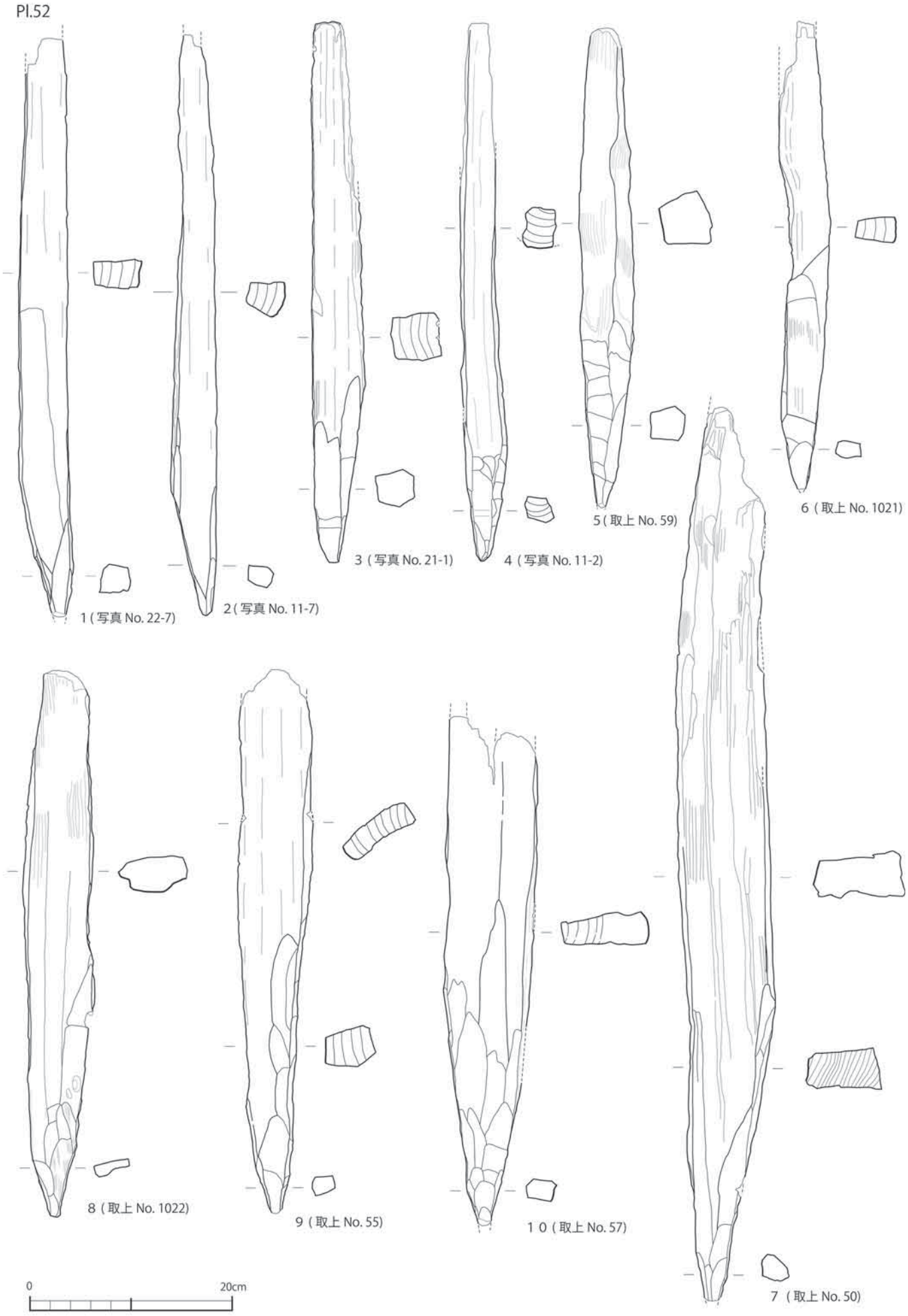


図 57　大畦畔出土杭　（上段 中形断面四角形、下段 大形扁平）（1/5）

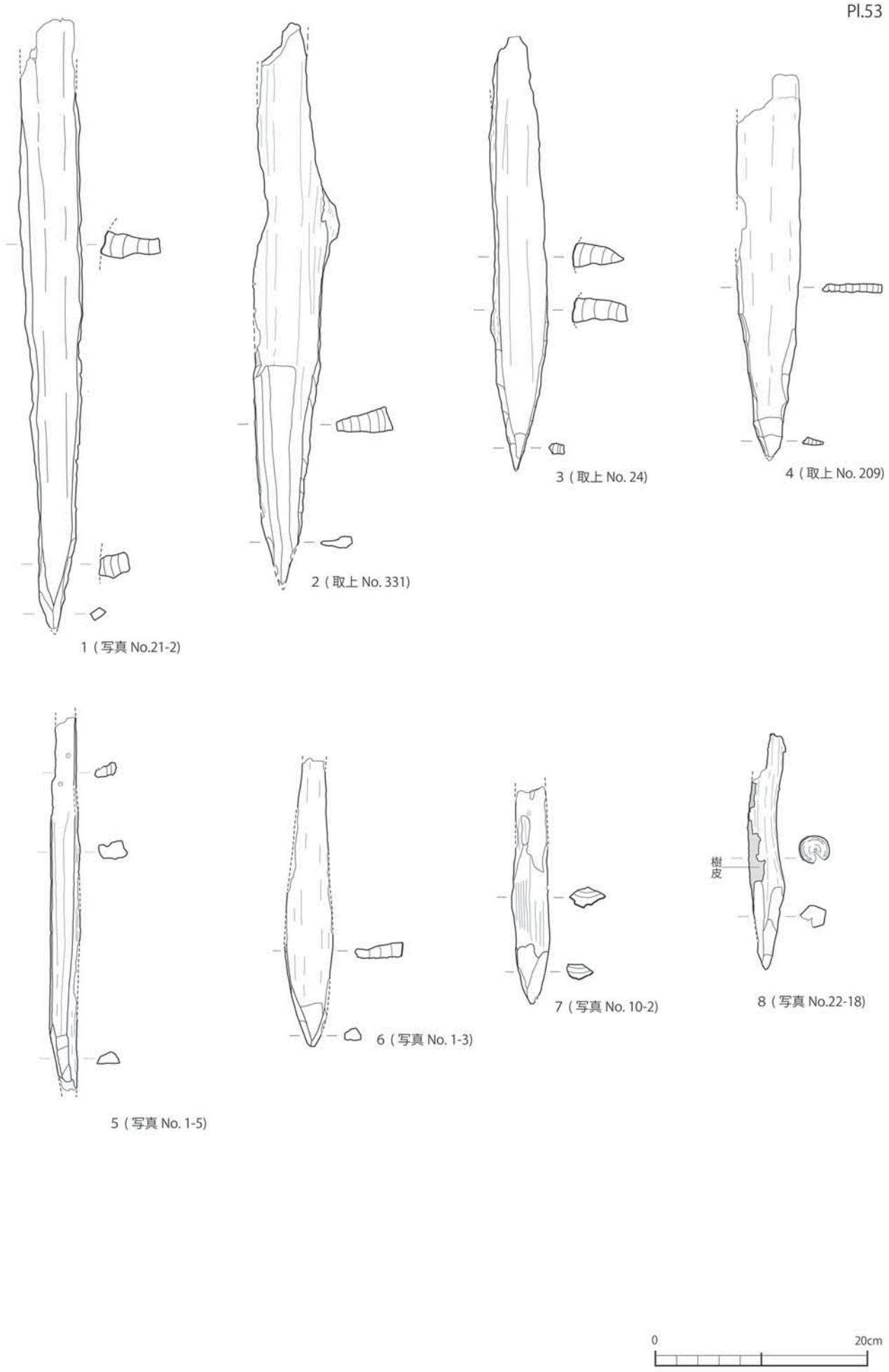
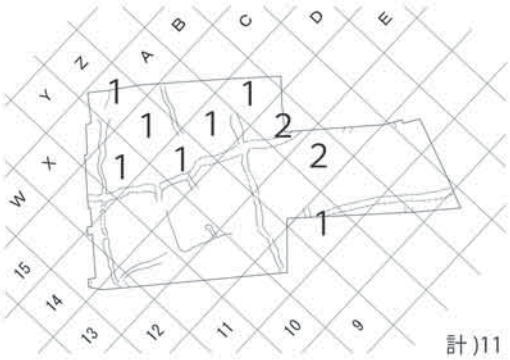
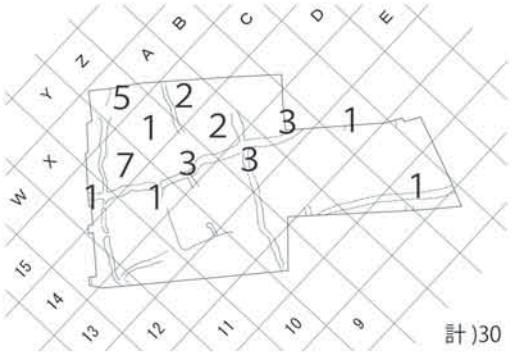


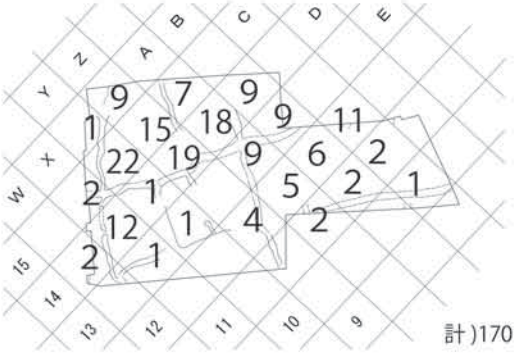
図 58　大畦畔出土杭　（上段 断面扁平、下段 断面円形）（1/5）



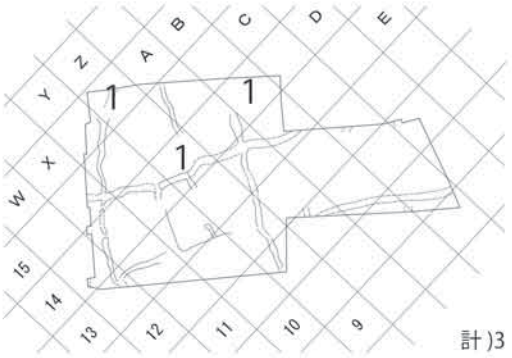
包Ⅶb 層　土器出土分布図　縄文土器



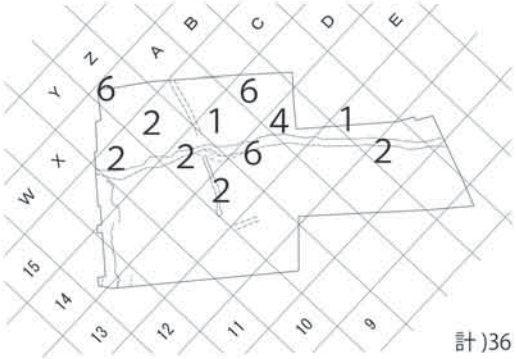
包Ⅶb 層　土器出土分布図　弥生土器



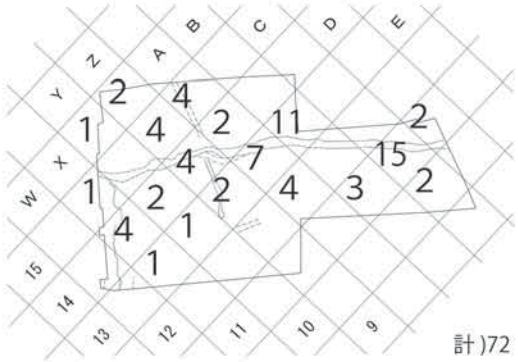
包Ⅶb 層　土器出土分布図　土師器



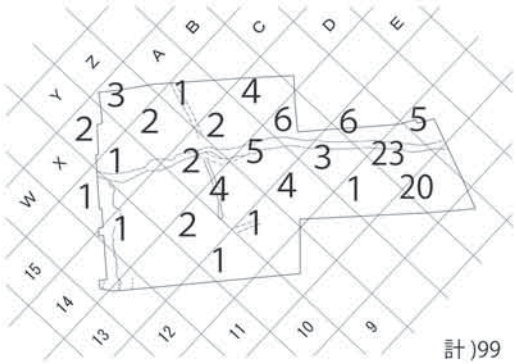
包Ⅶb 層　土器出土分布図　土師器



包Ⅷ層　土器出土分布図　縄文土器

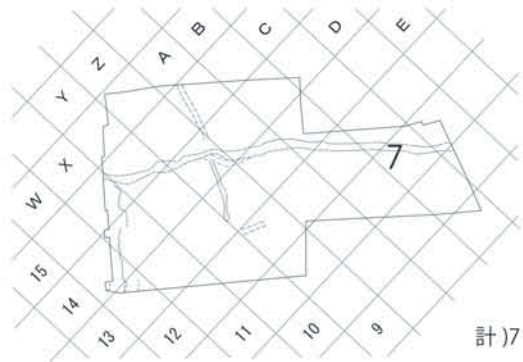


包Ⅷ層　土器出土分布図　弥生土器



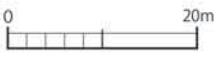
弥生土器か土師器か不明土器　計)30

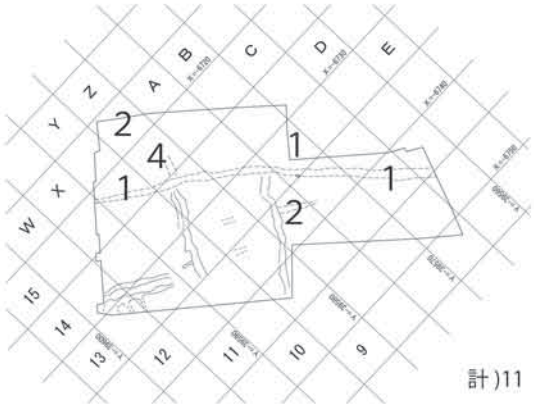
包Ⅷ層　土器出土分布図　土師器



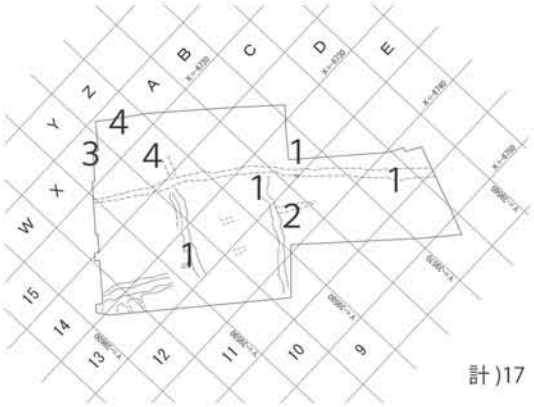
包Ⅷ層　土器出土分布図　須恵器

図 59　包Ⅶb 層・包Ⅷ層　土器出土分布図 (1/800)

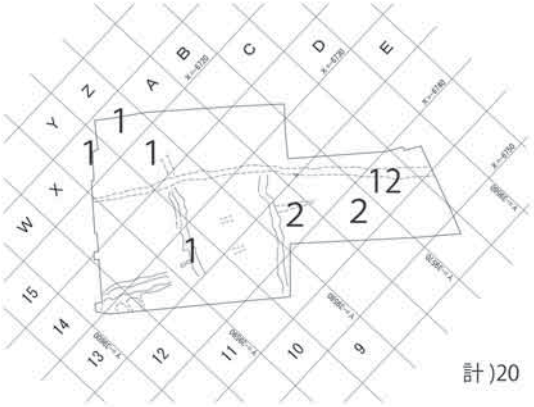




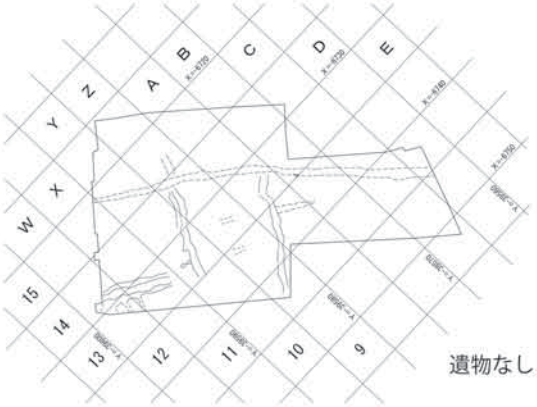
包Ⅷ層下層　土器出土分布図　縄文土器



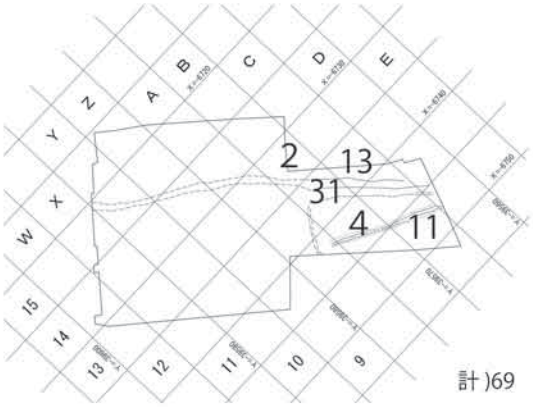
包Ⅷ層下層　土器出土分布図　弥生土器



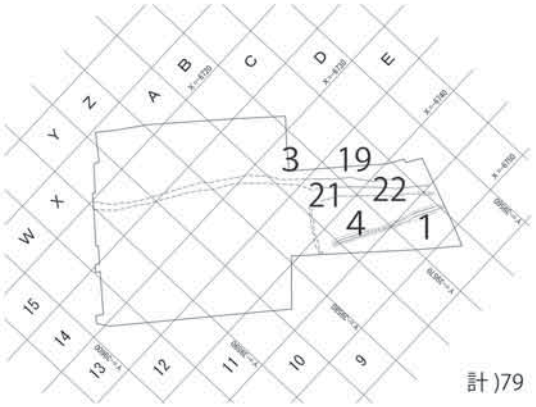
包Ⅷ層下層　土器出土分布図　土師器



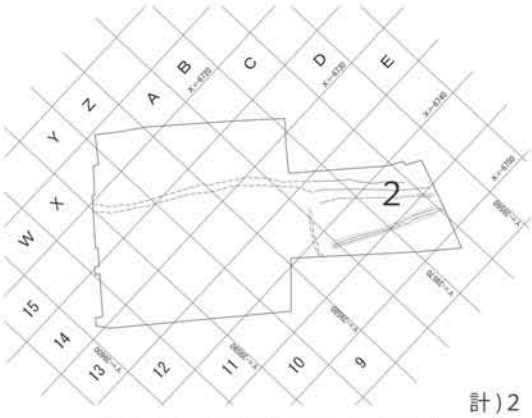
包Ⅷ層下層　土器出土分布図　須恵器



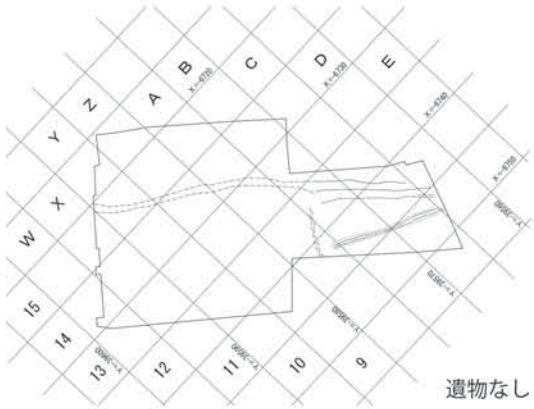
包Ⅷc 層　土器出土分布図　縄文土器



包Ⅷc 層　土器出土分布図　弥生土器

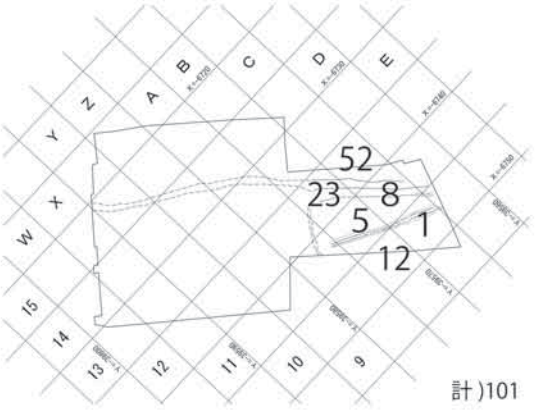


包Ⅷc 層　土器出土分布図　土師器

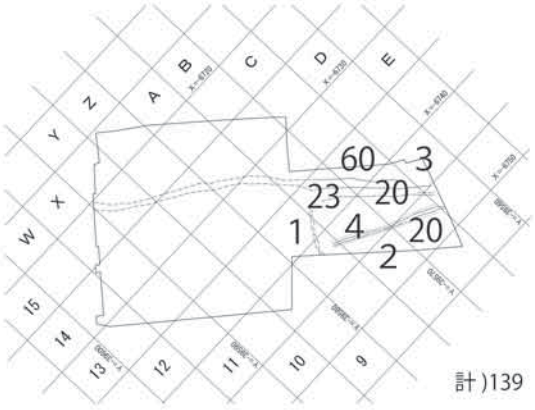


包Ⅷc 層　土器出土分布図　須恵器

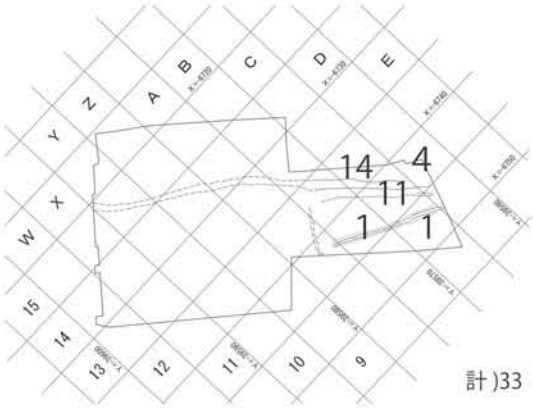
図 60　包Ⅷ層下層・包Ⅷc 層　石器出土分布図 (1/800)



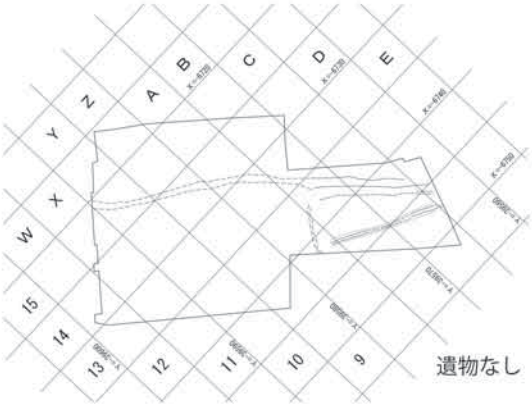
包Ⅷb 層　土器出土分布図　縄文土器



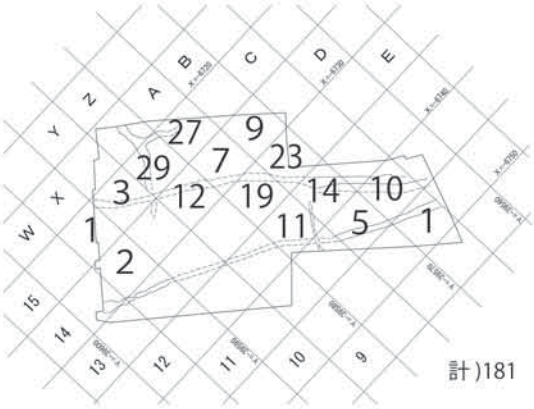
包Ⅷb 層　土器出土分布図　弥生土器



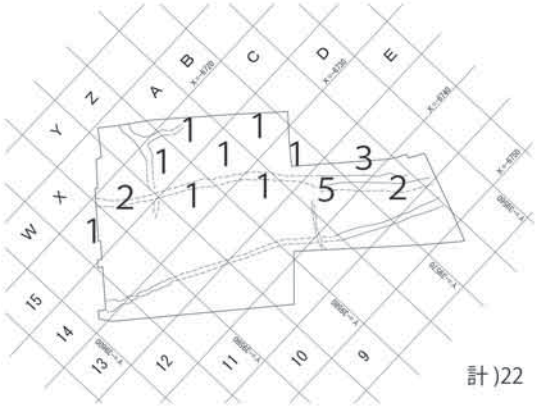
包Ⅷb 層　土器出土分布図　土師器



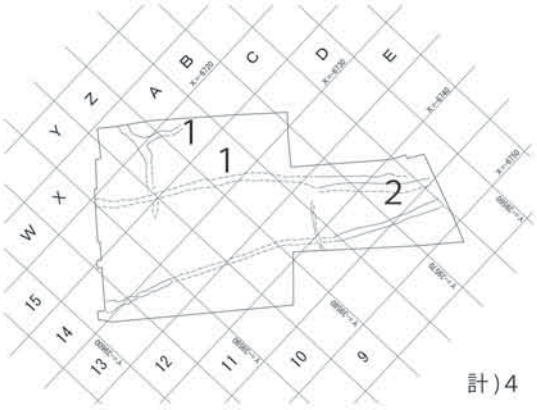
包Ⅷb 層　土器出土分布図　須恵器



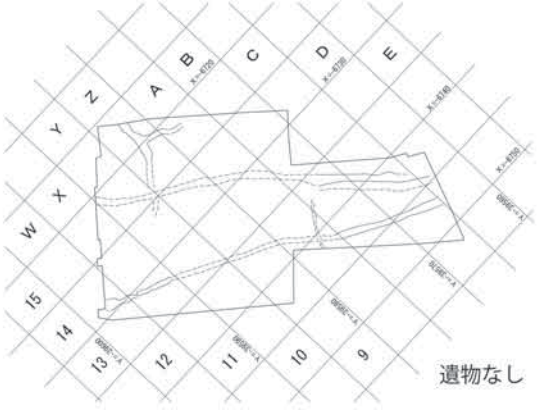
包Ⅸ層　土器出土分布図　縄文土器



包Ⅸ層　土器出土分布図　弥生土器

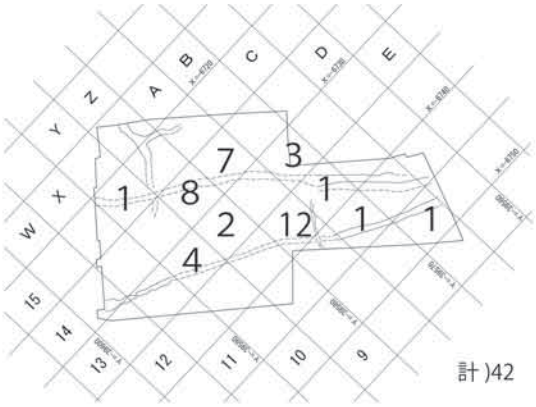


包Ⅸ層　土器出土分布図　土師器

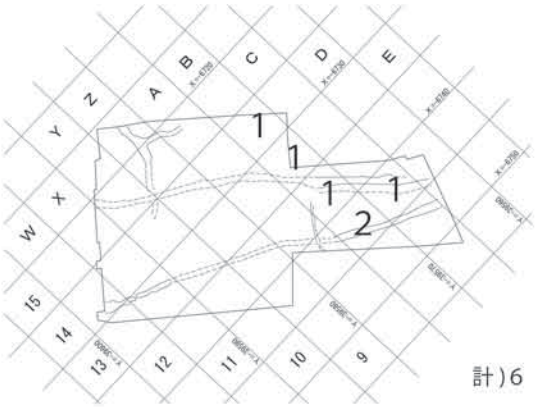


包Ⅸ層　土器出土分布図　須恵器

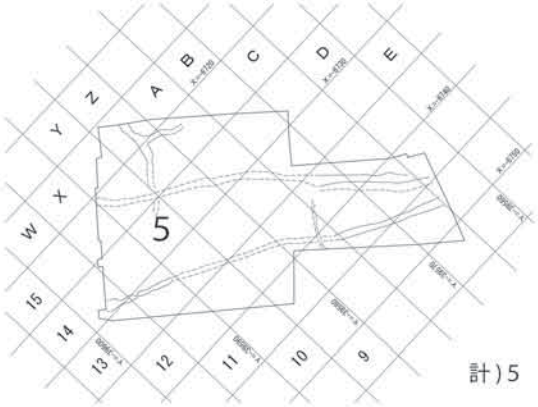
図 61　包Ⅷb 層・包Ⅸ層　土器出土分布図 (1/800)



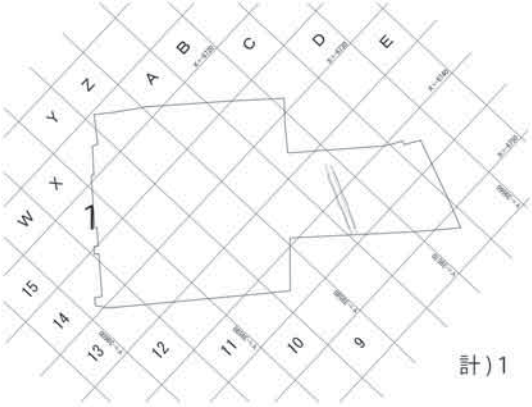
包Ⅹ層　土器出土分布図　縄文土器



包Ⅹ層　土器出土分布図　土師器



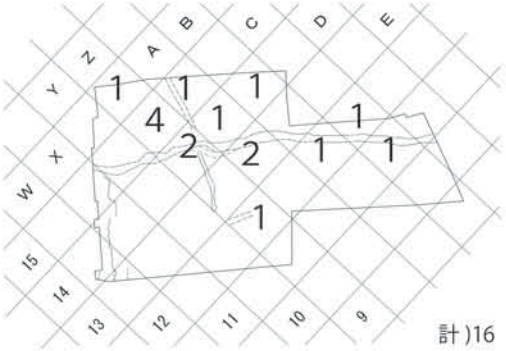
包Ⅺ層　土器出土分布図　縄文土器



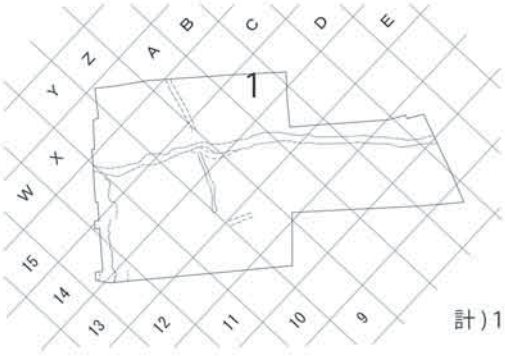
包Ⅵc 層　土器出土分布図　須恵器

※この分布図では、板付Ⅰ式土器は、便宜上縄文土器に含めている。

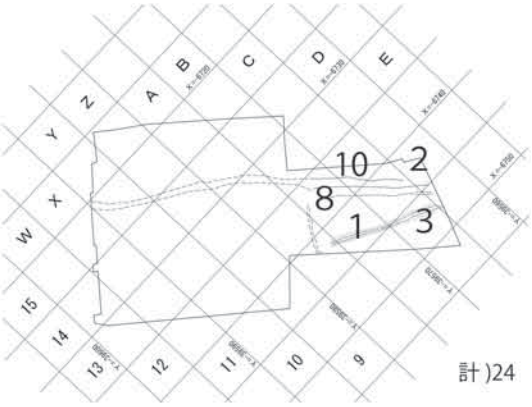
図 62　包Ⅹ層・包Ⅺ層・包Ⅵc 層　土器出土分布図 (1/800)



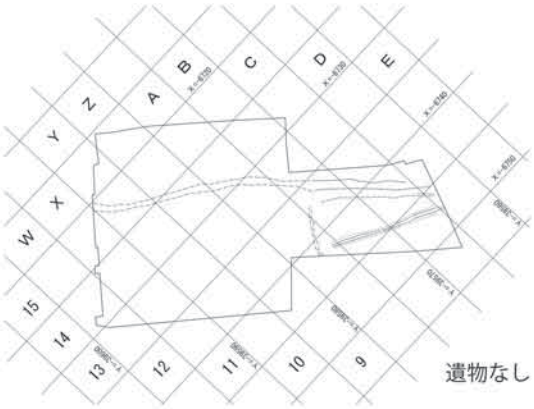
包Ⅷ層　石器出土分布図　剥片



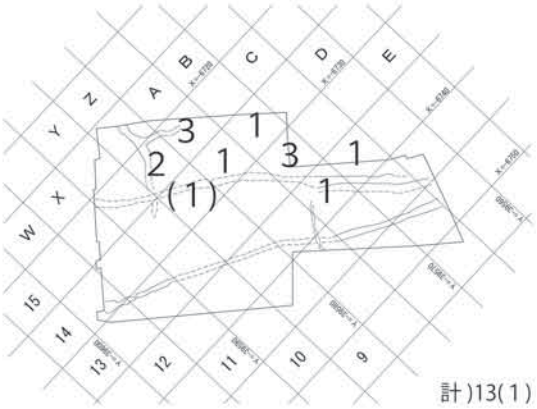
包Ⅷ層　石器出土分布図　石核



包Ⅷb 層　石器出土分布図　剥片

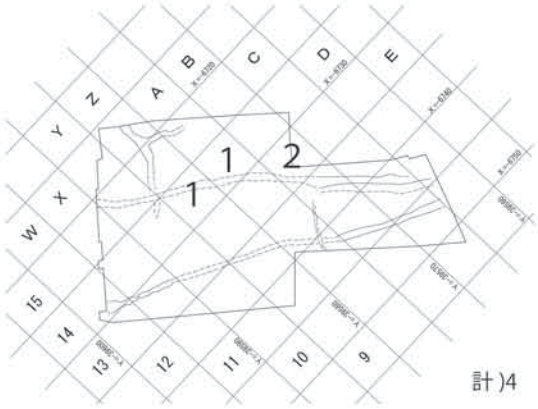


包Ⅷb 層　石器出土分布図　石核



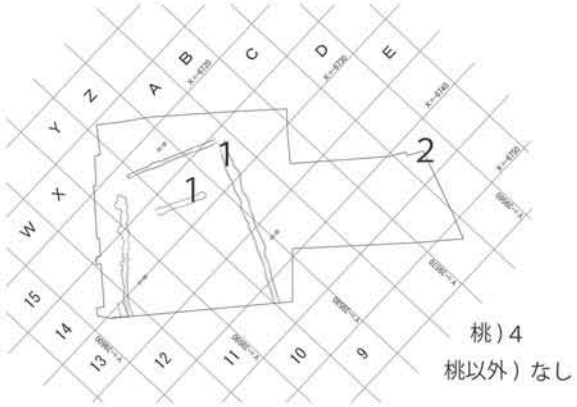
包Ⅸ層　石器出土分布図　剥片

() 内は黒曜石ほかの石器

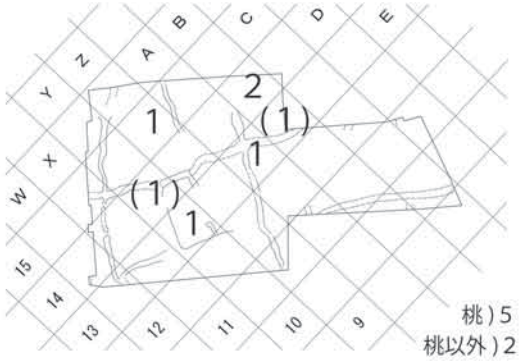


包Ⅸ層　石器出土分布図　石核

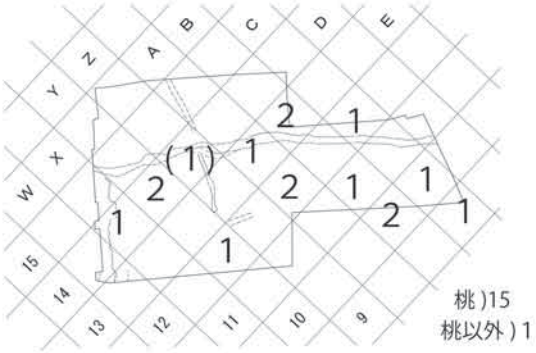
図 63　包Ⅷ層・包Ⅷb 層・包Ⅸ層　石器出土分布図（剥片・石核）（1/800）



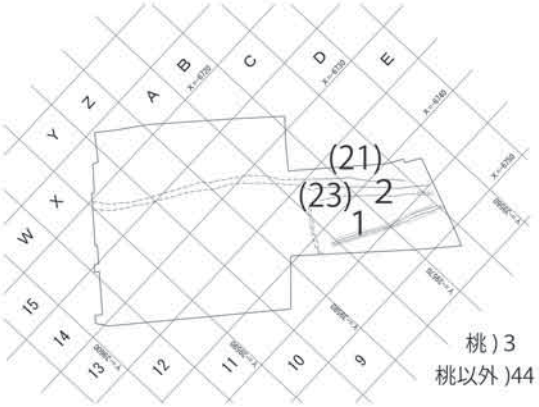
包Ⅶa 層　種子出土分布図



包Ⅶb 層　種子出土分布図

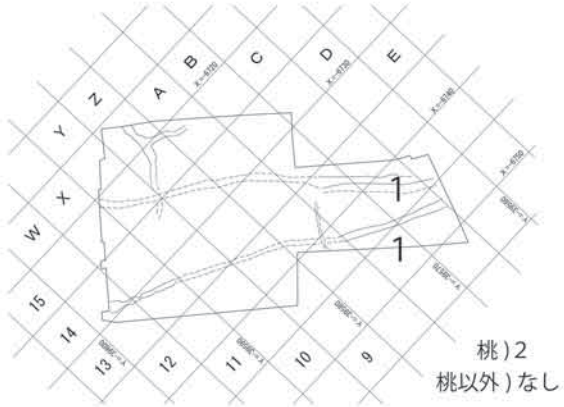


包Ⅷ層　種子出土分布図



包Ⅷb 層　種子出土分布図

() 内は桃以外の種の個数



包Ⅸ層　種子出土分布図

図 64　包Ⅶa 層・包Ⅶb 層・包Ⅷ層・包Ⅷb 層・包Ⅸ層　種子出土分布図 (1/800)

付表1　表1-1. 植物珪酸体含量

分類群	6C層	7A層	7B層	8層	8層下層	8'層	8B層(C-11東側)	8B層(C-11北側)	8B'層	8B''層(C-11)	8B''層(C-12)	8B'''層(C-11)	8B'''層(C-12)	9層	9層上層(C-11)	9層上層(C-11東側)	10層
	試料名																
イネ科葉部短細胞珪酸体																	
イネ族イネ属	1400	300	300	400	400	1000	200	700	800	700	−	200	−	−	200	100	−
タケ亜科	1600	400	600	400	800	1200	600	1000	700	1000	<100	400	4400	5400	1900	1500	800
ヨシ属	900	300	100	300	300	900	500	1100	800	500	<100	400	600	300	1100	1100	1200
ウシクサ族ススキ属	300	100	200	300	<100	100	300	500	200	200	100	400	400	800	1300	900	200
イチゴツナギ亜科	200	<100	−	−	200	400	300	300	−	200	100	200	600	300	300	200	200
不明	2500	1600	1200	3500	2600	3600	1400	5000	3300	2400	1000	2000	9600	11000	7300	5700	2700
イネ科葉身機動細胞珪酸体																	
イネ族イネ属	2400	1400	900	2800	2400	2200	1200	2600	1300	1600	500	900	100	−	700	700	200
タケ亜科	1200	400	100	800	900	700	300	800	400	1300	500	600	5700	5000	900	700	800
ヨシ属	1600	300	300	1600	800	1800	900	1300	400	600	400	600	2900	2200	1700	1200	1700
ウシクサ族	200	−	−	400	<100	<100	100	400	200	200	200	<100	700	300	600	400	200
不明	2900	1400	1000	4000	2200	3800	2100	5500	3900	4700	300	3900	8700	9800	3400	4000	2200
合　計																	
イネ科葉部短細胞珪酸体	7000	2900	2500	4800	4300	7200	3400	8500	6000	4900	1400	3400	15600	17800	12100	9600	5100
イネ科葉身機動細胞珪酸体	8300	3500	2300	9700	6300	8600	4700	10700	6200	8500	1900	6100	18200	17200	7300	7000	5000
総　計	15300	6400	4800	14500	10700	15800	8000	19100	12200	13400	3300	9500	33800	35000	19300	16600	10100
樹木起源珪酸体																	
イスノキ属	＊＊	＊＊	＊	＊＊	＊＊	＊＊	＊	＊＊	＊＊	＊＊	＊	＊＊	＊	＊	＊＊	＊＊	＊
クスノキ科	−	−	−	＊	−	＊	−	−	＊	−	−	−	＊	＊	−	−	＊

数量は、10の位で丸めた含量密度(個/g)を示す。合計は各分類群の丸めない数字を合計後に丸めた値である。<100は100個/g未満、−は未検出を示す。
樹木珪酸体の検出状況は＊で示し、＊＊は多数の検出を示す。

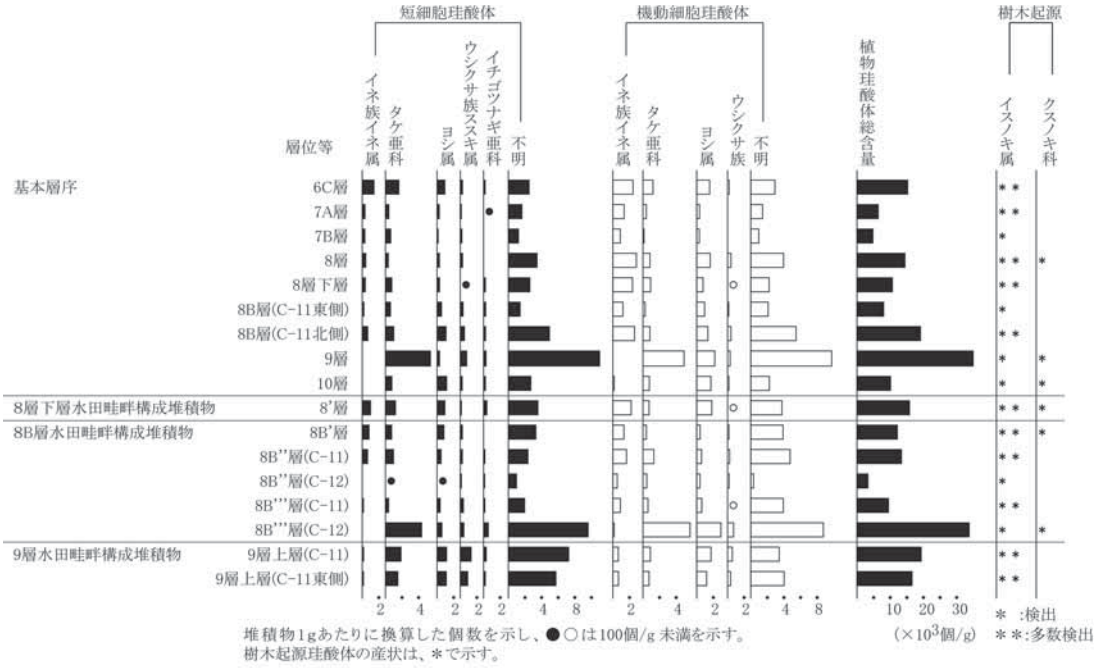


図1　植物珪酸体含量の層位分布

表1-2.　放射性炭素年代測定結果

実測番号	種類	処理方法	補正年代(暦年校正用) BP	δ13C (‰)	測定年代 BP	誤差	暦年較正結果 cal BC/AD	暦年較正結果 cal BP	相対比	Code No.
9	生木	AAA	1,910± 30 (1,908± 25)	−27.19±0.42	1,940± 20	σ	cal AD 72 − cal AD 93	cal BP 1,878 − 1,857	0.439	IAAA-110360
							cal AD 97 − cal AD 125	cal BP 1,853 − 1,825	0.561	
						2σ	cal AD 25 − cal AD 137	cal BP 1,925 − 1,813	0.987	
							cal AD 160 − cal AD 165	cal BP 1,790 − 1,785	0.005	
							cal AD 198 − cal AD 206	cal BP 1,752 − 1,744	0.008	
14	生木	AaA	1,920± 30 (1,915± 25)	−27.26±0.50	1,950± 20	σ	cal AD 65 − cal AD 92	cal BP 1,885 − 1,858	0.518	IAAA-110361
							cal AD 98 − cal AD 124	cal BP 1,852 − 1,826	0.482	
						2σ	cal AD 25 − cal AD 132	cal BP 1,925 − 1,818	1.000	
16	生木	AAA	1,830± 20 (1,829± 24)	−28.58±0.51	1,890± 20	σ	cal AD 137 − cal AD 160	cal BP 1,813 − 1,790	0.323	IAAA-110362
							cal AD 165 − cal AD 199	cal BP 1,785 − 1,751	0.466	
							cal AD 204 − cal AD 219	cal BP 1,746 − 1,731	0.211	
						2σ	cal AD 126 − cal AD 244	cal BP 1,824 − 1,706	1.000	
20	生木	AAA	1,890± 20 (1,892± 24)	−27.40±0.50	1,930± 20	σ	cal AD 80 − cal AD 128	cal BP 1,870 − 1,822	1.000	IAAA-110363
						2σ	cal AD 58 − cal AD 177	cal BP 1,892 − 1,773	0.955	
							cal AD 191 − cal AD 212	cal BP 1,759 − 1,738	0.045	
25	生木	AAA	1,900± 30 (1,904± 25)	−28.37±0.42	1,960± 20	σ	cal AD 75 − cal AD 125	cal BP 1,875 − 1,825	1.000	IAAA-110364
						2σ	cal AD 27 − cal AD 40	cal BP 1,923 − 1,910	0.022	
							cal AD 49 − cal AD 139	cal BP 1,901 − 1,811	0.945	
							cal AD 150 − cal AD 153	cal BP 1,800 − 1,797	0.003	
							cal AD 155 − cal AD 170	cal BP 1,795 − 1,780	0.016	
							cal AD 195 − cal AD 209	cal BP 1,755 − 1,741	0.015	
30	生木	AAA	1,850± 30 (1,851± 25)	−29.67±0.43	1,930± 20	σ	cal AD 128 − cal AD 180	cal BP 1,822 − 1,770	0.663	IAAA-110365
							cal AD 186 − cal AD 214	cal BP 1,764 − 1,736	0.337	
						2σ	cal AD 85 − cal AD 110	cal BP 1,865 − 1,840	0.093	
							cal AD 117 − cal AD 234	cal BP 1,833 − 1,716	0.907	

1)処理方法は、酸処理－アルカリ処理－酸処理(AAA処理)で、アルカリ濃度が1N未満の場合はAaAと表記している。
2)年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用した。
3)BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
4)補正年代および測定年代に付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。
5)暦年の計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0 (Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer) を使用した。
6)暦年の計算には、暦年較正用年代として示した、一桁目を丸める前の値を使用している。
7)年代値は、1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、暦年較正用年代値は1桁目を丸めていない。
8)統計的に真の値が入る確率はσは68.3%、2σは95.4%である
9)相対比は、σ、2σのそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

表3. 樹種同定結果

実測番号	地区	グリッド	位置	層位	取上番号	写真番号	種類	木取り	樹種	備考
4	06-Ⅱ区	C11		9層	203		中形三角	分割材	クリ	
9	06-Ⅱ区	B12		9層・10層		22-5	中形三角	ミカン割状	クリ	年代測定実施
11	06-Ⅱ区	Y15		9～10層		10-2	小形扁平	分割材	クリ	
14	06-Ⅱ区	B12		9～10層		1-3	小形扁平	板目板状	ムクロジ	年代測定実施
16	06-Ⅱ区	B12		9～10層		1-5	小形扁平	柾目板状	クリ	年代測定実施
20	06-Ⅱ区	D10		9層	1021		中形四角	柾目板状	クリ	年代測定実施
25	06-Ⅱ区	D10		9層	1022		大形扁平	分割材	クリ	年代測定実施
30	06-Ⅱ区	B12		9層・10層		22-7	中形四角	柾目板状	クリ	年代測定実施
			南壁		杭No.1			破片	クリ	

表2 種実同定結果

調査区	番号	グリッド	層位	同定結果					計測値(mm)		
				分類群	部位	状態	個数	備考	長さ	幅	厚さ
06-Ⅱ区	D1-1	Y15	7a層	エゴノキ属	種子	破片	1				
				カラスウリ	種子	破片	1				
	2	Z15	7a層	モモ	核	破片	1	乾燥状態			
	10	X13	7b層	モモ	核	破片	2	乾燥状態,計1個体未満			
	12	Y15	7b層	モモ	核	破片	2	炭化,接合し完形1個,側面～縫合線食痕	17.63 +	13.9 +	9.92
	13	A13	7b層	モモ	核	完形	1	表面摩耗	22.43	16.68 +	11.37 +
	14-1	Y15	7b層	モモ	核	完形	1	表面摩耗,側面食痕	22.56 +	16.91 +	9.11 +
	14-2	Y15	7b層	モモ	核	破片	1		19.61 +		
	16	D11	7b層	モモ	核	破片	1				
	17	B14	7b層	モモ	核	完形	1		19.14	16.23	13.98
	32	X14	8層	モモ	核	破片	1				
	40-2	C11	8b層	モモ	核	完形	1	頂部欠損	22.22 +	18.08 +	16.24
	43-1,5	B12	8b層	ヤマモモ	核	完形	2				
	44-1～19	B12	8b層 杭に絡んで出土	ヤマモモ	核	完形	18				
						破片	1				
	45-9～23	C13	8b層 杭列周辺	ヤマモモ	核	完形	12				
						破片	3				
	46	Y15	8b層	モモ	核	完形	1	乾燥状態,表面摩耗,頂部欠損	13.24 +	12.51 +	7.75 +

表5. 06-Ⅱ区出土種実同定結果

台帳情報										計測値(mm)		
番号	枝番号	調査区	遺構名	層位	分類群	部位	状態	個数	備考	長さ	幅	厚さ
D 3		A14		7a層	モモ	核	完形	1	一部欠損	19.89	18.23	16.36 +
4	1	D11		7a層	モモ	核	完形	1		26.44	21.13	16.18
4	2	D11		7a層	スモモ	核	完形	1		14.56	12.63	8.99
5		B14		7a層	モモ	核	完形	1	縫合線一部欠損	20.83	16.19 +	13.48
6		Z12		7b層	クスノキ	種子	完形	1				
7		Y14		7b層	オニグルミ	核	完形	1	縫合線に沿い頂部より割れかけている	25.05	21.28	20.89
8		Y13		7b層直上	モモ	核	破片	1	半分未満			
9		B13		7b層	キカラスウリ－モミジカラスウリ	種子	完形	1				
11		Y15		7b層	オニグルミ	核	完形	1	頂部～側部欠損			
15		X14		7b層	モモ	核	完形	1	一部欠損	21.12 +	16.92	16.98
18		Z15	杭列	7b層下層	モモ	核	完形	1		22.11	17.22	13.08
19		B14		7b層	モモ	核	完形	1		24.84	19.53	14.89
20		B11		8層	モモ	核	完形	1		23.73	18.65	14.45
21		C9		8層	モモ	核	完形	1		25.83	21.02	15.94
22		A12		8層上層	モモ	核	完形	1		22.43	17.96	14.84
23		Z13		8層	クスノキ	種子	破片	1				
					チャンチンモドキ	核	破片	1	横断面に種子5個確認			
24		B13		8層	モモ	核	完形	1	一部欠損	22.43	18.36	14.16
25		C13		8層	モモ	核	完形	1		21.98	17.05	13.78
26			杭列上	8層	モモ	核	破片	1	半分未満			
27		B13		8層	モモ	核	完形	1		19.59	18.53	15.75
28		A12		8層	モモ	核	完形	1	側面切断痕?	27.52 +	22.63	15.78 +
29			杭列上	8層	モモ	核	完形	1	一部欠損	21.14 +	18.39	15.05 +
30	1	Y14		8層	モモ	核	完形	1	一部欠損	26.95	22.84	16.63 +
30	2	Y14		8層	モモ	核	完形	1	一部欠損	25.25	19.29 +	15.83
31		Z14	杭列上	8層	キカラスウリ－モミジカラスウリ	種子	完形	1	一部欠損			
33		C10		8層	モモ	核	完形	1		23.23	18.84	15.63
34		A13	アゼ下	8層下層	モモ	核	完形	1		22.89	21.38	18.67
35		B10		8a層	モモ	核	完形	1	縫合線一部欠損	25.15	17.49 +	14.32
36	1	Y12		8層	モモ	核	完形	1	頂部欠損	20.04 +	17.02	13.21
38		Y14・15		8層上面	モモ	核	破片	3	縫合線上食痕,他に炭化材1個あり	24.6	18.42 +	－
									半分,頂部僅かに欠損	20.44 +	15.26	－
39		西側溝(B10?)		8層	モモ	核	完形	1	側面一部欠損	26.29	21.46	15.64 +
40	1	C11		8b層	モモ	核	完形	1	頂部僅かに欠損	23.74 +	21.63	16.08
41		C12		8b層	モモ	核	完形	1		23.09	20.18	14.54
42		B11		8b層	モモ	核	完形	1		24.09	18.83	15.05
43		B12		8b層	ヤマモモ	核	完形	3				
45		C13	杭列周辺	8b層	ヤマモモ	核	完形	8				
47		C11		9層	モモ	核	完形	1		22.47	17.88	14.17
48		西側溝北側(B10?)		9層	モモ	核	完形	1		26.48	20.09	16.69

付表１・２　解説　　両迫間日渡遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社　分析抜粋（編集　亀田）

１　分析方法

⑴　植物珪酸体分析

各試料について、乾燥重量を秤量し、過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム，比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤（2010）の分類を参考に同定し、計数する。

結果は堆積物1gあたりの植物珪酸体含量（同定した数を堆積物1gあたりの個数に換算）の一覧表と植物珪酸体含量の層位分布図として示す。なお、各分類群の含量密度は10の位で丸めた値として示してある。

⑵　種実同定

試料を双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて同定が可能な種実遺体を抽出する。種実遺体表面に付着した泥を、面相筆を用いて丁寧に除去する。種実遺体の同定は、現生標本および石川（1994）、中山ほか（2000）等との対照から実施し、個数を数えて一覧表で示す。分析後は、種類毎に瓶に入れて保管する。水に入った種実遺体には、約70%のエタノール溶液を入れて保存する。

⑶　放射性炭素年代測定

分析は、AMS法で実施する。杭材の木取りを観察した上で、残存する最外年輪から測定試料を採取する。試料表面の汚れをピンセット、超音波洗浄など等により物理的に除去する。塩酸や水酸化ナトリウムなどを用いて、試料内部の汚染物質を化学的に除去する（AAA処理）。

試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅（Ⅱ）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃（30分）850℃（2時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素＋エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO_2を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO_2と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-Ⅱ）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に13C/12Cの測定も行うため、この値を用いて$\delta^{13}C$を算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma; 68%）に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0（Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる

２　結果

⑴　植物珪酸体分析

結果を表1-1、図1に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。

植物珪酸体含量は、10層～9層で増加傾向が見られ、10層の約10,000個/gから9層の約35,000個/gと増加し、極大となる。8B'''層（C-12）でも多いが、8B''層以降減少し、5,000個/g～15,000個/gの間を変動する。

9層を除き、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体双方のイネ属が連続的に産出する。10層～8B''層（C-12）にかけては短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体がいずれも1,000個/g未満である。なお、8B''層（C-11）では8B''層（C-12）よりもイネ属の含量が多く、短細胞珪酸体が約700個/g、機動細胞珪酸体が約1,600個/gである。8B'層より上位では機動細胞珪酸体の増加傾向が見られる。その含量は1,000個/g前後～2,800個/gの範囲であり、他の分類群と比較して多い。また、8層は約2,800個/g、8B層（C-11北側）は約2,600個/g、8層下層と6C層は約2,400個/g、8'層は約2,200個/gであり、他の層位よりも含量が多い。

この他に、タケ亜科、ヨシ属、ススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科なども見られる。8B'''層（C-12）と9層では、タケ亜科の産出が目立つ。またイネ科起源の他に、イスノキ属やクスノキ科の樹木起源珪酸体も見られ、イスノキ属の産出が目立つ。

⑵　種実同定

結果を表2に示す。全試料を通じて、被子植物9分類群（広葉樹のヤマモモ、クスノキ、ウメ、スモモ、モモ、センダン、クマノミズキ、エゴノキ属、草本のカラスウリ）107個の種実が同定された。

栽培種は、ウメの核が2個（接合し1個）、スモモの核が1個、モモの核が57個、計60個が確認された。

栽培種を除いた分類群は、常緑高木のヤマモモの核が

36 個、クスノキの種子が 4 個、落葉高木のセンダンの核が 1 個、クマノミズキの核が 1 個、落葉小高木のエゴノキ属の種子が 4 個、つる性草本のカラスウリの種子が 1 個、計 47 個が確認された。各分類群の写真を図版 2 に、以下に形態的特徴等を記す。

・ヤマモモ（*Myrica rubra* Sieb. et Zucc.） ヤマモモ科ヤマモモ属

核（内果皮）は灰褐色、長さ 7 ～ 8mm、幅 6 ～ 7mm、厚さ 4.5 ～ 5mm 程度の歪でやや偏平な非対称広楕円体。内果皮は硬く、表面には微細な網目模様があり粗面。

・クスノキ（*Cinnamomum camphora*（L.）Presl） クスノキ科ニッケイ属

種子は灰黒褐色、長さ 5.5 ～ 6.5mm、幅 5 ～ 6mm、厚さ 5 ～ 5.5mm の偏球体。頂部にやや突出する臍からはじまる低い稜があり、側面の途中で終わる。種皮は硬く表面は粗面、断面は柵状。

・ウメ（*Prunus mume*（Sieb.）Sieb. et Zucc.） バラ科サクラ属

核（内果皮）は灰褐色、のやや偏平な広楕円体。05－Ⅰ－2 区の番号 6 と 7 は接合して 1 個体となり、長さ 19.76mm、幅 15.42mm、厚さ 11.51mm。（両迫間日渡遺跡 2 の報告書に掲載予定）頂部はやや尖り、基部は切形で中央部に湾入した臍がある。1 本の明瞭な縦の縫合線上が発達し、背面正中線上に細い縦隆条が、腹面正中線には浅い縦溝とその両側に幅の狭い帯状部がある。内果皮は厚く硬く、表面には円形の小凹点が分布する。

・スモモ（*Prunus salicina* Lindley） バラ科サクラ属

核（内果皮）は灰褐色、レンズ状広楕円体。出土核は、丸く臍点がある基部を欠損し、残存長 14.78mm、残存幅 10.14mm、残存厚 9.88mm。1 本の明瞭な縦の縫合線上が発達し、背面正中線上に細い縦隆条が、腹面正中線には浅い縦溝とその両側に幅の狭い帯状部がある。内果皮は厚く硬く、表面にはごく浅い凹みが不規則にみられる。

・モモ（*Prunus persica* Batsch） バラ科サクラ属

・センダン（*Melia azedarach* L. var. *subtripinnata* Miquel） センダン科センダン属

核（内果皮）は灰褐色、完形ならば長さ 1 ～ 1.3cm、径 0.7 ～ 0.8cm の楕円体。破片は長さ 1cm、幅 6.5mm 程度。背面は浅く広い 5 ～ 6 個の縦溝と縦隆条が交互に並び、上面観は星型。破片は縦隆条に沿って半割している。表面は粗面。内面には、長さ 6mm、幅 3mm、厚さ 1mm 程度の非対称長楕円体の種子が入る浅い窪みがあり、窪みの表面には微細な横方向の筋が流れる。

・クマノミズキ（*Swida macrophylla*（Wall.）Sojak） ミズキ科ミズキ属

核（内果皮）は灰褐色、径 4mm 程度の偏球体。基部に小さく浅い凹みがある。内果皮は硬く、表面には一周する 1 本のやや幅広く浅い縦溝と細く浅い縦溝数本が走る。

・エゴノキ属（*Styrax*） エゴノキ科

種子は灰～黒褐色、長さ 1.2 ～ 1.3cm、径 0.6 ～ 0.7cm 程度の卵体。頂部から基部にかけて 3 本程度の縦溝と縦隆条がある。基部は斜切形で、淡灰褐色、径 3mm 程度の粗面の着点がある。種皮は硬く、表面には微細な粒状網目模様がある。大きさはハクウンボク（*S. obassia* Sieb. et Zucc.）と思われるが、表面の状態がやや悪く、エゴノキ（*S. japonica* Sieb. et Zucc.）との明瞭な区別がつかないため、エゴノキ属にとどめている。

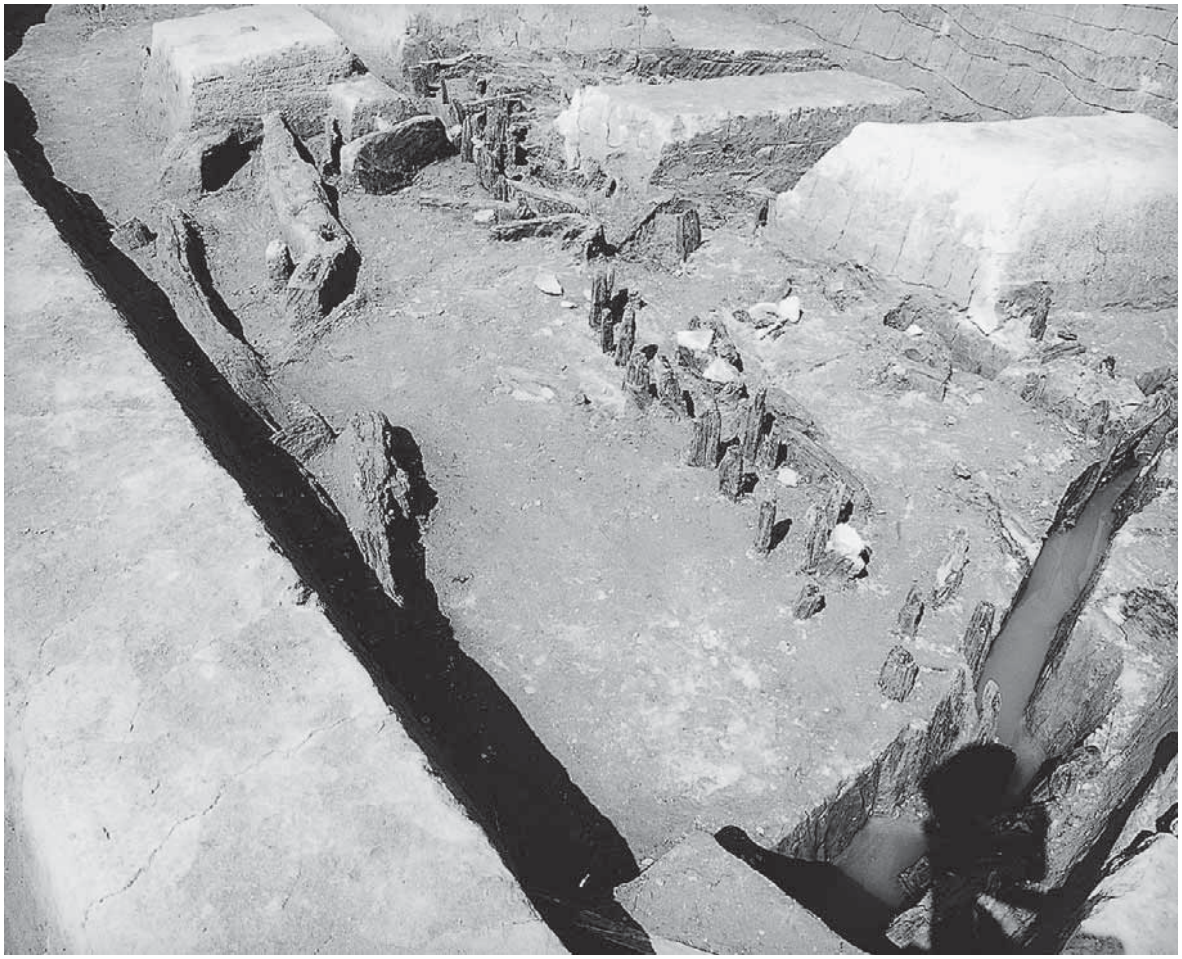
・カラスウリ（*Trichosanthes cucumeroides*（Ser.）Maxim.） ウリ科カラスウリ属

種子は灰褐色、長さ 8.5mm、幅 1cm、厚さ 3mm 程度のやや偏平な横楕円体。正中線は幅 4.5mm 程度の帯状に隆起し、基部に臍がある。種皮表面は粗面で低い突起が散在する。

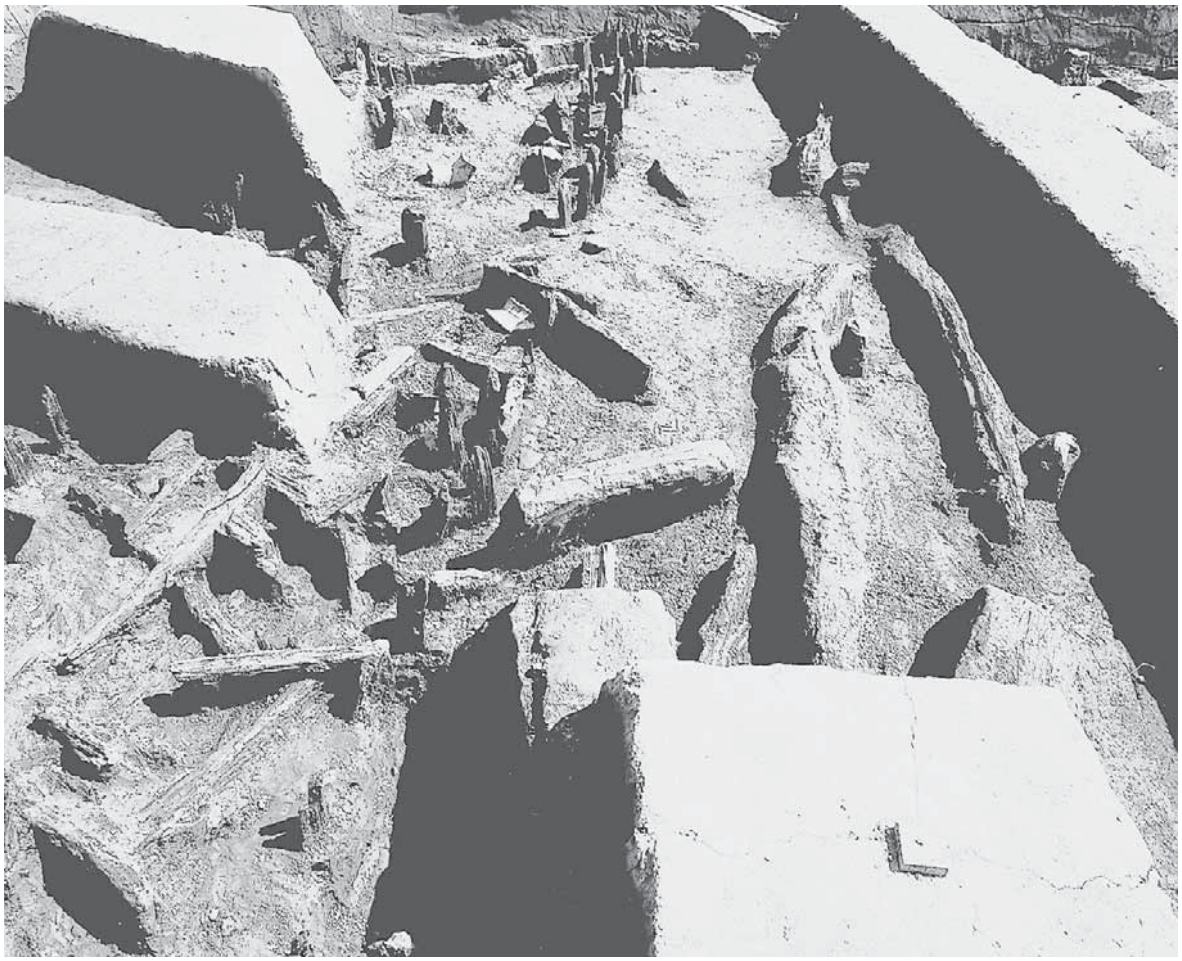
※出土層位に関しては算用数字で表記しているが、その他本文には、ローマ数字で基本層序として表記している。読み替えて頂きたい。

写 真 図 版

大畦畔内敷粗朶技法検出状況（西から）

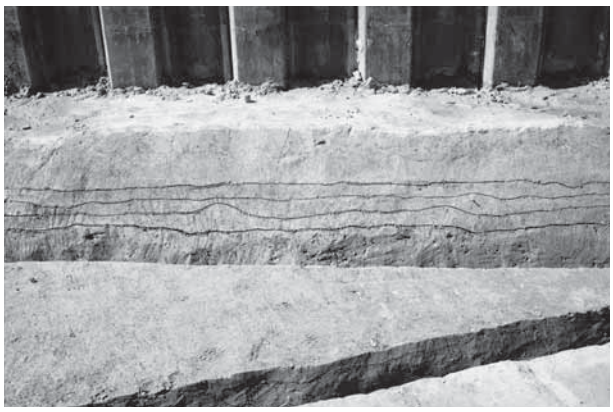


包Ⅷb層ほか耕作面大畦畔検出状況（南から）



包Ⅷb層ほか耕作面粗朶等検出状況（西から）

1　調査区南東壁土層断面　B2-B4（南から）



2　調査区南東壁土層断面　B2-B4（B4からB2に向かって5m）（北東から）

3　調査区南東壁土層断面　B2-B4（W12）（東から）

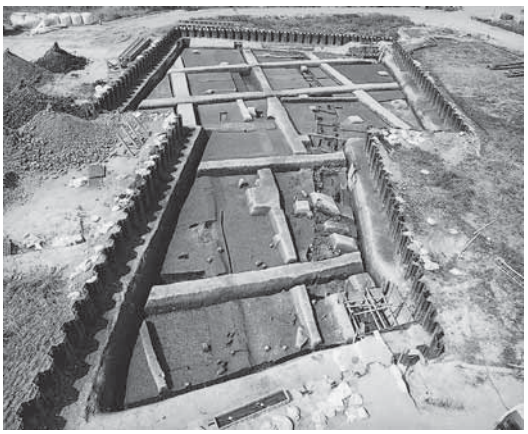
4　調査区北西壁土層断面　C0付近（南東から）

5　U-U’（P-P’）Z13・Y13（南から）

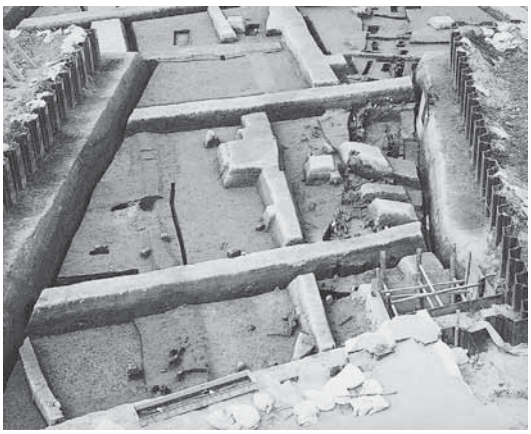
6　調査区南西端土層図（東から）

7　調査区北東壁東寄り　D3-D3’（西から）
（手前　大畦畔検出状況）

8　調査区北東壁南寄り　D3-D3’（南から）

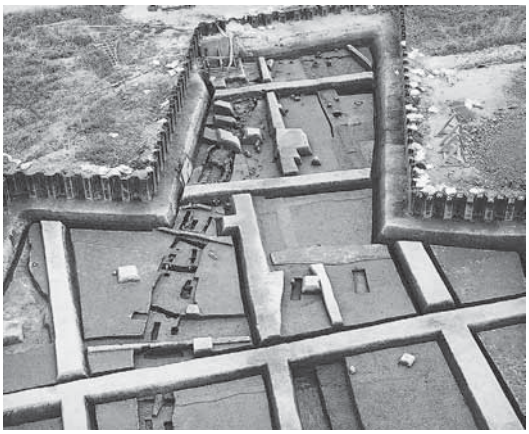


1　包Ⅷb層畦畔検出状況（南東から）

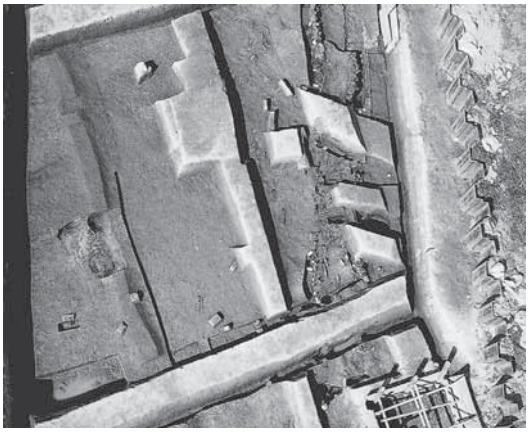


2　包Ⅷb層畦畔検出状況（南東から）

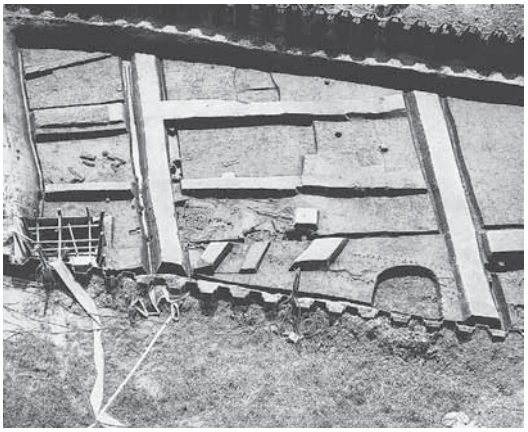
3　包Ⅶ層下層畦畔検出状況（北西から）



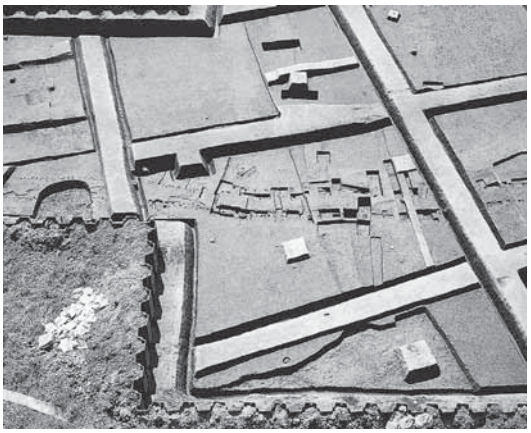
4　包Ⅶ層下層（手前）及び包Ⅷb層（奥）
畦畔検出状況（北西から）



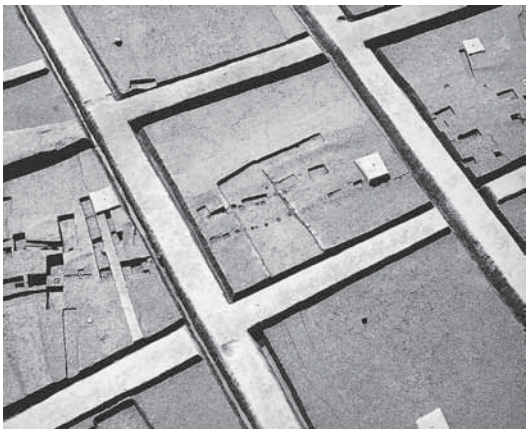
5　包Ⅷb層杭列検出状況（北西から）



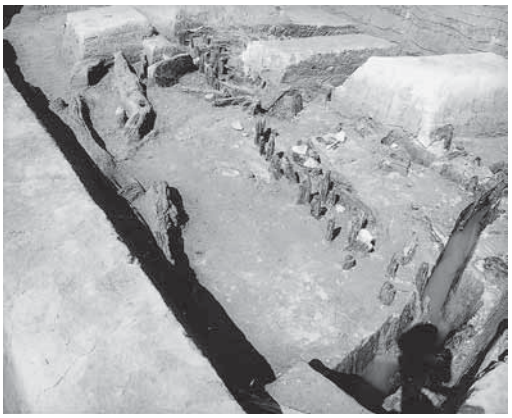
6　包Ⅷb層杭列検出状況（北東から）



7　包Ⅶ層下層杭列出土状況（北東から）

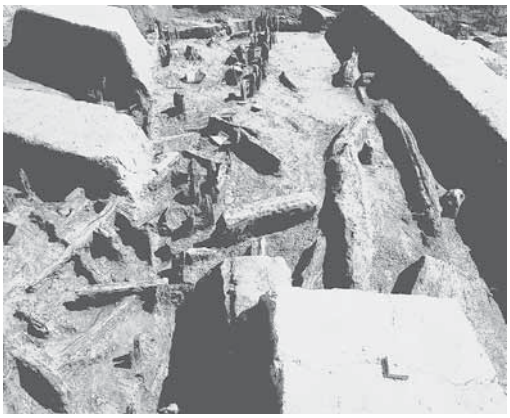


8　包Ⅶ層下層杭列出土状況（東から）

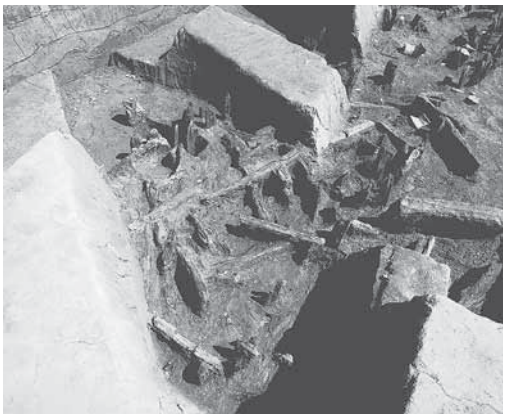


1　包Ⅷb層ほか耕作面大畦畔杭列検出状況（東から）

2　包Ⅷb層ほか耕作面大畦畔杭列検出状況（西から）

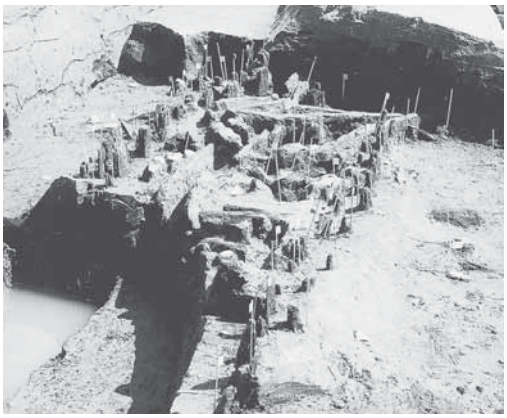


3　包Ⅷb層ほか耕作面大畦畔内粗朶等検出状況（北西から）



4　包Ⅷb層ほか耕作面大畦畔内粗朶等検出状況（西から）

5　包Ⅷb層ほか耕作面大畦畔内粗朶等検出状況（西から）



6　包Ⅷb層ほか耕作面大畦畔杭列検出状況（西から）

7　包Ⅷb層ほか耕作面大畦畔杭列検出状況（北から）

8　包Ⅷb層ほか耕作面大畦畔杭列検出状況（南から）

1　B12　331-335杭断面（T-T’北側）（南から）

2　A11　331-335杭断面（T-T’南側）（南東から）

3　B12　331-335杭断面（T-T’北側）（南東から）

4　B12　H-H’、写真No.1-3（実14：小形扁平）、写真No.1-5（実16：小形扁平）、写真No.1-4杭

5　B12（g-g’）写真No.22-8 ～ 21杭立面（南西から）

6　Z15（e-e’）写真No.10-1杭断面（東から）

7　C11（ア-ア’）写真No.24-1 ～ 6杭断面（南から）

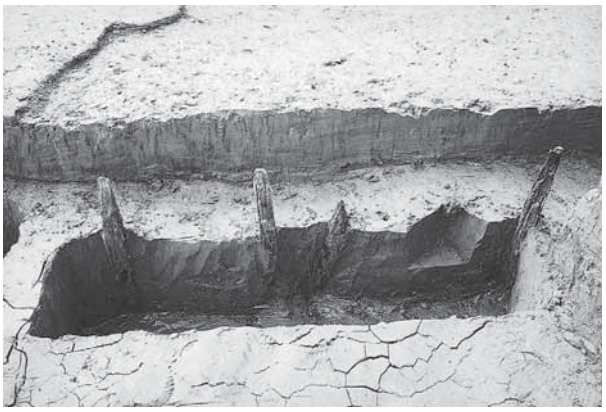
8　B13　写真No.11-1 ～ 3杭立面（西から）

1　B12　写真No.22-1 ～ 8杭断面（南から）

2　B12　エーエ’杭断面（南から）

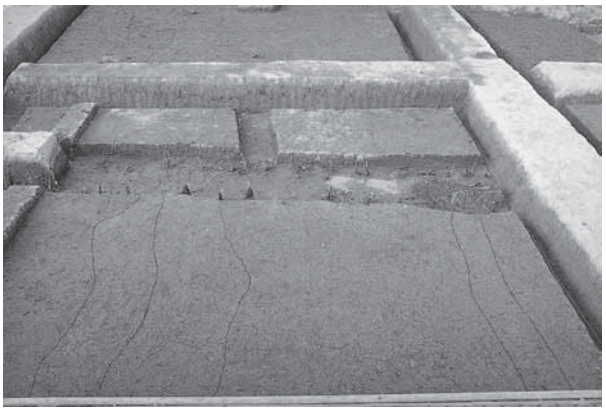
3　K14・Z14　K-K’杭断面（東から）

4　杭立面（南から）



5　Z14　杭立面（北から）

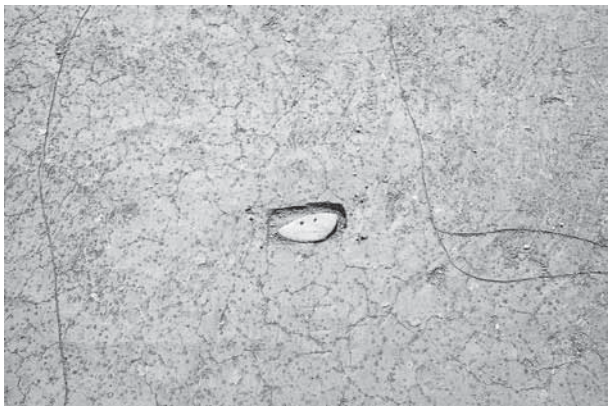
6　A14　杭立面（南から）



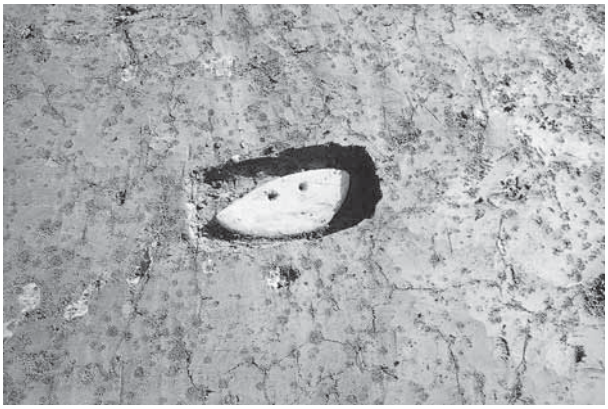
7　Z14・15，Y15　包Ⅷ層（下層）畦畔・水路検出状況（南から）

8　A15･16，Z15･16　包Ⅸ層畦畔検出状況（北から）

1　Y13　包Ⅸ層畦畔及び石製穂摘具検出状況（北から）

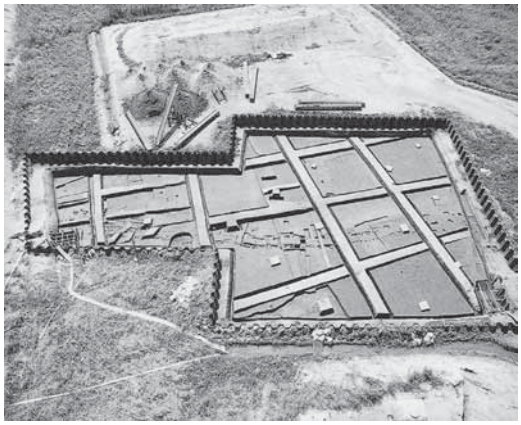


2　Y13　包Ⅸ層畦畔及び石製穂摘具検出状況（北から）



3　Y13　包Ⅸ層畦畔及び石製穂摘具検出状況（北から）

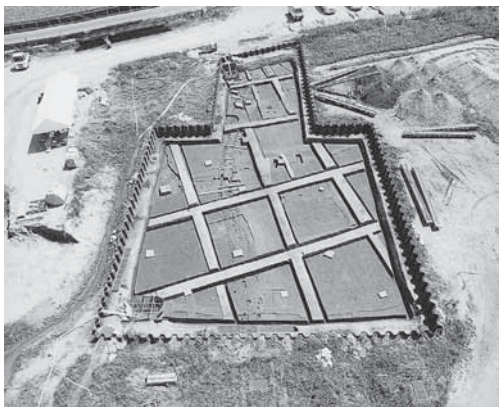
4　包Ⅷ層耕作面検出状況（南東から）



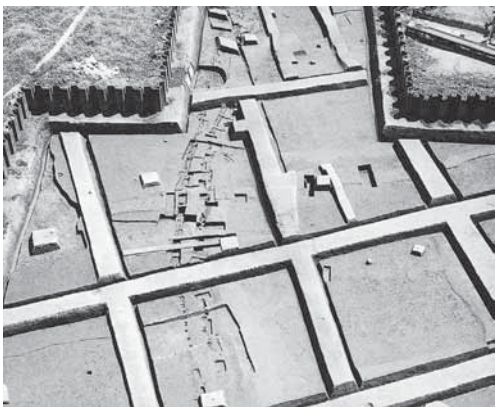
5　包Ⅷ層耕作面検出状況（北東から）

6　包Ⅷ層耕作面検出状況（南東から）

7　包Ⅷ層耕作面南側検出状況（南東から）

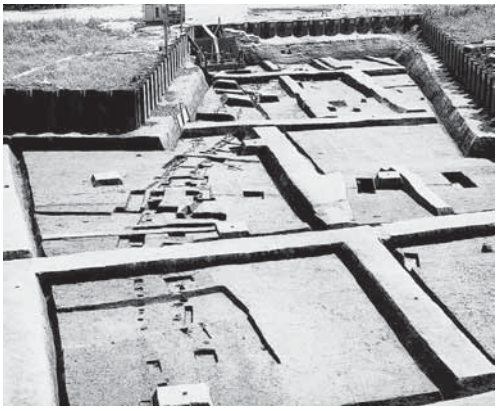


1　包Ⅷ層下層～包Ⅷ層杭列・畦畔検出状況（北西から）



2　包Ⅷ層下層～包Ⅷ層杭列・畦畔西側検出状況（北西から）

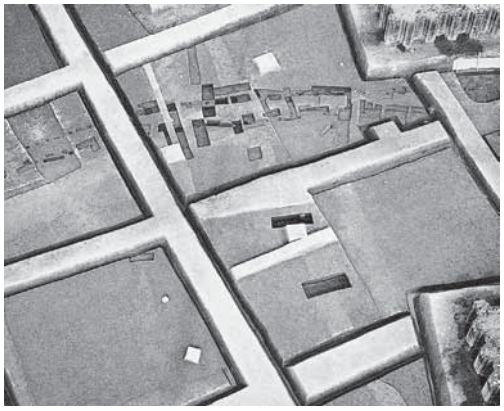
3　包Ⅷ層下層～包Ⅷ層杭列・畦畔検出状況（北西から）



4　包Ⅷ層下層～包Ⅷ層杭列・畦畔検出状況（北西から）

5　包Ⅷ層下層～包Ⅷ層杭列・畦畔検出状況（南西から）

6　包Ⅷ層下層～包Ⅷ層杭列・畦畔西側検出状況（北から）



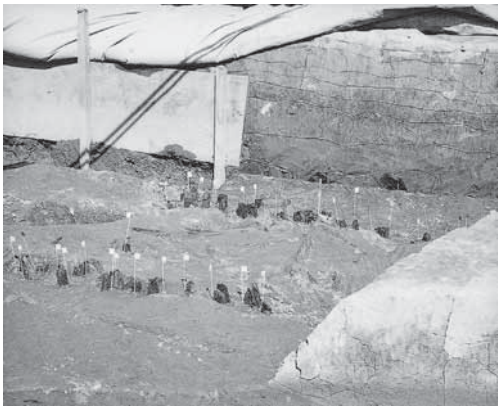
7　包Ⅷ層下層～包Ⅷ層杭列・畦畔西側検出状況（南西から）

8　包Ⅷ層下層～包Ⅷ層杭列・畦畔西側検出状況（東から）

Ph. 8　　包Ⅷb ～包Ⅶ層下層ほか杭列出土状況／包Ⅶb層検出状況

1　C11　包Ⅷb ～包Ⅶ層下層ほか杭列検出状況（南から）

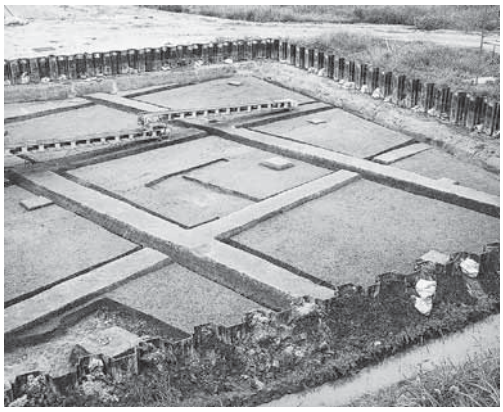
2　C12　包Ⅷb ～包Ⅶ層下層ほか杭列検出状況（南から）



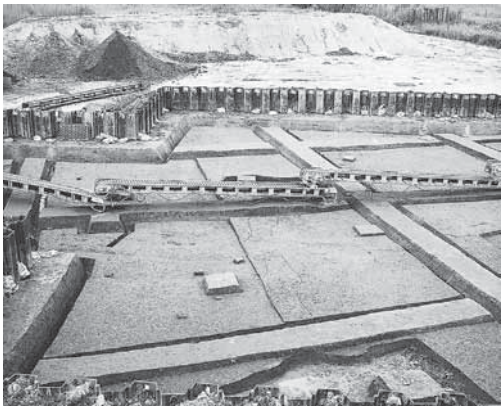
3　B12・C12　包Ⅷb ～包Ⅶ層下層ほか杭列検出状況（南西から）

4　C12　包Ⅷb ～包Ⅶ層下層ほか杭列検出状況（南から）

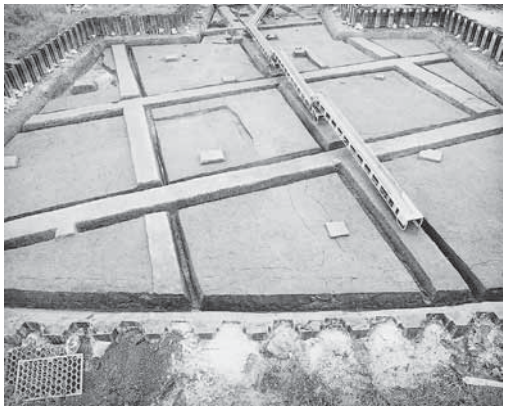
5　包Ⅶb層西側耕作面検出状況（北から）



6　包Ⅶb層西側耕作面検出状況（東から）

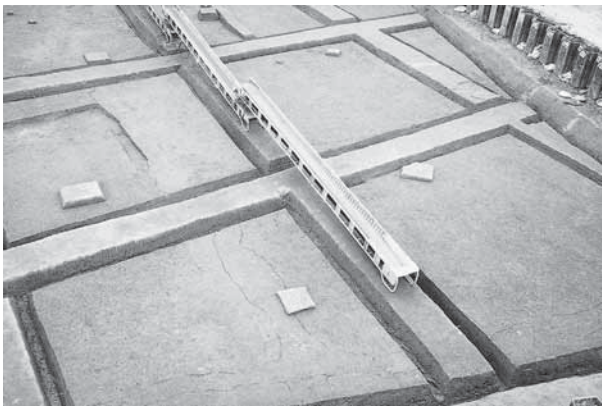


7　包Ⅶb層西側耕作面検出状況（北から）

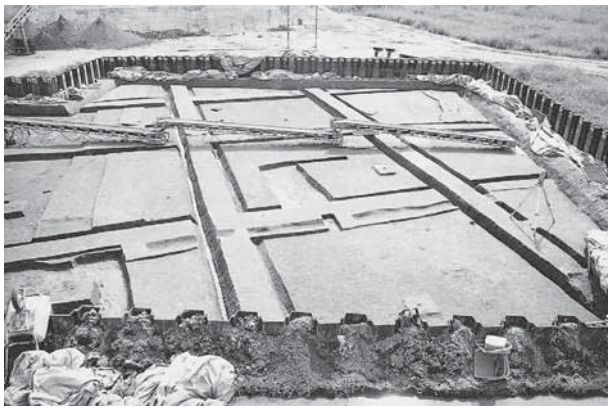


8　包Ⅶb層西側耕作面検出状況（北西から）

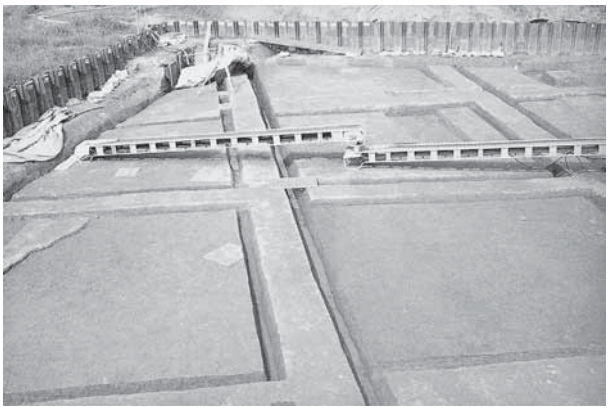
1　Y10・Z9　包Ⅷb層畦畔及び須恵器出土状況（南から）



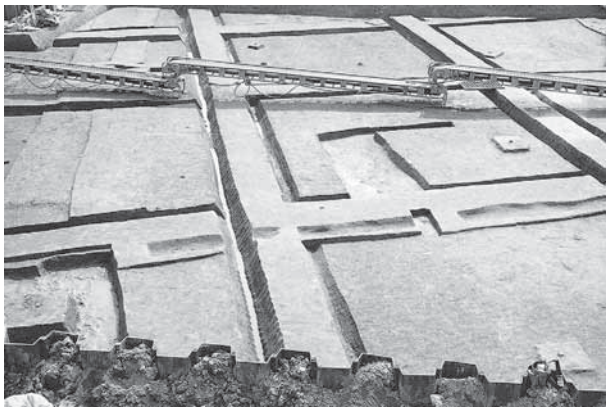
2　D9　包Ⅷa層畦畔検出状況（北から）



3　包Ⅶb層西側耕作面検出状況（北東から）

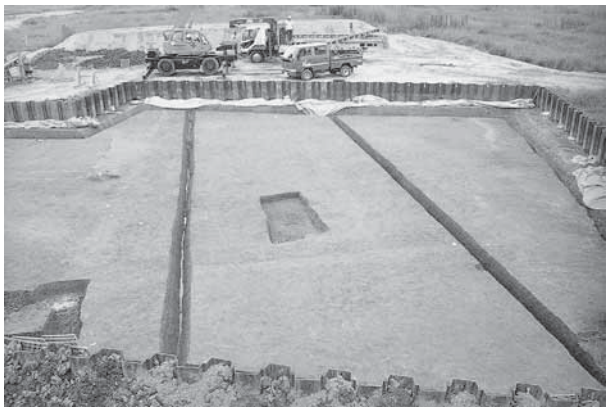


4　包Ⅶb層西側耕作面検出状況（南東から）

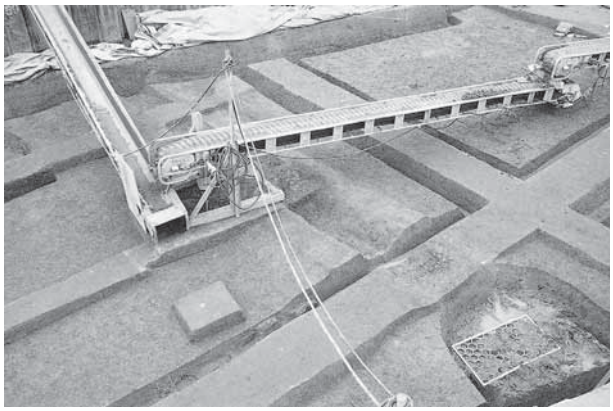


5　包Ⅶb層西側耕作面検出状況（北東から）

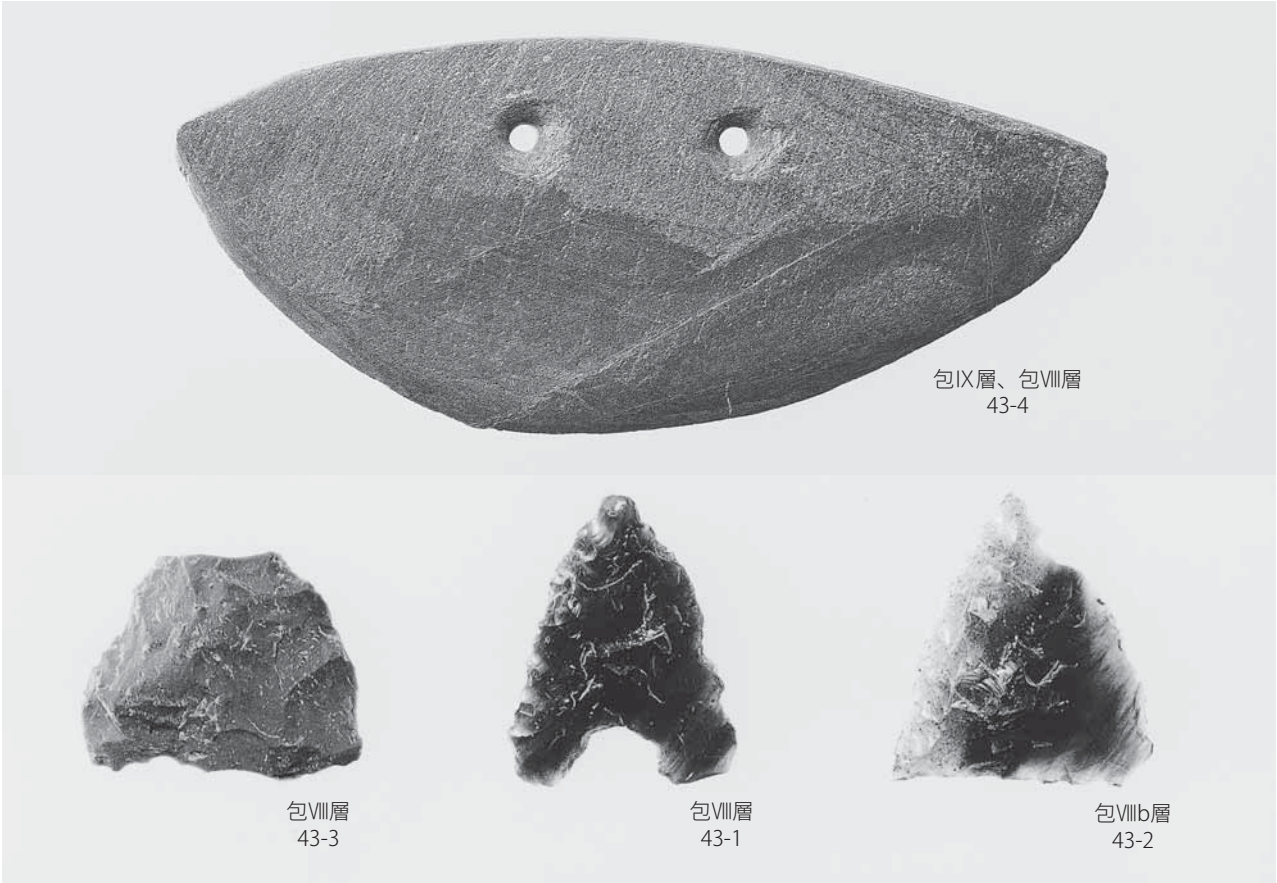
6　包Ⅶa層西側耕作面検出状況（北西から）



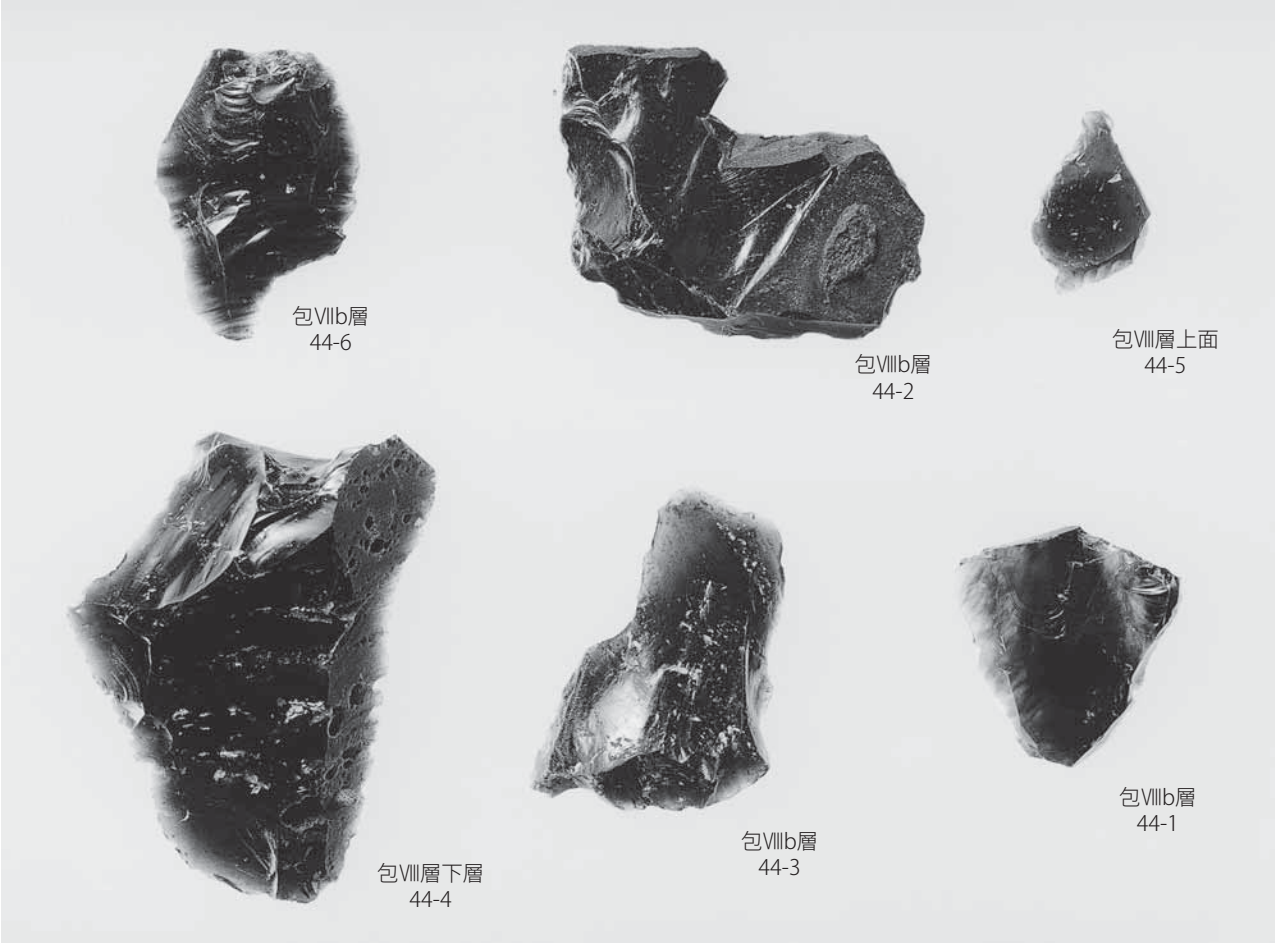
7　包Ⅶa層西側耕作面検出状況（北東から）



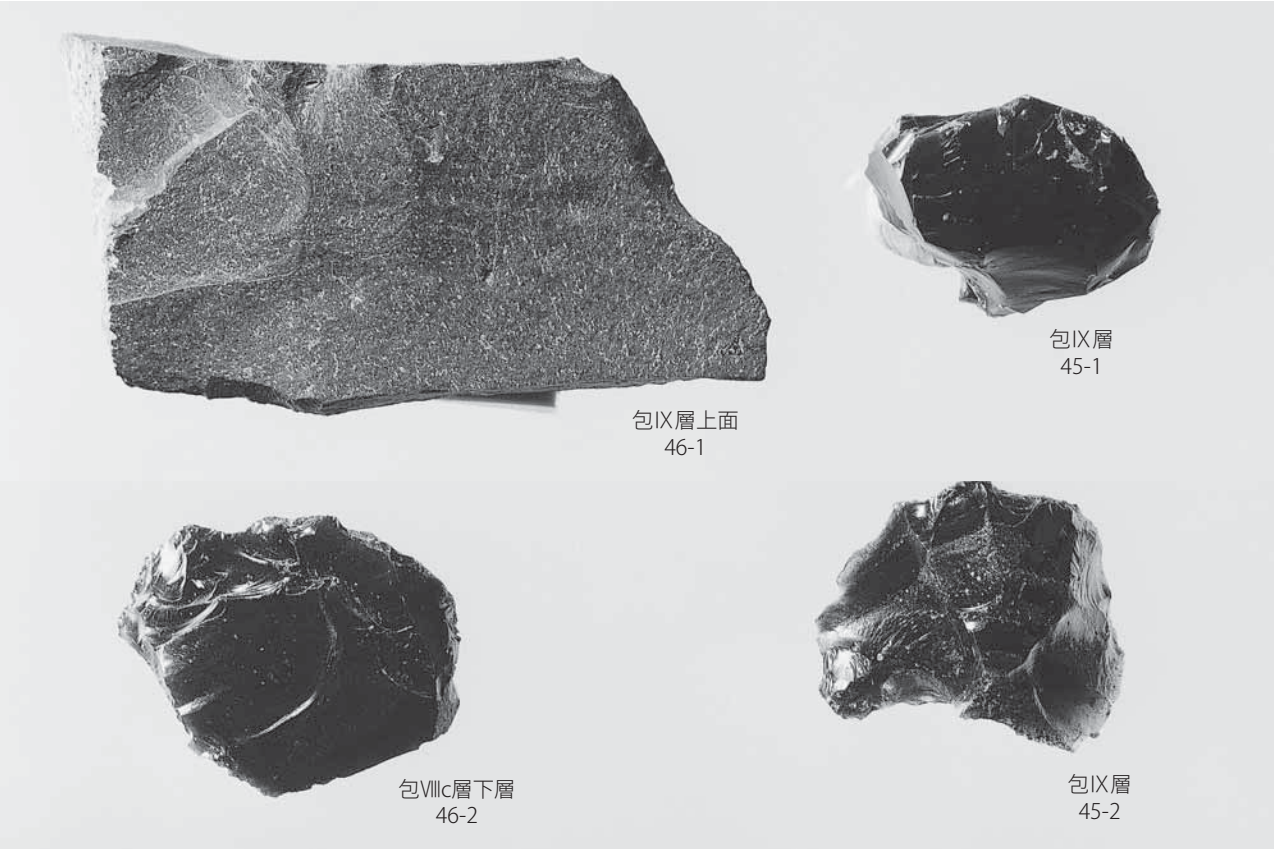
8　包Ⅵc層西側溝検出状況（東から）



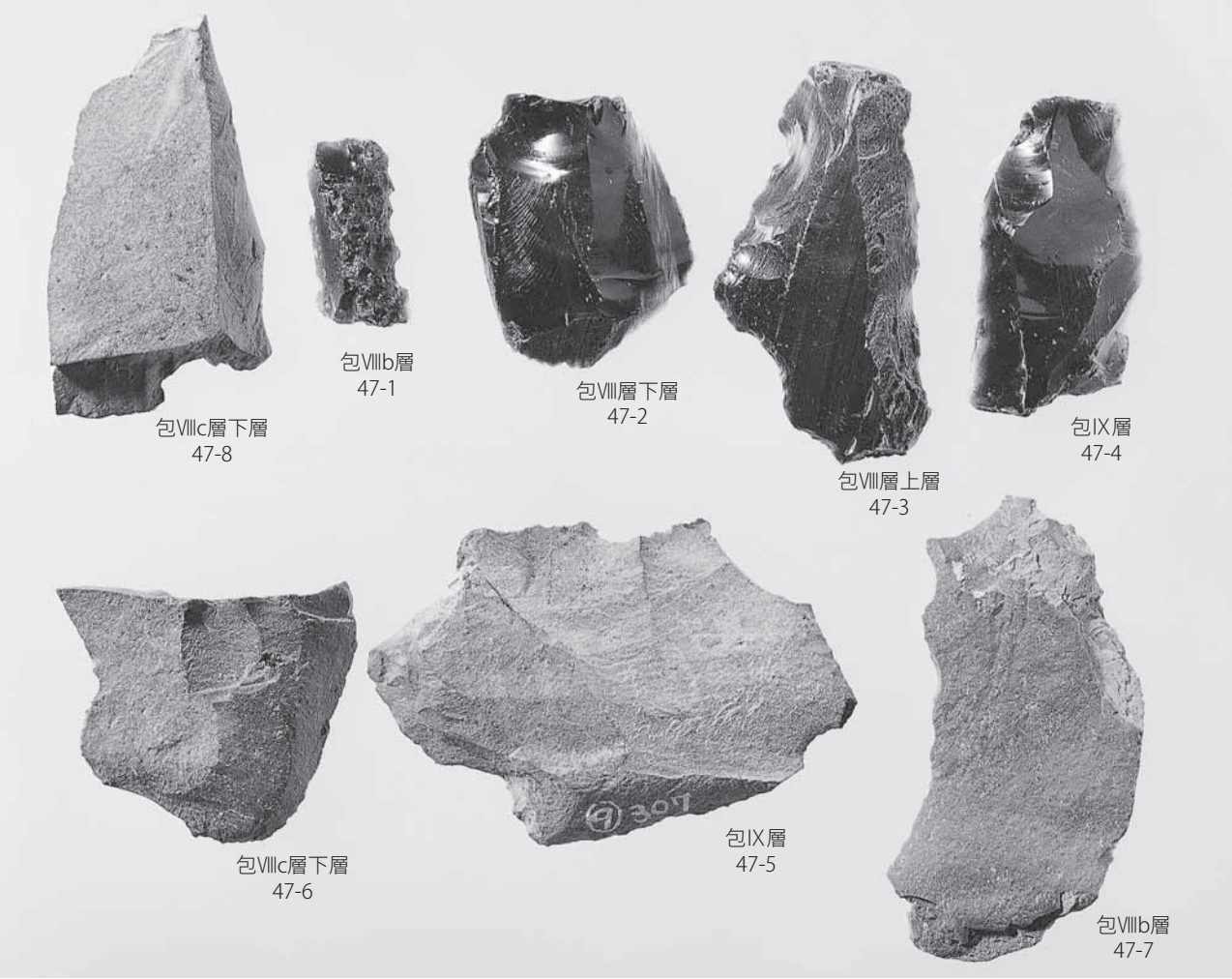
1．包Ⅸ層畦畔上出土（石製穂摘具）、包Ⅷ層、包Ⅷb層出土石器（打製石鏃）



2．包Ⅶb ～包Ⅷb層出土石器（スクレイパー等）

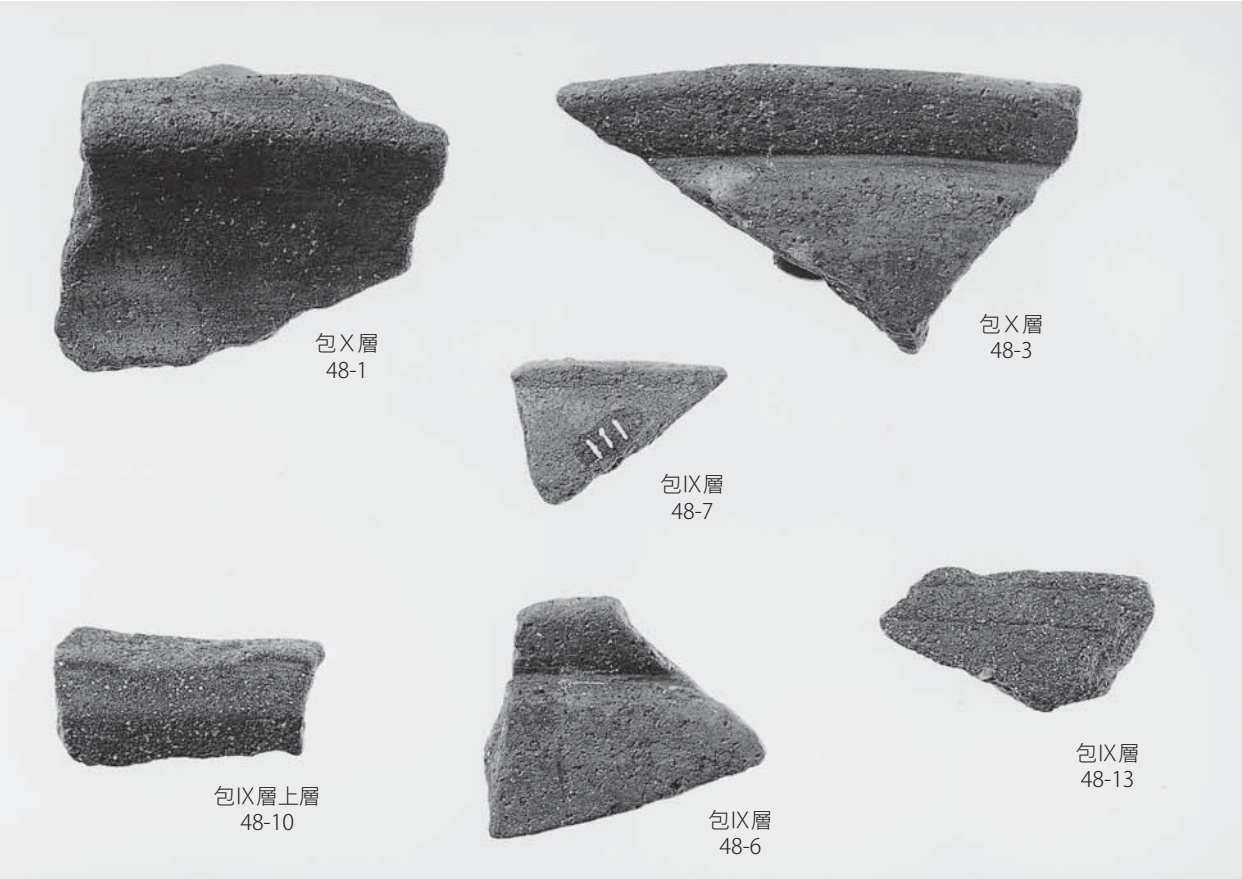


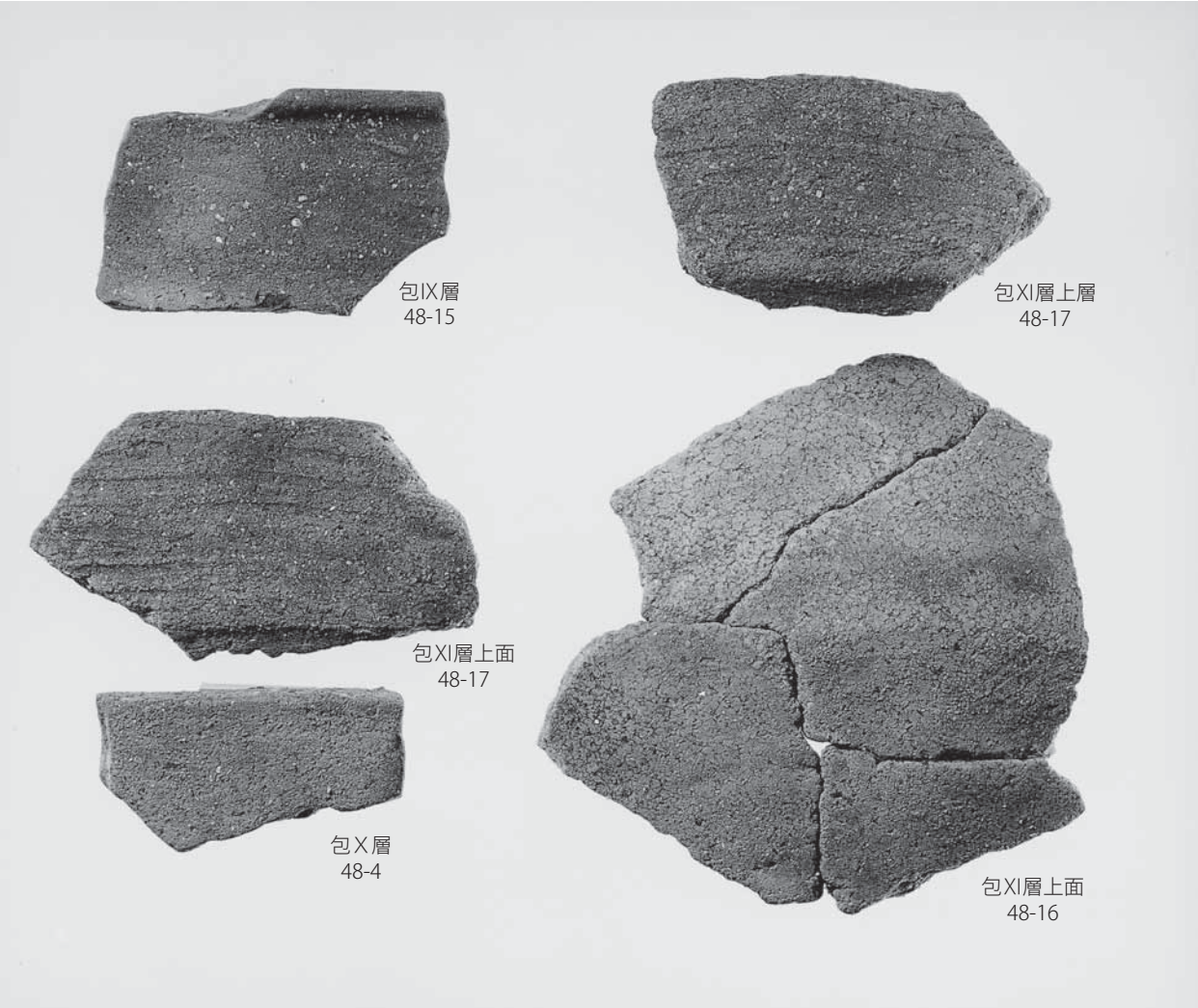
１．包Ⅸ層、包Ⅷc層下層出土石器（石核）

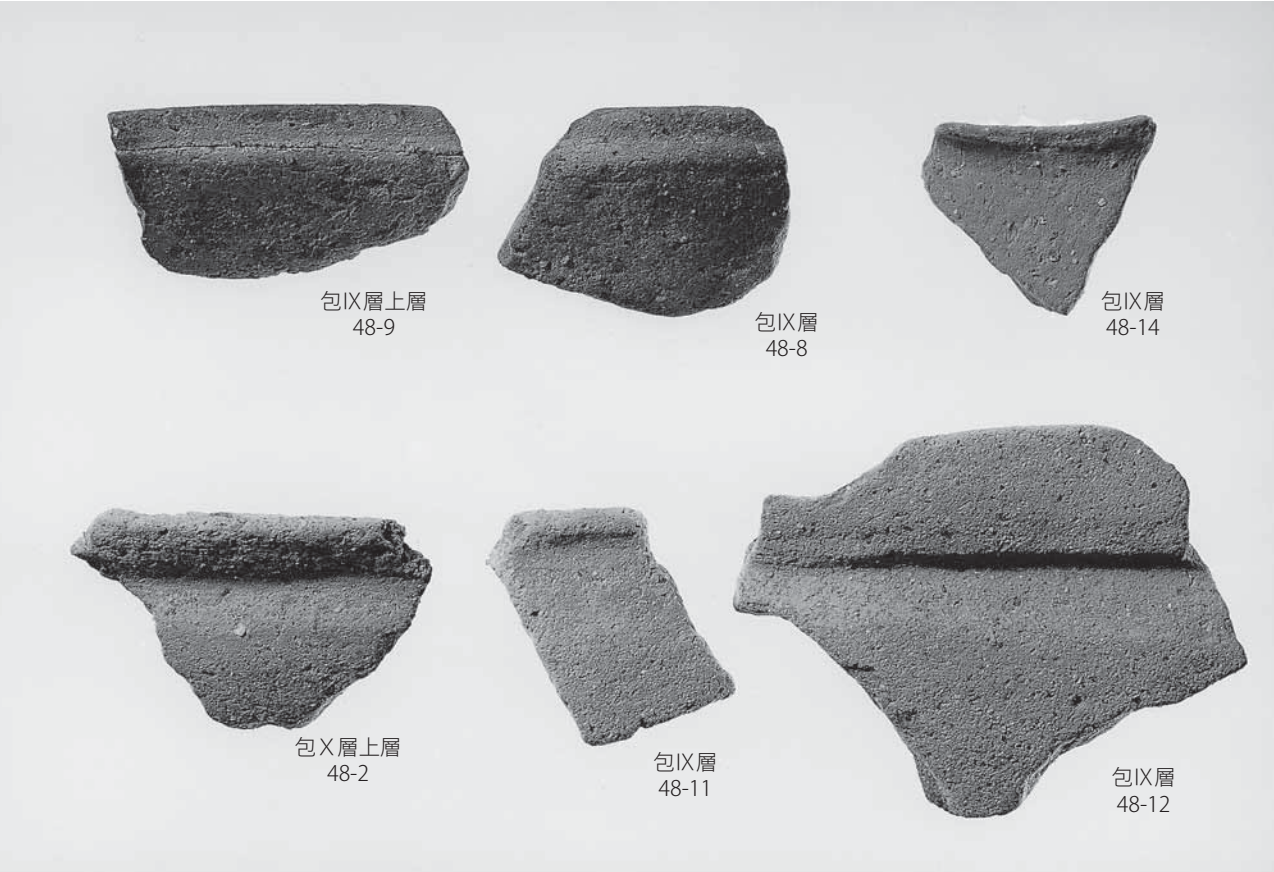


２．包Ⅷ層上層～包Ⅸ層出土石器（剥片）

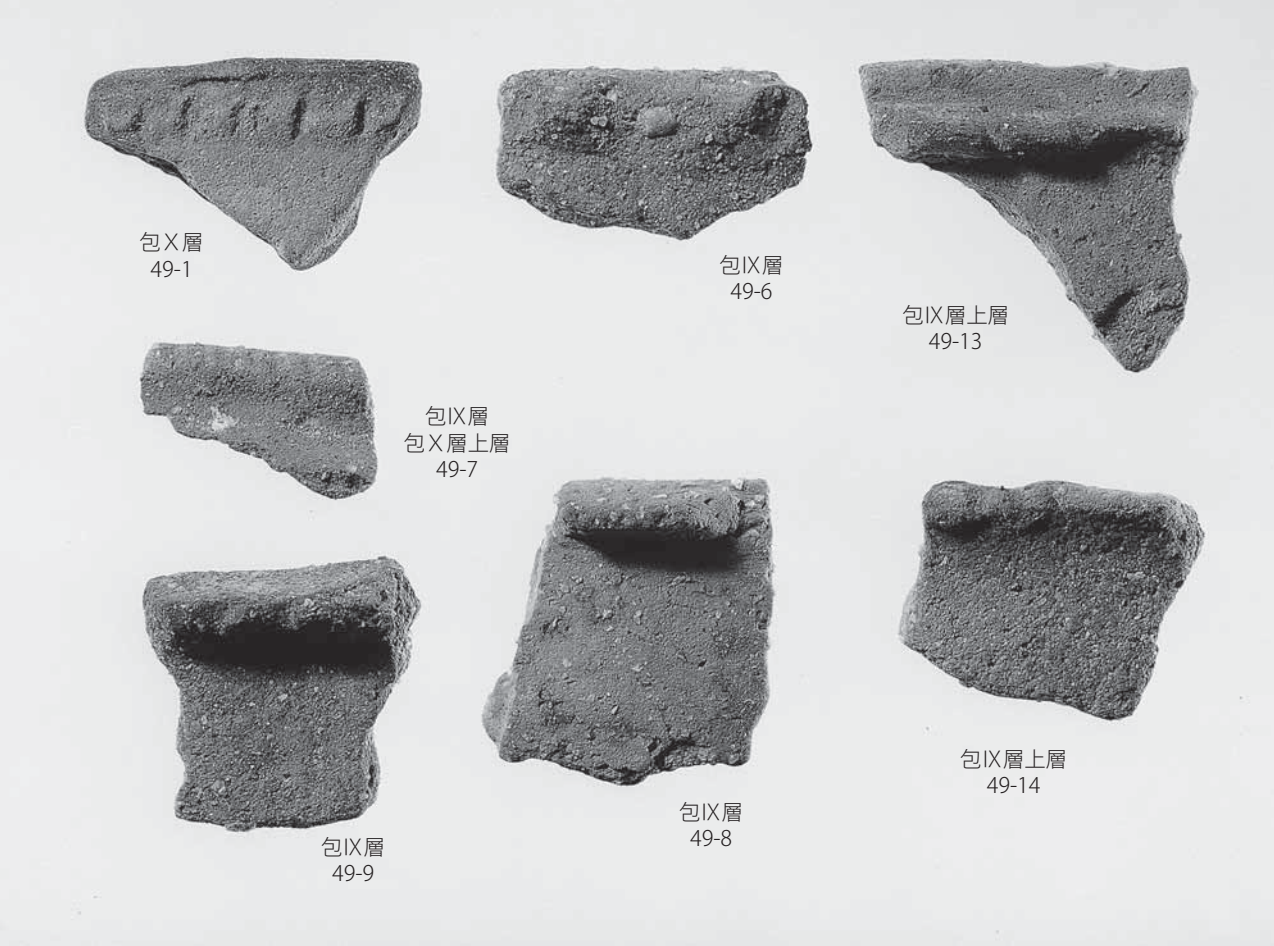
包Ⅹ・包Ⅸ層出土　縄文土器（精製土器）



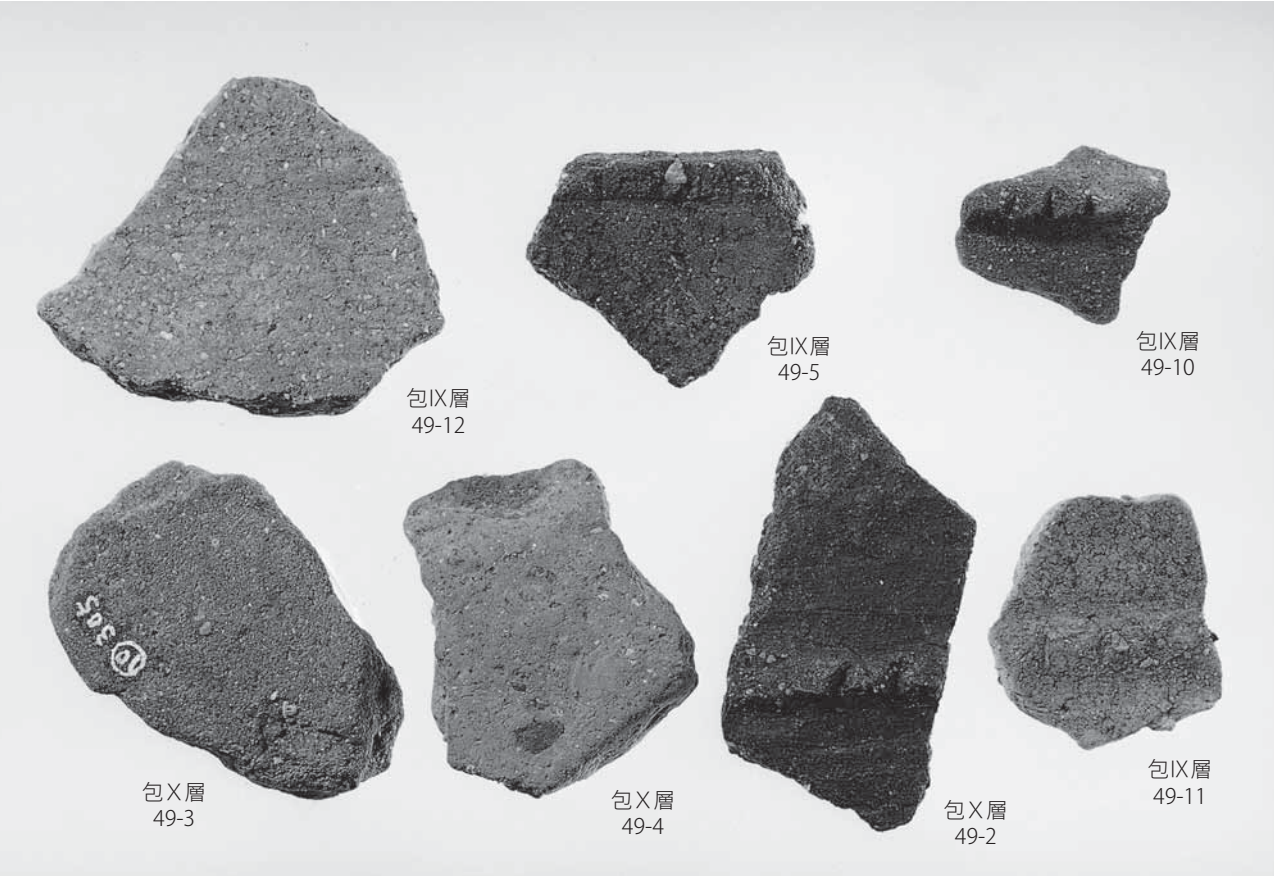




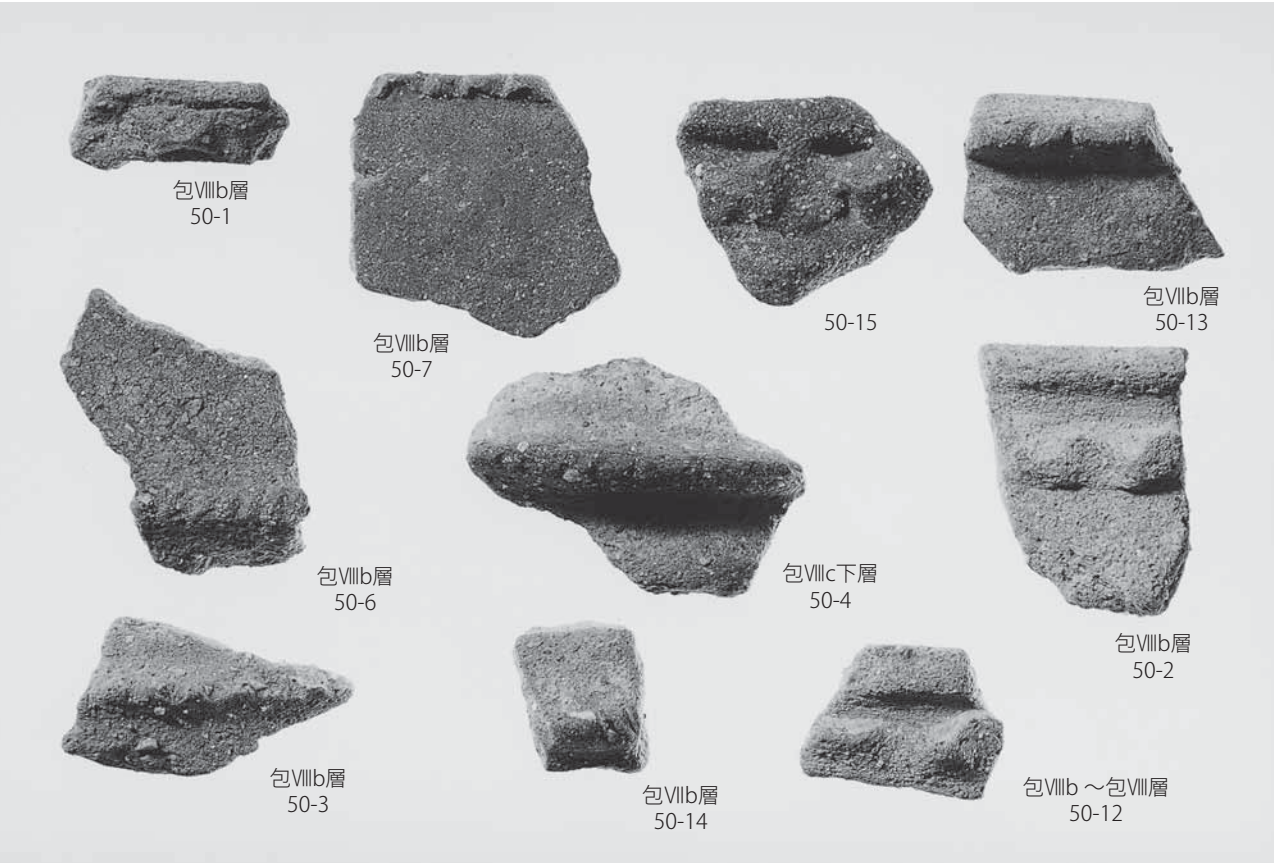
1．包Ⅹ・包Ⅸ層出土　縄文土器（精製土器）



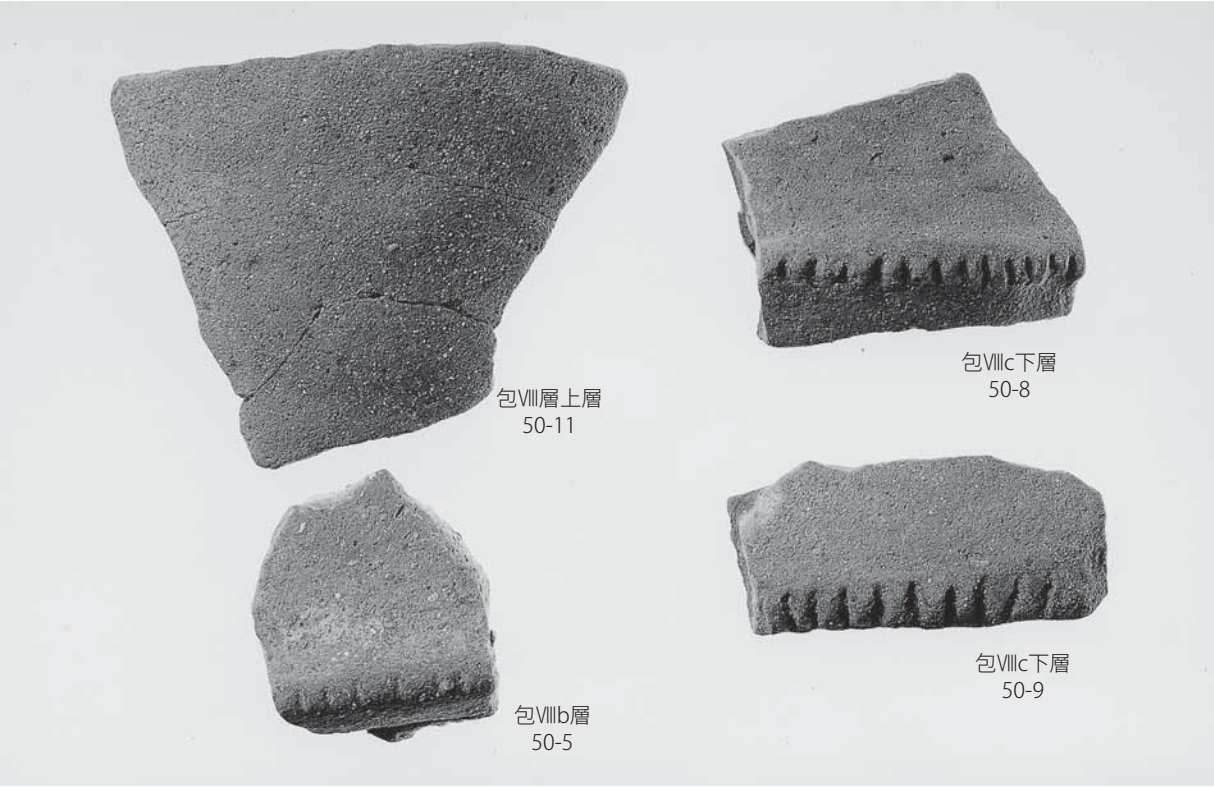
2．包Ⅹ・包Ⅸ層出土　縄文土器（粗製土器）



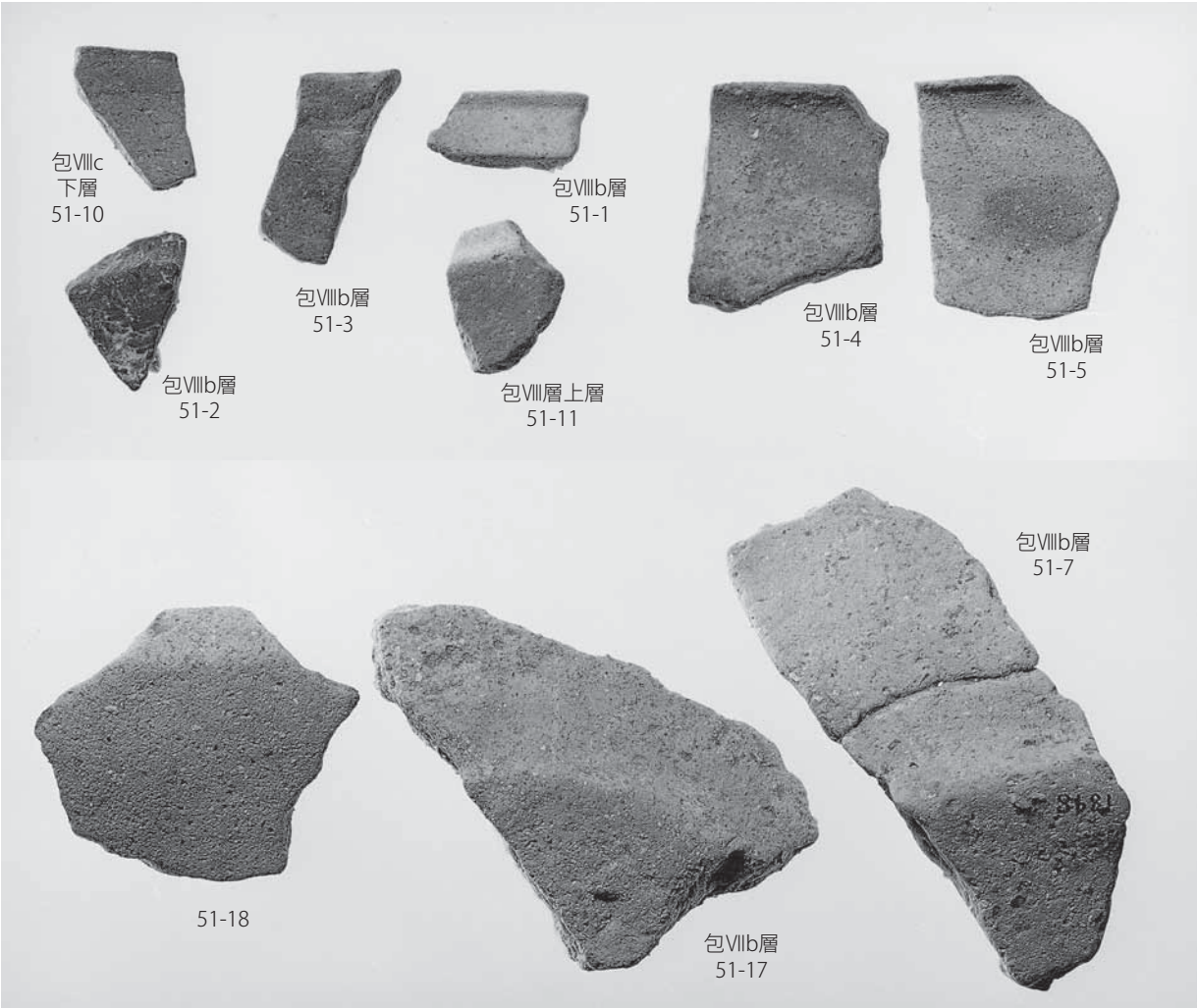
1．包Ⅹ・包Ⅸ層出土　縄文土器（粗製土器）



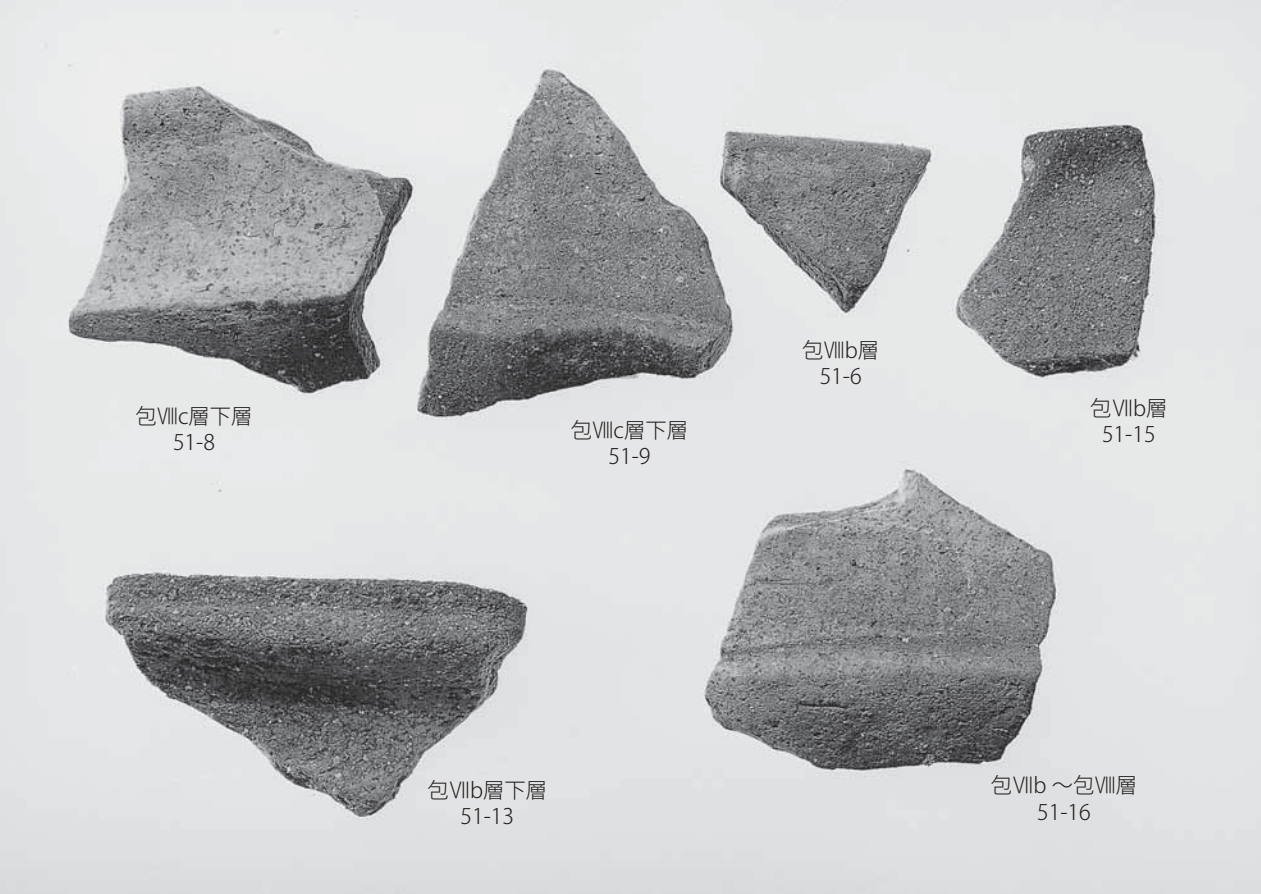
2．包Ⅷb・包Ⅷc・包Ⅷ層下・包Ⅶb層ほか出土　縄文土器（粗製土器）



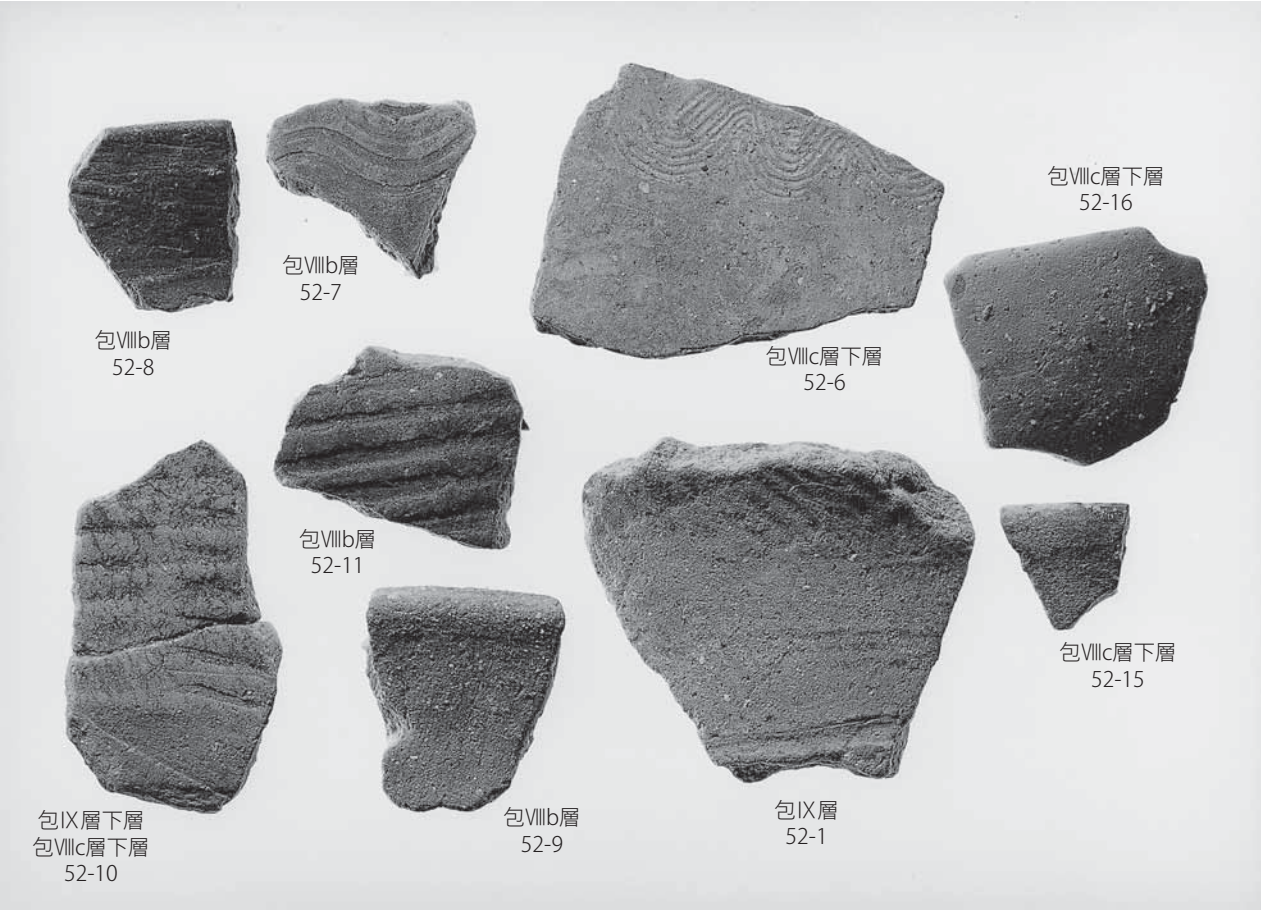
1．包Ⅷb・包Ⅷc・包Ⅷ層下ほか出土　縄文土器（粗製土器）



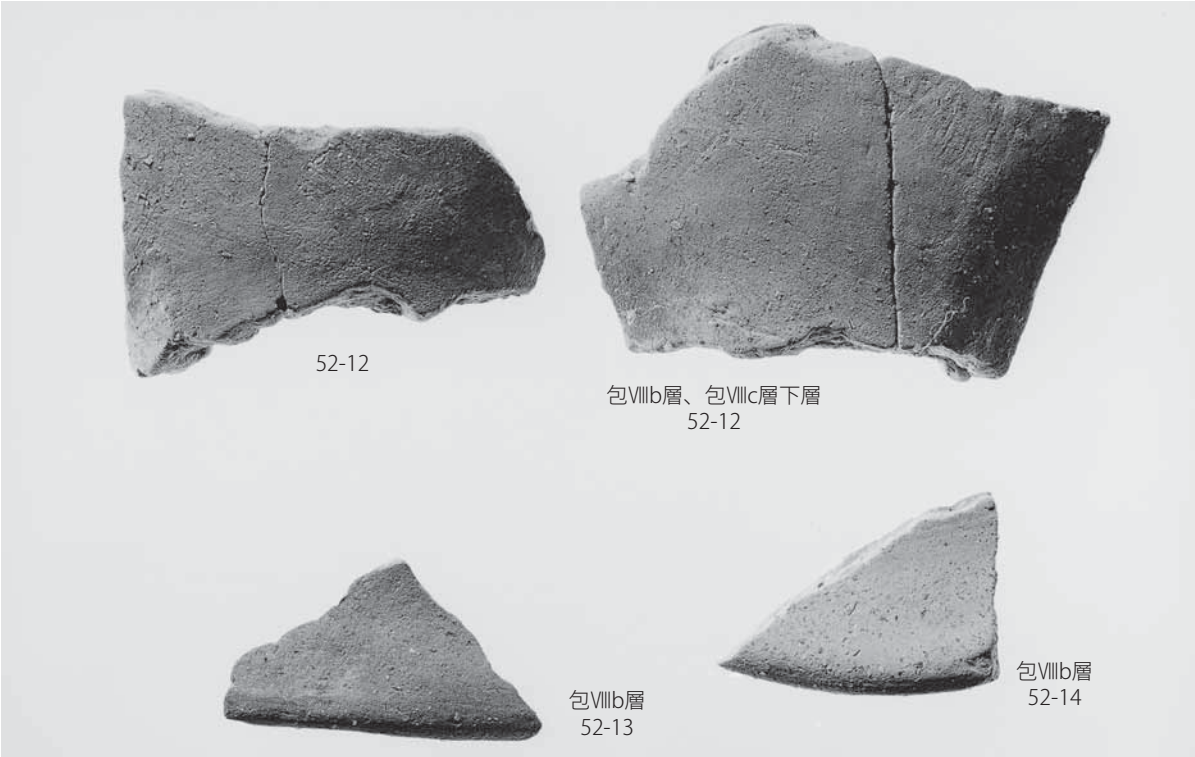
2．包Ⅷb・包Ⅷc・包Ⅷ・包Ⅶb層ほか出土　縄文土器（精製土器）



1．包Ⅷb・包Ⅷc・包Ⅶ・包Ⅶb層ほか出土　縄文土器（精製土器）

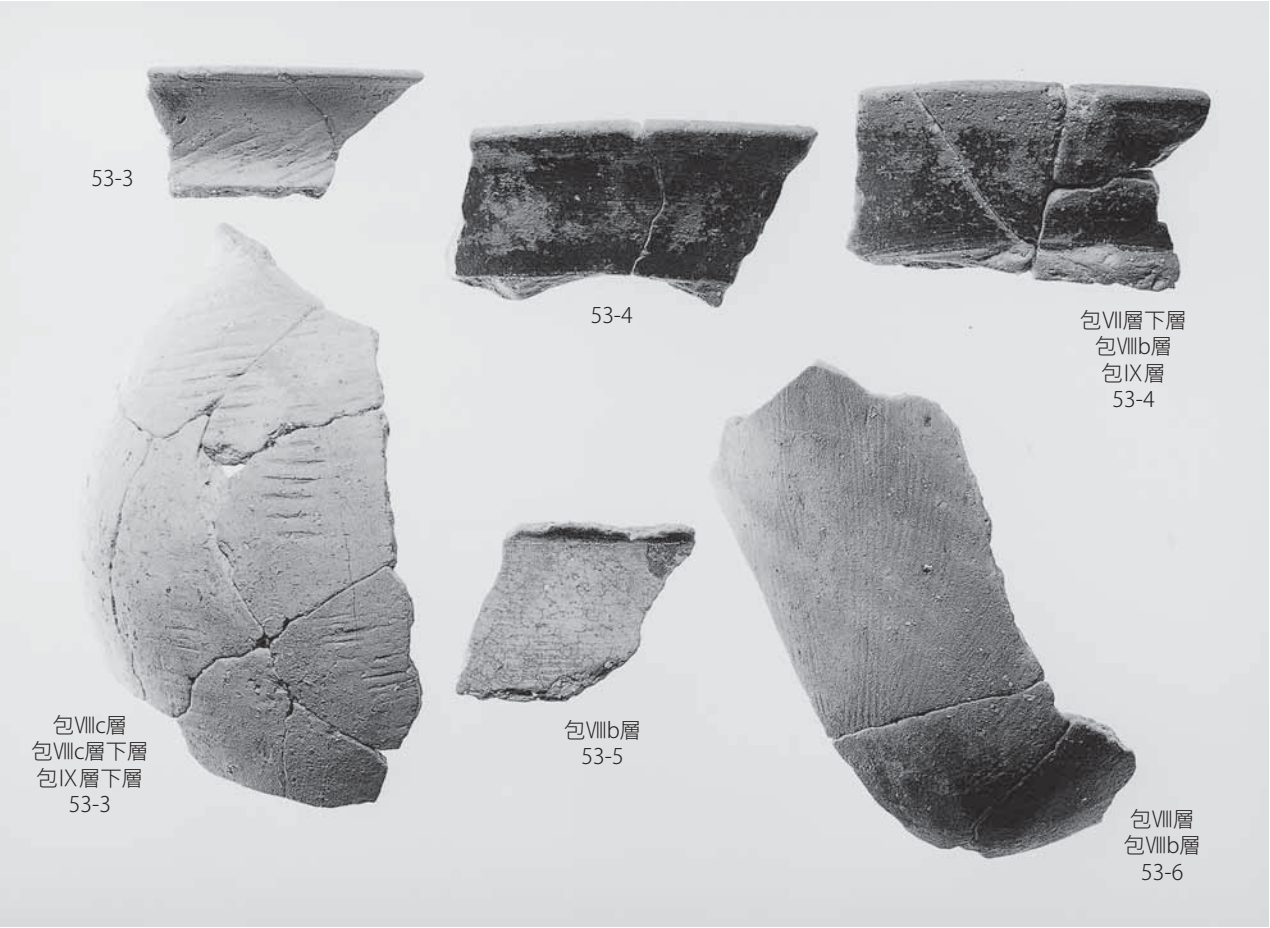


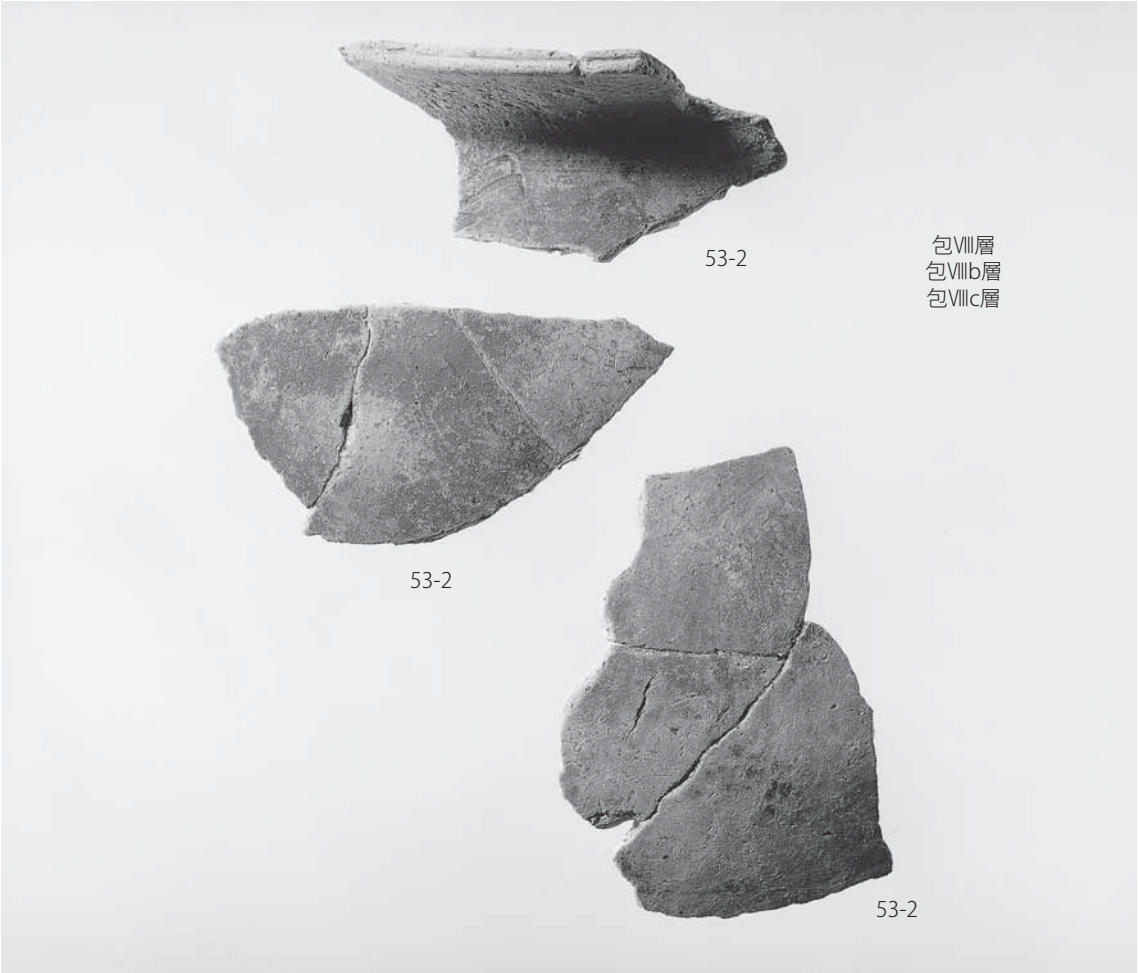
2．包Ⅸ・包Ⅷb・包Ⅷc層出土　弥生土器

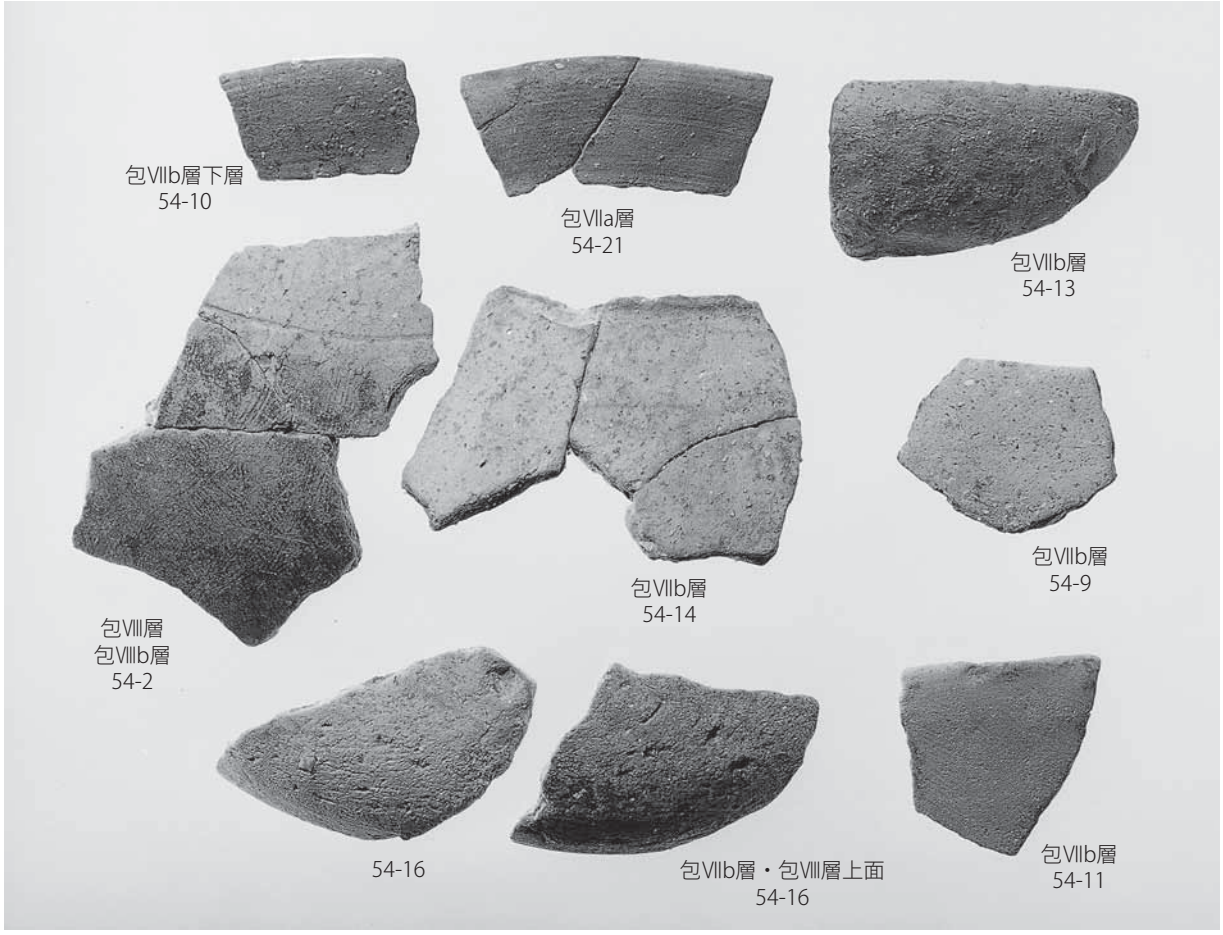


1．包Ⅷb・包Ⅷc層出土　弥生土器

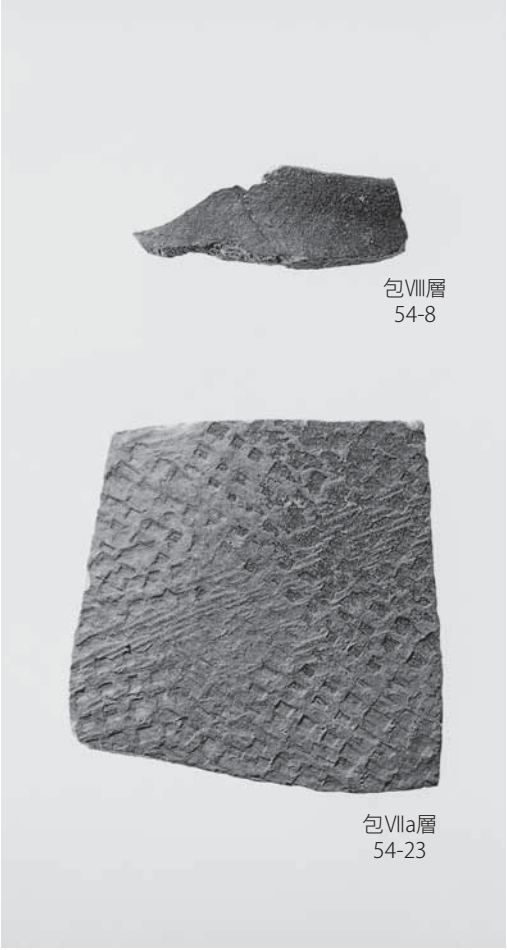
2．包Ⅷc層下層ほか出土土器　弥生終末～古墳時代初頭土器


53-3
53-4
包Ⅶ層下層
包Ⅷb層
包Ⅸ層
53-4
包Ⅷc層
包Ⅷc層下層
包Ⅸ層下層
53-3
包Ⅷb層
53-5
包Ⅷ層
包Ⅷb層
53-6

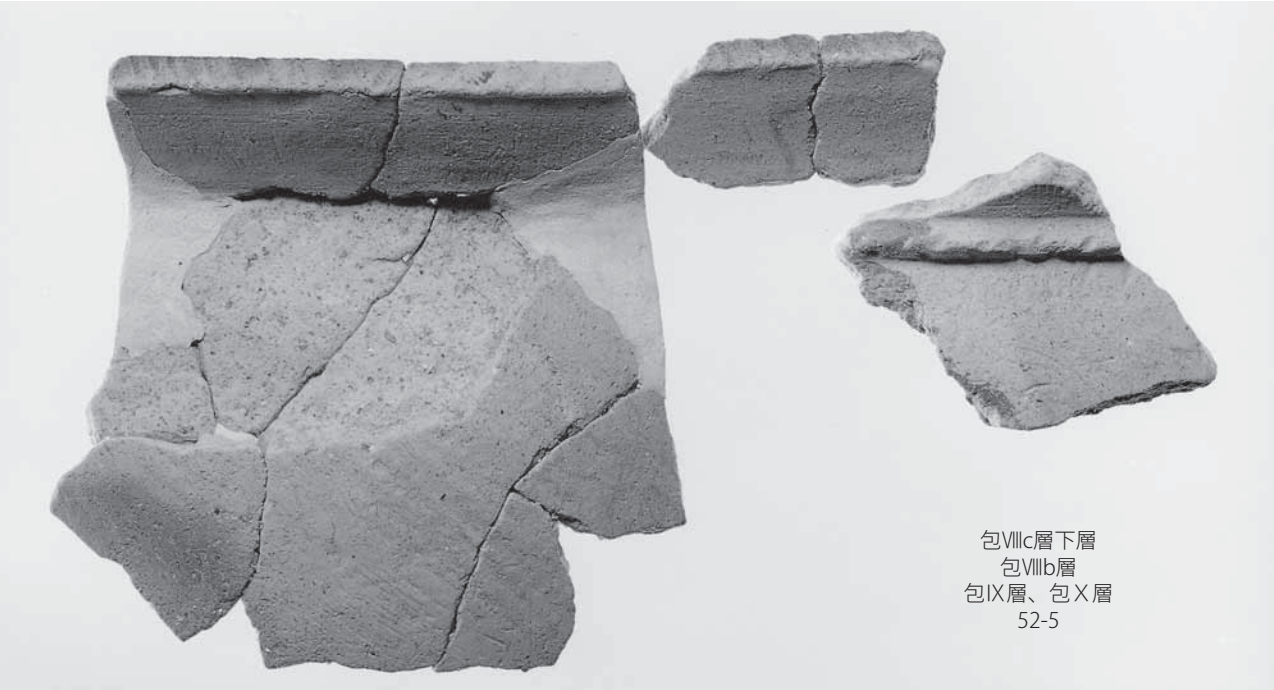

53-2
包Ⅷ層
包Ⅷb層
包Ⅷc層
53-2
53-2


包Ⅶb層下層
54-10
包Ⅶa層
54-21
包Ⅶb層
54-13
包Ⅷ層
包Ⅷb層
54-2
包Ⅶb層
54-14
包Ⅶb層
54-9
54-16
包Ⅶb層・包Ⅷ層上面
54-16
包Ⅶb層
54-11

包Ⅷ層上層
54-6
包Ⅶa層
54-20
包Ⅷ層
54-3
包Ⅶb層下層
54-19
包Ⅷ層上層
54-5
包Ⅶb層
54-18


包Ⅷ層
54-8
包Ⅶa層
54-23

包Ⅸ・包Ⅷb・包Ⅷc層出土　弥生土器


包Ⅷc層下層
包Ⅷb層
包Ⅸ層、包Ⅹ層
52-5

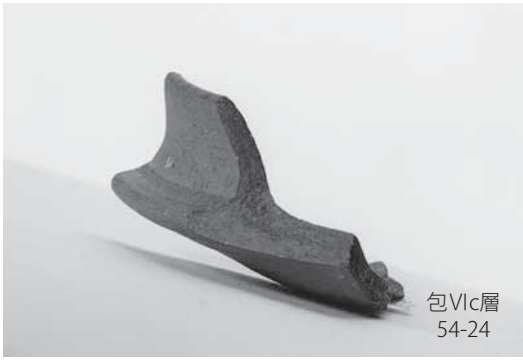
包Ⅸ層
包Ⅷ層
52-3

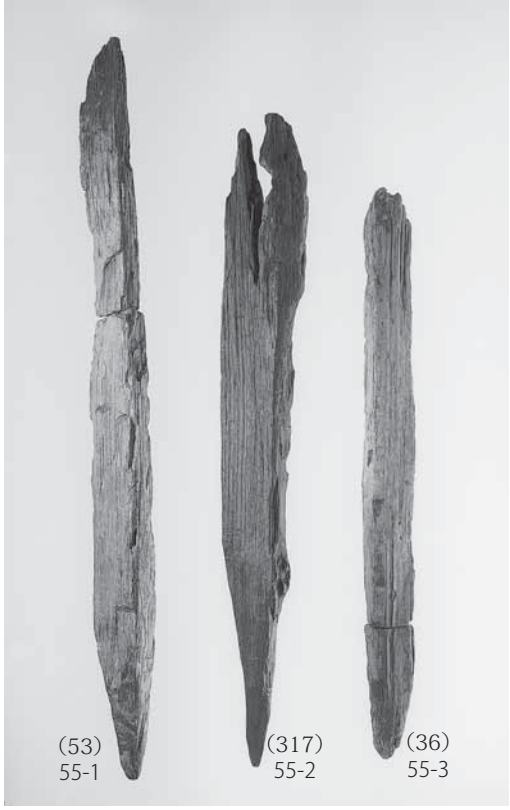
54-1

包Ⅶa層
54-15

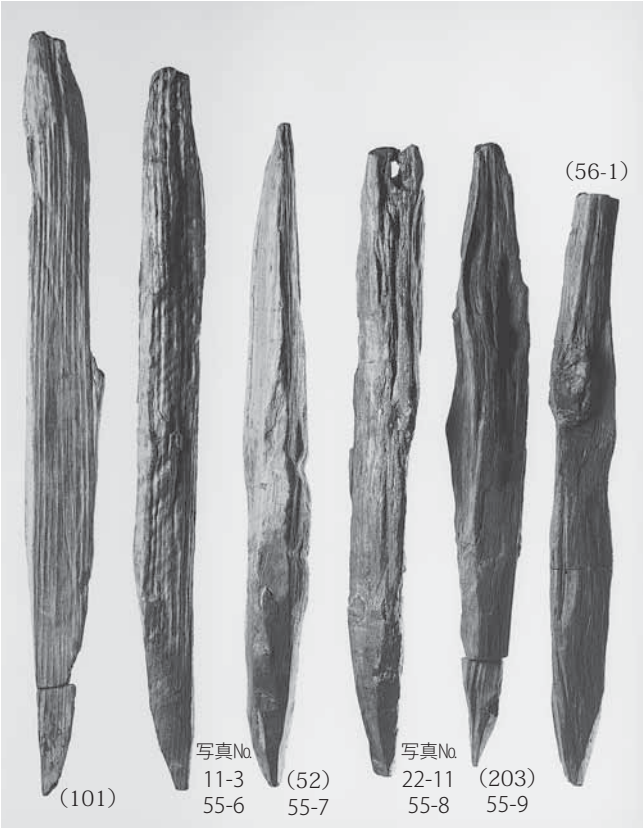
包Ⅶb層
54-17

包Ⅷ層
54-7


包Ⅵc層
54-24



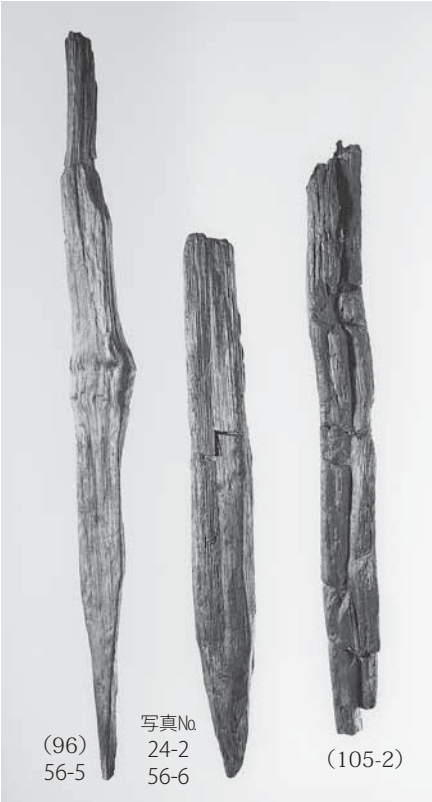
大形、断面三角形杭

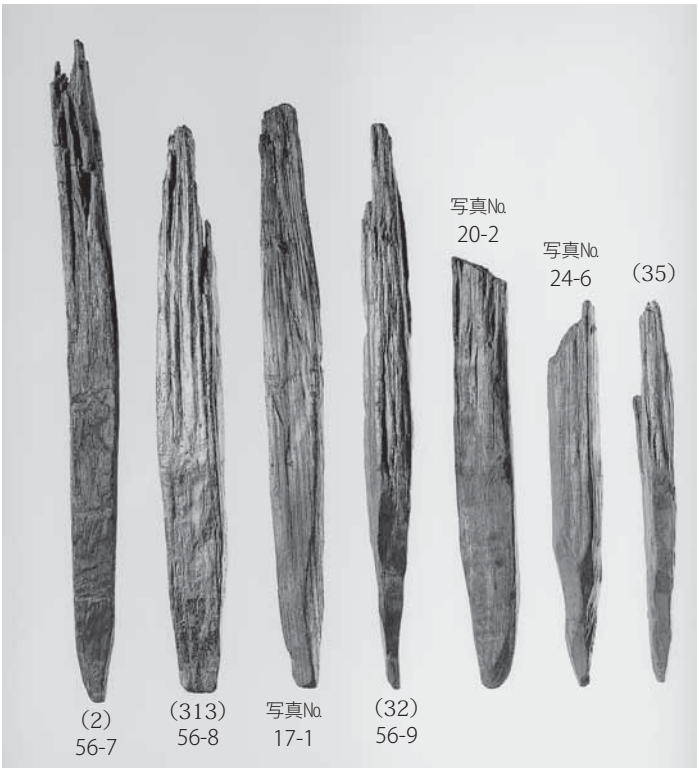


中形、断面三角形杭

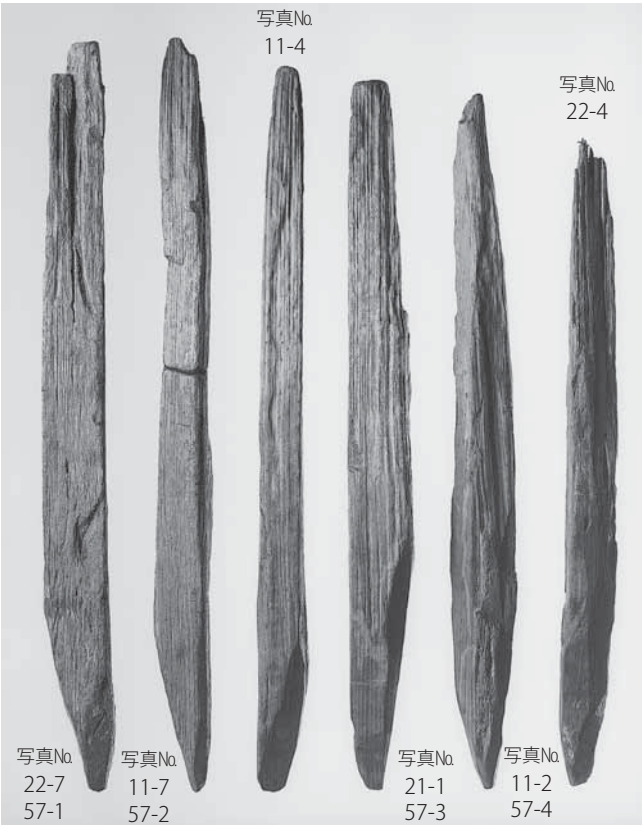
中形、断面三角形杭

(　)内は取り上げ番号





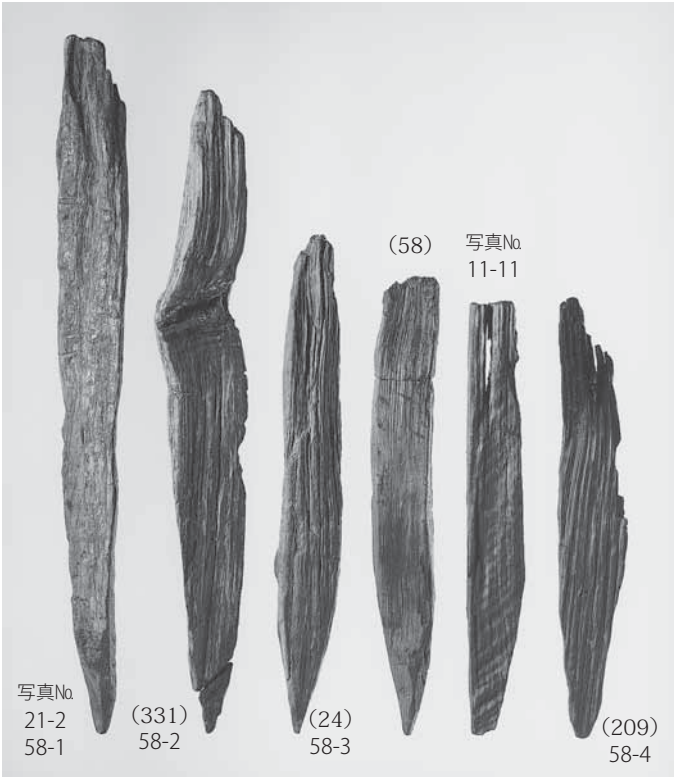
断面四角形杭



中形、断面四角形杭

（　）内は取り上げ番号

断面大形扁平杭



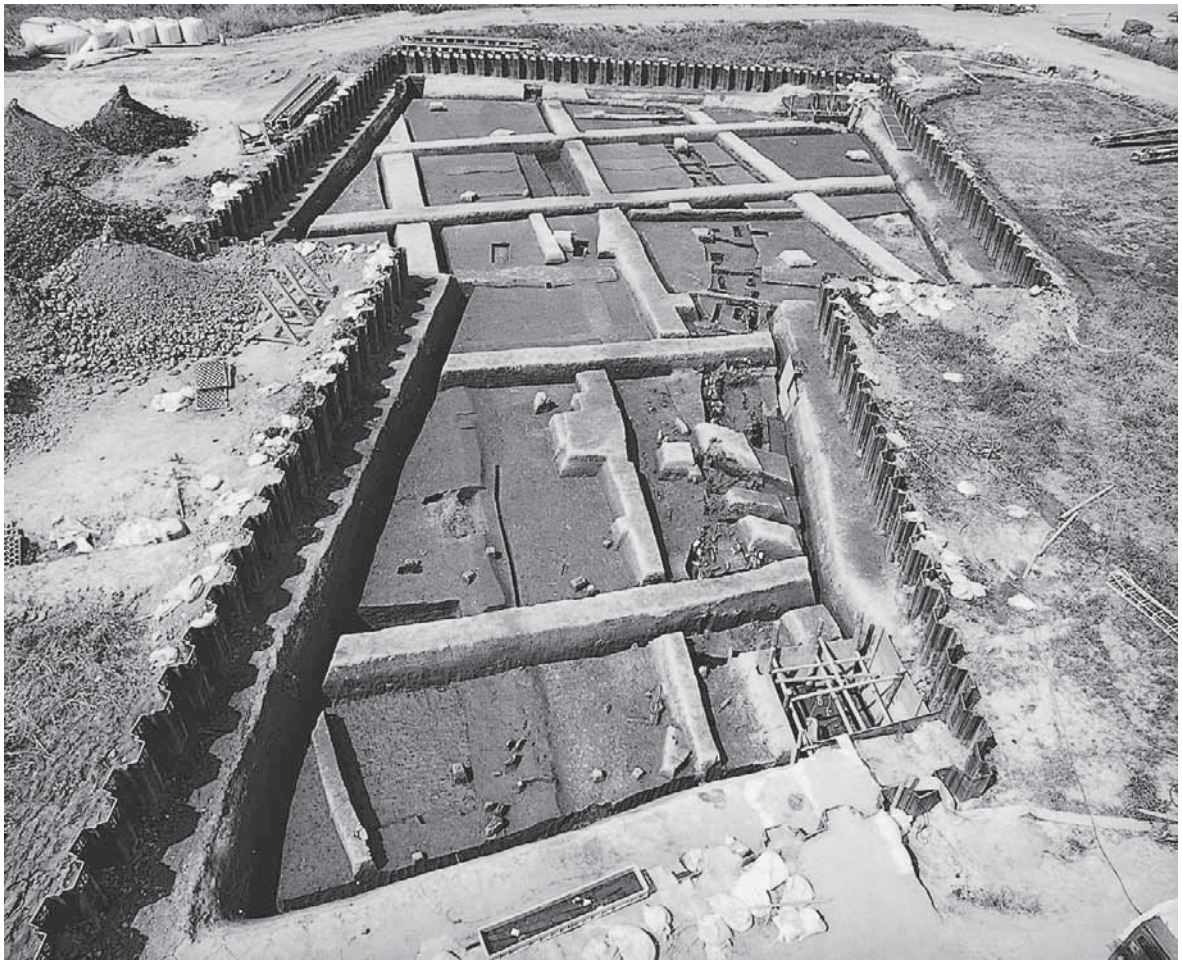
断面中形扁平杭

断面小形扁平杭

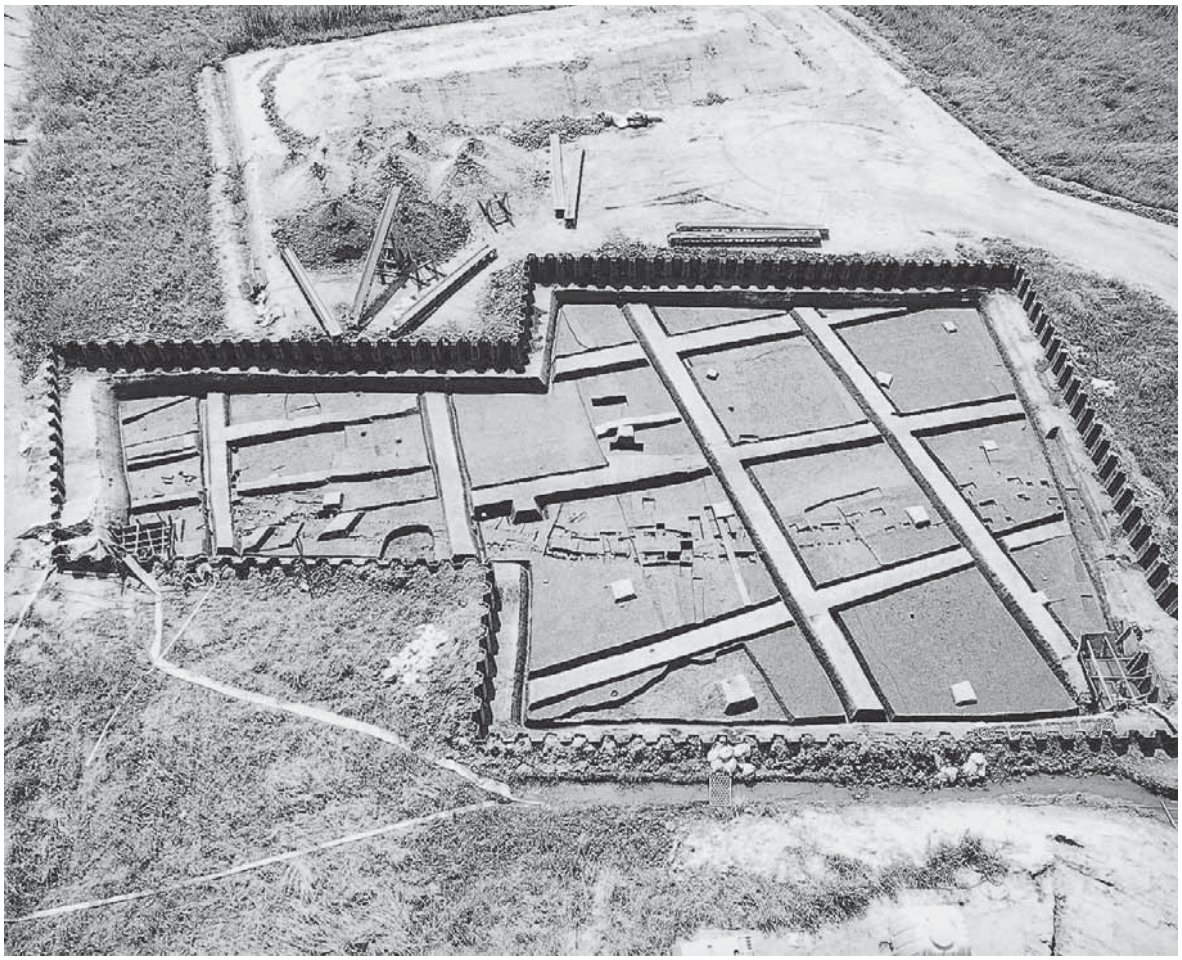
断面小形丸形杭

断面小形三角形杭

(　)内は取り上げ番号



包Ⅷb層畦畔検出状況（南東から）



包Ⅷ層耕作面検出状況（北東から）

報告書抄録

ふりがな	ながやままえだいせき・りょうはざまひわたしいせき1
書名	長山前田遺跡・両迫間日渡遺跡1
副書名	九州新幹線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ名	熊本県文化財調査報告
シリーズ番号	第268集
編著者名	長谷部　善一・亀田　学
編集機関	熊本県教育委員会
所在地	〒862-8609　熊本市水前寺6丁目18番1号
発行年月日	2012年3月23日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
ながやままえだいせき 長山前田遺跡	くまもとけんたまなぐん 熊本県玉名郡 なんかんまちながやま 南関町長山26、27-(2)	43 367	140	33° 00′ 48″	130° 30′ 59″	20040421 ～ 20040527	1,201㎡	九州新幹線 建設工事

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長山前田遺跡	集落	弥生後期から 近世	掘立柱建物 柵列 溝	輸入陶磁器 弥生土器	

要約	三池山から南東に延びる丘陵の端部に位置する遺跡で、関川流域の沖積地を見下ろせる位置にある。溝を伴う建物の性格は遺物包含層が残存しておらず不明であるが、中世後期の肥後と筑後の動きを見る上で重要な遺跡である。周辺の岡田山経塚や龍門寺跡には、16世紀中頃の経塚板碑や大乗妙典板碑等があり関連が注目される。

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
りょうはざまひわたしいせき 両迫間日渡遺跡	くまもとけんたまなしりょうはざま 熊本県玉名市両迫間	43 206	484	32° 58′	130° 32′	20060822 ～ 20061006	約800㎡	九州新幹線 建設工事

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
両迫間日渡遺跡	生産 (水田)	弥生終末から 古墳時代初頭 古墳時代後期	水田に伴う畦畔	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、種子、木杭	

要約	両迫間日渡遺跡は、九州新幹線新玉名駅周辺整備事業で、剣形や鏡等の滑石製模造品やミニチュア土器を伴う古墳時代の祭祀遺跡や弥生時代の祭祀遺跡と見られる遺構群が見つかり、また弥生中期にさかのぼる水田面に伴う杭列群が見つかっており、弥生時代から古墳時代にかけての集落跡及び生産遺跡である。今回報告するのは、隣接する県道玉名山鹿線の改良工事に伴う調査で見つかった弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての水田に伴う畦畔を中心とする。洪水に伴う砂をかぶり軟弱な部分の畦畔に木を斜交して置いて沈むのを防ぐ簡易な敷粗朶技法を用いているのが確認でき、杭には主にクリを使っていることも判明した。時期的には弥生時代から古墳時代に移行する時期にあたり、古墳時代の玉名平野における古墳時代の集落を支える生産拠点としての役割を果たしていたと思われる。 また、古代にいたるまで区画を踏襲していることも判明した。

熊本県文化財調査報告　第２６８集

長山前田遺跡・両迫間日渡遺跡１

-九州新幹線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査-

平成24年３月23日

編集
発行　熊本県教育委員会

〒862-8609　熊本市水前寺6丁目18番1号

印刷　有限会社さかき印刷

〒861-8038熊本市長嶺東6丁目30番37号

発 行 者：熊本県
所　　属：教育庁文化課
発行年度：平成 23 年度

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 268 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名： 長山前田遺跡 両迫間日渡遺跡
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話： 096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2015 年 12 月 8 日